秋田県文化財調査報告書第２８４集

脇　神　館　跡

－県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－

１９９９・３

秋田県教育委員会

脇神館跡（わきがみたてあと）

－県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－

１９９９・３

秋田県教育委員会

序

豊かな地域社会の形成は秋田県の重要な課題であり、高速交通網整備事業もその一つであります。一方、本県には先人によって大地に刻まれた埋蔵文化財が数多く残っており、これら過去の文化遺産を保護すると共に、未来へ継承することもまた私達の責務であります。

このたび、県道木戸石鷹巣線建設事業の路線が、脇神館跡の一部を通過することが判明しました。当教育委員会では道路建設工事に先立って、平成８年度に発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、旧石器時代の遺物、縄文時代、平安時代、中世、近世などの遺構や遺物を検出しました。特に平安時代には大きな集落が営まれ、中世には山城として土塁や空堀などが構築されたことがわかりました。

本報告書は、これらの調査記録をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました秋田県土木部北秋田土木事務所、鷹巣町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　　清

例　　言

1．本書は、県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の１冊目の報告書である。

2．本書は、平成８(1996)年度に調査された鷹巣町に所在する脇神館跡の調査結果を収めたものである。

3．調査の内容については、すでにその一部が年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4．本書に使用した地図は、国土地理院発行の５万分の１『鷹巣』・『米内沢』と２万５千分の１『鷹巣東部』・『鷹巣西部』・『桂瀬』・『米内沢』、秋田県土木部北秋田土木事務所提供の１千分の１地形図である。

5．遺跡基本層位と遺構土層中の土色、土師器、須恵器の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1994年版によった。

6．本書に使用した空中写真、地形図および遺構図の一部は、株式会社シン技術コンサルに撮影・空中写真測量委託したものである。

7．第５章「自然科学的分析」は、第１節「脇神館跡の年代測定」を古環境研究所、第２節「炭化材の樹種、種実遺体の種類、貝類の種類、土坑への遺体埋納の可能性、鍛治炉について、堆積層の分析」をパリノ・サーヴェイ株式会社、第３節「脇神館跡出土鉄滓・鉄器類の調査」を新日鐵グループ(株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センターに委託した報告であるが、遺構の名称など一部を補訂している。

8．本報告書の作成にあたり、以下の方々から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。
（敬称略・所属は平成８年度のものである）

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）　藤井伸幸（佐賀県立九州陶磁文化館）
永渕友子（佐賀県立九州陶磁文化館）　村上伸之（有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館）
野上建紀（有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館）　盛　峰雄（伊万里市教育委員会）
仲野泰裕（愛知県陶磁資料館）　藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）
服部　郁（瀬戸市埋蔵文化財センター）　鈴木敏中（三島市教育委員会）
倉田芳郎（駒沢大学文学部名誉教授）　鈴木裕子（東京都豊島区教育委員会）
藤井安正（鹿角市教育委員会）

9．本書の草稿執筆は、栗澤光男、高橋　学、熊谷　誠が下記のように分担したが、加筆は栗澤が行った。

第１章から第３章、第４章の第１節１～３、第２節１・２、第６章・・・・・・・・・・・・・栗澤光男
第４章の第１節10～12、第２節３～５、第６章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・高橋　学
第４章の第１節４～９・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・熊谷　誠

10．本書の編集は、栗澤が行った。

凡　　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＩ・・・竪穴住居跡　ＳＫＩ・・竪穴状遺構　ＳＢ・・掘立柱建物跡　ＳＫＰ・・・柱穴様ピット

ＳＫ・・・土坑　ＳＱ・・・集石　ＳＮ・・・焼土遺構　ＳＤ・・・溝跡、空堀　ＳＦ・・・土塁

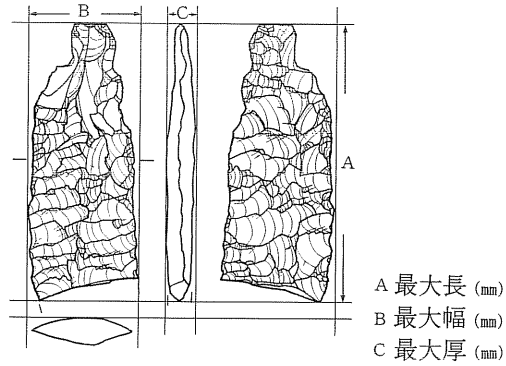
ＳＹ・・・塚　ＳＷ・・・炭窯跡　ＳＸ・・・その他の遺構

なお、遺構図面中に記したＰは竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡等に伴うピット、Ｓは礫を示している。

2．挿図中の須恵器断面は、土師器と区別するため黒く塗りつぶした。

3．土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。

4．石器の計測部位は、下図のとおりである。また、計測値の単位は、長さ・幅・厚さがmm、重さがgである。



5．挿図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。

目　　次

序
例言
凡例
目次
第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……1
第２章　遺跡の環境……4
　第１節　遺跡の位置と立地……4
　第２節　歴史的環境……4
第３章　発掘調査の概要……12
　第１節　遺跡の概観……12
　第２節　調査の方法……17
　第３節　調査の経過……19
第４章　調査の記録……21
　第１節　検出遺構……21
　　1　竪穴住居跡……21
　　2　竪穴状遺構……50
　　3　掘立柱建物跡……53
　　4　柱穴様ピット……53
　　5　土坑……58
　　6　集石……77
　　7　焼土遺構……78
　　8　溝跡・空堀……82
　　9　土塁……89
　　10　塚……95
　　11　炭窯跡……95
　　12　その他の遺構……98
　第２節　出土遺物……99
　　1　旧石器時代の遺物……99
　　2　縄文時代の遺物……99
　　3　平安時代の遺物……103
　　4　中世・近世の遺物……125
第５章　自然科学的分析……137
　第１節　火山灰分析、放射性炭素年代測定結果……137
　第２節　炭化材の樹種、種実遺体の種類、貝類の種類、土坑への遺体埋納の可能性
　　鍛治炉について、堆積層の分析……141
　第３節　鉄滓・鉄器類の調査……147
第６章　まとめ……150
報告書抄録

挿図目次

第1図 路線と遺跡…… 2
第2図 遺跡位置図…… 4
第3図 地形区分図…… 5
第4図 脇神館跡(G)と周辺遺跡位置図 …… 6
第5図 遺跡周辺地形図…… 13
第6図 工事計画と調査範囲…… 15
第7図 調査区の基本層位…… 16
第8図 グリッド配置図…… 18
第9図 SI11・31 …… 27
第10図 SI75 …… 28
第11図 SI107・115 …… 29
第12図 SI112 …… 30
第13図 SI130 …… 31
第14図 SI148 …… 32
第15図 SI162 …… 33
第16図 SI192・198 …… 34
第17図 SI215 …… 35
第18図 SI223・226 …… 36
第19図 SI238 …… 37
第20図 SI240・271 …… 38
第21図 SI268 …… 39
第22図 SI372 …… 40
第23図 SI373 …… 41
第24図 SI379 …… 42
第25図 SI380 …… 43
第26図 SI385 …… 44
第27図 SI406・428 …… 45
第28図 SI407・412 …… 46
第29図 SI411 …… 47
第30図 SI413・414・415・416 …… 48
第31図 SI424 …… 49
第32図 SKI122・126・267 …… 51
第33図 SKI137 …… 52
第34図 SB274 …… 54
第35図 SK06・07・17・18・23・25・40・41・42 …… 67
第36図 SK50・90・102・103・110・111・116・117・120 …… 68
第37図 SK97・98・105・106・118・121・127・128 …… 69
第38図 SK129・136・139・140・141・142・143・144・364 …… 70
第39図 SK147・150・151・152・153・154・155 …… 71
第40図 SK156・159・160・161・211・216・217・219・220 …… 72
第41図 SK222・225・248・249・250・251・254・263・430 …… 73
第42図 SK264・357・358・366・371・376・377 …… 74
第43図 SK378・381・383・397・398・410・422・423 …… 75
第44図 SK427・429・434・435 …… 76
第45図 SQ242・370・384 …… 77
第46図 SN16・119・125・194・195・228・261 …… 80
第47図 SN375・408・431・433・452 …… 81
第48図 SD01・02・03・04・15・341・342・343、SF05・344 …… 90
第49図 SD02・03・15土層図 …… 91
第50図 SD04・343、SF05・344土層図…… 93
第51図 SD01・02・15・341・342断面図 …… 94
第52図 SY170・171・172 …… 96
第53図 SW13 …… 97
第54図 SX200 …… 98
第55図 旧石器 …… 99
第56図 縄文時代の土器 ……100
第57図 縄文時代の石器 ……101
第58図 土 師 器(1)遺構内出土……104
第59図 土 師 器(2)遺構内出土……105
第60図 土 師 器(3)遺構内出土……106
第61図 土 師 器(4)遺構内出土……107
第62図 土 師 器(5)遺構内出土……108
第63図 土 師 器(6)遺構内出土……109
第64図 土 師 器(7)遺構内出土……110
第65図 土 師 器(8)遺構内出土……111
第66図 土 師 器(9)遺構内出土……112
第67図 土 師 器(10)遺構外出土 ……113
第68図 土 師 器(11)遺構外出土 ……114
第69図 土 師 器(12)遺構外出土 ……115
第70図 土 師 器(13)遺構外出土 ……116
第71図 土 師 器(14)遺構外出土 ……117
第72図 土 師 器(15)遺構外出土 ……118
第73図 須 恵 器(1)遺構内出土……119
第74図 須 恵 器(2)遺構外出土……120
第75図 須 恵 器(3)遺構外出土……121
第76図 陶 磁 器(1)……126
第77図 陶 磁 器(2)……127
第78図 陶 磁 器(3)……128
第79図 陶 磁 器(4)……129
第80図 陶 磁 器(5)……130
第81図 陶 磁 器(6)……131
第82図 陶 磁 器(7)……132
第83図 陶 磁 器(8)……133
第84図 銭 貨 ……136

表　目　次

第1表 脇神館跡周辺の遺跡一覧…… 8
第2表 SB274-Pit 計測一覧…… 53
第3表 SKP 計測一覧(1) …… 55
第4表 SKP 計測一覧(2) …… 56
第5表 SKP 計測一覧(3) …… 57
第6表 石器計測一覧……102
第7表 土師器観察表(1) ……122
第8表 土師器観察表(2) ……123
第9表 土師器観察表(3) ……124
第10表 須恵器観察表 ……124
第11表 陶磁器観察表(1)……134
第12表 陶磁器観察表(2)……135
第13表 出土銭貨一覧表 ……136
第14表 脇神館跡における屈折率測定結果 ……138
第15表 炭化材の樹種同定結果 ……142
第16表 種実遺体の同定結果 ……143
第17表 リン・カルシウム分析結果……144
第18表 主成分分析結果 ……145
第19表 腐植分析結果 ……146
第20表 分析試料と分析項目 ……147
第21表 鉄滓の成分分析結果 ……148
第22表 鉄滓の成分分析結果 ……148
第23表 金属玉の EPMA による半定量分析結果 ……148
第24表 ……149

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

秋田県は、平成３(1991)年度に策定した「秋田県新総合発展計画前期計画」と、平成８(1996)年度に策定した「秋田県新総合発展計画後期計画」の中で「国内外を結ぶ高速交通・情報通信体系の確立」を一つのプログラムとして位置付け、高速交通網や情報通信網などの交流基盤を整備し、その利活用による人、もの、情報の活発な交流から生じる効果を産業経済の発展や生活の利便性の向上へ結び付け、豊かな地域社会を形成することを目指している。

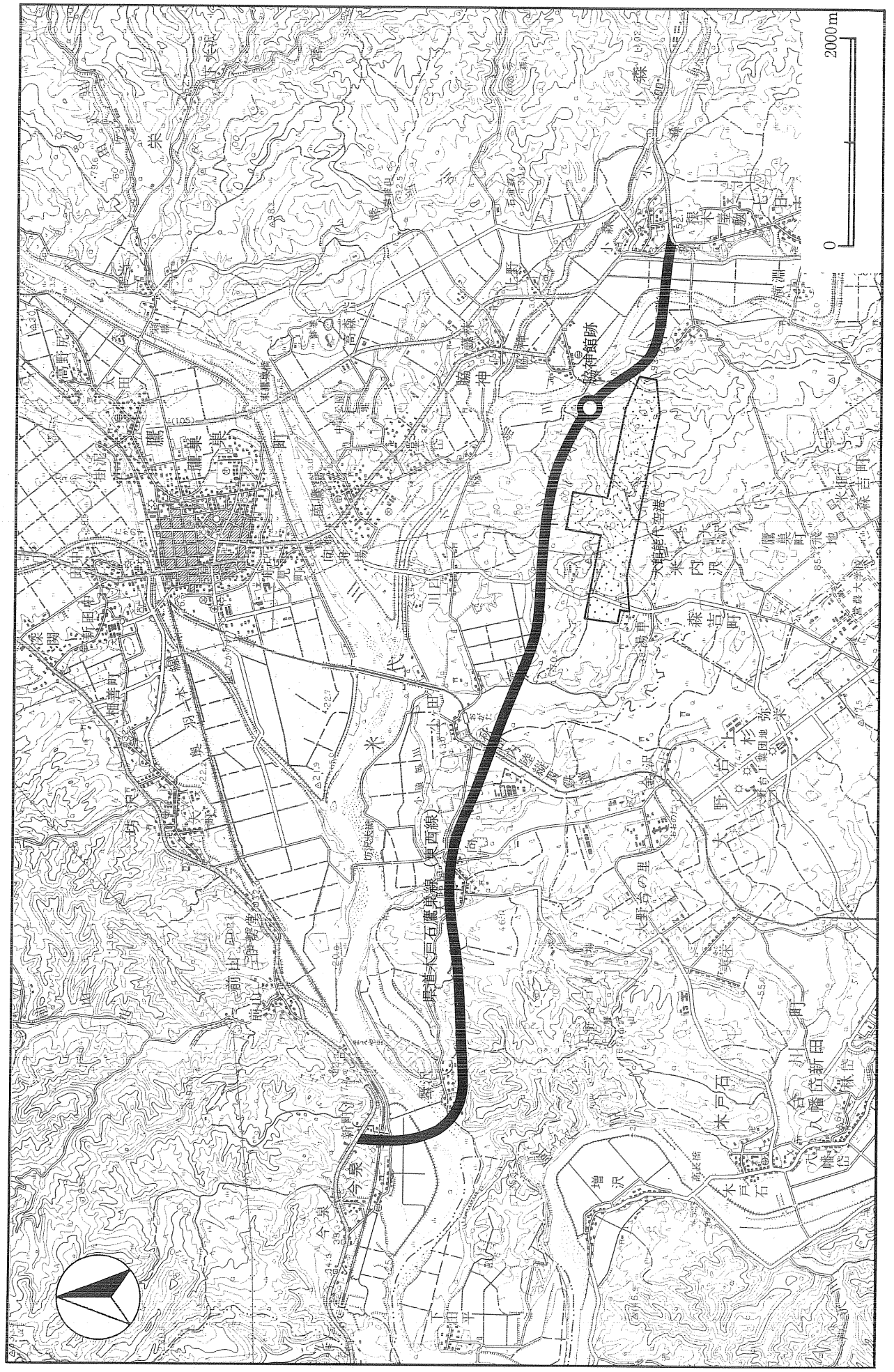
大館能代空港は、高速交通網の中でも航空ネットワークの形成として位置付けられ、平成３(1991)年11月の第６次空港整備事業５カ年計画の閣議決定を経て具体化し、平成５(1993)年４月から鷹巣町大野台中屋敷に空港建設が着工され、平成10(1998)年７月18日に本県第２の空港として開港した。

大館能代空港建設事業に関連する地域の埋蔵文化財包蔵地については、空港建設が具体化した平成４(1992)年度に建設事業と埋蔵文化財保護の円滑な推進を図ることを目的に、空港本体と関連施設及びアクセス道路等の建設が予想される周辺地域約5,300ヘクタールを対象に、県教育委員会文化課が空港周辺の市町村教育委員会の応援を得て分布調査を実施した。

この結果、本地域に周知の埋蔵文化財包蔵地と新発見の遺跡あわせて30遺跡が存在することを確認した。これらのうち、大館能代空港へのアクセス道路(東西線)として計画された県道木戸石鷹巣線建設事業の路線内には、新発見の伊勢堂岱遺跡と周知の遺跡である脇神館跡の２遺跡が存在することを確認した。このため秋田県教育委員会は、遺跡保護について工事主体者の北秋田土木事務所と協議し、記録保存の必要なものについては、発掘調査を実施することにした。そこで、平成６(1994)年と平成７(1995)年に両遺跡の範囲確認調査を行った結果、いずれも路線内に遺跡の一部がかかることが判明したため、工事に先立って発掘調査を行い、記録保存することとした。平成８(1996)年５月13日から脇神館跡の発掘調査を実施するに至った。

第２節　調査要項

遺　跡　名	脇神館跡（わきがみたてあと）（遺跡略号２ＷＧＴ）
遺跡所在地	秋田県北秋田郡鷹巣町脇神字タタラノ沢31外
調査期間	平成８(1996)年５月13日～11月15日
調査面積	8,090㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	栗澤　光男　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第１科　文化財主任)
	利部　　修　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第１科　学芸主事)
	高橋　　学　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第３科　学芸主事)
	千葉　史宏　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第１科　非常勤職員)
	黒澤　　尊　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科　非常勤職員)（実測支援）(平成９年３月退職)


2000m
0
鷹巣
脇神館跡
脇神
高森
上野
小森
大館能代空港
米内沢
森吉町
鷹巣町
新田
新町
今泉
前山
伊勢堂
大野台の里
大野
金沢
増沢
大戸石
八幡台
新田
県道大戸石鷹巣線（東西線）
能代
米内沢

第１図　路線と遺跡

総務担当者　藤肥　良清（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査）
（平成10年３月転出　現 秋田県教育庁福利課 課長補佐）
須田　輝樹（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
（平成10年３月転出　現 秋田県立図書館 主事）
菅原　　晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査）
佐藤　幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

調査協力機関　秋田県土木部北秋田土木事務所
鷹巣町教育委員会

参考文献

１．秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年
２．秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第267集　1996（平成８）年

第２章　遺跡の環境

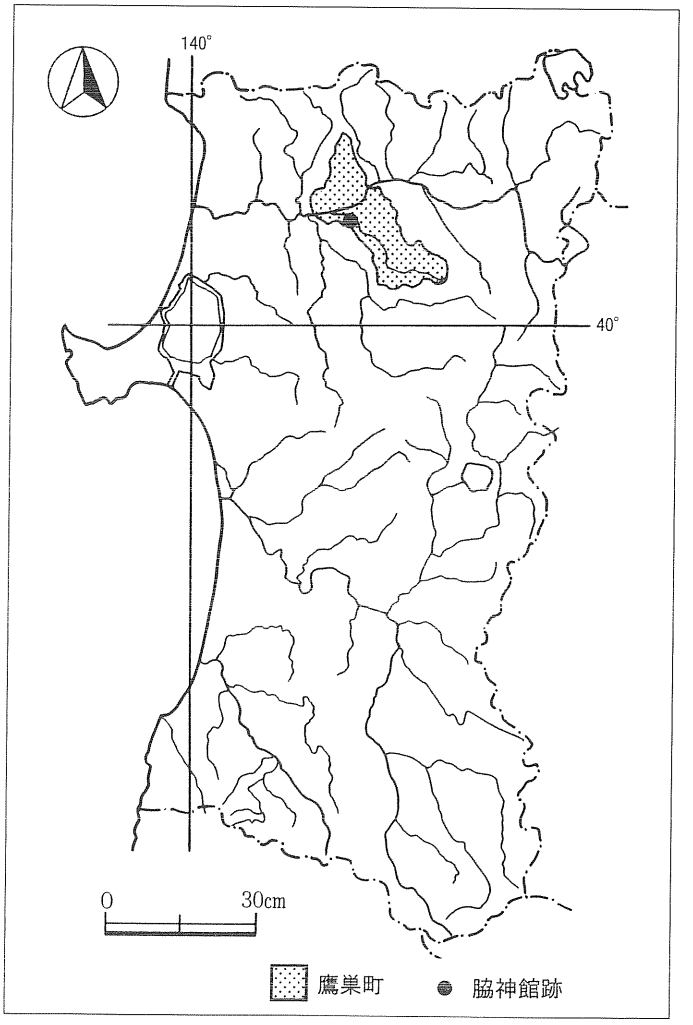
第１節　遺跡の位置と立地

脇神館跡の所在する秋田県北秋田郡鷹巣町は、県北部のほぼ中央にあって、日本海に向かって西流する米代川の中流域に形成された鷹巣盆地の北縁部にあり、米代川の両岸に街地が広がる町である。

本遺跡は、町南部の脇神地区に所在し、ＪＲ東日本鷹巣駅の南約4.2km、北緯40°11′35″、東経140°23′15″に位置する(第２図)。

遺跡周辺の地形は、地区分図によれば山地、丘陵地、台地(段丘地)、低地の４つに分けられる(第３図)。北を白神山山地、東を摩当山山地(Ⅰg)・十ノ瀬山山地(Ⅰd)、西を七座山山地(Ⅰf)・荻ノ山山地(Ⅰc)、南を大野台台地(Ⅲb)によって画され、山地北麓に綴子丘陵地(Ⅱb)、東麓に栄丘陵地(Ⅱg)・妹尾館丘陵地(Ⅱh)があり、大野台台地の北西部に蟹沢山丘陵地(Ⅱf)が形成されている。これらは全体的に平坦面が少なく、標高100～200mの起伏に富んだ地形を呈している。地質は、(Ⅱb)が新第三紀岩谷層、前山川層及び第四紀湯車層、(Ⅱf)が新第三紀小比内沢層、前山川層silt岩及び礫岩、(Ⅱg)・(Ⅱh)が新第三紀上部早口川層の玄武岩・凝灰岩などから構成されている。また、丘陵地間には、米代川とその支流となる小猿部川などによってつくられた低地(Ⅳb・Ⅳg)があり、低地側辺の丘陵地には数段の段丘が形成されている。米代川には鷹巣盆地内で、白神山地から前山・綴子・糠沢川が、太平山地から小猿部・摩当・田沢川が注いでいる。

脇神館跡は大野台台地の北東端部に位置し、北東側下方を北西方向に流れる小猿部川左岸の、東西を沢によって開析された北向きの舌状台地上に立地している。台地の標高は70mほどであり、台地の北および西側下方に広がる小猿部川沿いの水田面との比高差は約40mである。

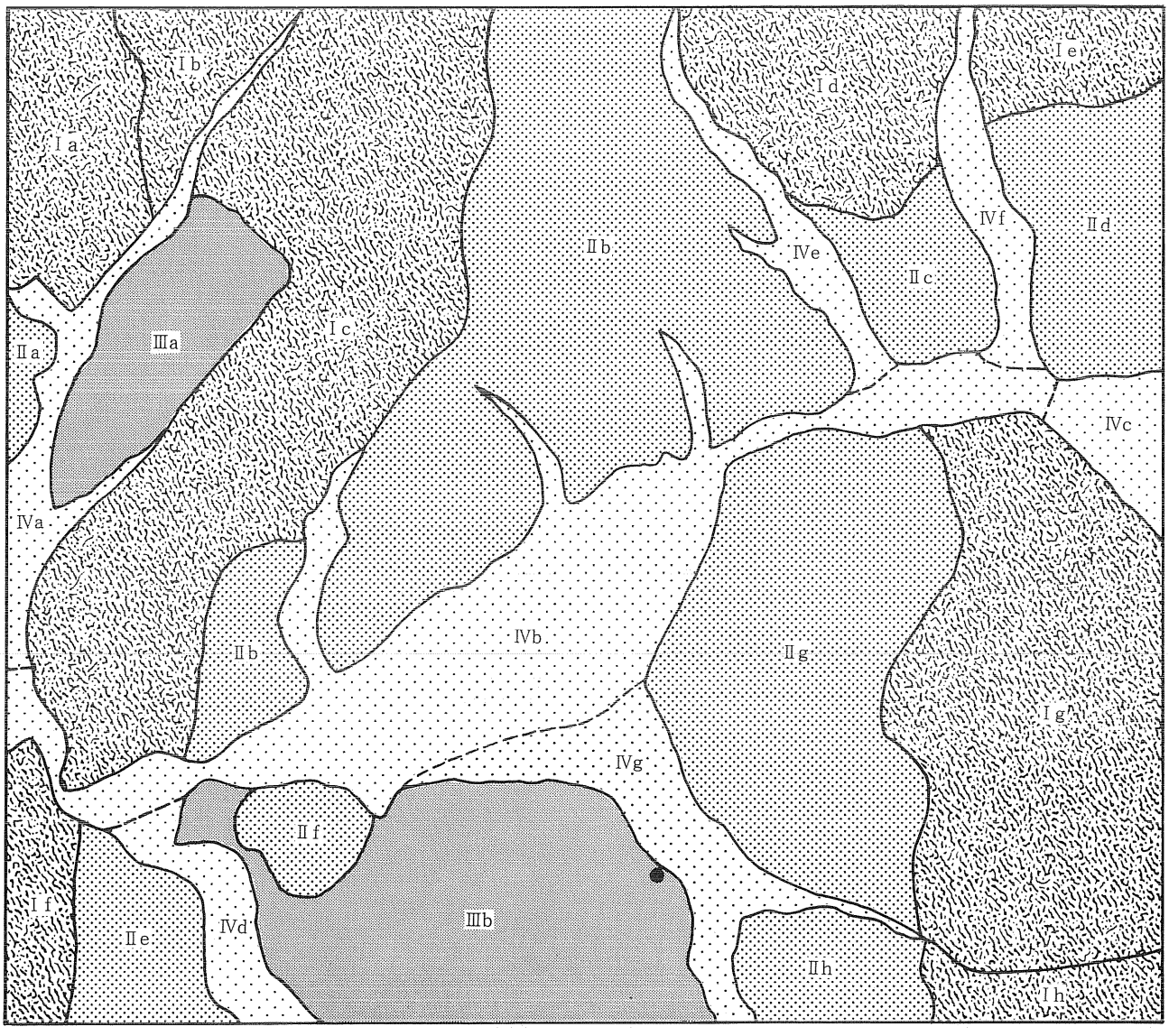


第２図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

脇神館跡が所在する鷹巣町には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多数確認されており、米代川とこれに合流する諸河川などによって形成された河岸段丘と、丘陵地や台地上に多く分布している。

昭和51(1976)年に発行した『秋田県遺跡地図』と、昭和56(1981)年発行の『秋田県の中世城館』、



茂谷山山地（Ⅰa）・奥小比内山地（Ⅰb）・萩ノ方山山地（Ⅰc）・十ノ瀬山山地（Ⅰd）
萱刈山山地（Ⅰe）・七座山山地　（Ⅰf）・摩当山山地　（Ⅰg）・坊山山地　（Ⅰh）　― 山地

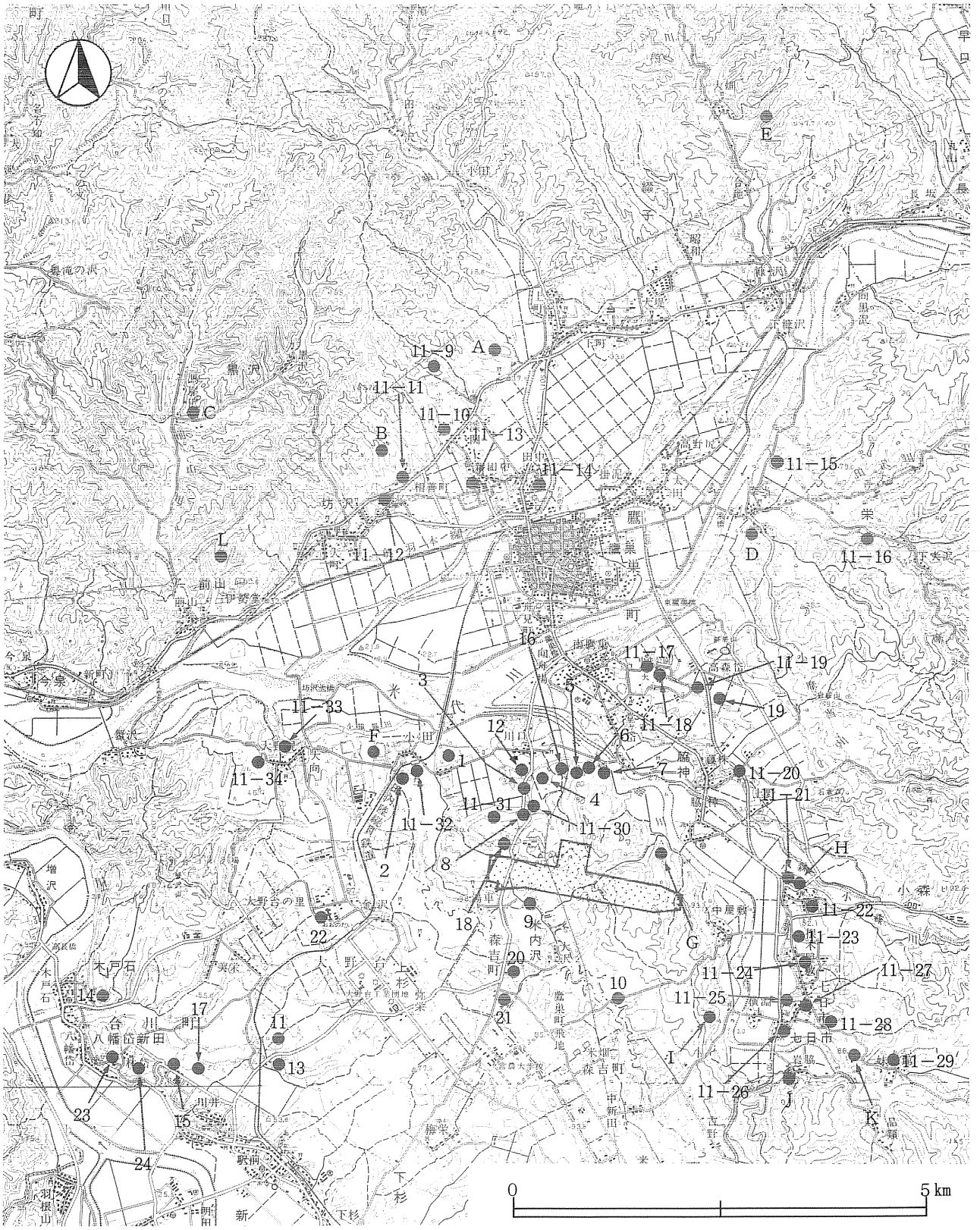
粕毛丘陵地　（Ⅱa）・綴子丘陵地　（Ⅱb）・田代丘陵地（Ⅱc）・山田丘陵地　（Ⅱd）
羽根山丘陵地（Ⅱe）・蟹沢山丘陵地（Ⅱf）・栄丘陵地　（Ⅱg）・妹尾館丘陵地（Ⅱh）　― 丘陵地

藤琴台地（Ⅲa）・大野台台地（Ⅲb）　― 台地

藤琴川低地（Ⅳa）・鷹巣低地　（Ⅳb）・大館低地　（Ⅳc）・阿仁川低地（Ⅳd）
早口川低地（Ⅳe）・岩瀬川低地（Ⅳf）・小猿部川低地（Ⅳg）　― 低地

● 脇神館跡

第３図　地形区分図



第４図　脇神館跡(G)と周辺遺跡位置図

大館能代空港

平成３(1991)年発行の『秋田県遺跡地図(県北版)』収載後に、新たに発見された遺跡もある。

平成４(1992)年度に大館能代空港及びアクセス道路建設予定地を中心に鷹巣町、森吉町、合川町区域の大野台地域約5,300ヘクタールを対象に県教委と大館市・能代市・鷹巣町・森吉町・二ツ井町・合川町の教育委員会が合同で詳細分布調査を実施した。

この調査では、まず踏査により遺跡所在の有無の確認を行い、その後、地権者の同意が得られた箇所で試

掘調査を実施した。

調査の結果、調査対象区域内において、新たに15遺跡が所在することを確認した(その後2遺跡確認され、17遺跡となった)。

第4図には、それまでに確認した遺跡のほか、この調査で確認した遺跡も記入し、第1表には遺跡の内容を調査担当者の記録から記載した。なお、この区域では、昭和51(1976)年発行の『秋田県遺跡地図』(以下、旧分布図と記す)と、平成3(1991)年発行の『秋田県遺跡地図(県北版)』(同、新分布図)の記載に相違があることを認めざるを得ない。今回はそれらの記載内容の正誤の検証を十分できなかったので、新分布図には収載されていないが、旧分布図に収載されていた遺跡も図上に示し、表中にその旨を記した。

本来、遺跡分布図は埋蔵文化財保護のための基本台帳とも言うべきものであり、その記載に誤り等があってはならないことであり、早急に是正しなければならない。今後、その分布調査の精度を高めながら、正確な最新の埋蔵文化財情報として提供していく必要があることは言うまでもない。

縄文時代の遺跡では、本遺跡の北東約1.8kmに藤株遺跡(11-20)がある。昭和56(1981)年に国道105号バイパス建設に伴い発掘調査が行われ、主に縄文時代晩期の竪穴住居跡や土壙墓、頭部のない人骨の火葬墓などを検出した。また、本遺跡の西北西約3.2kmには伊勢堂岱遺跡(2)がある。空港アクセス道路建設のため、平成7(1995)年度から2カ年計画で調査が行われたが、縄文時代後期前葉の環状列石とそれを取りまく掘立柱建物跡群などを検出し、建設中止＝道路迂回の保存措置の執られた遺跡である。

続縄文･弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は確認されていない。

奈良･平安時代になると、伊勢堂岱遺跡、平成8(1996)年に地方特定道路整備工事鷹巣町湯車工区に係り発掘調査が行われた法泉坊沢Ⅱ遺跡(6)(本遺跡から北西約1.4km)、胡桃館跡(11-13)(本遺跡から北北西約5km)がある。胡桃館跡は昭和41(1966)年から3カ年にわたって県教育委員会が発掘調査を実施し、板校倉建物跡など4棟と掘立柱列(柵)等を検出したが、この遺跡の性格については未解明である。これらの建物跡などが、地質学者から1,000年前のシラス洪水により埋もれたとする見解が出されたシラス層の中に、建ったままの状態で検出したことから建築学的にも貴重な遺跡として注目された。また、小ケ田(11-32)でも、文化14(1817)年にシラスに埋もれた建物が検出したとの伝承記録がある。

鷹巣町内では、これまで須恵器や土師器の出土した遺跡が大畑神社遺跡、上台遺跡、深関太平山遺跡(11-9)、深関沢遺跡(11-10)、田中遺跡(11-14)、根木屋敷岱Ⅰ遺跡(11-23)の7箇所が確認されていたが、本格的な調査もないまま不明な点が多かった。先の分布調査では、法泉坊沢Ⅰ遺跡(7)、からむし岱Ⅲ遺跡(4)、からむし岱Ⅳ遺跡(16)、からむし岱Ⅴ遺跡(4)など脇神地区での古代の遺跡が多く見つかっている。法泉坊沢Ⅱ遺跡の調査では鍛冶炉を調査しており、同遺跡の西側の大きな沢を、地元では「金掘り沢(かねほりさわ)」と呼んでおり、かね＝鉄とすれば、原料鉄の採掘場所である可能性もあり、鉄生産について注目すべき地区となる。

中世になると、米代川右岸には二本杉館、綴子館(A)、坊沢高館(B)、務沢館(C)、大畑下館(E)、前山館(L)が、左岸には館平館(D)、小勝田館(F)、小森館(H)、横淵館(I)、妹尾館(K)、岩脇館(J)、明利又館、槐岱道上館(1)が構築されている。

第１表　脇神館跡周辺の遺跡一覧

『秋田県遺跡地図（県北版）』収載の周知の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
11-9	深関太平山	鷹巣町坊沢字深関沢122－4	平安	
11-10	深関沢	鷹巣町坊沢字深関沢25－55	平安	
11-11	鰐口	鷹巣町鰐口岱16－5	続縄文	
11-12	相善	鷹巣町坊沢字相善岱33－2	縄文	
11-13	胡桃館	鷹巣町字胡桃館79	平安	県教委による３次の発掘調査で建物跡など検出。学校用地
11-14	田中	鷹巣町字坊沢田中47	平安	
11-15	碇岱	鷹巣町摩当碇岱256	縄文	
11-16	岩坂	鷹巣町摩当字岩坂102	縄文	
11-17	石の巻岱Ⅰ	鷹巣町脇神字石の巻岱60	縄文　晩期	別称陣場岱　遺物包含地　公園
11-18	石の巻岱Ⅱ	鷹巣町脇神字石の巻岱65	縄文　後期	別称陣場岱　遺物包含地　公園
11-19	高森岱	鷹巣町脇神字高森岱16	縄文　前～晩期	遺物包含地　大型遮光器土偶が
				出土している。水田
11-20	藤株	鷹巣町脇神字藤株塚の岱43－4	縄文　前・後～晩期	縄文集落。学史上も著名な遺跡。バイパス建設に伴う発掘調査が行われているほか、町教委の範囲確認調査も行われている。道路・畑･水田
11-21	タモノ木	鷹巣町小森字タモノ木17	縄文	
11-22	小森	鷹巣町小森字小森88－1	縄文	
11-23	根木屋敷岱Ⅰ	鷹巣町七日市根木屋敷岱20	平安	
11-24	根木屋敷岱Ⅱ	鷹巣町七日市字根木屋敷岱61	縄文	
11-25	山の上	鷹巣町七日市字山の上57	縄文	
11-26	囲の内	鷹巣町七日市字囲の内80	縄文	環状列石。
11-27	石倉岱	鷹巣町七日市字石倉岱3－1	縄文	
11-28	伊勢堂岱	鷹巣町七日市字伊勢堂岱8－4	縄文	
11-29	野尻	鷹巣町七日市字野尻8－2	縄文	
11-30	からむし岱Ⅰ	鷹巣町脇神字からむし岱21	続縄文	遺物包含地。水田
11-31	からむし岱Ⅱ	鷹巣町脇神字からむし岱93	続縄文	遺物包含地　牧草地
11-32	小ケ田	鷹巣町脇神字小ケ田伊勢堂岱8－4	縄文　後期	旧分布図では別地点を表示。遺物包含地　林・水田
11-33	観音堂岱	鷹巣町坊沢字観音堂岱6－23	縄文　中・後期	分布調査によって、広大な広がりを確認。米代川の河岸段丘上に立地する広大な縄文集落。山林・畑地
11-34	堀切石	鷹巣町大野尻堀切石6	縄文　中期	遺物包含地。墓地

『秋田県の中世城館』収載の城館

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
A	綴子館	鷹巣町綴子	中世	空堀２条。連郭式館跡。館主についての伝承あり。山林
B	坊沢高館	鷹巣町坊沢字高館	中世	空堀２条。連郭式館跡。館主についての伝承あり。製鉄関連の施設があるか。山林
C	務沢館	鷹巣町黒沢字務沢館	中世	平坦面３段。
D	館平館	鷹巣町栄字館	中世	単郭式館跡。館主についての伝承あり。山林
E	大畑下館	鷹巣町綴子字下館ケ沢	中世	単郭式館跡。
F	小勝田館	鷹巣町脇神字館野	中世	館跡。別称館野館。河岸段丘上の一画に位置し、台地上を空堀で区画し、東側に幅広の腰郭を有す。館主についての伝承あり。山林・畑地
G	脇神館	鷹巣町脇神字タタラノ沢31外	平安・中世	連郭式館跡。館主についての伝承あり。平成８年度に県教委が発掘調査を実施。山林
H	小森館	鷹巣町小森字小森	中世	
I	横淵館	鷹巣町七日市字古館	中世	連郭式館跡。館主についての伝承あり。山林
J	岩脇館	鷹巣町七日市字岩脇坂の上	中世	連郭式館跡。館主についての伝承あり。山林
K	妹尾館	鷹巣町七日市字長根沢	中世	平坦面３段。館主についての伝承あり。山林
L	前山館	鷹巣町前山字萩の岱	中世	連郭式館跡。館主についての伝承あり。山林

分布調査で新発見の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	槐岱道上館	鷹巣町	中世	館跡。台地上を幅約５～６ｍの空堀で区画。 山林・畑地
2	伊勢堂岱	鷹巣町脇神字伊勢堂岱5－1外	縄文　後期 平安	米代川支流にのぞむ舌状台地突端に立地。平成７・８年度に県教委が発掘調査を実施。環状列石等の発見により保存決定。山林
3	川口	鷹巣町	縄文　後期	旧分布図には川口Ⅱ(12)との間が続縄文の遺物包含地とされている。原野・畑
4	からむし岱Ⅲ	鷹巣町脇神字からむし岱	平安	台地東端の広大な範囲を占める。平安の比較的大規模な集落。山林・原野

5	からむし岱Ⅳ	鷹巣町脇神字からむし岱	平安	集落跡。平成８年度に県教委が工事立ち会いで土坑と土器片を確認。山林
6	法泉坊沢Ⅱ	鷹巣町脇神字法泉坊沢49外	平安	小猿部川に面した舌状台地に立地し、鉄滓が多量に出土しており、製鉄鍛冶等の生産遺跡の可能性がある。山林
7	法泉坊沢Ⅰ	鷹巣町脇神字法泉坊沢	平安	法泉坊沢Ⅱと沢を隔てて同一台地上に立地。平安の集落跡。試掘により竪穴遺構検出。山林原野
8	湯車Ⅰ	鷹巣町	続縄文	旧分布図では湯車。遺物包含地。分布調査時に場所の特定できず。畑地
9	五右エ門屋敷下	鷹巣町	縄文　中期	湯車川に面する河岸段丘上に立地する。縄文の小集落。山林原野
10	大野台下	鷹巣町	縄文	遺物包含地。　山林
11	羽立岱	鷹巣町	縄文　中期	舌状台地縁辺部に立地。縄文集落。畑地・原野
12	川口Ⅱ	鷹巣町	縄文	台地縁辺部に立地。過去の耕作や整地の際に土器が多く出土。試掘調査で石皿断片出土。山林・原野
13	中谷地	鷹巣町	縄文　後～晩期	遺物包含地。畑地
14	上ノ山	鷹巣町	縄文　中・後期	阿仁川に張り出した台地先端部に立地。遺物包含地。雑木林
15	林岱	鷹巣町	縄文　後期	大谷地遺跡と同一台地上にあり、小沢を挟んで隣接する。遺物包含地。　山林
16	からむし岱Ⅴ	鷹巣町	縄文　後期 平安	からむし岱Ⅲと沢を隔てた一連の台地上に立地。縄文・平安の集落跡。試掘により平安の竪穴住居跡を検出。山林・原野
17	大谷地	鷹巣町	縄文　中期	縄文集落。遺跡の西側は宅地化されている。山林

『秋田県遺跡地図』（旧分布図）に登載されていたが、『秋田県遺跡地図（県北版）』に収載されなかった遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
18	湯車Ⅱ	鷹巣町	縄文　後期	旧分布図の地点。遺物包含地。分布調査で場所の特定できず。畑地
19	高森岱Ⅱ	鷹巣町	縄文	旧分布図の地点。平成８年度に町教委で分布調査実施。水田
20	大沢岱Ａ	森吉町	縄文　後期	遺物包含地。畑地
21	大沢岱Ｂ	森吉町	縄文　後期	遺物包含地。畑地
22	金沢森吉町	森吉町	縄文　後期	遺物包含地。畑地
23	伊豆館	合川町	縄文	遺物包含地。山林
24	林台	合川町	縄文　後期	遺物包含地。原野

注

1．地図および一覧に付した番号のうち、11-28などのような番号は、「秋田県遺跡地図（県北版）』に収載されている遺跡の市町村登録番号である。11は鷹巣町を示す。

2．Ａ～Ｌは、『秋田県の中世城館』には収載されているが、『秋田県遺跡地図(県北版)』に未掲載のため、遺跡の登録番号がない。このため、中世城跡は便宜的にアルファベットで記載した。

3．１～17は、大館能代空港建設事業関連遺跡詳細分布調査で新たに発見された遺跡である。未公表だったため、便宜的に同調査の遺跡番号をそのまま収載した。

4．『秋田県遺跡地図』には登載されていたが、『秋田県遺跡地図(県北版)』に収載されなかった遺跡には市町村登録番号がない。そのため、18から24までの仮番号で表示した。

5．「秋田県遺跡地図（県北版)』収載の11-28(伊勢堂岱遺跡)と、分布調査で発見した２(伊勢堂岱遺跡)が同名の「伊勢堂岱遺跡」であるが、発掘調査で環状列石等が発見され、平成８(1996)年に保存決定されたのは、２の「伊勢堂岱遺跡」である。同一行政区域内に２つの「伊勢堂岱遺跡」があり、環状列石の保存問題が起きた際、混乱を招くとして字名を付して「脇神伊勢堂岱遺跡」と報道されたこともあったが、どちらも「伊勢堂岱遺跡」として現在に至っている。遺跡発見に伴う事務手続きの瑕疵によると思われる。

引用・参考文献

1．平山次郎･市川賢一「1000年前のシラス洪水」『地質ニュース』140　1966(昭和41)年

2．秋田県教育委員会『胡桃館埋没建物発掘調査概報』　秋田県文化財調査報告書第14集　1968(昭和43)年

3．秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』　1976(昭和51)年

4．秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第85集　1981(昭和56)年

5．秋　　田　　県『土地分類基本調査　鷹巣』　1985(昭和61)年

6．秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県北版)』　1991(平成３)年

7．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年

8．秋田県教育委員会『法泉坊沢Ⅱ遺跡－地方特定道路整備工事鷹巣町湯車工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　1998(平成10)年

9．鷹巣町教育委員会『藤株遺跡　発掘調査報告書』　1990(平成２)年

(本書は発掘調査報告書という書名になっているが、詳細分布調査の報告書である。)

10．鷹巣町史編さん委員会『鷹巣町史』第一巻　1992(平成４)年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

脇神館跡は既述のごとく、大野台台地の北東端部に位置し、東西を沢によって開析された北向きの舌状台地(標高約70ｍ)に立地している。この台地の南側は、標高を増しながら尾根状となって大野台台地に続いており、東～北～西側は急峻な斜面となっている。また、台地上からは、北に小猿部川と小森川の合流点や両河川周辺の脇神地区一帯を見おろすことでき、北西側に米代川を挟んで対岸の鷹巣町の町並みを見ることができる。

本遺跡は、空堀などで区画された空間(郭＝くるわ)が連なった中世城館とされている。舌状台地先端から南約50ｍには、ほぼ東西に開削された深くて大きい空堀が存在し、これによって台地は南北に区画されている。　今回の調査区域は、この空堀以南の台地平坦部とその南東斜面である。調査区において現地形で空堀と土塁が観察された。空堀は、前述した１条と調査区南東端の２条、南端の１条、調査区のほぼ中央部を北～南～東にクランク状に延びる１条と、土塁は調査区中央部に延びる空堀に沿った１条と南端の１条であった。

なお、脇神館跡は『秋田県の中世城館[(1)]』によると、「小猿部川の西側、小猿部川に合流する小森川を含む脇神地区一帯を見とおせる丘陵上に位置する。丘陵は斜面が急峻で登道も見あたらず、郭上に至るのが困難である。丘陵先端部に東西30ｍ、南北50ｍの平坦面があり、その南側に空堀を配して丘陵と画しているが、空堀南側にも同様の平坦面があって、連郭式館であることがわかる。館主についての記録はないが、口伝では津島某なる者が居たと伝えられている。秋田家文書の「浅利頼平領内村数覚書[(2)]」(慶長２(1597)年）に「あれ、文禄四年とりあいニ、従当年ハすこし毛付申候、秋田よりなてきりの所、一わき神　田畠　家十五、まへハ八十」とみえる。小森川沿いに大館盆地と連絡する旧道があって、その要地に位置する。」と紹介されている。

調査区の現況は、山林であったが工事区にかかったため伐採され、その切り株が隠れるくらいの雑草が繁茂していた。

調査区の基本土層は、47ラインに設けた東西トレンチの南壁土層などから、以下の通り観察できた。(第７図参照)。

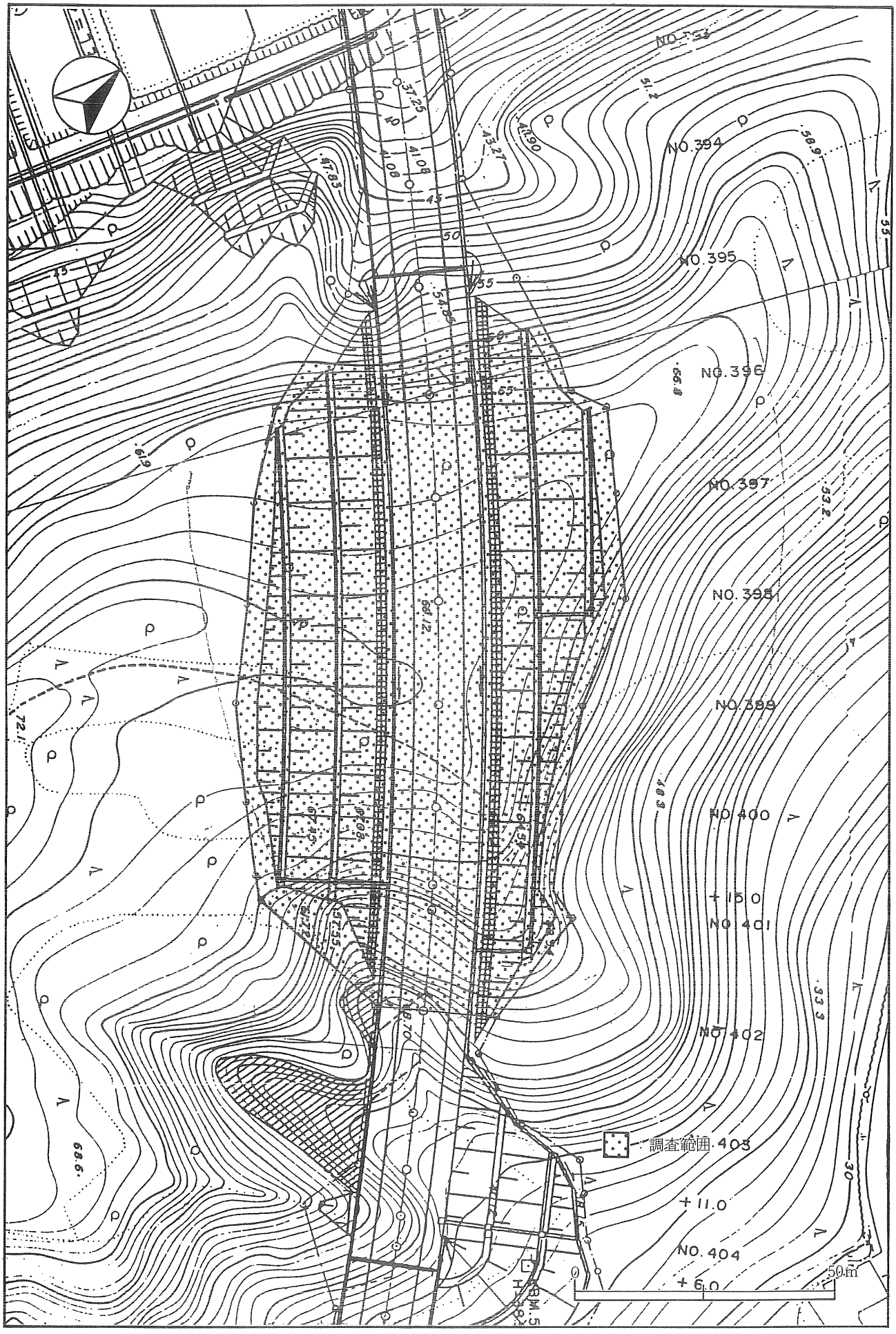
第Ⅰ層　暗褐色土(10YR3/3)：調査区全体を覆う表土層である。杉・灌木等の根が多く入り込んでおり、腐葉を多量に含んでいる。層厚は２～29㎝である。

第Ⅱ層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)：しまりの強いシルト質土である。土師器片、陶磁器片等の遺物を含んでいる。調査区の西側部分では認められなかった。層厚は３～18㎝である。

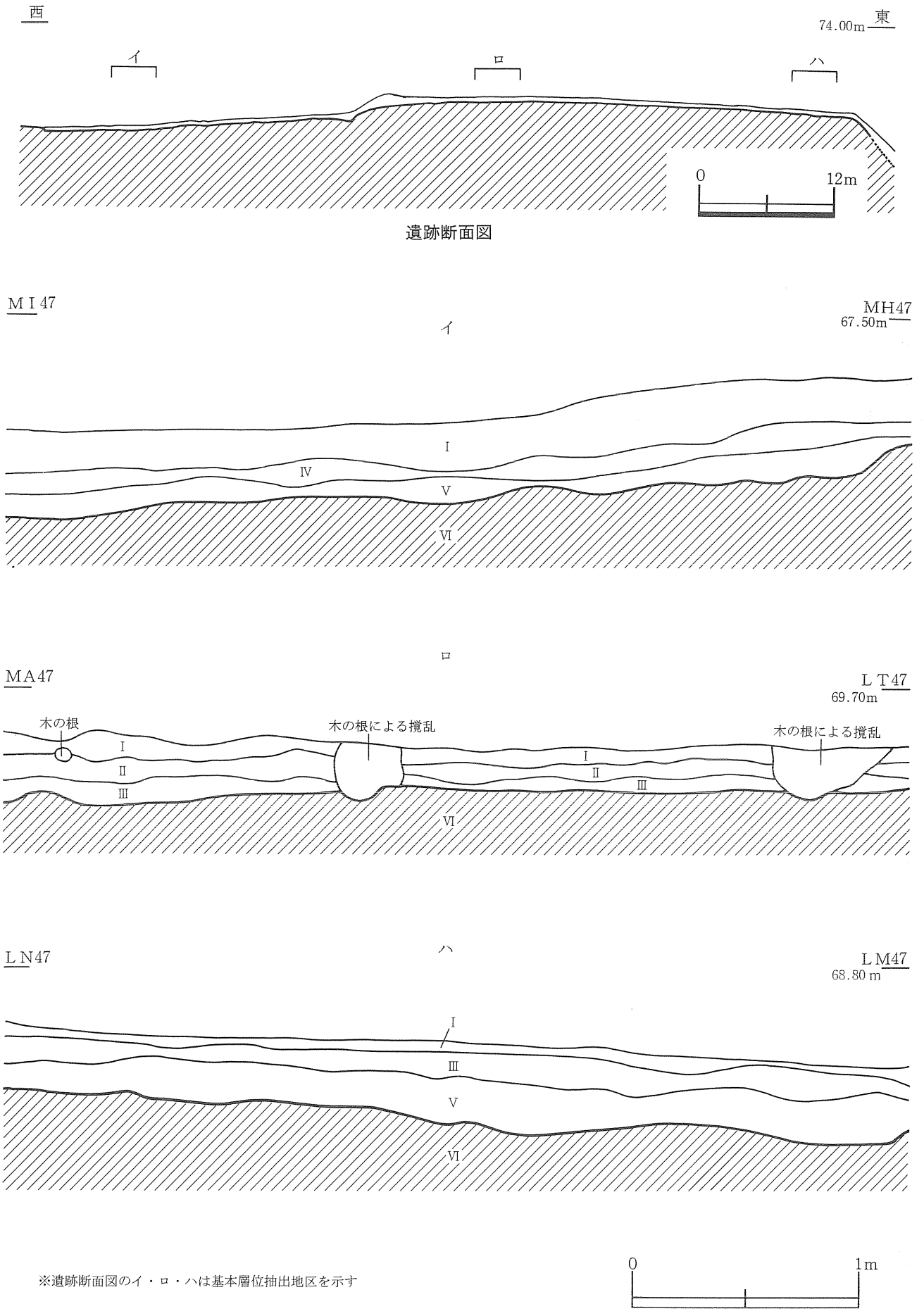
第Ⅲ層　褐色土(10YR4/4)：しまりの強いシルト質土で、縄文土器片、石器、土師器片、陶磁器片、鉄滓等の遺物を含んでいる。調査区の西側部分では認められなかった。層厚は２～17㎝である。

第Ⅳ層　黒褐色土(10YR3/2)：しまりの弱いシルト質土で、褐色土ブロックを少量含む。また、土師器片、須恵器片、鉄滓等の遺物を含んでいる。部分的にしか堆積しておらず、本調査区では主に南西側部分で認められる。層厚は３～30㎝である。

第５図　遺跡周辺地形図



第６図　工事計画と調査範囲



※遺跡断面図のイ・ロ・ハは基本層位抽出地区を示す

第７図　調査区の基本層位

第Ⅴ層　暗褐色土(10YR3/3)：しまりはやや強く、多少粘性をおびたシルト質土である。土師器片等の遺物を含んでいる。調査区の中央部では認められなかった。層厚は２～23cmである。

第Ⅵ層　褐色土(10YR4/6)～黄褐色土(10YR5/6)：しまりの強い粘質土の地山である。

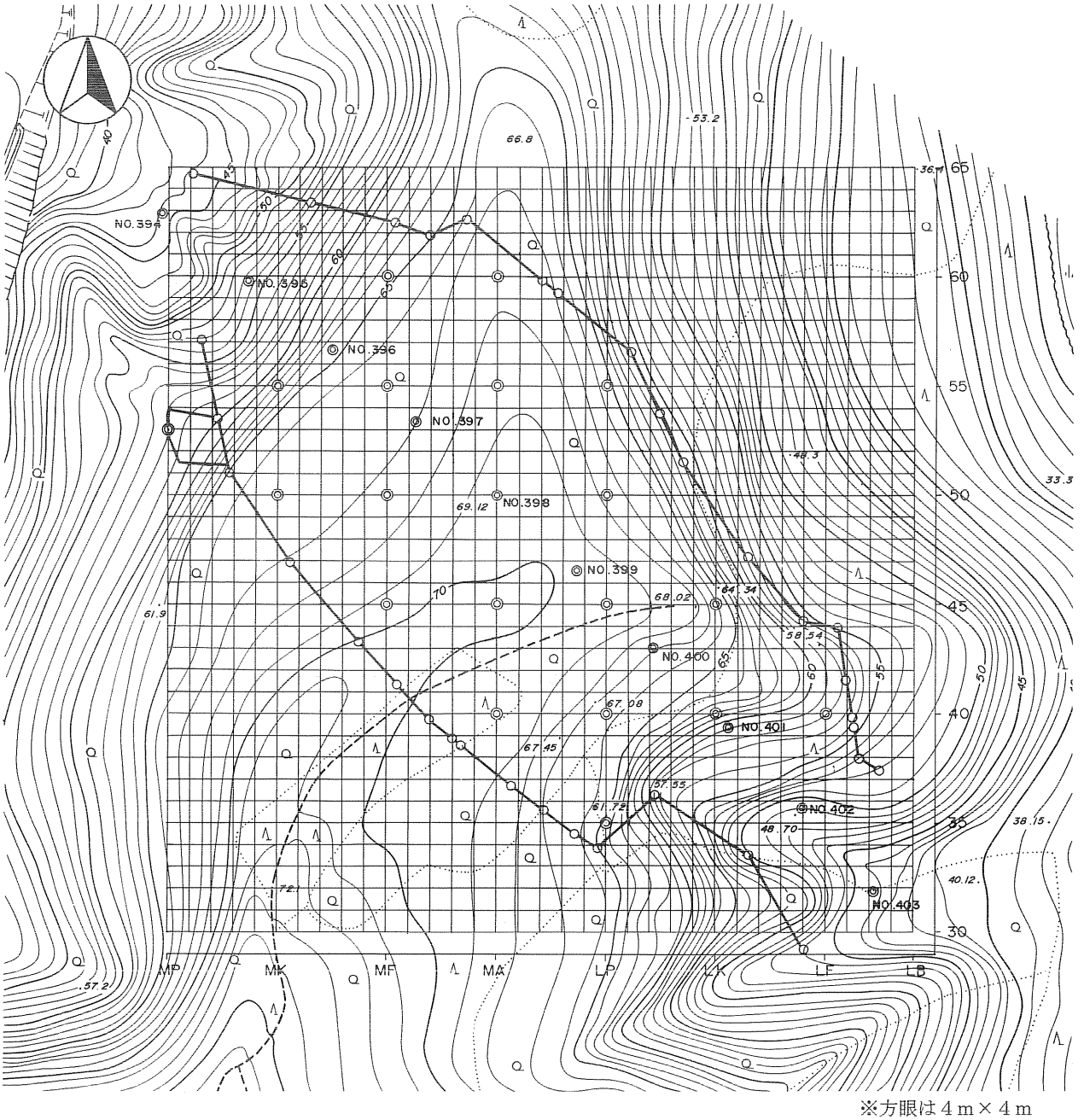
第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区に設置されている県道木戸石鷹巣線建設の道路中心杭(STA.No.398＋00)をグリッド原点ＭＡ50として、この杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。またグリッド杭には、東から西に向かって東西方向を表すＬＢ……ＬＴ・ＭＡ……ＭＰというアルファベットと、南から北に向かって昇順する南北方向を表す30・31……65の２桁の数字を組み合わせた記号を記入し、４ｍ×４ｍの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。

遺構の確認はできるだけ遺構の掘り込み面での検出に努めようとしたが、地山面まで浅い所が多く、多くの遺構は地山面での確認となった。

遺物は、遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。

調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は基本的には1/20の縮尺で作図したが、カマドや焼土遺構は1/10とした。また、空堀と一部の住居跡、溝跡などの遺構は、平面実測作業の迅速化と省力化をはかるため、ラジコンヘリによる空中写真測量を実施し、1/20・1/40の縮尺で平面図を作成した。さらに、これらの遺構平面図と調査範囲図等から遺構配置図など必要な図面も作成した。検出遺構の写真撮影は、35mmのモノクロとカラーリバーサルフィルムを使用した。遺跡全体の俯瞰写真はラジコンヘリによる空中写真撮影によった。なお、発掘調査前に脇神館跡の地形測量を行った。



※方眼は４ｍ×４ｍ

第８図　グリッド配置図

第３節　調査の経過

５月13日～17日、調査区内の草刈りや雑木寄せ、調査区南東斜面にベルトコンベアーを設置する。５月20日から、台地平坦部の調査区の排土を捨てる場所にあてるため、調査区南東斜面から発掘を開始、６月７日に終了した。結果、同斜面には、亜炭採掘坑の口が見つかったが、遺構・遺物は検出されなかったので、予定通り排土場所にあてることにした。また、同日より調査区平坦部にベルトコンベアーの搬入を開始し、６月14日に設置を完了した。また、同日調査区平坦部の北西側から発掘調査を開始した。

６月28日までにＳＫ(土坑)４基、ＳＤ(溝・堀)４条、ＳＷ(炭窯跡)１基を検出した。

７月１日～５日、雨天のため土塁内側の上位平坦部の粗掘りを中心に作業を進める。さらに、ＳＤ02を北西部分より掘り進め、1.5～2.0ｍの厚さをもつ覆土を一部除去する。結果、ＳＤ02がＳＤ01に沿うように掘られていることが判明した。

７月８日～12日、粗掘りと遺構・遺物の有無を確認しながら地山までの掘り下げ・検出遺構の調査を行う。ＳＩ(竪穴住居跡)１軒、ＳＫ３基、ＳＮ(焼土遺構)１基、ＳＤ３条、ＳＦ(土塁)１条等を検出した。

７月15日～19日、遺構の細部調査と土塁・堀の全体把握調査を並行して進める。ＳＫ１基、ＳＤ５条等を検出した。

７月22日～26日、粗掘り(調査区南側中心)と遺構・遺物の有無を確認しながら地山までの掘り下げ・検出遺構の調査を行う。主に９月中旬に引き渡す地区の遺構確認精査と検出遺構の調査を急いで行う。

７月29日～８月２日、北西区の竪穴住居跡・土坑、北東区の堀・土塁を中心に精査を行う。また、粗掘りの範囲を台地部の南西部に拡大する。ＳＩ３軒、ＳＫ13基、ＳＮ１基、ＳＤ７条等を検出した。

８月５日～９日、調査区北西側の検出遺構の精査と同地区の遺構確認精査、調査区中央を通って北～南～東に築かれた土塁と北側の堀の精査、調査区南西側と北側の粗掘り及び遺構・遺物の有無を確認しながら地山までの掘り下げを行う。また、７日までにＳＤ01の覆土除去を終了した。

８月19日～23日、平坦部以外の北側と西側斜面においては木の根の抜き取りをしながら遺構確認精査を行う。

８月26日～30日、10月初めに引き渡す地区で検出遺構の調査、調査区中央を通って北～南～東に築かれた土塁の精査、調査区中央平坦部の地山までの掘り下げと遺構確認精査及び検出遺構の調査、東側斜面の粗掘りと地山までの掘り下げを行う。また、遺構にかかる木の根の抜き取りも行う。27日、調査区北端の空堀の空中写真測量を開始した。ＳＫＩ(竪穴状遺構)１基、ＳＫ11基、ＳＮ２基、ＳＤ３条等を検出した。

９月２日～６日、上位の平坦部では遺構の検出と半截を中心に、下位では斜面北側の工事区域にかかる部分の平面実測を中心に調査する。２日から平坦部北側の土塁を除去する。また、６日空中写真測量を完了した。ＳＫ１基、ＳＤ２条等を検出した。

９月９日～13日、10月上旬工事着工地区の調査、調査区中央を通って北～南～東に築かれた土塁の除去、調査区中央平坦部の地山までの掘り下げと遺構確認精査及び検出遺構の調査、前週空中写真測量を終了したＳＤ02北側の土塁を除去して、その下にあるＳＤ03を出す作業を行う。また、遺構にかかる木の根の抜き取りも行う。さらに、調査区中央の土塁除去は、ＭＢ47からＭＢ54の間をほぼ終了した(ただし、土層観察用ベルトを一部残す)。ＳＫ４基、ＳＤ１条等を検出した。また、ＳＫＩ137から炭化材や藁様の炭化したもの、焼土が出土した。この遺構は火災にあった遺構であると考察した。

９月17日～20日、遺構の精査は、主に９月末までに終了する地域と東側上位平坦部に分かれて行う。前者

は北西側の各遺構の実測とＳＤ03の精査を中心に行う。後者は遺構の検出と土塁の実測・除去を中心に行う。これらと併せて台地南端の粗掘りを行う。ＳＩ３軒、ＳＫ４基、ＳＮ２基、ＳＤ10条等を検出した。

９月23日～27日、10月上旬の工事着工地区の検出遺構の調査、同地区と平坦部の間の遺構確認精査、調査区南東端の粗掘りを行う。ＳＩ２軒、ＳＫ４基、ＳＤ１条等を検出した。

９月30日～10月４日、調査を終了した10月上旬から行う北側掘削区域を引き渡す。北側工事区域で新たに発見された住居跡などの精査を行い、併せて土塁外側の区域で粗掘り及び精査を行う。ＳＩ１軒、ＳＮ１基、ＳＤ４条等を検出した。

10月７日～11日、調査区北西側と土塁内側平坦部の遺構確認精査、検出遺構の実測を行う。併せて調査区南側の遺構確認精査を行う。ＳＫ155から貝殻が出土した。

10月14日～18日、調査区南側と土塁内側平坦部の精査を中心に進める。前者では３つの塚の平面図作成を終了し、一部で半截しているほか、斜面肩部を検出した。後者では竪穴住居跡の半截を中心にしつつ、土坑等の完掘写真撮影までの作業を進める。ＳＩ１軒、ＳＫ１基、ＳＱ２基、ＳＤ２条等を検出した。また、ＳＫＩ137から炭化米、東側の塚盛土中から寛永通寶が出土した。

10月21日～25日、調査区南側と土塁内側平坦部の遺構確認精査と、検出遺構の実測を中心に作業を進める。また、調査区南東端の空堀等の精査を行う。ＳＩ１軒、ＳＫ７基、ＳＤ５条等を検出した。また、ＳＤ207から炭化米が出土した。

10月28日～11月１日、前週と同じ地区の調査を継続する。ＳＩ１軒、ＳＫ５基、ＳＱ１基、ＳＮ２基、ＳＤ13条、ＳＦ１条等を検出した。

11月５日～８日、遺構確認精査と検出遺構の実測を行う。なお、粗掘りは今週で終了した。ＳＩ３軒、ＳＫ６基、ＳＮ１基、ＳＤ１条等を検出した。

11月11日～15日、調査区南部で検出された遺構の調査及び、他地区で検出された遺構の補足調査を行う。ＳＩ６軒、ＳＫＩ１基、ＳＫ３基等を検出した。11月15日、全検出遺構の精査を終え、発掘器材を撤収して発掘調査を終了した。

注

１．秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第85集　1981(昭和56)年

２．秋田市『秋田市史 第八巻 中世 史料編』1996(平成８)年　ｐ281

第４章　調査の記録

本調査で検出された遺構は、竪穴住居跡33軒、竪穴状遺構４基、掘立柱建物跡１棟、柱穴様ピット123基、土坑79基、集石３基、焼土遺構12基、溝跡69条・空堀８条、土塁２条、塚３基、炭窯跡１基、その他の遺構１基の計339遺構である。これらの遺構は調査区全体にかけて検出された。このうち土塁と空堀(一部)、塚を除く遺構は、第Ⅵ層上面で検出された。遺物は第Ⅱ～Ⅴ層及び遺構覆土中から、旧石器時代の石器、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器、中世・近世の陶磁器・銭貨、その他鉄製品・鉄滓・炭化した米や雑穀類などが出土した。

第１節　検出遺構

１．竪穴住居跡

ＳＩ11(第９図、図版６)

ＭＫ52・53、ＭＬ53グリッドで確認された。南東壁付近に長軸(北西－南東)46㎝×短軸(北東－南西)37㎝の楕円形を呈する焼土があり、北西壁付近に長軸(北東－南西)110㎝×短軸(北西－南東)66㎝の落ち込みが認められる。木の根によって撹乱されているため北東側一部の壁は確認できなかったが、平面形は北東壁3.70ｍ、北西壁2.70ｍ、南東壁2.60ｍ、南西壁3.78ｍのほぼ隅丸方形を呈する。壁高は北東壁６㎝、北西壁13㎝、南東壁14㎝、南西壁14㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。住居内に径15～34㎝、床面からの深さ２～８㎝のピットが４個穿たれている。遺物は、縄文土器胴部２点、土師器胴部２点が出土した。

ＳＩ31(第９図)

ＭＧ53・54、ＭＨ53グリッドで確認された。木の根によって撹乱されているため北東側半分・南東側半分・南西側半分と北西側の壁溝は確認できなかったが、平面形は現存する北東壁溝・南東壁溝・南西壁溝(いずれも半分現存)から、一辺4.00ｍ前後のほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅10～20㎝、底面幅４～16㎝、深さ５～12㎝である。遺物は出土しなかった。

ＳＩ75(第10図)

ＭＫ50・51、ＭＬ49・50・51グリッドで確認された、東側にカマドの痕跡が認められる竪穴住居跡である。木の根によって撹乱されているため北壁を、また、南東部をＳＫ06に切られているため西側一部と南側一部の壁を、さらに、遺構内中央部をＳＤ08が通っているため南壁の一部をそれぞれ確認できなかった。平面形は現存する西壁・南壁(いずれも大部分現存)・東壁から、ほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。床面は東側がやや窪んでいて、堅くしまっている。遺物は、土師器口縁部６点(うち１点は第58図に掲載)・胴部19点・底部３点、鉄滓３点が出土した。

ＳＩ107(第11図)

ＭＩ47・ＭＪ47グリッドで確認された、南側にカマドが付設されている竪穴住居跡である。ＳＫ116の西側を切っている。本住居が調査区外にかかっていたため南西側の一部を、また、東側半分の壁と北側大部分の壁溝をそれぞれ確認できなかったが、平面形は現存する北壁溝(一部現存)・西壁溝と東壁溝(いずれも半分現存)・南壁から、一辺3.00ｍ前後のほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅12～22㎝、底面幅６～11㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。住居内に径23㎝、床面からの深さ25㎝のピッ

トが１個穿たれている。遺物は、土師器口縁部７点(うち２点は第58図に掲載)・胴部34点・底部７点、鉄滓８点、石器１点が出土した。

ＳＩ112(第12図)

ＭＤ46・47・48、ＭＥ46・47・48、ＭＦ47グリッドで確認された、南東部にカマドの痕跡が認められる竪穴住居跡である。ＳＮ119・125、ＳＫＰ191、ＳＤ417と重複関係にあるが、全て同一面(第Ⅵ層)での検出であり、新旧関係は不明である。平面形は、北壁溝6.60ｍ、南壁溝6.55ｍ、東壁(溝)6.59ｍ、西壁溝6.57ｍのほぼ隅丸方形を呈する。壁溝は上面幅15～61㎝、底面幅６～44㎝、深さ15～17㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。南壁溝に径21～36㎝、床面からの深さ14～22㎝のピットが２個穿たれている。遺物は、土師器口縁部３点(３点とも第58図に掲載)・胴部７点・底部１点(第58図に掲載)が出土した。

ＳＩ115(第11図)

ＭＪ47・48、ＭＫ47グリッドで確認された、南東部にカマドの痕跡が認められる竪穴住居跡である。木の根によって撹乱されているため北壁と西壁は確認できなかったが、平面形は現存する東壁(溝)と南壁溝からほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅10～26㎝、底面幅４～18㎝、壁高は東壁11㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は、土師器口縁部８点(うち６点は第59図に掲載)・胴部30点・底部２点(うち１点は第59図に掲載)が出土した。

ＳＩ130(第13図、図版６)

ＬＴ53・54・55、ＭＡ53・54、ＭＢ53・54・55グリッドで確認された、南西部にカマドの痕跡が認められる竪穴住居跡である。北側を空堀に切られているため東側一部・西側一部と北側の壁溝は確認できなかったが、平面形は現存する東壁溝・西壁溝(いずれも一部現存)と南壁溝から一辺6.55ｍ前後のほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅16～30㎝、底面幅８～18㎝、深さ８～30㎝である。床面は平坦で、堅くしまっている。住居内に径22～26㎝、床面からの深さ10～30㎝のピットが３個穿たれている。遺物は、土師器胴部１点が出土した。

ＳＩ148(第14図、図版７)

ＬＳ47・48、ＬＴ47・48、ＭＡ47・48グリッドで確認された。ＳＫ152の北側とＳＫ153の西側を切っている。木の根によって撹乱されているため南側半分の壁は確認できなかったが、平面形は北壁溝6.45ｍ、南壁溝6.85ｍ、東壁溝6.55ｍ、西壁溝6.70ｍの隅丸方形を呈する。壁溝は上面幅18～35㎝、底面幅８～21㎝、深さ13～30㎝である。床面はほぼ平坦で、堅くしまっている。遺物は、縄文土器胴部１点、土師器胴部１点が出土した。

ＳＩ162(第15図)

ＭＣ47・48・49グリッドで確認された。南東側でＳＤ146を切っている。北西側をＳＤ04に切られているため南西側の大部分と北東側・北西側の壁は確認できなかったが、平面形は現存する北東壁・南西壁(いずれも一部現存)と南東側の壁から、隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は南東壁35㎝である。床面はやや窪んでいて堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ192(第16図、図版７)

ＬＴ49・50、ＭＡ49・50グリッドで確認された、北東側に張り出してカマドが付設されている竪穴住居跡である。平面形は北東壁3.99ｍ、北西壁4.08ｍ、南東壁3.87ｍ、南西壁3.39ｍのほぼ隅丸方形を呈する。壁高は北東壁21㎝、南西壁16㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は、土師器口縁部３点(うち２点は第61図に掲載)・胴部34点・底部２点(２点とも第60図に掲載)が出土した。

ＳＩ198(第16図、図版８)

ＬＰ50・51、ＬＱ50・51グリッドで確認された、南東側にカマドが付設されている竪穴住居跡である。平面形は北東壁2.83ｍ、北西壁3.25ｍ、南東壁3.09ｍ、南西壁3.10ｍのほぼ隅丸方形を呈する。壁高は南西壁26㎝である。床面は南東側がやや窪んでいて堅くしまっている。遺物は、縄文土器口縁部２点(第56図に掲載)、土師器口縁部５点(うち２点は第61図に掲載)・胴部27点・底部４点(うち３点は第61図に掲載)が出土した。

ＳＩ215(第17図、図版８)

ＭＥ56・57、ＭＦ56・57、ＭＧ57グリッドで確認された、東側にカマドの痕跡が認められる竪穴住居跡である。ＳＤ04に切られており、そのＳＤ04はＳＫ217に切られているため、本住居はＳＫ217より古い。また、木の根によって撹乱されているため北東側半分・南東側半分の壁溝を、また、北西側をＳＤ04に切られているため北西側の壁溝をそれぞれ確認できなかったが、平面形は現存する北東壁溝・南東壁溝(いずれも半分現存)と北西壁溝・南西壁溝から一辺5.30ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅14～40㎝、底面幅５～27㎝、深さ19㎝前後である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は、土師器胴部５点・底部１点(第61図に掲載)、須恵器胴部１点(第73図に掲載)、鉄滓１点が出土した。

ＳＩ223(第18図、図版８)

ＭＦ56、ＭＧ55・56グリッドで確認された、南東壁にカマドが付設されている竪穴住居跡である。木の根によって撹乱されているため南西側大部分の壁は確認できなかったが、平面形は現存する南西壁(一部現存)と北東壁・南東壁・北西壁から、一辺3.50ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は北西壁11㎝、南東壁13㎝である。床面はやや凹凸があり堅くしまっている。南東側・北東側・北西側の壁に径21～24㎝、床面からの深さ24～40㎝のピットが５個穿たれている。遺物は、土師器口縁部１点・胴部１点が出土した。

ＳＩ226(第18図)

ＭＮ51・52、ＭＯ51グリッドで確認された、東側にカマドが付設されている竪穴住居跡である。木の根によって撹乱されているため東側一部・西側一部・北側の壁は確認できなかったが、平面形は現存する東壁溝・西壁溝(いずれも一部現存)と南壁溝から一辺4.80ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は南壁３㎝、東壁４㎝である。床面はやや凹凸があり堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ238(第19図)

ＬＴ51・52、ＭＡ50・51・52、ＭＢ52グリッドで確認された。南西側にＳＮ194とＳＮ195があるが、２基ともカマドの痕跡と思われる。木の根によって撹乱されているため南西側半分の壁溝は確認できなかったが、平面形は現存する南西壁溝(一部現存)と北東壁溝・南東壁溝・北西壁溝から一辺６ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅13～59㎝、底面幅４～21㎝、深さ20～24㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。北東壁溝と南西壁溝に径16～22㎝、床面からの深さ19～29㎝のピットが３個穿たれている。遺物は、縄文土器胴部２点、土師器口縁部７点・胴部77点・底部３点(うち１点は第62図に掲載)が出土した。

ＳＩ240(第20図)

ＬＮ42グリッドの地山で確認された。木の根によって撹乱されているため北西側一部・南西側一部の壁溝は確認できなかったが、平面形は現存する北西壁溝・南西壁溝(いずれも一部現存)から、隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅17～29㎝、底面幅８～15㎝、深さ28㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は、土師器口縁部２点(２点とも第62図に掲載)・胴部６点・羽口１点(第62図に掲載)が出土した。

ＳＩ268(第21図、図版９)

ＬＲ51・52・53、ＬＳ51・52・53、ＬＴ51・52・53グリッドで確認された。木の根によって撹乱されているため北側一部の壁溝は確認できなかったが、平面形は現存する北壁溝（一部現存）と南壁溝・東壁溝・西壁溝から一辺6.20ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅13～33㎝、底面幅４～17㎝、深さ11～32㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。住居内南側に径19～28㎝、床面からの深さ10～37㎝のピットが４個穿たれている。遺物は、土師器口縁部２点（うち１点は第62図に掲載）・胴部４点・底部３点、石器１点が出土した。

ＳＩ271（第20図）

ＬＫ43、ＬＬ43、ＬＭ42・43グリッドで確認された、南西壁付近にカマドが付設されている竪穴住居跡である。木の根によって撹乱されているため北東側一部と南東側の壁は確認できなかったが、平面形は現存する北東壁・南西壁（いずれも一部現存）・北西壁から一辺6.10ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は北西壁48㎝である。床面は凹凸があり堅くしまっている。住居内に径23～29㎝、床面からの深さ14～20㎝のピットが２個穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ372（第22図）

ＬＱ53・54、ＬＲ53・54グリッドで確認された。北西部をＳＫ423に切られているため西側一部の壁は確認できなかったが、平面形は現存する北壁・西壁（いずれも大部分現存）と東壁・南壁から一辺2.50～3.60ｍ前後のほぼ隅丸方形を呈する。壁高は北壁23㎝、南壁20㎝、東壁９㎝、西壁32㎝である。床面はやや凹凸があり堅くしまっている。南壁に径29～45㎝（残存部のみ）、床面からの深さ31～43㎝のピットが２個穿たれている。遺物は、土師器口縁部７点（うち４点は第62図に掲載）・胴部35点・底部２点（うち１点は第62図に掲載）が出土した。

ＳＩ373（第23図）

ＭＤ55・56、ＭＥ55・56グリッドで確認された。木の根によって撹乱されているため北西側一部・南東側一部と南西側の壁は確認できなかったが、平面形は現存する北西壁・南東壁（いずれも一部現存）と北西壁から一辺3.85ｍ前後のほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は北東壁28㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。住居内に径17～32㎝、床面からの深さ８～25㎝前後のピットが20個穿たれている。遺物は、土師器口縁部３点（すべて第63図に掲載）・胴部11点（うち１点は第63図に掲載）・底部１点・１個体１点、鉄滓４点が出土した。

ＳＩ379（第24図、図版10）

ＬＴ36・37、ＬＴ36・37・38グリッドで確認された。木の根によって撹乱されているため北東側一部・南東側の壁溝は確認できなかったが、平面形は現存する北東壁溝（一部現存）と北西壁溝・南西壁溝から一辺3.20ｍ前後のほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅13～22㎝、底面幅９～14㎝、深さ17～23㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。北西壁溝と南西壁溝に径19～30㎝、床面からの深さ８～18㎝の壁柱穴が４個穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ380（第25図、図版９）

ＬＱ41・42・43、ＬＲ41・42・43、ＬＳ42グリッドで確認された、住居内中央部やや北西寄りにカマドの痕跡が認められる竪穴住居跡である。住居内やや北西よりに位置するＳＮ399との重複関係はこの観察では不明瞭であり、新旧関係を把握することはできなかった。北側をＳＤ04に切られているため北東側一部・北西側一部の壁溝は確認できなかったが、平面形は北東壁（溝）6.80ｍ、北西壁（溝）6.70ｍ、南東壁（溝）6.68ｍ、南西壁（溝）6.91ｍの隅丸方形を呈する。壁溝は上面幅23～49㎝、底面幅７～31㎝、深さ16㎝前後である。床

面はほぼ平坦で堅くしまっている。壁溝北隅と南東壁溝に径33～48㎝、床面からの深さ17～39㎝のピットが３個穿たれている。遺物は、土師器口縁部５点(うち１点は第63図に掲載)・胴部24点・底部２点が出土した。

ＳＩ385(第26図、図版10)

ＭＡ39・40、ＭＢ39・40・41、ＭＣ40グリッドの地山で確認された、南東側にカマドが付設されている竪穴住居跡である。ＳＩ407の北西側を切っている。平面形は北東壁溝5.30ｍ、北西壁(溝)4.50ｍ、南東壁溝4.28ｍ、南西壁溝5.76ｍの隅丸方形を呈する。壁溝は上面幅14～29㎝、底面幅６～16㎝、深さ24㎝前後である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。北西壁溝、南西壁溝と壁溝西隅に径20～26㎝、床面からの深さ31～85㎝前後のピットが４個穿たれている。遺物は、土師器口縁部５点(うち４点は第63図に掲載)・胴部８点・底部４点(うち２点は第63図に掲載)が出土した。

ＳＩ406(第27図、図版10)

ＬＴ38・39・40、ＭＡ38・39・40グリッドで確認された、北側にカマドの痕跡が認められる竪穴住居跡である。ＳＩ407の北東側とＳＩ412の北東側を切っている。北東側の一部をＳＤ343に、住居内の中央部から南東側をＳＩ428にそれぞれ切られているため北東側一部・南東側大部分の壁溝は確認できなかったが、平面形は現存する北東壁・南東壁(いずれも一部現存)と北西壁溝・南西壁溝から一辺6.40～8.00ｍのほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は南西壁14㎝で、壁溝は上面幅16～42㎝、底面幅６～16㎝、深さ21～26㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。南西壁付近に径12～47㎝、床面からの深さ12～30㎝のピットが９個穿たれている。遺物は、土師器口縁部２点・胴部６点・底部１点、須恵器胴部１点(第73図に掲載)が出土した。

ＳＩ407(第28図、図版10)

ＭＡ39、ＭＢ38・39グリッドで確認された。本住居が調査区外にかかっていたため南西側を、また、北側をＳＩ385に、北東側をＳＩ406に、南東側をＳＩ412にそれぞれ切られているため、北東側一部と南東側の壁溝を確認できなかったが、平面形は現存する北東壁溝・北西壁溝(いずれも一部現存)から、ほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅16～26㎝、底面幅８～16㎝、深さ24～35㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ411(第29図)

ＬＮ42、ＬＯ41・42、ＬＰ41・42グリッドで確認された、北東側の壁溝付近にカマドが付設されている竪穴住居跡である。木の根によって撹乱されているため北東側一部の壁溝を、また、南東側をＳＤ341に切られているため、南西側一部と南東側の壁溝をそれぞれ確認できなかったが、平面形は現存する北東壁溝・南西壁溝(それぞれ一部現存)と北西壁溝から一辺5.40ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅15～42㎝、底面幅９～20㎝、深さ34㎝前後である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。北西壁溝に径24㎝、床面からの深さ48㎝のピットが１個穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ412(第28図、図版10)

ＬＴ38、ＭＡ38・39、ＭＢ38・39グリッドで確認された。本住居が調査区外にかかっていたため南西側を、また、北東側をＳＩ406に切られているため北東側大部分の壁をそれぞれ確認できなかったが、平面形は現存する北西壁溝(一部現存)から、隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は北西壁42㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ413(第30図、図版10)

ＬＲ36、ＬＳ36・37グリッドで確認された。本住居が調査区外にかかっていたため南西側を、また、住居

内の中央部から南東側をＳＩ414に切られているため、北東側一部・南東側の壁をそれぞれ確認できなかったが、平面形は現存する北東壁(一部現存)・北西壁から、隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は北東壁16㎝、北西壁14㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。北東壁付近に径25㎝、床面からの深さ27㎝のピットが１個穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ414(第30図、図版10)

ＬＱ35・36、ＬＲ35・36、ＬＳ36グリッドで確認された。ＳＩ413の南東側とＳＩ415の南西側を切っている。本住居が調査区外にかかっていたため南西側を確認できなかったが、平面形は南東壁・北西壁溝(いずれも一部は調査区外)と北東壁から一辺6.30ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁高は北東壁９㎝、南東壁６㎝で、壁溝は上面幅10～20㎝、底面幅６～９㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ415(第30図、図版10)

ＬＱ35・36、ＬＲ36グリッドで確認された。木の根によって撹乱されているため南東側一部の壁溝を、また、遺構内の中央部から南西側をＳＩ414の切られているため、北西側一部と南西側の壁をそれぞれ確認できなかったが、平面形は現存する南東壁溝・北西壁溝(いずれも一部現存)と北東壁溝から一辺3.10ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅14～26㎝、底面幅６～18㎝、深さ14～20㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

ＳＩ416(第30図、図版10)

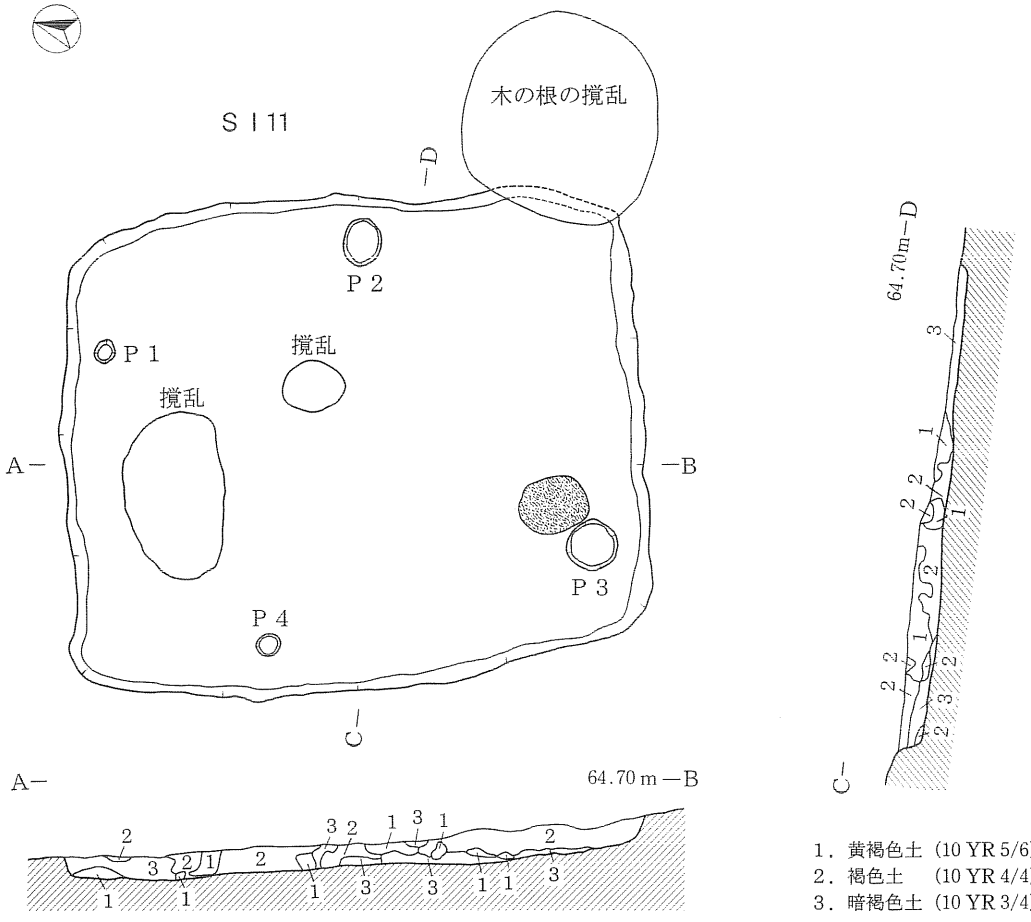
ＬＱ37グリッドで確認された。木の根によって撹乱されているため南東壁溝を、また、北東側をＳＤ343に切られているため、北西側一部と北東側の壁溝をそれぞれ確認できなかったが、平面形は現存する北西壁溝(一部現存)と南西壁溝から、隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅21～27㎝、底面幅10～17㎝、深さ10～18㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

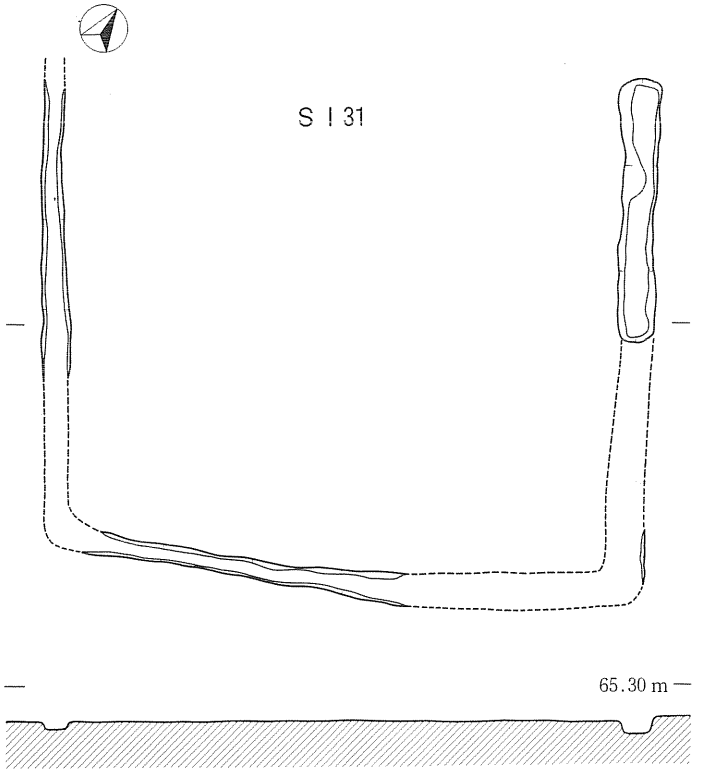
ＳＩ424(第31図、図版10)

ＬＲ37・38、ＬＳ38グリッドで確認された。木の根によって撹乱されているため南東壁溝を、また、北東側をＳＤ343に切られているため、北西側一部と北東側の壁溝をそれぞれ確認できなかったが、平面形は現存する北西壁溝(一部現存)と南西壁から、隅丸方形を呈すると推定される。壁溝は上面幅13～26㎝、底面幅６～14㎝、深さ13～34㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は、土師器胴部５点、鉄滓１点が出土した。

ＳＩ428(第27図、図版10)

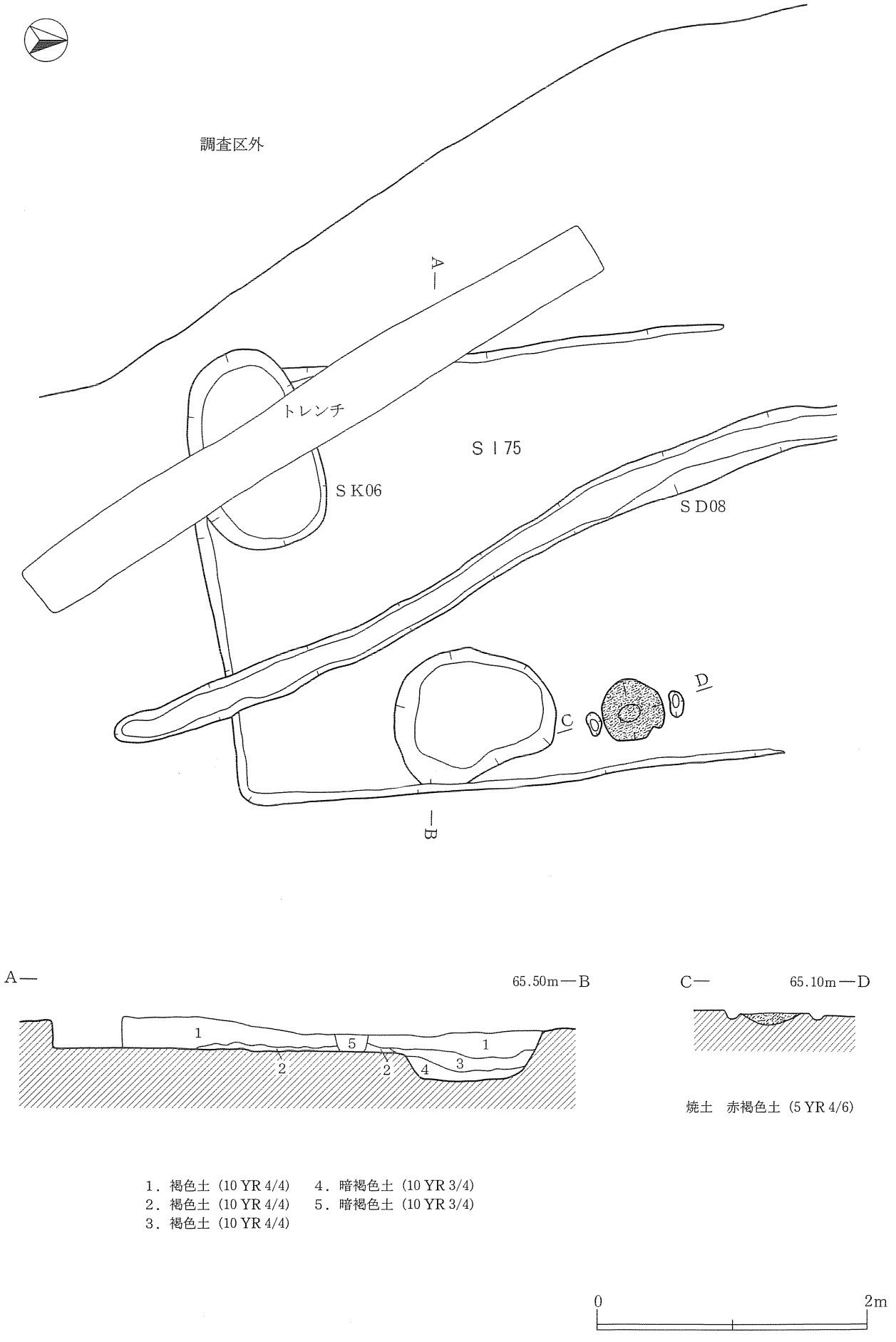
ＬＳ38・39、ＬＴ38・39、ＭＡ38・39グリッドで確認された。ＳＩ406の中央部から南東側を切っている。木の根によって撹乱されているため北東側一部・南西側一部と北西側の壁溝は確認できなかったが、平面形は現存する北東壁溝(一部現存)と南東壁溝・南西壁溝(いずれも大部分現存)から一辺5.60ｍ前後の隅丸方形を呈するものと推定される。壁溝は上面幅13～25㎝、底面幅５～13㎝、深さ22～23㎝である。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物は、土師器口縁部１点(第64図に掲載)・胴部13点・底部２点(うち１点は第64図に掲載)が出土した。



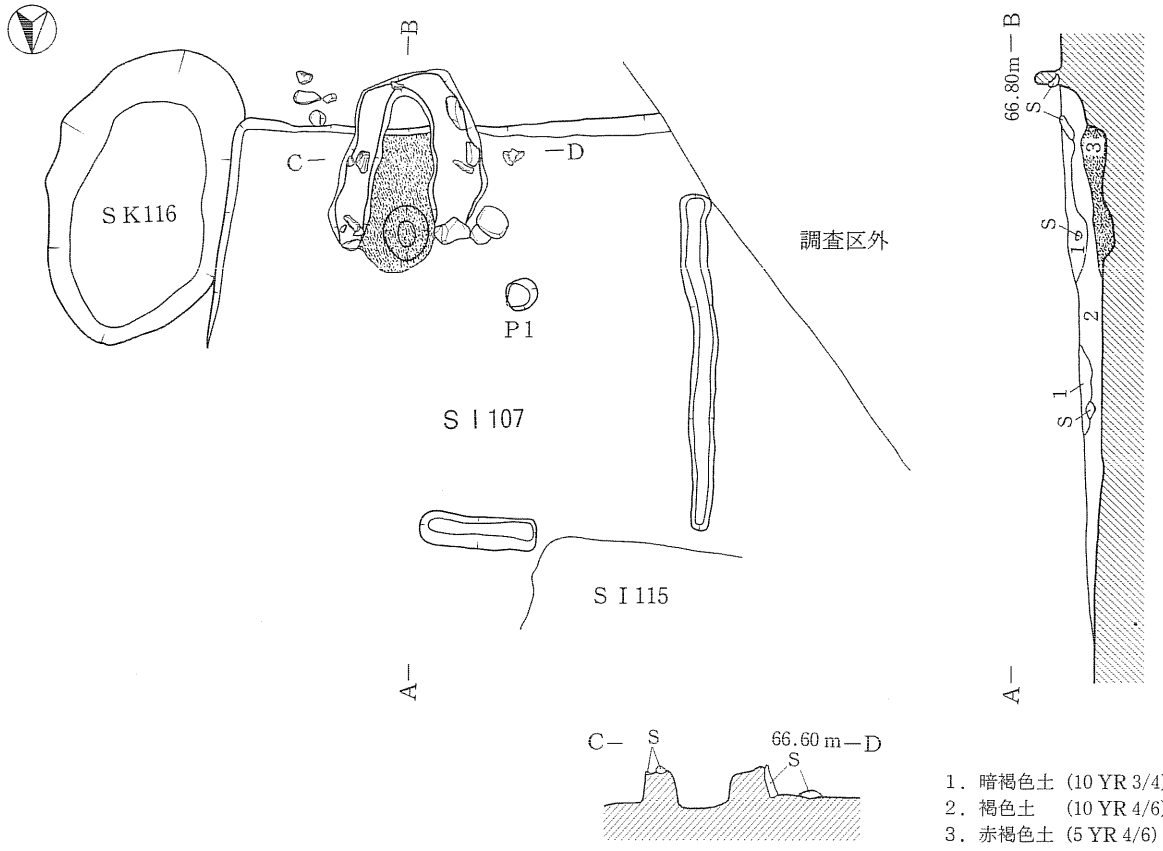


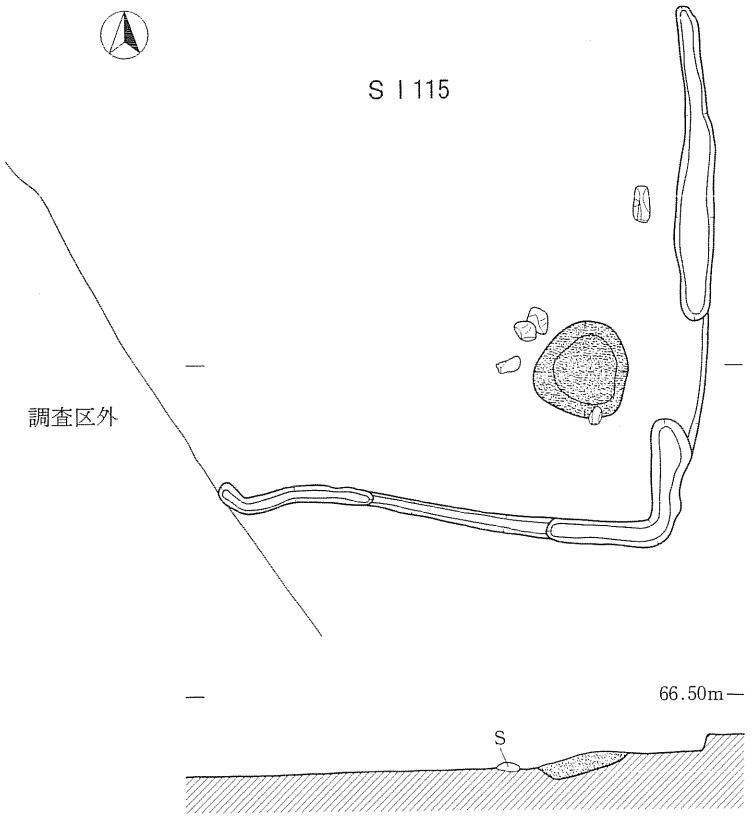
0　2 m

第９図　S I 11・31

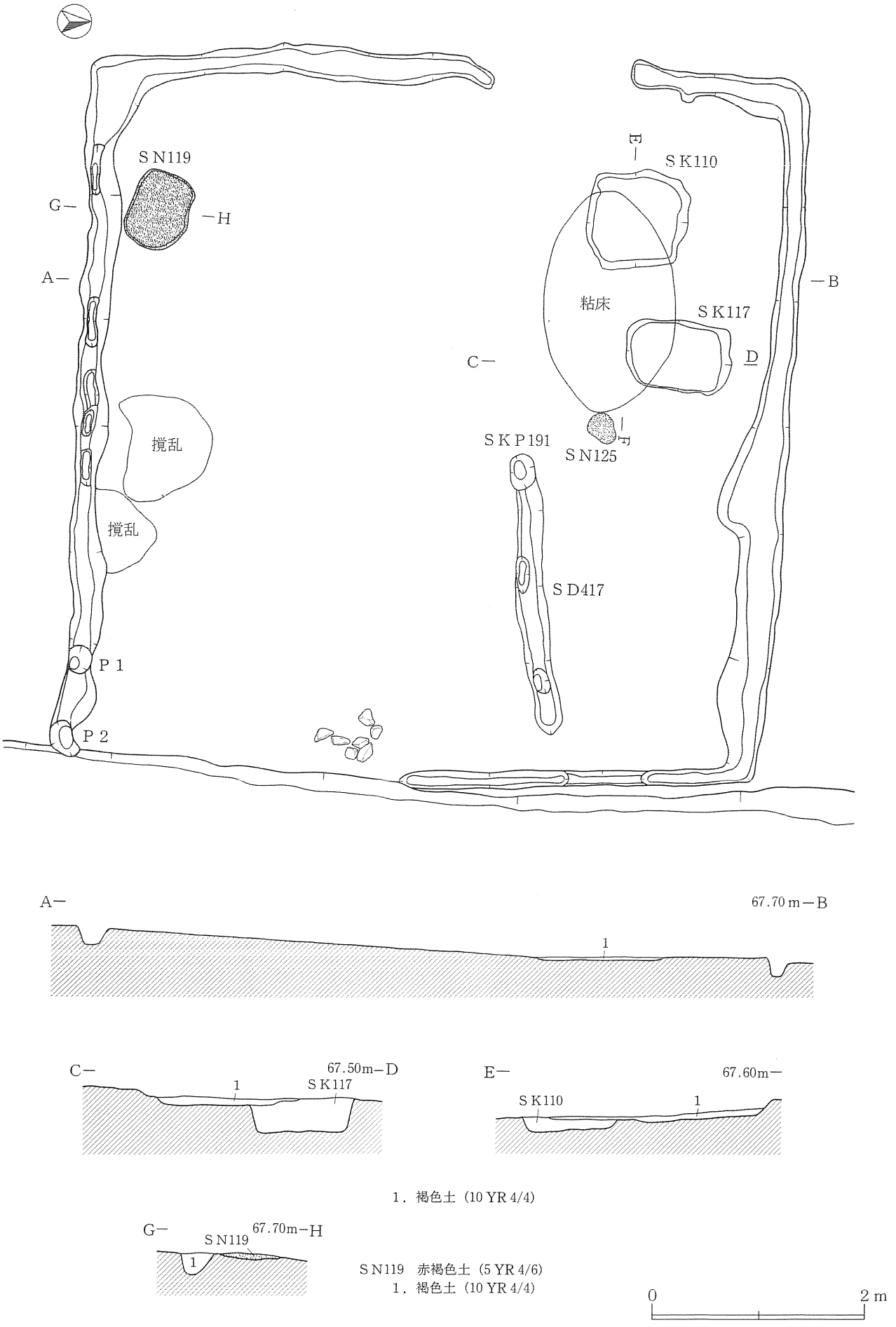

調査区外
A
トレンチ
S I 75
S K06
S D08
C
D
B
A
65.50m
B
1
2
5
2
4
3
1
C
65.10m
D
焼土　赤褐色土（5 YR 4/6）
1．褐色土（10 YR 4/4）
2．褐色土（10 YR 4/4）
3．褐色土（10 YR 4/4）
4．暗褐色土（10 YR 3/4）
5．暗褐色土（10 YR 3/4）
0
2m

第10図　S I 75

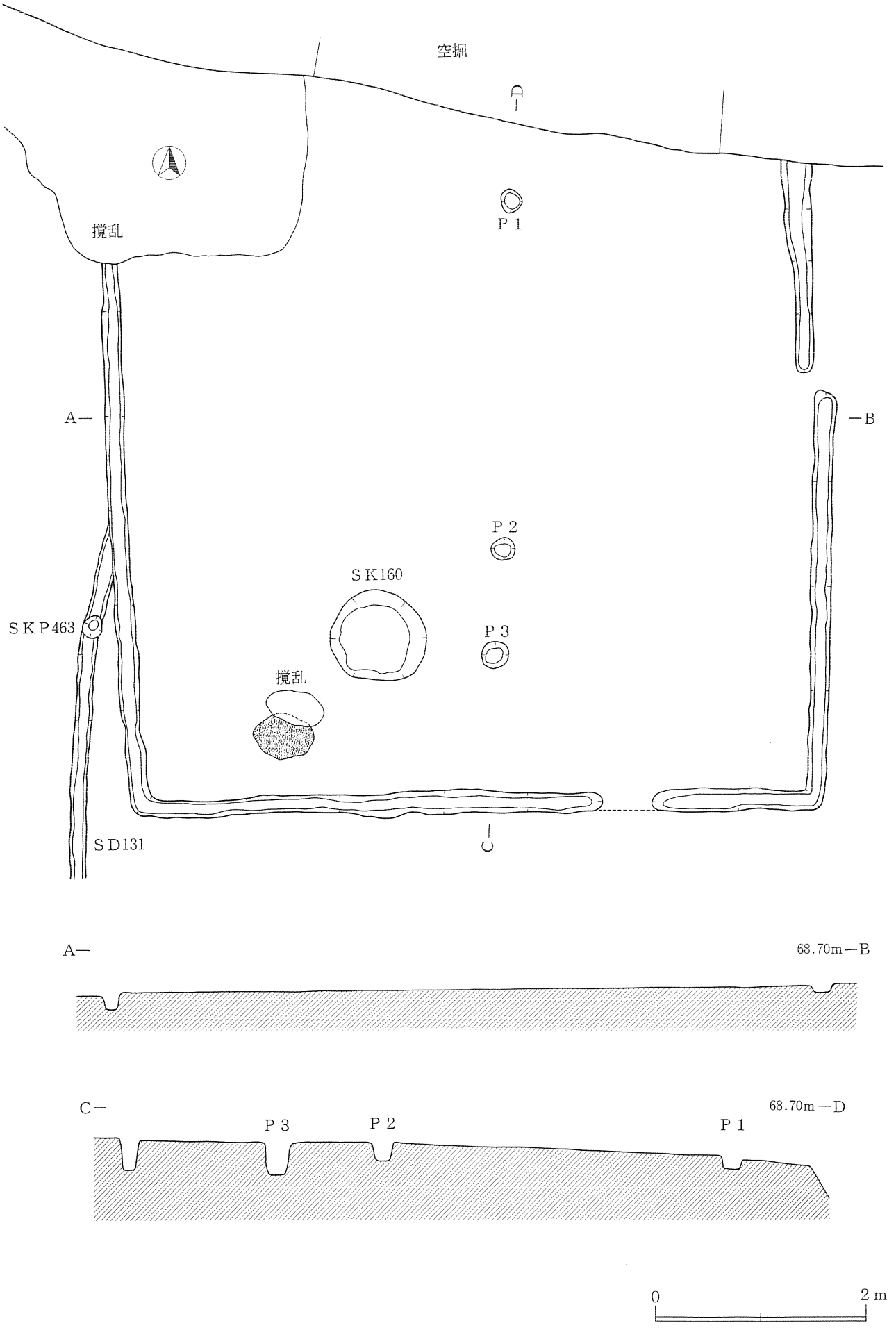




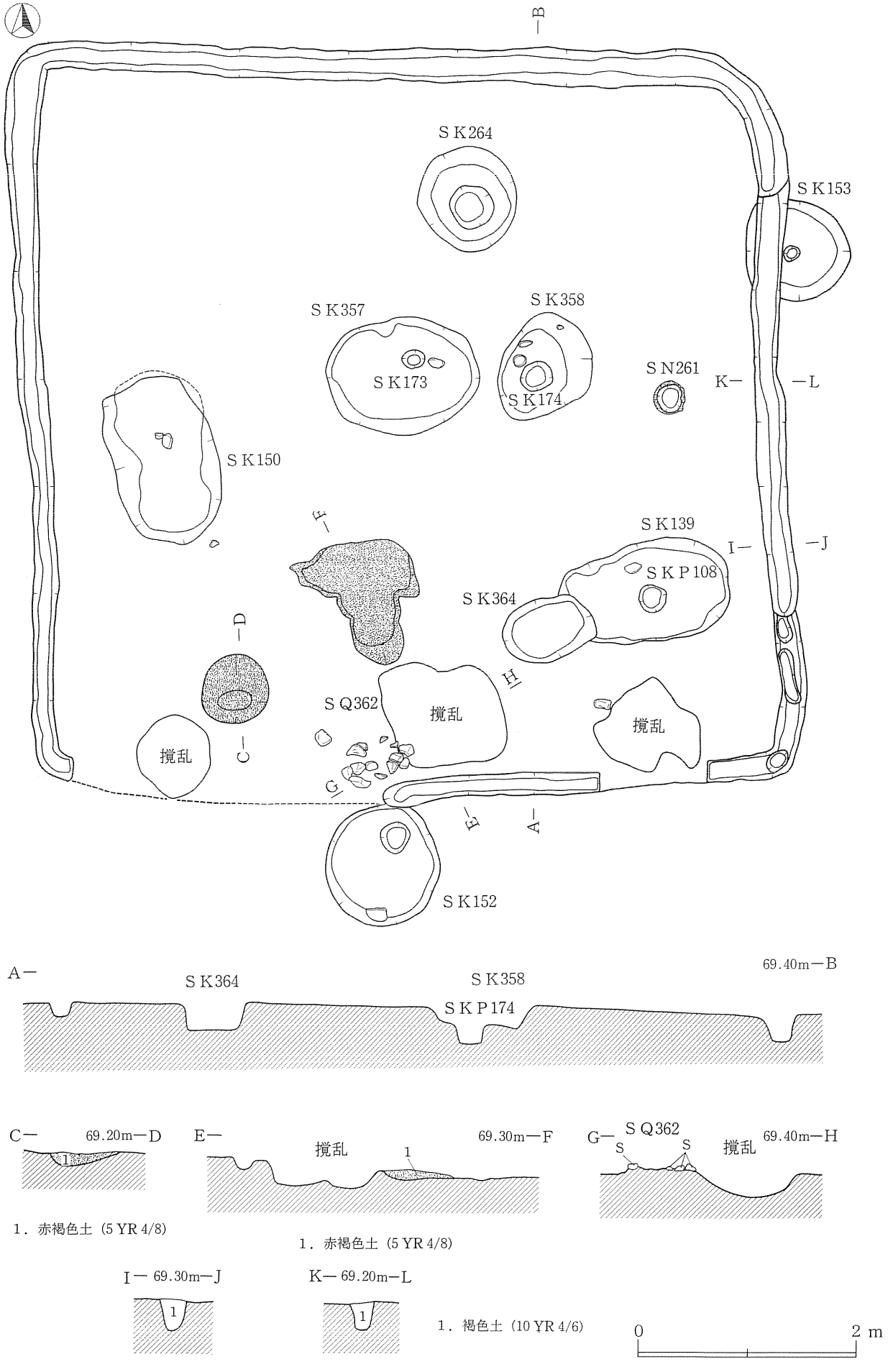
第11図　SI107・115


SN119
G—
—H
A—
—B
E—
SK110
粘床
SK117
C—
D
F—
SN125
SKP191
撹乱
撹乱
SD417
P1
P2
A—
67.70m—B
1
C—
67.50m—D
1
SK117
E—
67.60m—
SK110
1
1．褐色土（10YR 4/4）
G—
67.70m—H
SN119
1
SN119　赤褐色土（5YR 4/6）
1．褐色土（10YR 4/4）
0
2m

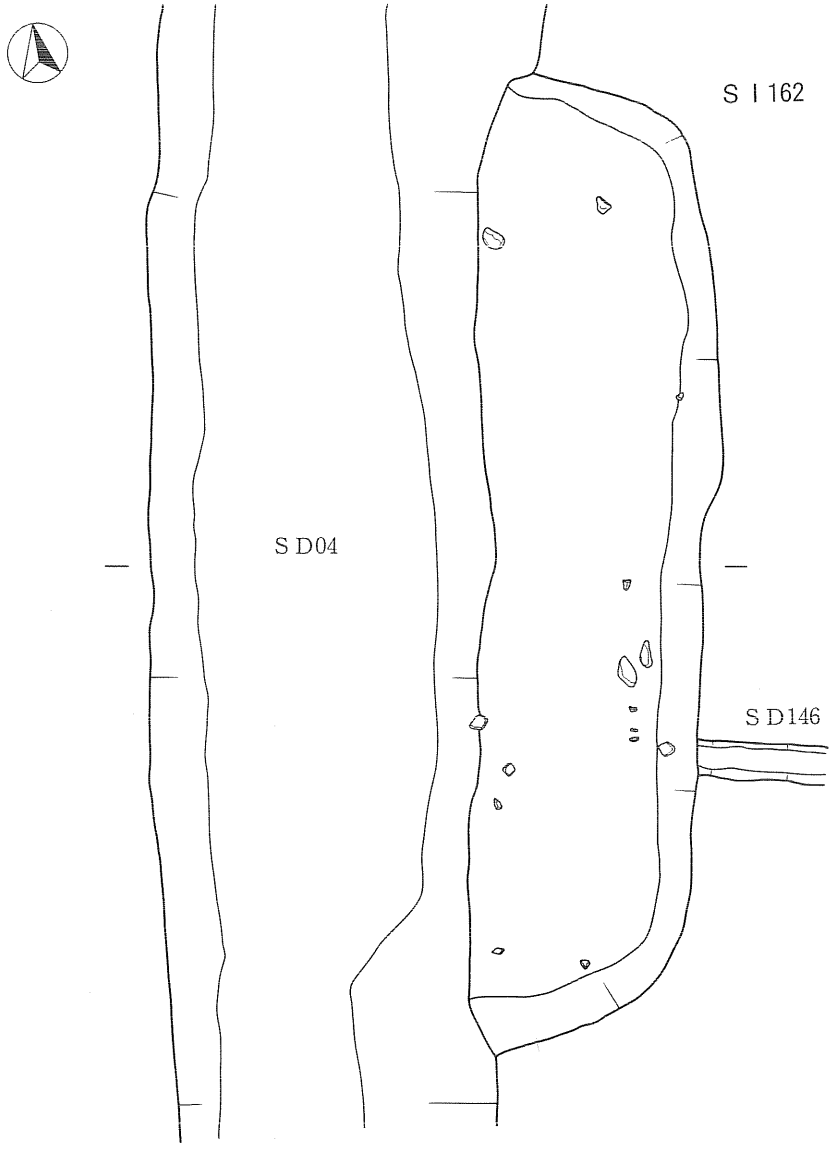
第12図　ＳＩ112

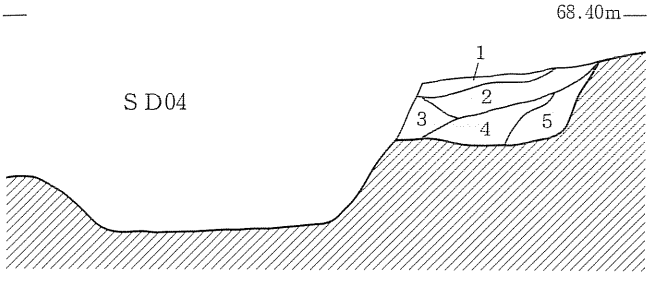

空掘
D
撹乱
P 1
A
B
P 2
S K160
S K P463
P 3
撹乱
S D131
C
A
68.70m
B
C
68.70m
D
P 3
P 2
P 1
0
2 m

第13図　ＳＩ130

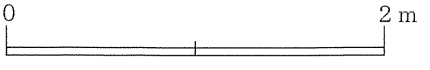

B
SK264
SK153
SK357
SK358
SK173
SK174
SN261
K
L
SK150
F
SK139
I
J
SKP108
SK364
D
H
SQ362
撹乱
撹乱
撹乱
C
G
E
A
SK152
A
SK364
SK358
SKP174
69.40m—B
C
69.20m—D
1
1．赤褐色土（5YR 4/8）
E
撹乱
1
69.30m—F
1．赤褐色土（5YR 4/8）
G
SQ362
S
S
撹乱
69.40m—H
I
69.30m—J
1
K
69.20m—L
1
1．褐色土（10YR 4/6）
0
2 m

第14図　ＳＩ148

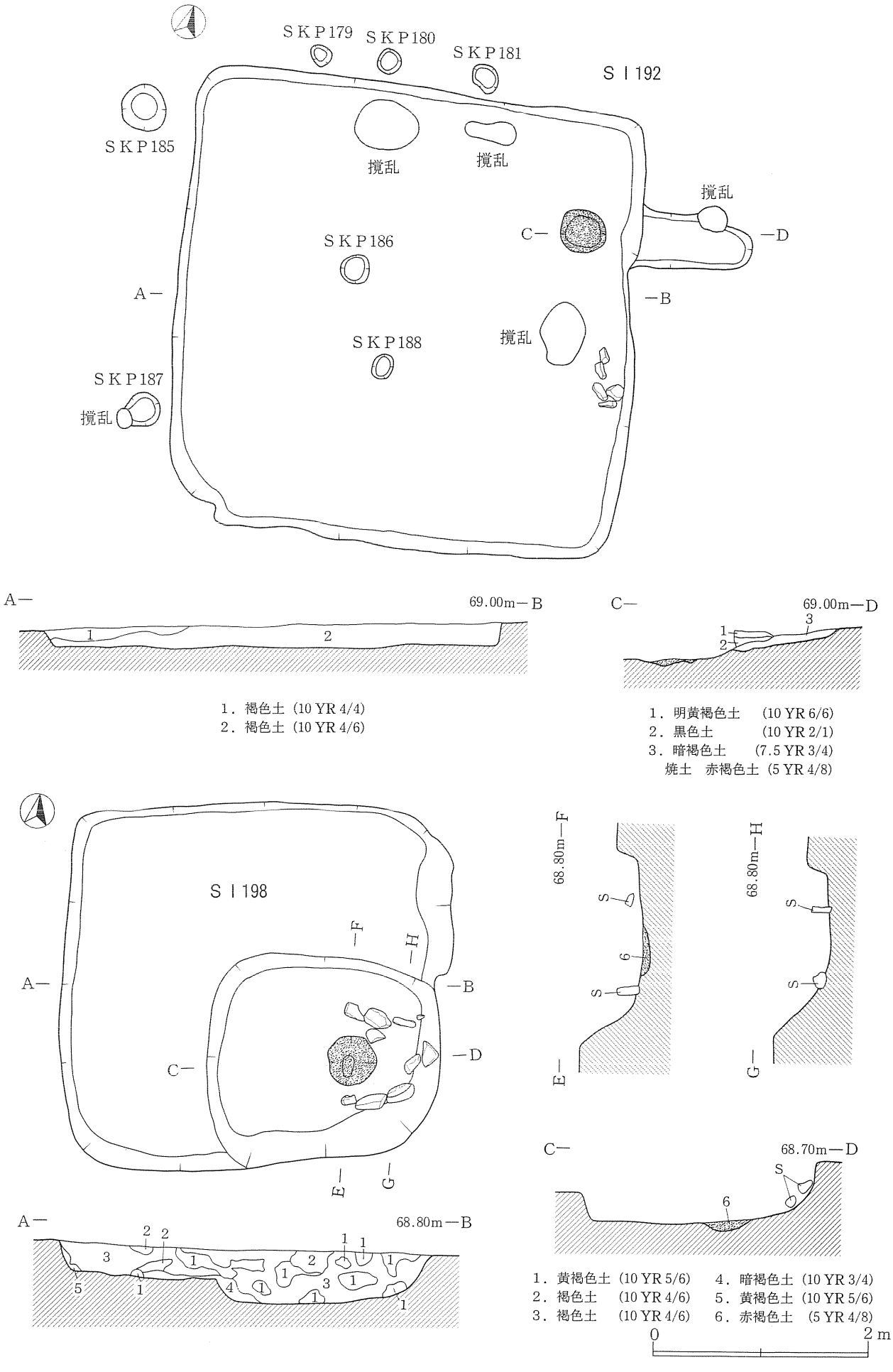




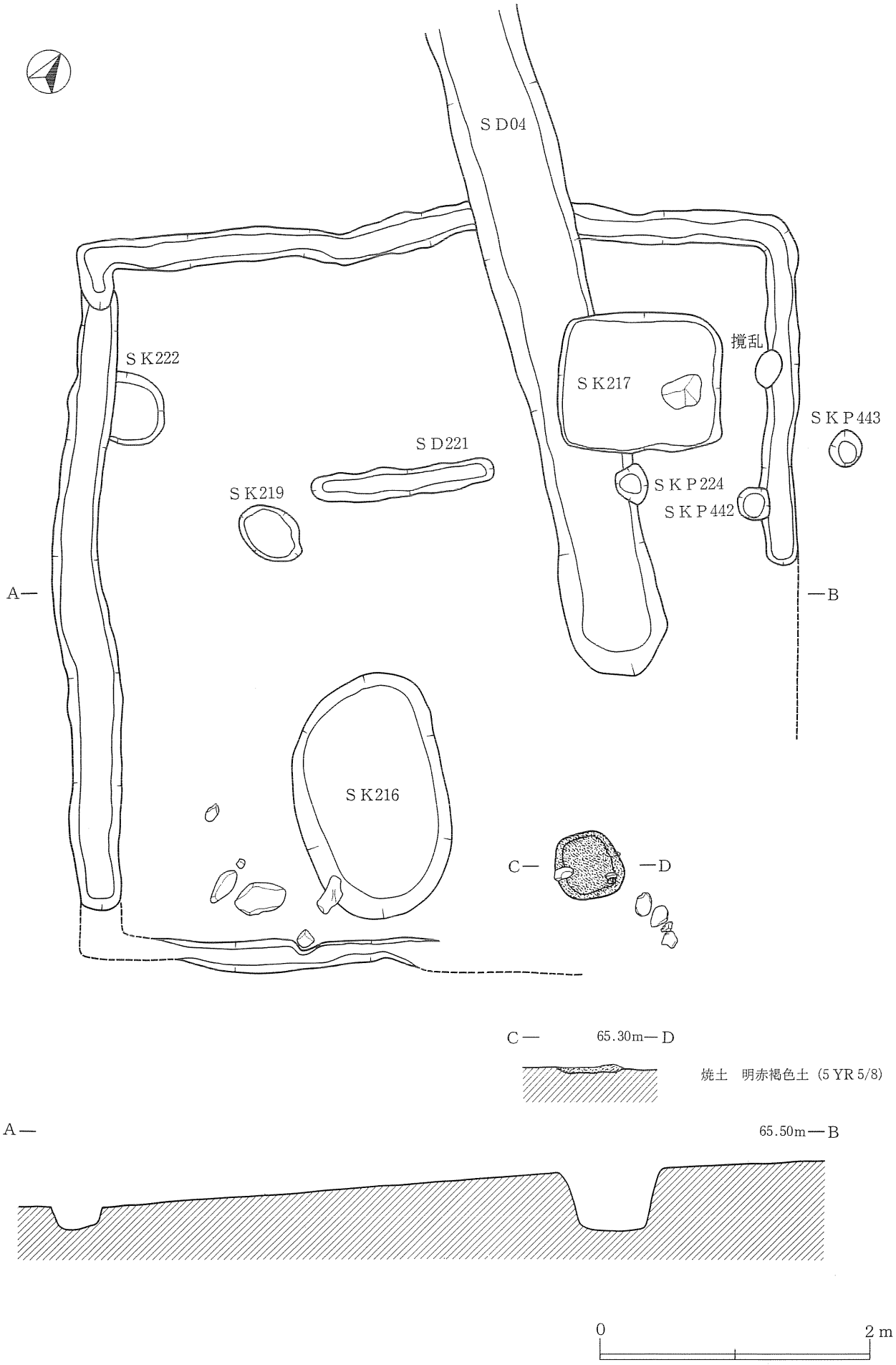
1．黒褐色土　(10 YR 2/2)　4．暗褐色土（7.5 YR 3/4)
2．にぶい黄褐色土（10 YR 4/3)　5．褐色土　(10 YR 4/6)
3．暗褐色土　(10 YR 3/3)



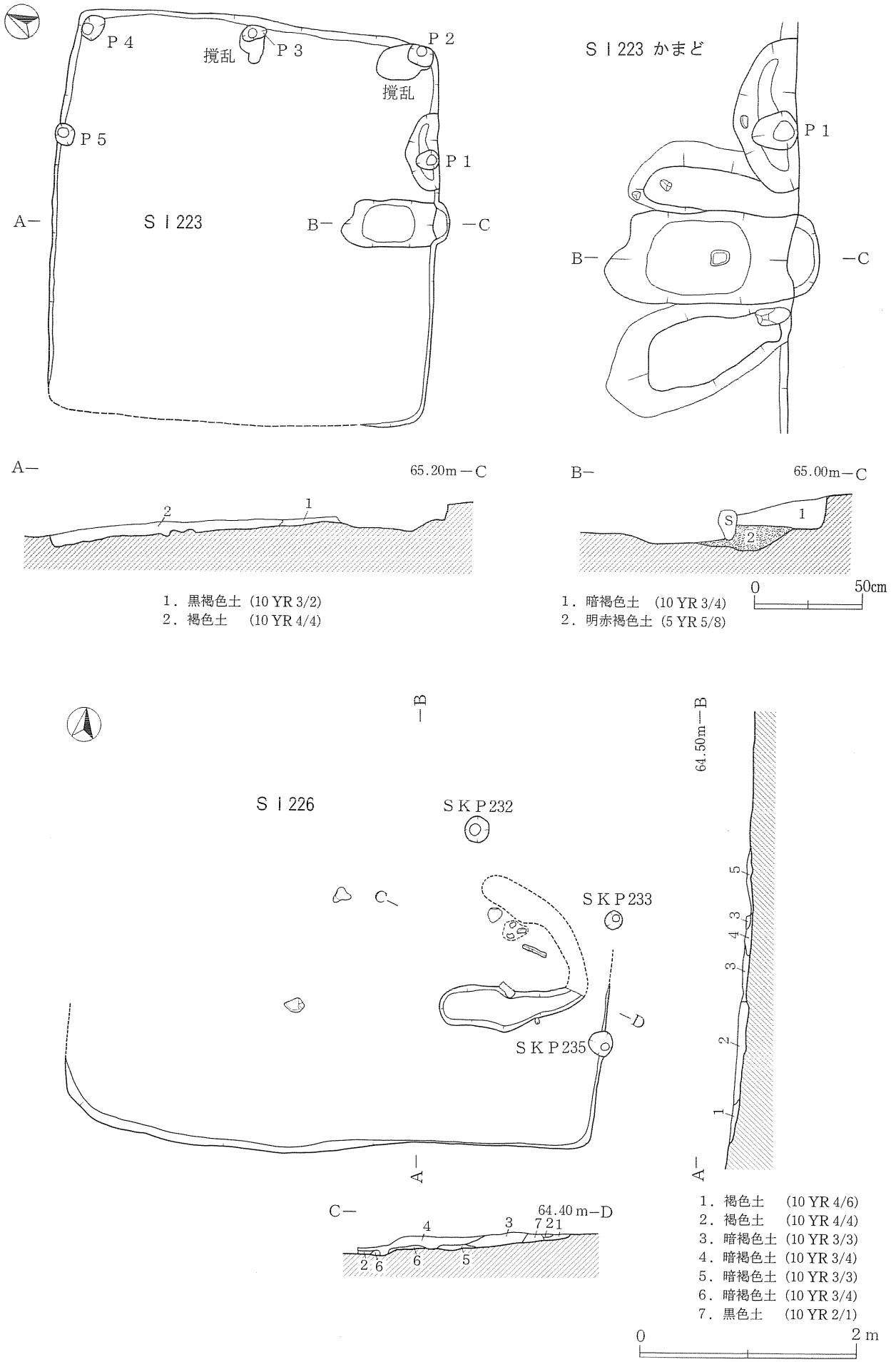
第15図　S I 162



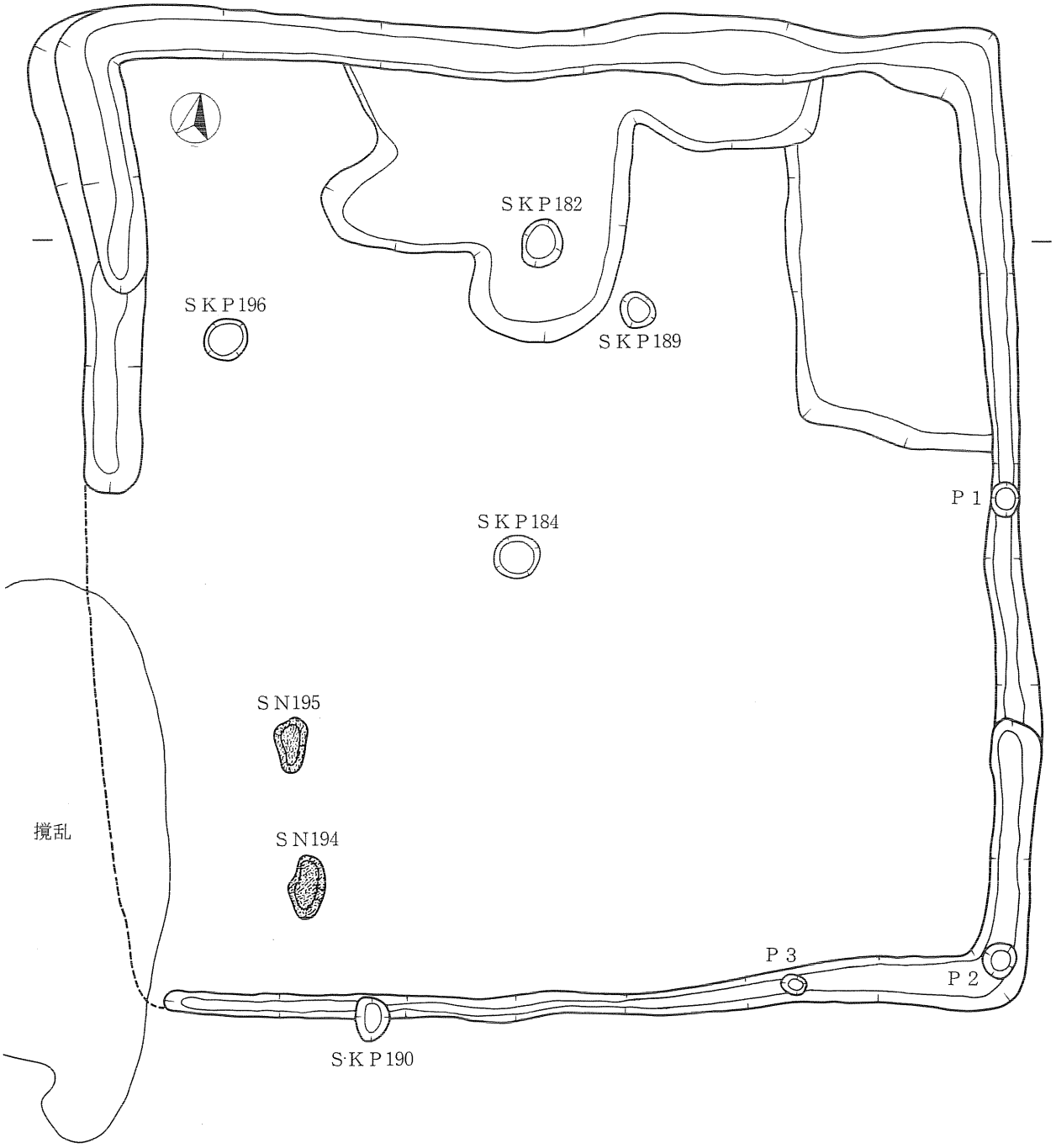
第16図　S I 192・198

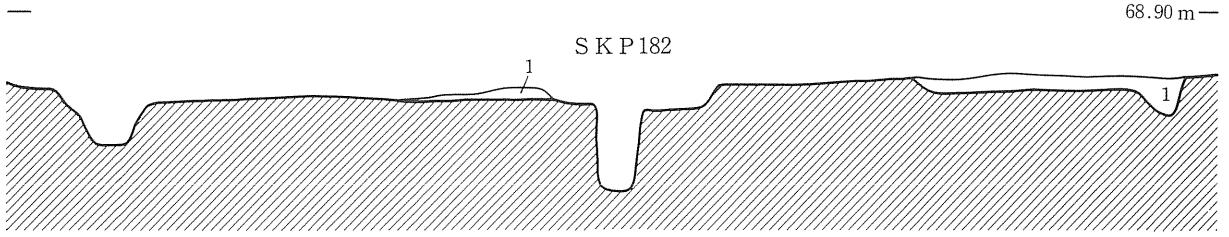

SD04
SK222
SK217
撹乱
SKP443
SD221
SKP224
SKP442
SK219
A—
—B
SK216
C—
—D
C—
65.30m—D
焼土　明赤褐色土（5YR 5/8）
A—
65.50m—B
0
2m

第17図　ＳＩ215



第18図　S I 223・226

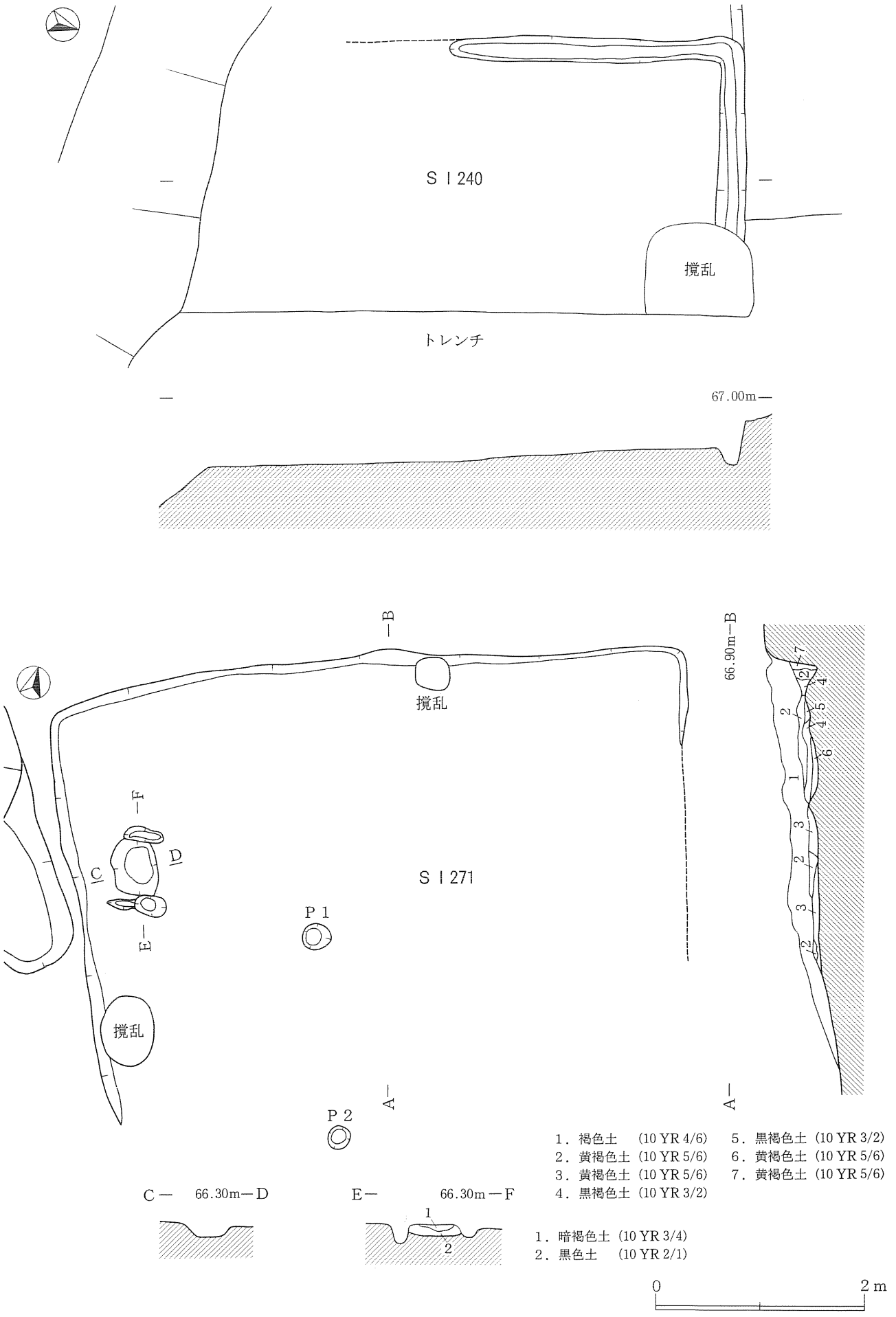




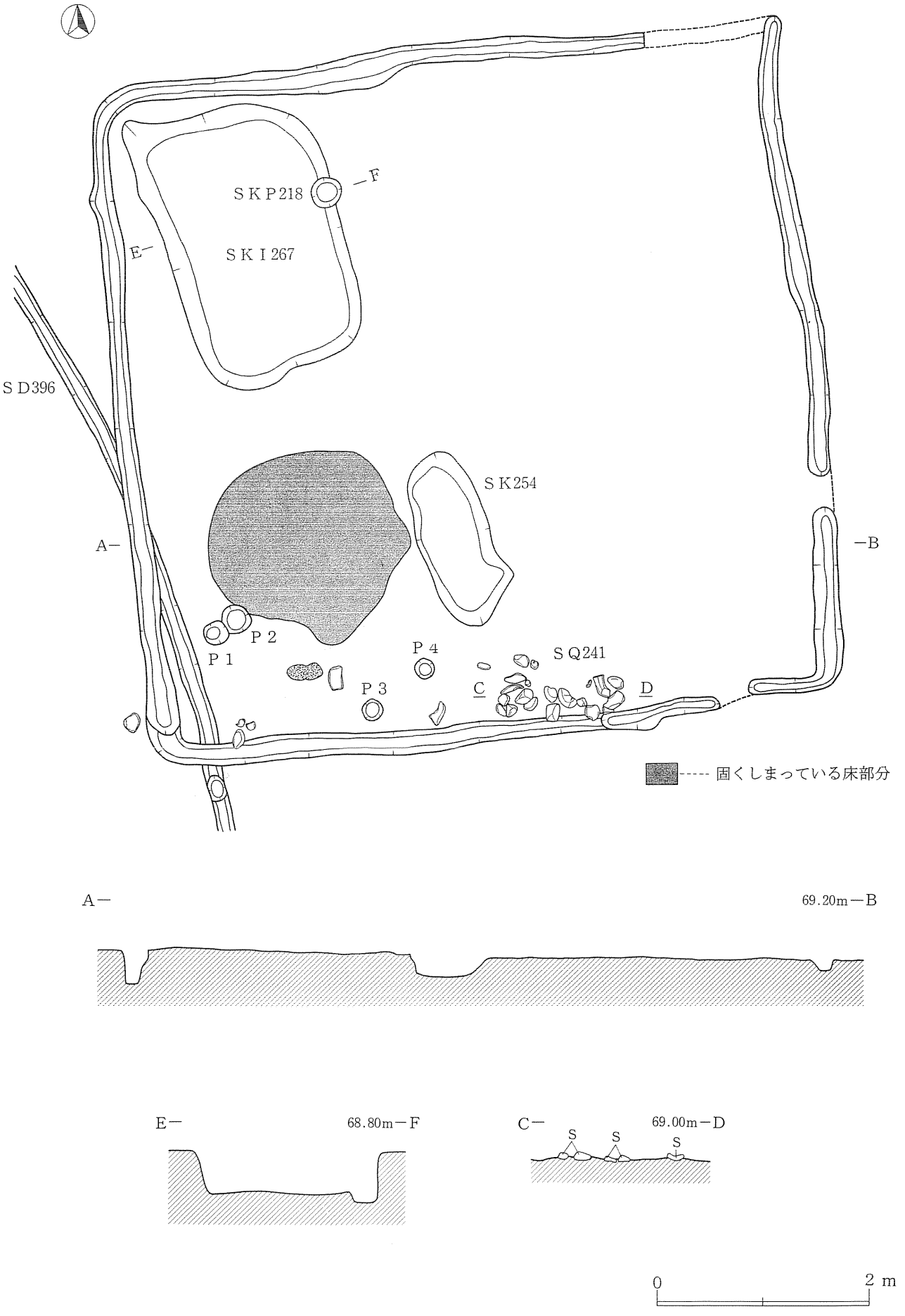
1．褐色土（10 YR 4/4）

0　2 m

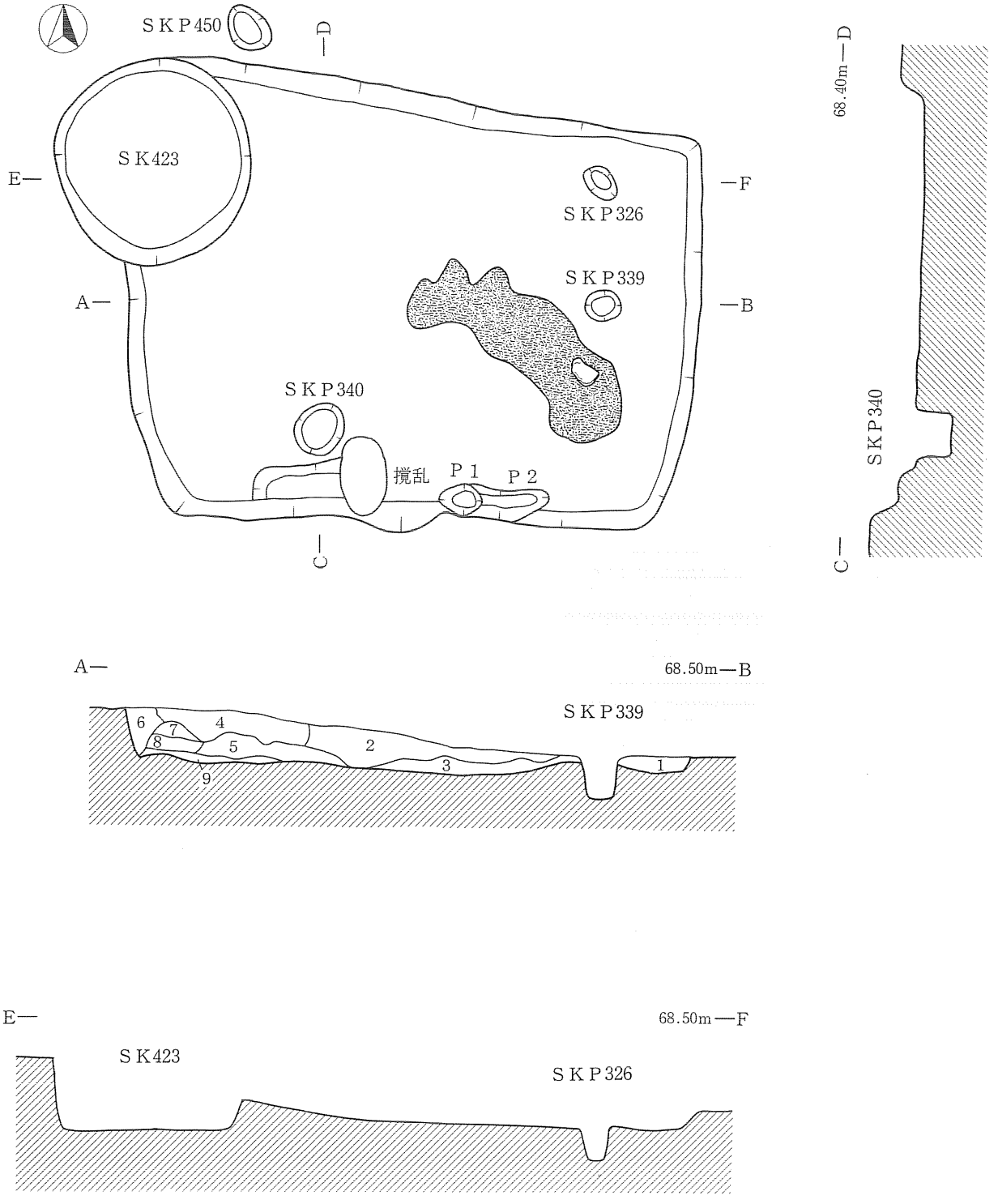
第19図　ＳＩ238



第20図　ＳＩ240・271


SKP218
F
SKI267
E
SD396
SK254
A
B
P2
P1
P4
SQ241
P3
C
D
固くしまっている床部分
A
69.20m－B
E
68.80m－F
C
69.00m－D
S
S
S
0
2 m

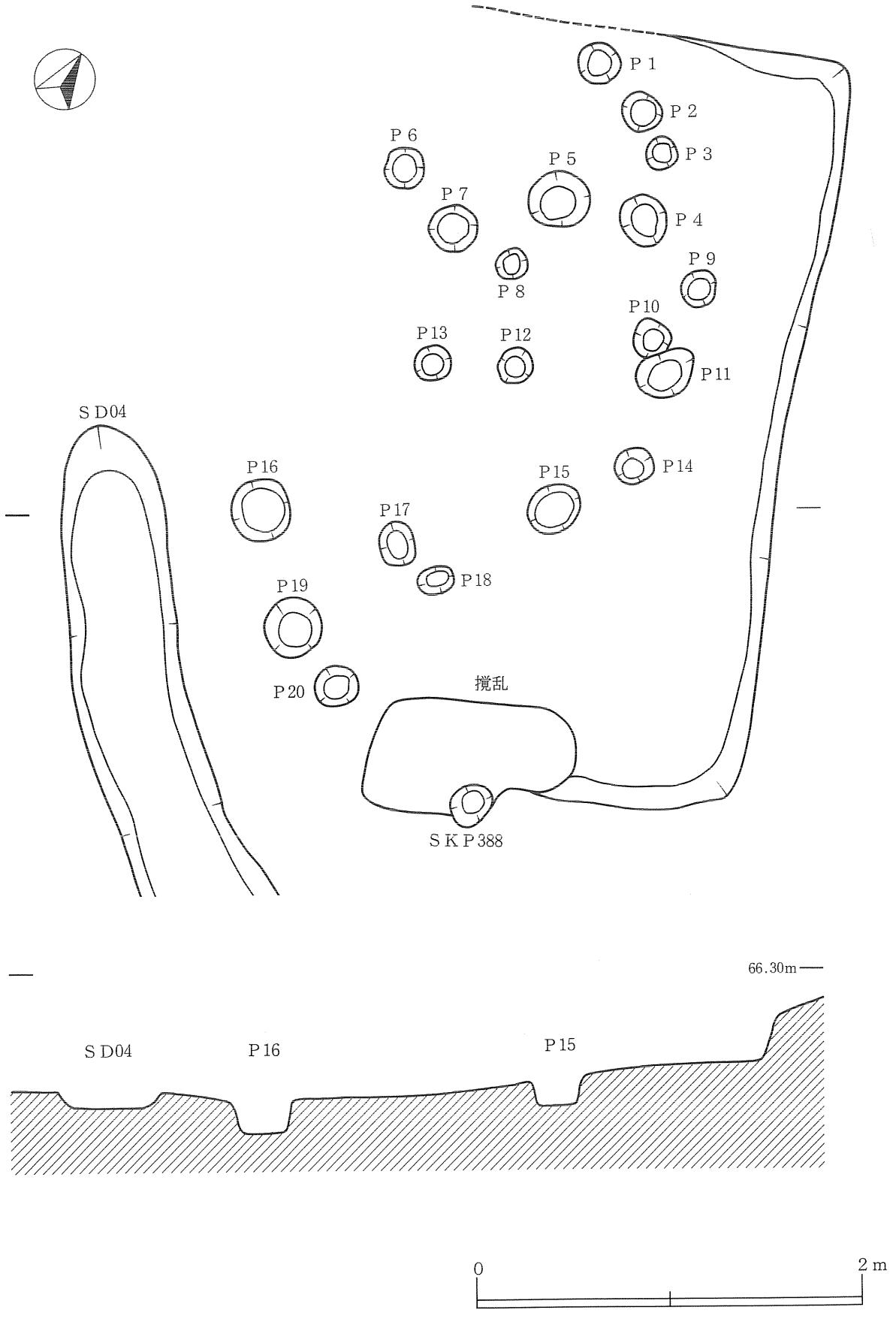
第21図　ＳＩ268



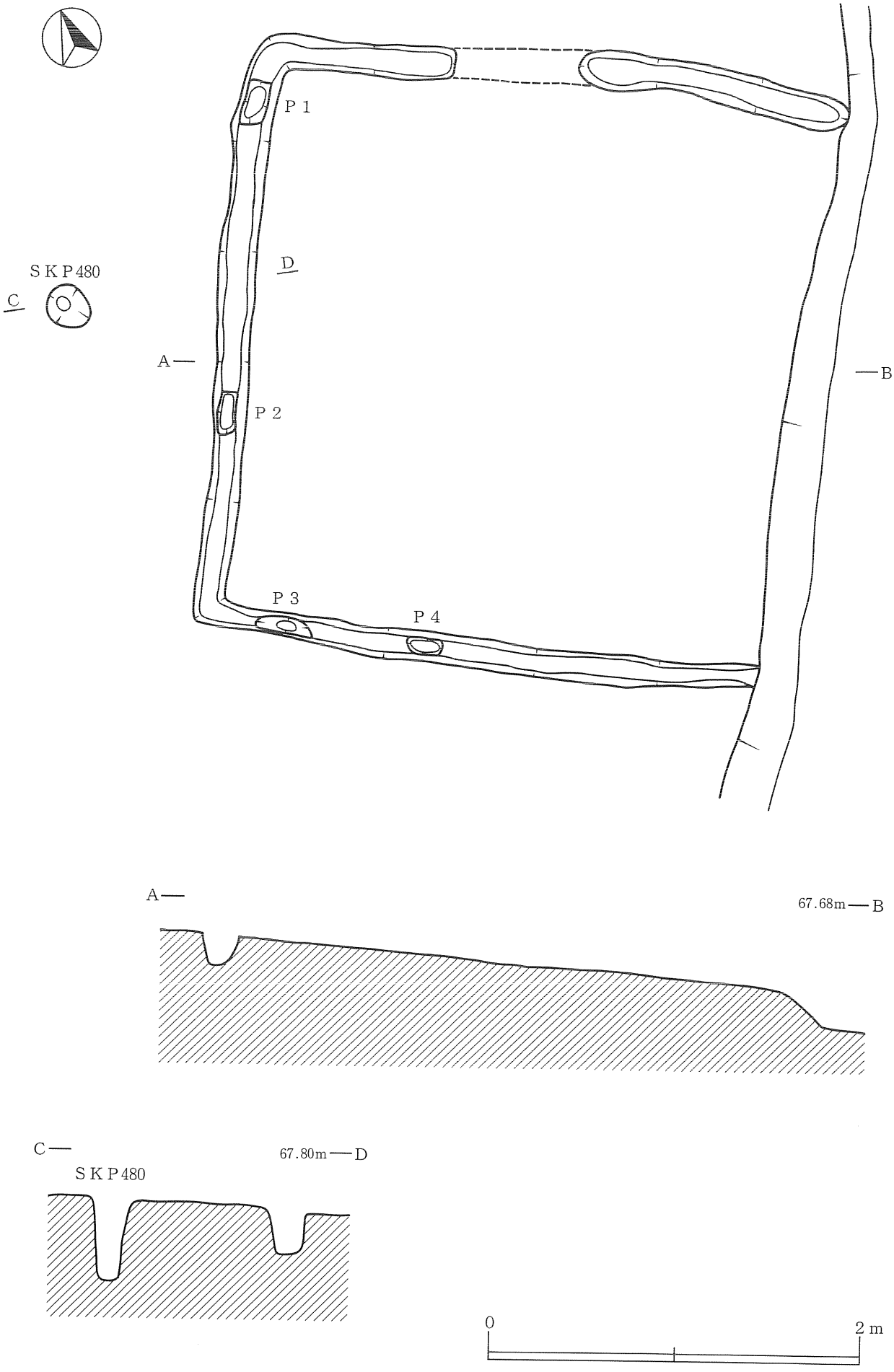
1．褐色土　(10 YR 4/4)　4．にぶい黄褐色土 (10 YR 4/3)　7．褐色土　(10 YR 4/6)
2．褐色土　(10 YR 4/6)　5．暗褐色土　(10 YR 3/4)　8．黒褐色土 (10 YR 2/2)
3．暗褐色土 (10 YR 3/4)　6．褐色土　(10 YR 4/4)　9．黄褐色土 (10 YR 5/6)

0　2 m

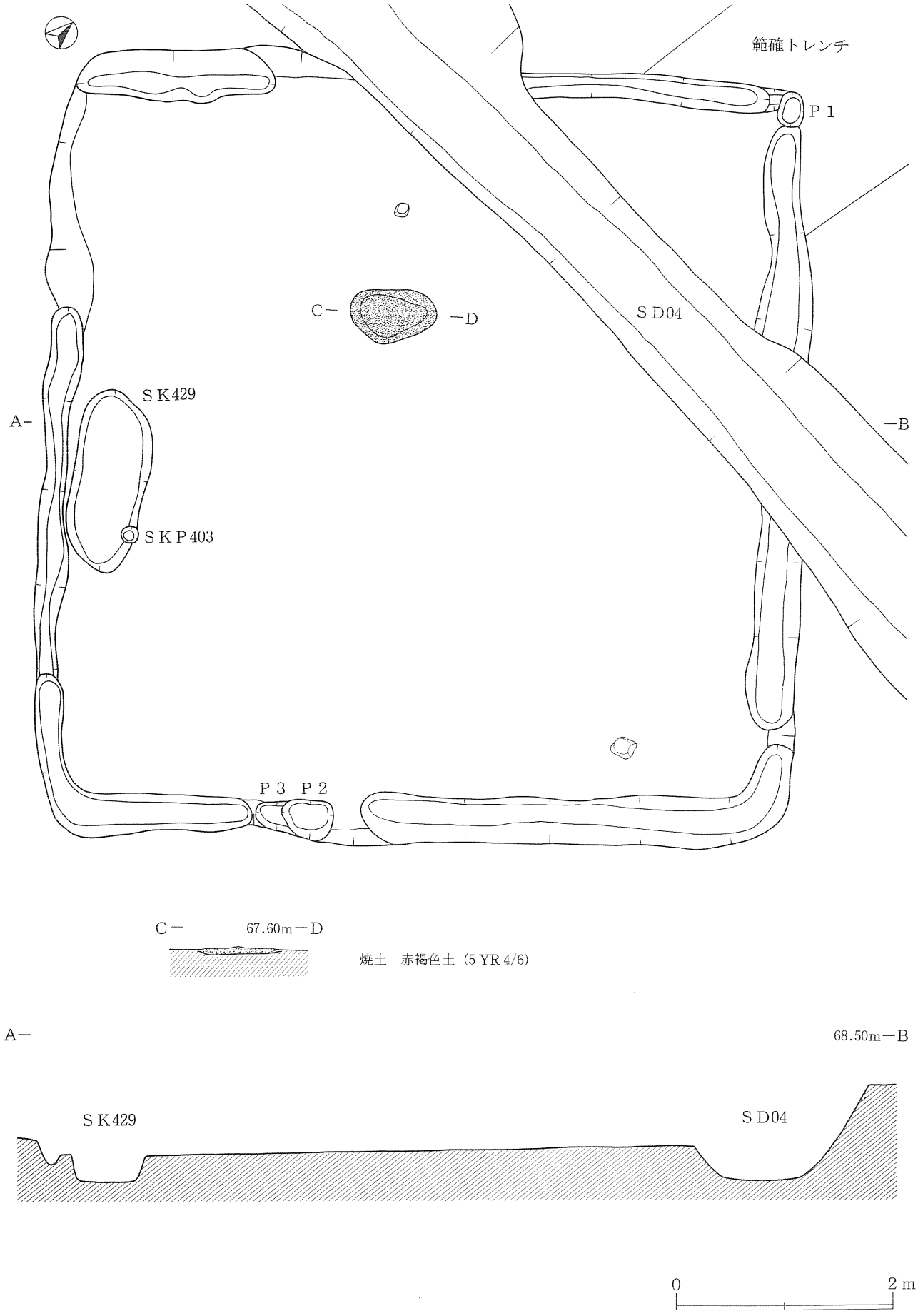
第22図　ＳＩ372


P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
S D04
撹乱
S K P 388
66.30m
S D04
P16
P15
0
2 m

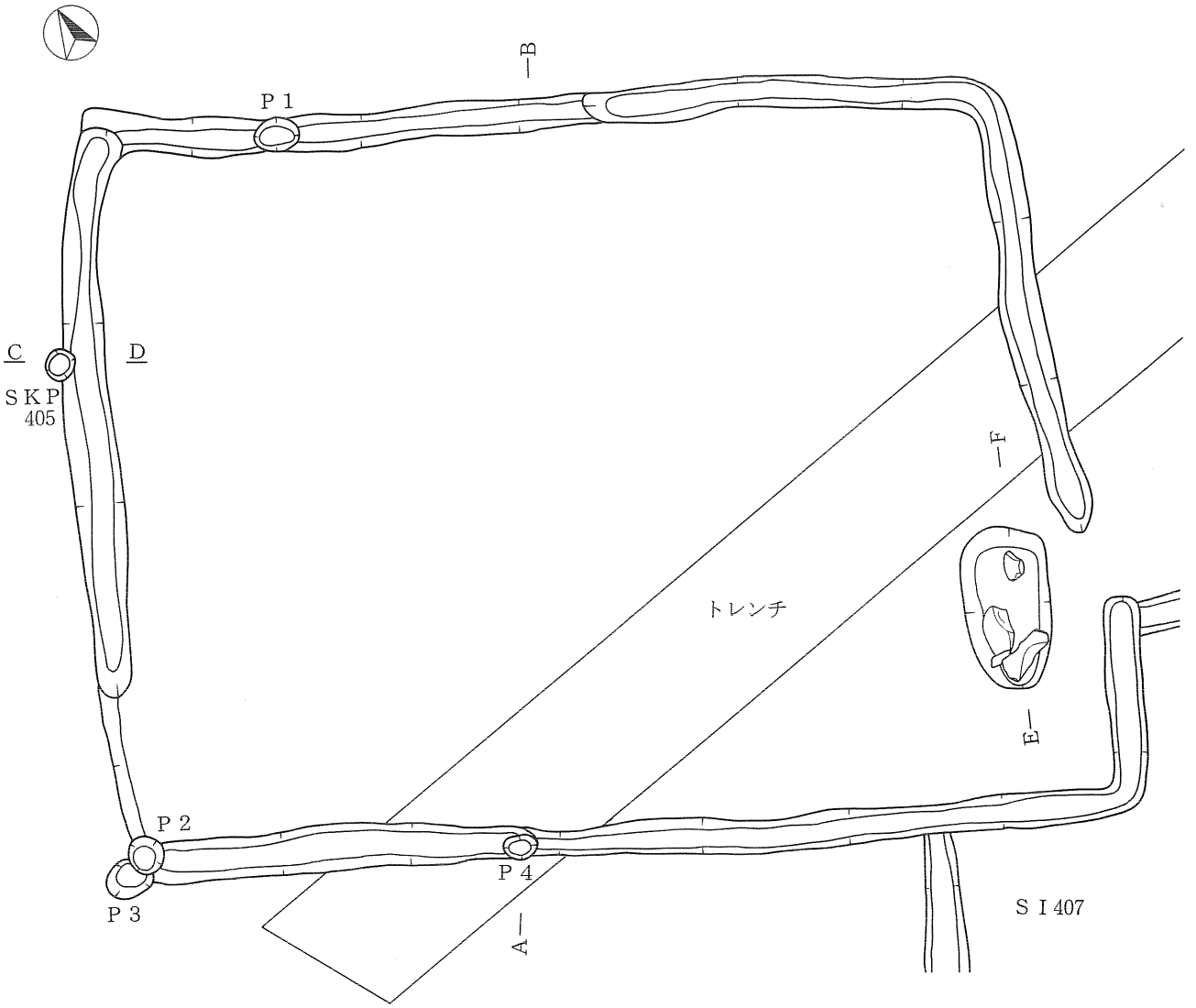
第23図　ＳＩ373

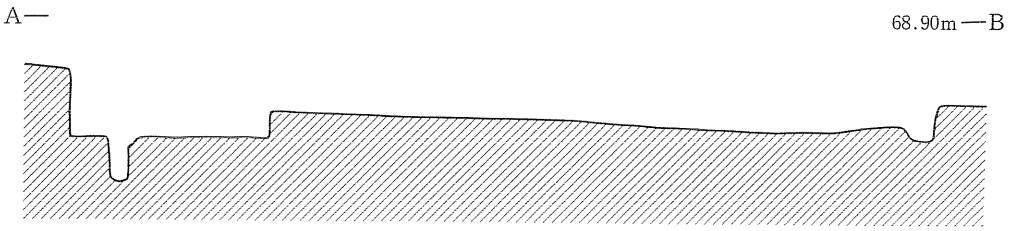


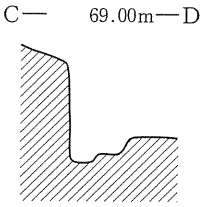
第24図　ＳＩ379

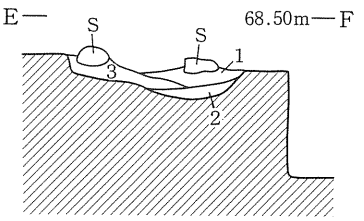

範確トレンチ
P 1
C－
－D
S D04
S K429
A－
－B
S K P 403
P 3
P 2
C－
67.60m－D
焼土　赤褐色土（5 YR 4/6）
A－
68.50m－B
S K429
S D04
0
2 m

第25図　S I 380





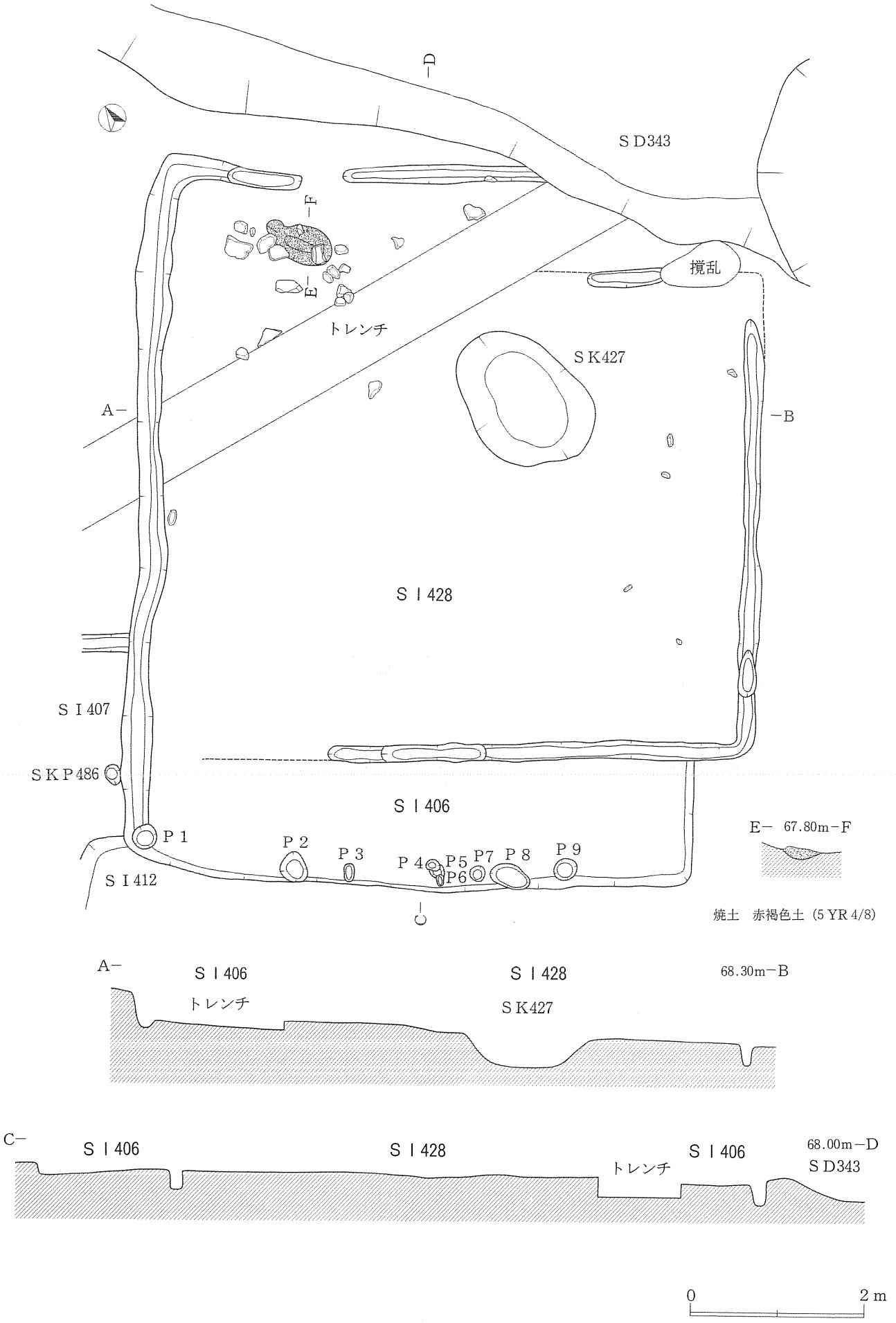




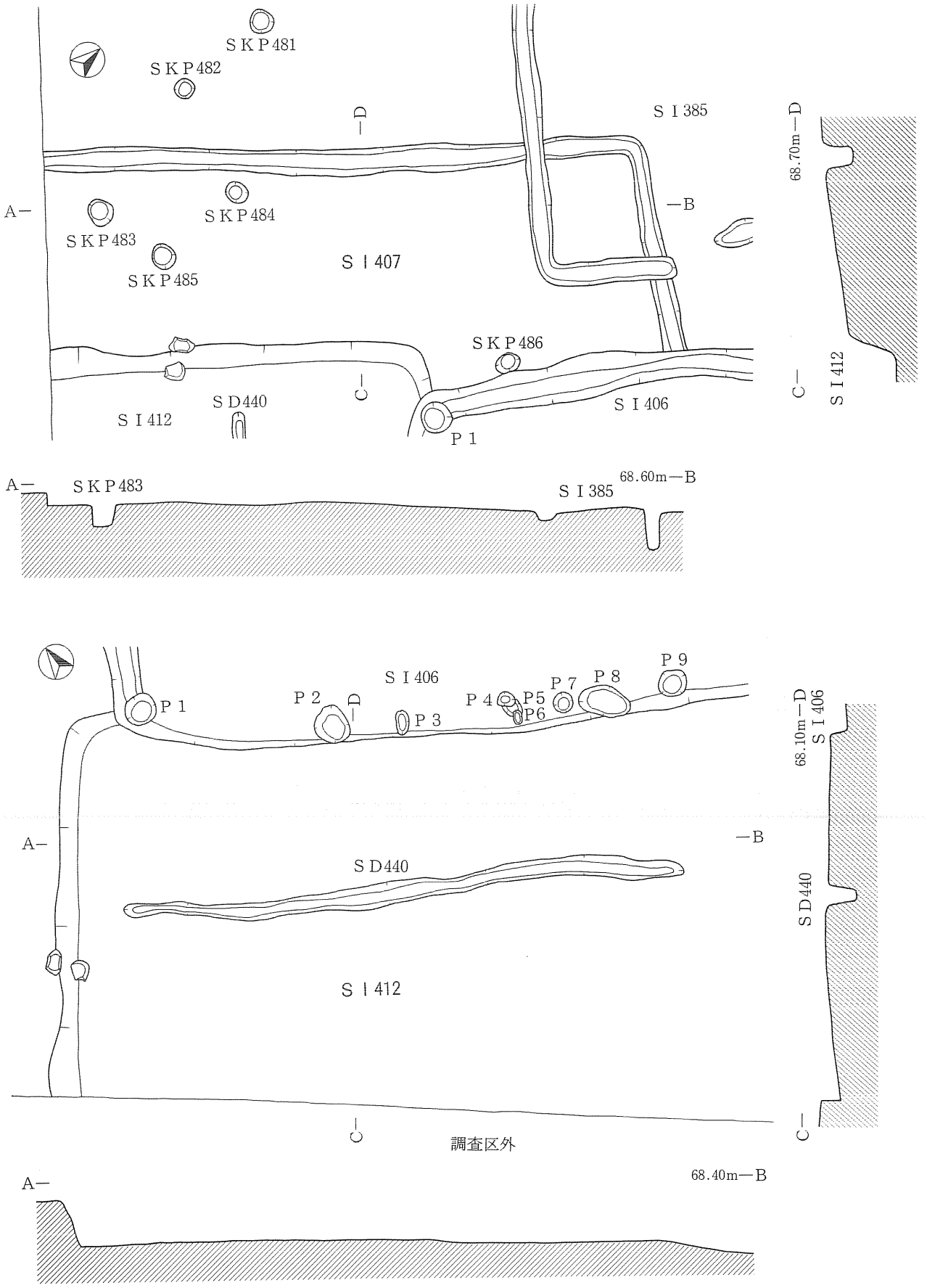
1．暗褐色土　(10 YR 3/4)
2．黒褐色土　(10 YR 2/1)
3．明黄褐色土 (10 YR 6/6)

0　2 m

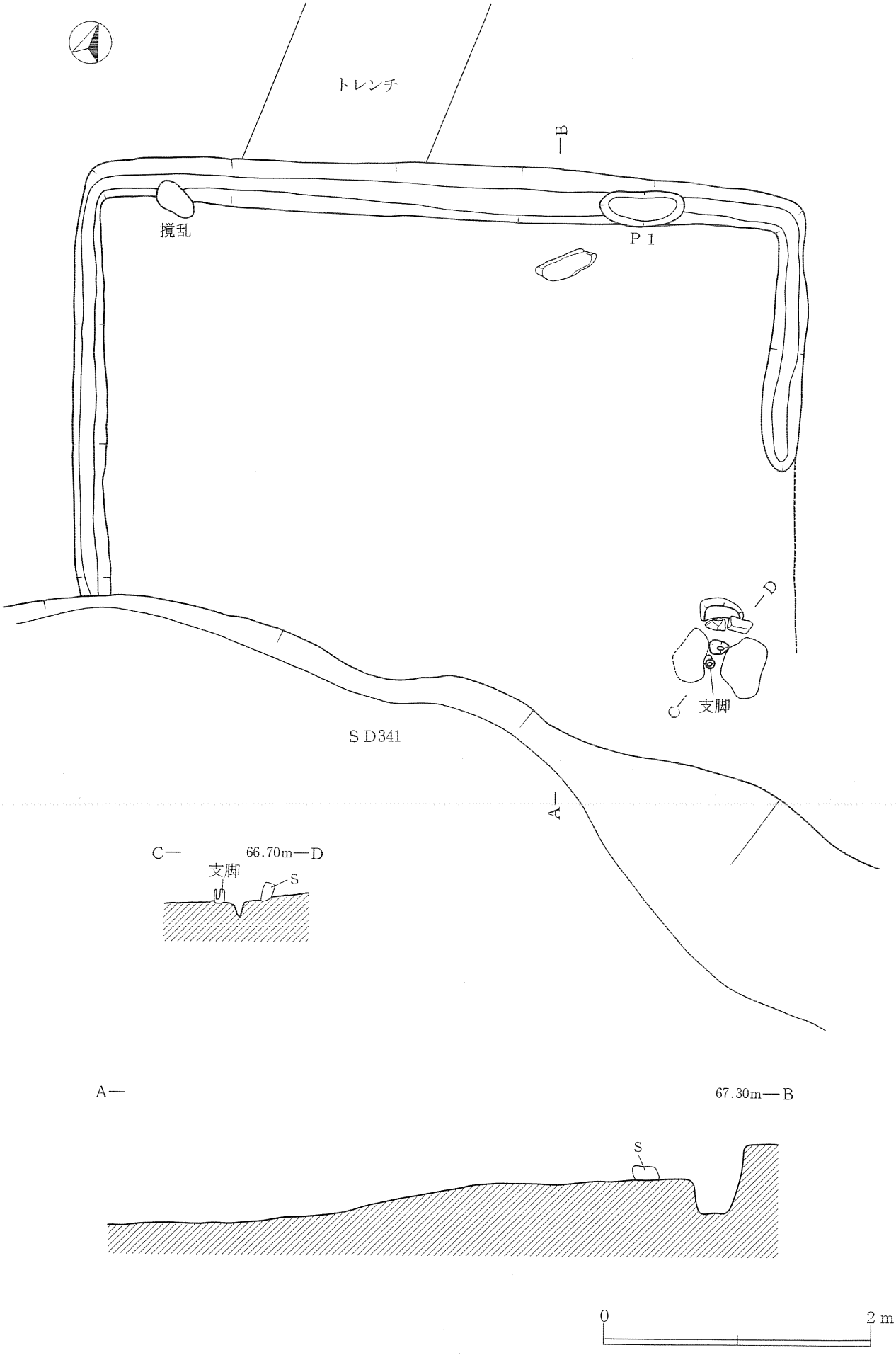
第26図　S I 385



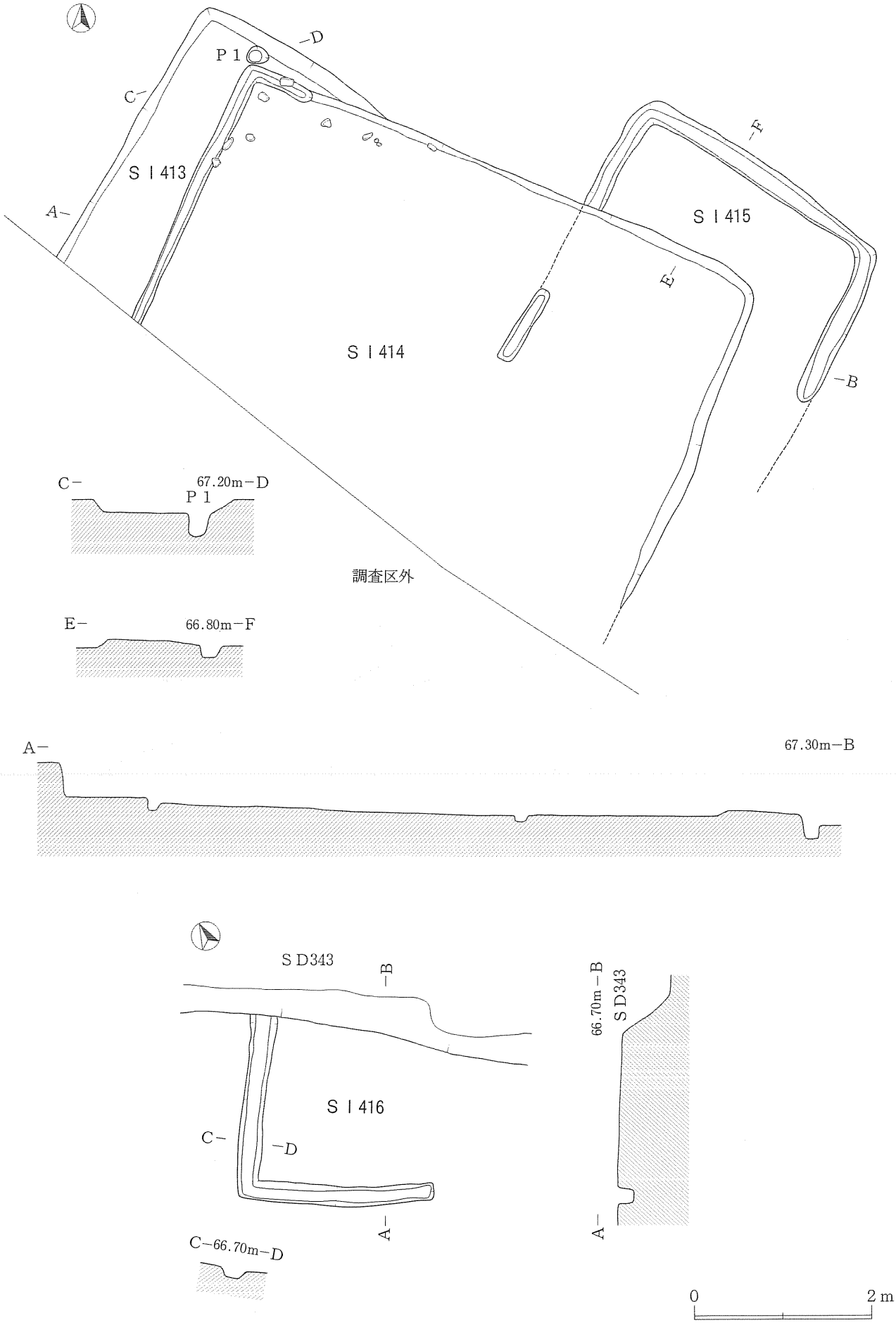
第27図　ＳＩ406・428



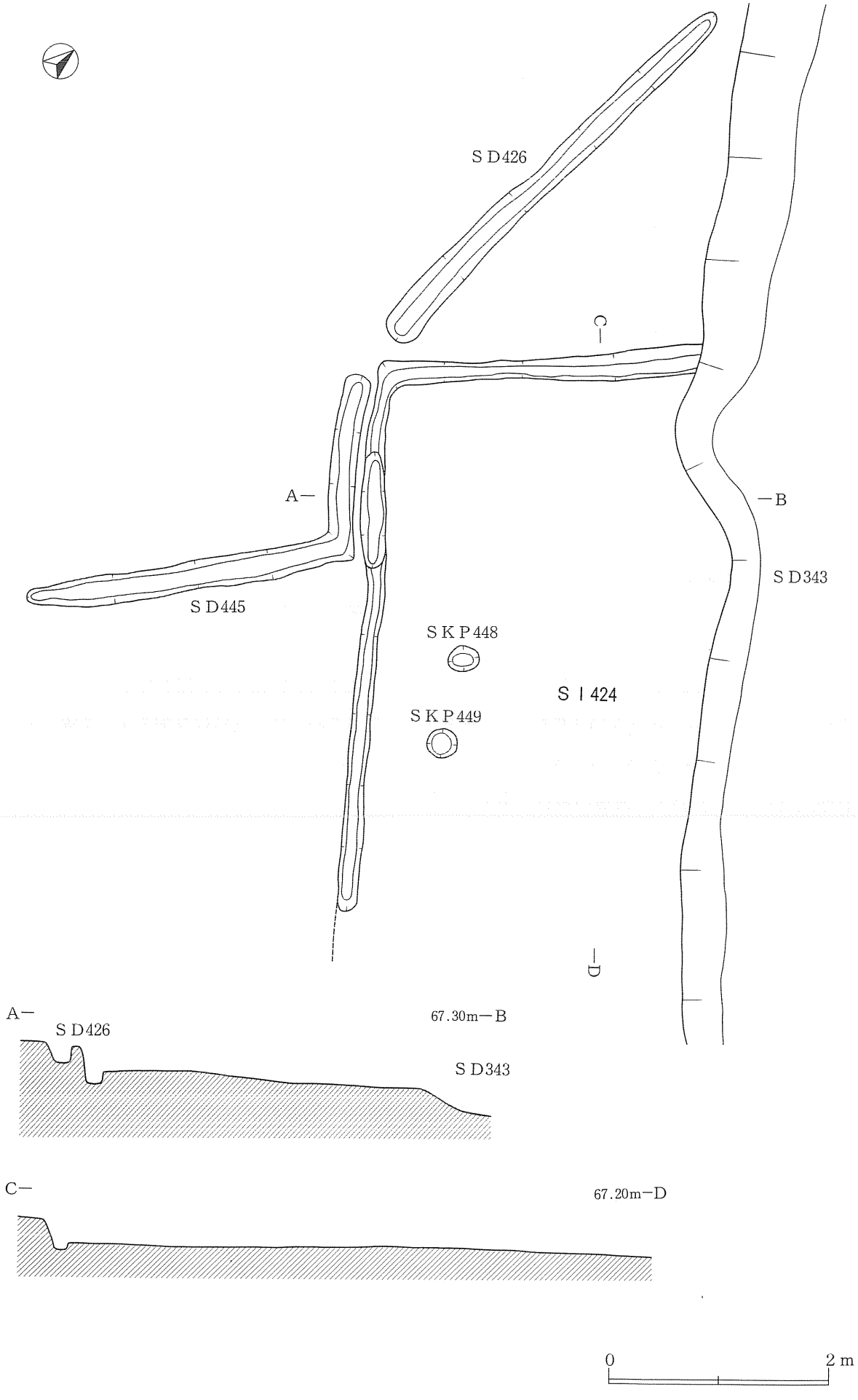
第28図　ＳＩ407・412



第29図　S I 411



第30図　S I 413・414・415・416


S D426
C
A—
—B
S D343
S D445
S K P 448
S I 424
S K P 449
D
A—
S D426
67.30m—B
S D343
C—
67.20m—D
0
2 m

第31図　S I 424

２．竪穴状遺構

ＳＫＩ122(第32図、図版11)

ＭＥ44グリッドで確認された。平面形は北壁1.78ｍ、南壁1.88ｍ、東壁1.96ｍ、西壁1.90ｍの略方形を呈し、壁高は東壁36㎝、西壁８㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は６層に分けられた。壁付近に径20～25㎝、深さ20～52㎝のピットが４個穿たれている。遺物は、土師器(窯鍋)８点が出土した。

ＳＫＩ126(第32図、図版11)

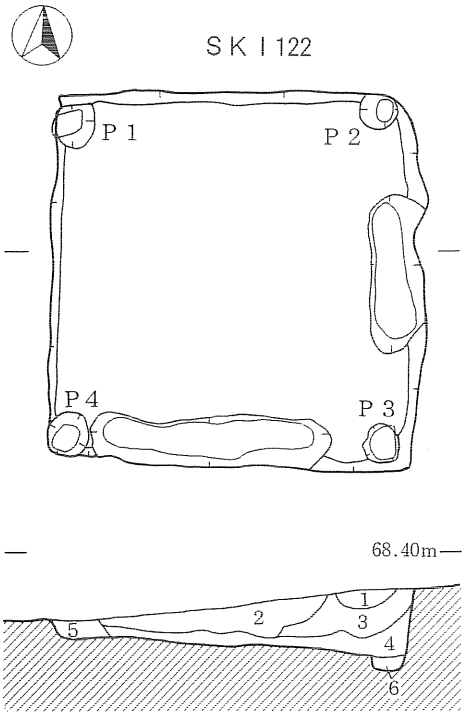
ＭＡ52・53、ＭＢ52・53グリッドで確認された。平面形は北壁1.70ｍ、南壁1.50ｍ、東壁2.20ｍ、西壁2.11ｍの略方形を呈し、壁高は北壁、南壁ともに10㎝である。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫＩ137(第33図、図版12～18)

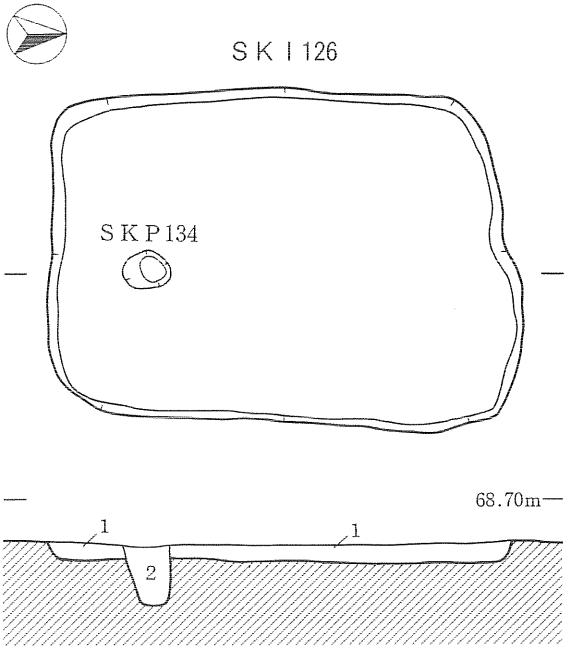
ＬＴ49・50、ＭＡ49・50グリッドで確認された。東部に張り出して出入り口が付設されている竪穴状遺構である。平面形はほぼ隅丸方形を呈し、壁高は北東壁44～58㎝、北西壁48～60㎝、南東壁13～51㎝、南西壁57～64㎝で、壁は北西側はほぼ垂直に立ち上がるが、南東側はゆるやかな傾斜で立ち上がっている。床面はほぼ平坦である。出入り口の長さは1.62ｍ、最大幅は1.02ｍである。遺構内壁付近及び出入り口内にピットが合わせて12個穿たれている。各ピットの大きさは以下のとおりである。ピット１は長軸35㎝、短軸25㎝、深さ29㎝、ピット２は長軸26㎝、短軸25㎝、ピット３は長軸25㎝、短軸23㎝、深さ28㎝、ピット４は長軸32㎝、短軸25㎝、深さ31㎝、ピット５は長軸34㎝、短軸30㎝、深さ41㎝、ピット６は長軸34㎝、短軸30㎝、深さ28㎝、ピット７は長軸９㎝、短軸６㎝、深さ14㎝、ピット８は長軸６㎝、短軸４㎝、深さ17㎝、ピット９は長軸６㎝、短軸５㎝、深さ12㎝、ピット10は長軸６㎝、短軸５㎝、深さ７㎝、ピット11は長軸９㎝、短軸６㎝、深さ８㎝、ピット12は長軸13㎝、短軸９㎝、深さ12㎝である。遺物は柱、板材、屋根に葺いた萱、炭化米、雑穀(ヒエ・豆類)、炭化材、瀬戸・美濃産の陶器が出土した。

ＳＫＩ267(第32図)

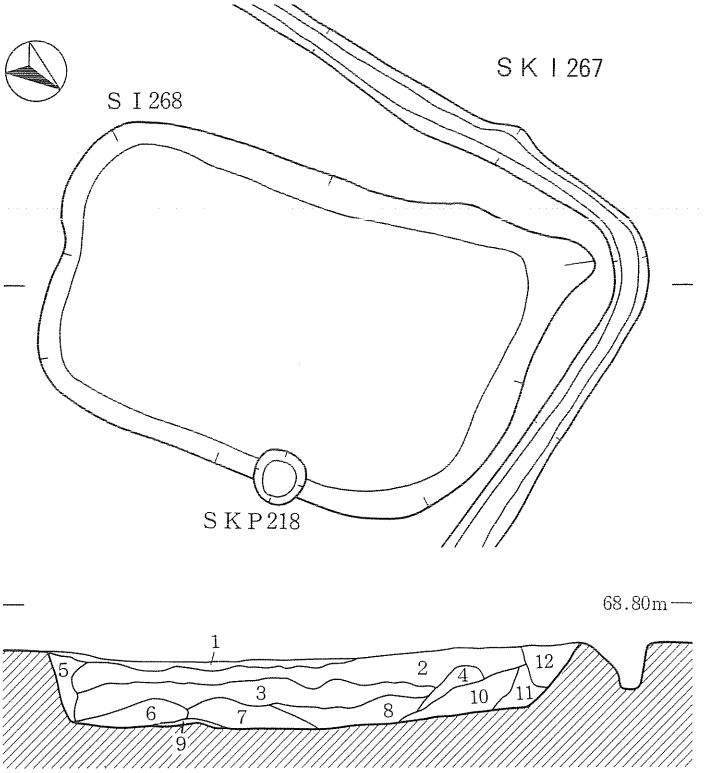
ＬＳ52・53、ＬＴ52・53グリッドで確認された。平面形は北東壁2.20ｍ、北西壁1.56ｍ、南東壁1.27ｍ、南西壁2.65ｍの略方形を呈し、壁高は北西壁34㎝、南東壁37㎝、南西壁41㎝である。底面はやや凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は11層に分けられた。遺物は、土師器胴部11点・底部２点(うち１点は第64図に掲載)が出土した。



１．黒褐色土（10 YR 2/3）
２．褐色土　（10 YR 4/4）
３．褐色土　（10 YR 4/6）
４．褐色土　（10 YR 4/4）
５．褐色土　（10 YR 4/4）
６．黄褐色土（10 YR 5/6）



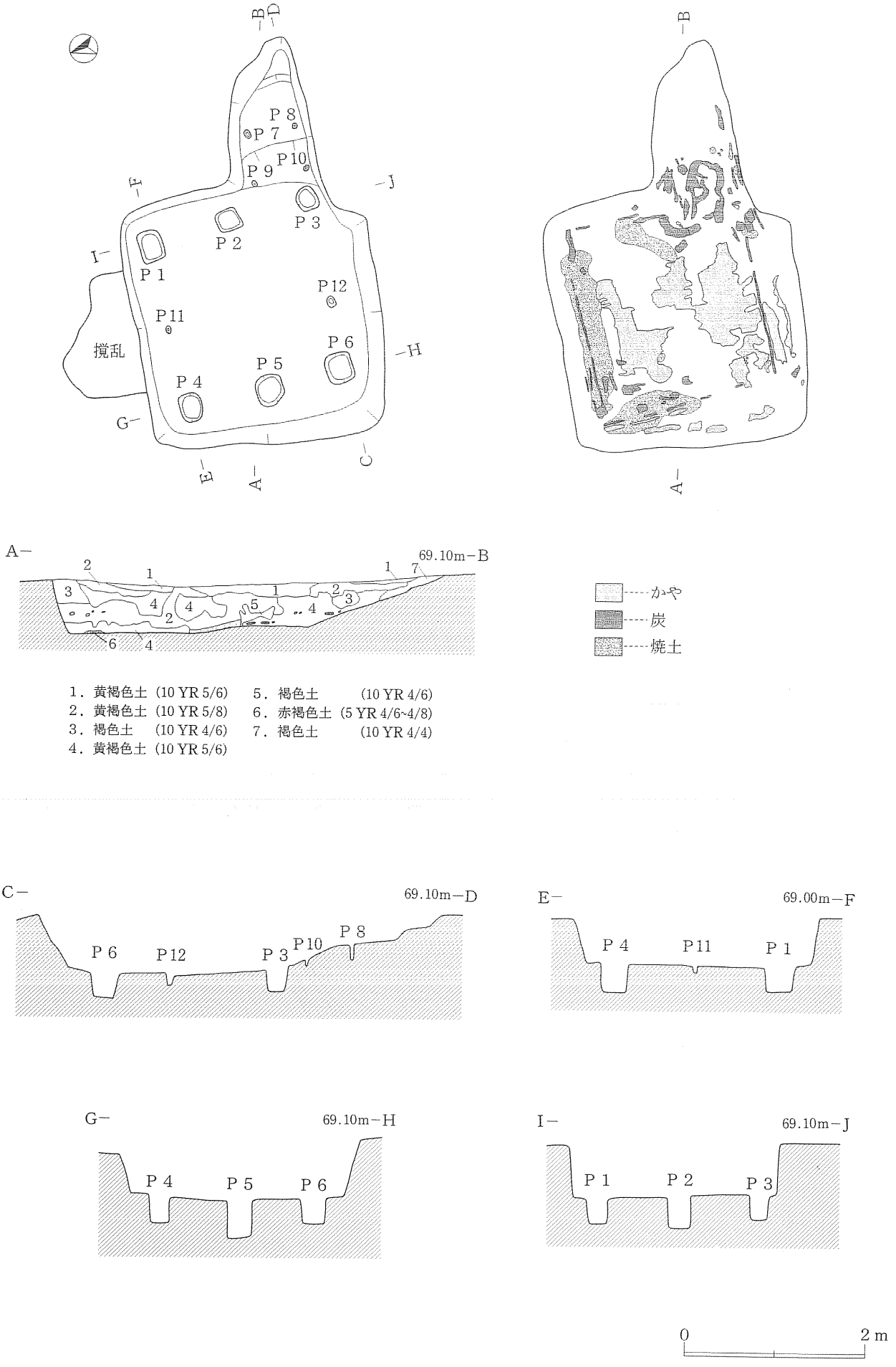
１．黒褐色土（10 YR 3/2）
２．褐色土　（10 YR 4/4）



１．黒色土　　（10 YR 2/1）
２．にぶい黄褐色土（10 YR 4/3）
３．暗褐色土　　（10 YR 3/3）
４．黒褐色土　　（10 YR 2/3）
５．暗褐色土（7.5 YR 3/4）
６．褐色土　　（10 YR 4/6）
７．暗褐色土（7.5 YR 3/4）
８．褐色土　　（10 YR 4/4）
９．黒色土（10 YR 1.7/1）
10．暗褐色土（10 YR 3/3）
11．黄褐色土（10 YR 5/6）
12．褐色土　（10 YR 4/4）

0　　2 m

第32図　ＳＫＩ122・126・267


B
D
P 8
P 7
P 10
P 9
F
J
P 3
P 2
I
P 1
P 12
P 11
撹乱
P 6
H
P 5
P 4
G
E
A
C
B
A
A
69.10m－B
1
2
3
4
5
6
7
かや
炭
焼土
1．黄褐色土（10 YR 5/6）
2．黄褐色土（10 YR 5/8）
3．褐色土　（10 YR 4/6）
4．黄褐色土（10 YR 5/6）
5．褐色土　　（10 YR 4/6）
6．赤褐色土（5 YR 4/6~4/8）
7．褐色土　　（10 YR 4/4）
C－
69.10m－D
P 6
P 12
P 3
P 10
P 8
E－
69.00m－F
P 4
P 11
P 1
G－
69.10m－H
P 4
P 5
P 6
I－
69.10m－J
P 1
P 2
P 3
0
2 m

第33図　ＳＫ１137

３．掘立柱建物跡

ＳＢ274(第34図)

調査区東側のＬＮ47・48、ＬＯ47・48グリッドに位置する東－西棟の掘立柱建物跡である。規模は、桁行１間(東－西)×梁行２間(北－南)で、復元した桁行方向の柱間距離は北側(P_3－P_5)396cm、中央(P_2－P_6)409cm、南側(P_1－P_7)436cmで、梁行方向の柱間距離は東側(P_5－P_7)387cm、西側(P_1－P_3)391cmである。柱穴の覆土は堅くしまっている暗褐色土の単一層であり、柱痕は確認できなかった。

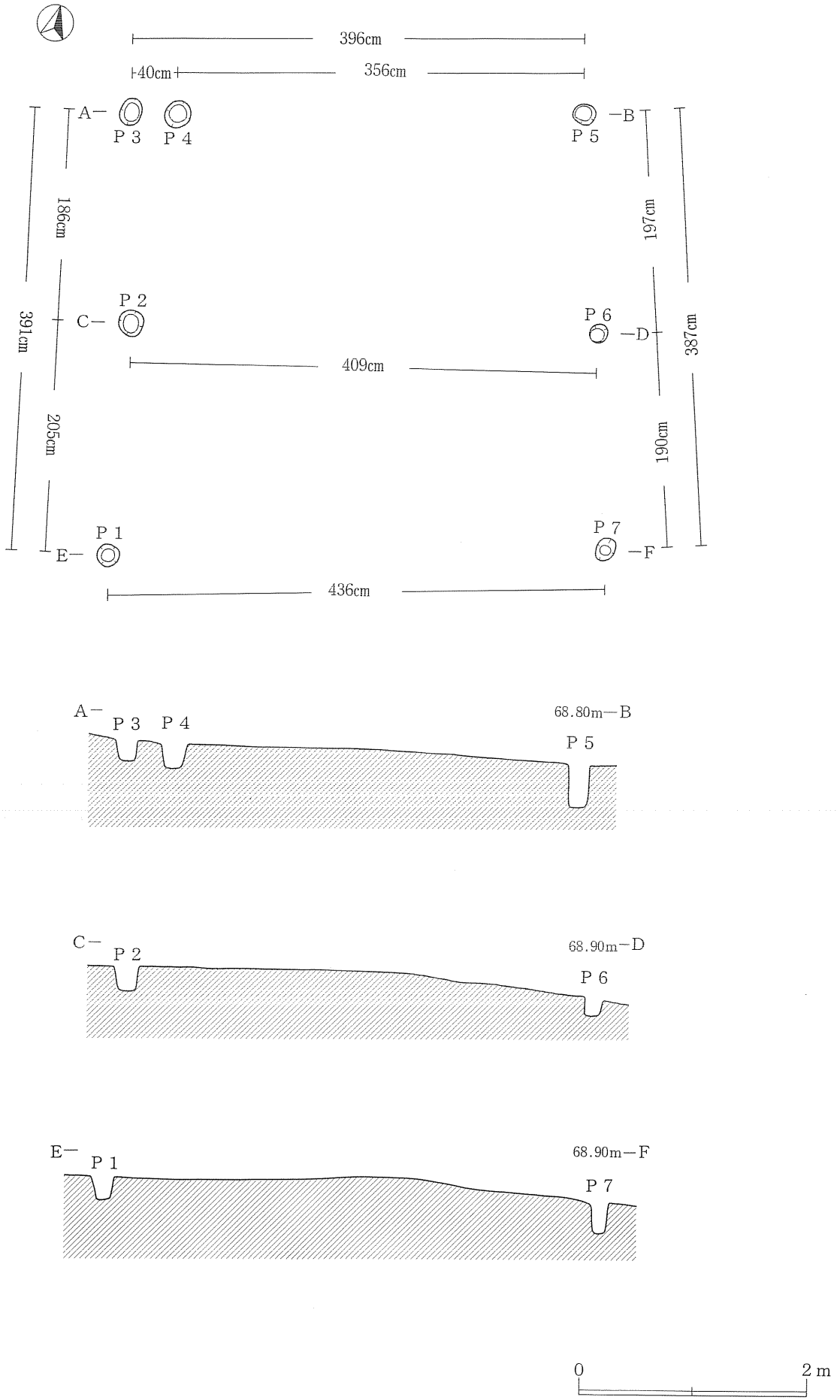
なお、各柱穴の大きさ等は下記の第２表にまとめた。

第２表　ＳＢ274Pit計測一覧

Ｐｉｔ番号	検出グリッド	平面形	大きさ			底面の標高	出土遺物
			長軸	短軸	深さ		
1	ＬＯ47	円形	20.0cm	20.0cm	21.0cm	68.46m	炭化米・雑穀類
2	ＬＯ47	楕円形	23.5cm	21.5cm	22.0cm	68.47m	
3	ＬＯ48	楕円形	24.5cm	19.0cm	18.0cm	68.35m	
4	ＬＯ48	楕円形	25.0cm	23.0cm	21.0cm	68.29m	
5	ＬＮ48	円形	20.0cm	18.0cm	38.0cm	67.96m	
6	ＬＮ48	円形	16.0cm	15.0cm	16.0cm	68.27m	
7	ＬＮ47	楕円形	21.0cm	17.0cm	27.0cm	68.18m	炭化米・雑穀類

４．柱穴様ピット(付図)

柱穴様ピットはＳＩ112内で１基と調査区全体の４箇所で計123基を確認した。調査区北側のＭＤ55～58グリッド以西からＭＦ55～58グリッド以東で５基を検出した。規則的な配列は認められず、柱痕跡も確認できなかった。覆土は黒褐色土(10YR2/3)～暗褐色土(10YR3/3)で、堅くしまっている単一層である。調査区西側のＭＨライン以西・51ライン以北で17基を検出した。規則的な配列は認められず、柱痕跡も確認できなかった。覆土は黒褐色土(10YR2/3)で、堅くしまっている単一層である。調査区南側のＬＲライン以西・42ライン以南で14基を検出した。規則的な配列は認められず、柱痕跡も確認できなかった。覆土は黒褐色土(10YR2/3)～暗褐色土(10YR3/3)で、堅くしまっている単一層である。ＭＣライン以東・45ライン以北の土塁の内側から東側斜面までが86基と最も多く、特にＬＰ49グリッド周辺が密集している。当初ＳＫＰ274・277・279・285・286・288・289としていた柱穴様ピットは掘立柱建物跡として判断されたため、それらの番号を欠番とし、新しくＳＢ274と付した。他には規則的な配列は認められず、柱痕跡も確認できなかった。覆土は暗褐色土(10YR3/3)で、堅くしまっている単一層である。これらの柱穴様ピットの平面形は、円形を呈するものが多く、遺物はほとんど出土せず、その時期を明確にすることができなかった。また、個々の柱穴様ピットについては第３・４・５表にまとめた。


396cm
40cm
356cm
A－
P 3
P 4
P 5
－B
186cm
197cm
391cm
C－
P 2
P 6
－D
387cm
409cm
205cm
190cm
P 1
E－
P 7
－F
436cm
A－
P 3
P 4
68.80m－B
P 5
C－
P 2
68.90m－D
P 6
E－
P 1
68.90m－F
P 7
0
2 m

第34図　ＳＢ274

第３表　柱穴様ピット一覧（１）

※( )内の数値は残存値で、重複状況は古→新である。

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸	大きさ 短軸	大きさ 深さ	底面の標高	出土遺物	重複状況
20	MH・MI53	円形	28.0cm	23.0cm	14.2cm	64.75m		
21	MI53	円形	28.0cm	24.0cm	14.1cm	64.69m		
22	MI53	楕円形	25.0cm	20.0cm	12.4cm	64.43m		
35	ML53	楕円形	26.0cm	21.0cm	25.0cm	64.12m		
36	ML53	円形	20.0cm	18.0cm	27.0cm	64.11m		SD27→SKP36
37	ML53	円形	24.0cm	22.0cm	26.0cm	64.03m		SD27→SKP37
38	ML53	円形	26.0cm	23.0cm	27.0cm	64.07m		SD27→SKP38
108	LT47	円形	26.0cm	26.0cm	41.0cm	68.70m		SK139→SKP108
134	MB54	楕円形	26.0cm	19.0cm	42.9cm	68.02m		SKI126→SKP134
167	MJ53	円形	24.0cm	21.0cm	15.4cm	64.31m		
168	ML53	円形	21.0cm	19.0cm	3.5cm	64.32m		
169	ML52	円形	19.0cm	18.0cm	15.5cm	64.21m		
173	LT48	円形	21.0cm	18.0cm	29.0cm	68.74m		SK357→SKP173
174	LT47・48	円形	30.0cm	28.0cm	35.0cm	68.70m		SK358→SKP174
179	MA50	円形	20.0cm	18.0cm	4.0cm	68.55m		
180	LT50・51	円形	23.0cm	22.0cm	36.7cm	68.26m		
181	LT50・51	楕円形	30.0cm	23.0cm	43.6cm	68.18m		
182	MA52	楕円形	22.5cm	17.0cm	54.0cm	67.97m		SK128→SKP182
183	LT51	円形	23.0cm	22.0cm	31.2cm	68.45m		
184	MA51	円形	29.0cm	27.0cm	33.0cm	68.23m		
185	MA50	円形	43.0cm	37.0cm	27.0cm	68.37m		
186	MA50	円形	25.0cm	22.0cm	18.0cm	68.52m		SI192→SKP186
187	MA50	(円形)	(31.5cm)	31.0cm	5.0cm	68.51m	炭化米、雑穀類	
188	LT50	円形	28.0cm	26.0cm	19.9cm	68.56m		SI192→SKP188
189	LT・MA52	円形	24.0cm	21.0cm	20.0cm	68.34m		
190	MA51・52	円形	30.0cm	27.0cm	16.0cm	68.30m		
191	MD・ME47	楕円形	34.0cm	25.0cm	21.4cm	67.15m		SD417→SKP191
196	MA52・53	円形	30.0cm	27.0cm	17.0cm	68.30m		
197	LT52	楕円形	24.0cm	18.0cm	23.0cm	68.30m		
202	LP47	円形	26.0cm	25.0cm	12.0cm	68.70m		
205	LO・LP47	円形	21.0cm	21.0cm	24.0cm	68.51m		
212	LQ47	円形	26.0cm	26.0cm	36.0cm	38.54m	雑穀類	
213	LQ47	円形	18.0cm	16.0cm	32.0cm	38.58m		
218	LS52	円形	29.0cm	28.0cm	21.0cm	68.32m		SK267→SKP218
224	ME・MF57	楕円形	31.0cm	24.0cm	25.0cm	68.69m		SD04→SKP224
232	MN57	円形	24.0cm	22.0cm	28.0cm	63.78m		
233	MN52	円形	17.0cm	17.0cm	19.5cm	63.95m		
234	MM52	円形	21.0cm	21.0cm	21.8cm	63.91m		
235	MN52	円形	24.0cm	22.0cm	25.0cm	63.94m		
236	MN51	円形	21.0cm	20.0cm	4.5cm	64.23m		
237	MM53	円形	22.0cm	20.0cm	20.4cm	63.95m		

第４表　柱穴様ピット一覧（２）

※( )内の数値は残存値で、重複状況は古→新である。

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ			底面の標高	出土遺物	重複状況
			長軸	短軸	深さ			
275	LN47	円形	18.0cm	16.5cm	19.0cm	68.16m		
276	LN48	円形	23.0cm	19.0cm	34.0cm	68.03m		
278	LN47	円形	15.0cm	14.0cm	19.0cm	68.45m		
281	LO48	円形	17.0cm	15.0cm	14.0cm	68.19m		
282	LO48	円形	22.0cm	21.0cm	15.0cm	68.22m		
283	LO48	円形	19.0cm	18.0cm	16.0cm	68.21m		
284	LO48	円形	22.0cm	21.5cm	13.0cm	68.28m		
287	LO48	円形	25.0cm	23.0cm	16.0cm	68.42m		
291	LP48	円形	25.0cm	24.0cm	11.0cm	68.54m		
292	LP48	円形	22.0cm	19.0cm	13.0cm	68.50m		
293	LP48	円形	17.0cm	17.0cm	14.0cm	68.50m		
294	LO49	円形	24.0cm	21.0cm	3.0cm	68.38m		
295	LO49	楕円形	31.0cm	24.0cm	16.0cm	68.21m		
296	LN49	楕円形	24.0cm	19.0cm	33.0cm	67.98m		
297	LN49	円形	18.0cm	16.0cm	17.0cm	68.14m		
298	LN49	円形	23.0cm	21.0cm	25.0cm	68.06m		
299	LN49	円形	22.0cm	19.0cm	17.0cm	68.08m		
300	LN49	楕円形	20.0cm	14.0cm	24.0cm	68.01m		
301	LN49	円形	24.0cm	21.0cm	36.0cm	68.05m		
302	LO50	円形	18.0cm	17.0cm	35.0cm	68.20m		
304	LQ47	円形	16.0cm	15.0cm	24.0cm	68.58m		
305	LQ48	円形	22.5cm	22.0cm	23.0cm	68.59m		
306	LP･LQ48	円形	21.0cm	20.0cm	22.0cm	68.53m		
307	LQ49	円形	22.5cm	21.0cm	21.0cm	68.46m		
308	LQ48	円形	20.0cm	18.0cm	18.0cm	68.65m		
309	LQ48	円形	20.5cm	19.0cm	17.0cm	68.68m		
311	LP･LQ49	円形	16.0cm	15.0cm	19.0cm	68.52m		
320	LN52	円形	35.0cm	34.0cm	14.1cm	67.17m		
321	LO51	円形	28.0cm	24.0cm	22.2cm	67.82m		
322	LO52	円形	24.0cm	20.0cm	16.7cm	67.74m		
323	LO52	円形	20.0cm	19.0cm	19.8cm	67.95m		
324	LP52	円形	20.0cm	20.0cm	40.6cm	67.76m		
325	LP51･52	円形	24.0cm	20.0cm	13.2cm	68.19m		
326	LQ54	楕円形	26.0cm	18.0cm	15.0cm	67.67m		SI372→ SKP326
332	LP･LQ54	円形	34.0cm	30.0cm	34.0cm	67.42m		
334	LP54	円形	24.0cm	23.0cm	11.9cm	67.68m		
335	LP54	円形	25.0cm	21.0cm	25.6cm	67.52m		
336	LP54	円形	24.0cm	22.0cm	12.2cm	67.66m		
339	LQ53･54	円形	24.0cm	20.0cm	28.0cm	67.65m		SI372→ SKP339
340	LR53	楕円形	36.0cm	31.0cm	26.0cm	67.84m		SI372→ SKP340
345	LR45	円形	18.5cm	17.5cm	17.2cm	68.81m		

第５表　柱穴様ピット一覧（３）

※( )内の数値は残存値で、重複状況は古→新である。

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸	大きさ 短軸	大きさ 深さ	底面の標高	出土遺物	重複状況
346	LR45	円形	16.5cm	15.0cm	9.3cm	68.91m		
347	LR45	円形	20.0cm	20.0cm	19.3cm	68.84m		
348	LR45	円形	25.0cm	23.5cm	16.8cm	68.89m		
349	LR45	円形	20.0cm	19.0cm	20.4cm	68.86m		
350	LR46	円形	24.0cm	22.0cm	16.7cm	68.91m		
351	LS45･46	楕円形	25.0cm	19.0cm	25.0cm	69.40m		
352	LS46	円形	21.0cm	20.0cm	16.8cm	69.50m		
353	LS46	円形	19.5cm	18.0cm	25.2cm	69.37m		
354	LS45	円形	27.0cm	25.0cm	22.2cm	69.48m		
355	LS45	円形	22.0cm	20.0cm	19.3cm	69.37m		
356	LT45･46	円形	23.0cm	19.5cm	25.7cm	69.42m		
386	LO54	円形	17.0cm	17.0cm	8.1cm	66.57m		
387	LO54	円形	20.0cm	17.0cm	9.3cm	66.90m		
388	MD55	円形	24.0cm	22.0cm	15.0cm	65.75m		
389	LO53	円形	21.0cm	20.0cm	11.3cm	66.84m		
390	LO53	楕円形	27.0cm	21.0cm	10.3cm	67.11m		
391	LO53	円形	21.0cm	21.0cm	16.5cm	67.58m		
401	MA41	楕円形	38.0cm	25.5cm	18.0cm	68.20m		
402	MA41	円形	35.0cm	35.0cm	15.0cm	68.39m		
403	LR41	円形	17.0cm	16.0cm	16.0cm	67.29m		SK429→ SKP403
404	MA41	円形	23.5cm	22.0cm	14.0cm	68.51m		
405	MB41	円形	18.0cm	18.0cm	50.0cm	68.22m		SI385→ SKP405
442	ME57	楕円形	30.0cm	22.0cm	27.0cm	64.87m		SI215→ SKP442
443	ME57	円形	27.0cm	24.0cm	24.0cm	64.94m		
444	ME57	円形	22.0cm	21.0cm	25.0cm	64.95m		
447	MH53	円形	29.0cm	26.0cm	6.4cm	64.80m		
448	LR38	楕円形	28.0cm	23.0cm	10.0cm	66.60m		
449	LR37	円形	28.0cm	26.0cm	43.0cm	66.29m		
450	LR54	楕円形	33.0cm	25.0cm	22.0cm	67.82m		
463	MB54	円形	23.0cm	20.0cm	41.9cm	67.96m		SD131→ SKP463
468	MB49	楕円形	29.0cm	23.0cm	24.8cm	68.39m		
469	MB49	円形	25.0cm	21.0cm	28.5cm	68.36m		
470	MB49	円形	20.0cm	17.0cm	17.2cm	68.35m		
471	MB49	楕円形	22.0cm	15.0cm	16.8cm	68.50m		
480	LT37	円形	21.5cm	21.5cm	27.0cm	67.24m	土師器片１点	
481	MB39	円形	22.0cm	22.0cm	23.0cm	68.40m		
482	MB39	円形	18.5cm	18.0cm	27.0cm	68.82m		
483	MB38	円形	24.0cm	21.0cm	13.6cm	68.22m		
484	MB38	円形	20.0cm	20.0cm	29.3cm	68.00m		
485	MB39	円形	22.0cm	20.0cm	16.2cm	68.21m		
486	MA39	(円形)	19.0cm	(18.0cm)	31.4cm	66.81m		SI406← SKP486

５．土坑

ＳＫ06(第35図、図版19)

ＭＬ50グリッドで確認された。中央が範囲確認調査時のトレンチで壊されている。平面形は長軸(北東―南西)1.51ｍ×短軸(北西―南東)0.92ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ07(第35図、図版19)

ＭＬ51グリッドで確認された。坑内のやや西側と南東壁の一部を、東西に横切るＳＤ08に切られている。平面形は長軸(北東―南西)1.57ｍ(残存部)×短軸(北西―南東)1.53ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは14㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ17(第35図、図版19)

ＭＨ52・53グリッドで確認された。平面形は長軸(北東―南西)1.51ｍ×短軸(北西―南東)1.22ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは13㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、土師器胴部４点、鉄滓１点が出土した。

ＳＫ18(第35図、図版19)

ＭＩ52グリッドで確認された。平面形は長軸(北東―南西)0.52ｍ×短軸(北西―南東)0.52ｍの円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ23(第35図)

ＭＨ52グリッドで確認された。西側をＳＫ25に切られている。平面形は長軸(北東―南西)1.70ｍ(残存部)×短軸(北西―南東)1.52ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは15㎝である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、土師器口縁部１点・胴部８点が出土した。

ＳＫ25(第35図)

ＭＨ52グリッドで確認された。ＳＫ23の西側を切っている。平面形は長軸(北東―南西)0.72ｍ×短軸(北西―南東)0.65ｍの円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ40(第35図、図版19)

ＭＪ50、ＭＫ50グリッドで確認された。平面形は長軸(北東―南西)2.46ｍ×短軸(北西―南東)1.91ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは22㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。遺物は、土師器口縁部２点・胴部26点・底部２点、鉄滓15点が出土した。

ＳＫ41(第35図、図版19)

ＭＪ49・50グリッドで確認された。平面形は長軸(南―北)1.88ｍ×短軸(東―西)1.22ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。底面は南側がやや窪んでいて、南側から北側へ緩やかに傾斜している。壁は北側を除いて急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ42(第35図、図版19)

ＭＪ50グリッドで確認された。坑内のほぼ中央部を東西に横切るＳＤ44に切られている。平面形は長軸(北東―南西)1.30ｍ×短軸(北西―南東)1.07ｍの円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。底面は南西側から北東側へ緩やかに傾斜していて、壁は北東側を除いて急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であっ

た。遺物は出土しなかった。

ＳＫ50（第36図、図版19）

ＭＫ50グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.47ｍ×短軸（北西―南東）0.90ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは７㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ90（第36図）

ＭＨ47グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.76ｍ×短軸（北東―南西）0.63ｍの円形を呈し、確認面からの深さは８㎝である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ97（第37図、図版20）

ＭＩ49グリッドで確認された。ＳＫ118の南東側を切っているが、北側をＳＫ98に切られている。平面形は長軸（北東―南西）1.41ｍ（残存部）×短軸（北西―南東）1.28ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは34㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、土師器口縁部３点（３点とも第64図に掲載）・胴部19点・底部４点が出土した。

ＳＫ98（第37図、図版20）

ＭＩ49・50グリッドで確認された。ＳＫ97の北側とＳＫ118の北東側を切っている。平面形は長軸（北東―南西）1.34ｍ×短軸（北西―南東）0.95ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは30㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、土師器口縁部１点・胴部４点（うち１点は第64図に掲載）・底部１点が出土した。

ＳＫ102（第36図、図版20）

ＭＪ48・49、ＭＫ48・49グリッドで確認された。南側をＳＫ103に切られている。平面形は長軸（北東―南西）1.86ｍ×短軸（北西―南東）1.40ｍ（残存部）の円形を呈し、確認面からの深さは39㎝である。底面は若干凹凸がある。壁は大部分は緩やかに立ち上がっているが、北東側は開口部まで若干内傾して立ち上がっている。覆土は４層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ103（第36図、図版20）

ＭＪ48、ＭＫ48グリッドで確認された。ＳＫ102の南側を切っている。平面形は長軸（北東―南西）0.58ｍ×短軸（北西―南東）0.47ｍの円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ105（第37図、図版20）

ＭＩ49グリッドで確認された。南東側をＳＫ106に切られている。平面形は長軸（北西―南東）1.10ｍ（残存部）×短軸（北東―南西）1.05ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは22㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、鉄滓３点が出土した。

ＳＫ106（第37図）

ＭＩ49、ＭＫ49グリッドで確認された。ＳＫ105の南東側とＳＫ118の南西側を切っている。平面形は長軸（北東―南西）1.46ｍ×短軸（北西―南東）1.42ｍの円形を呈し、確認面からの深さは27㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、土師器胴部２点が出土した。

ＳＫ110（第36図）

ＭＥ48グリッドで確認された。平面形は長軸（南―北）0.95ｍ×短軸（東―西）0.92ｍで方形を呈し、確認面

からの深さは14㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ111（第36図、図版20）

ＭＨ47・48グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.60ｍ×短軸（北東―南西）0.45ｍの円形を呈し、確認面からの深さは35㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ116（第36図）

ＭＩ47グリッドで確認された。西側をＳＩ107に切られている。平面形は長軸（北東―南西）2.04ｍ×短軸（北西―南東）0.99ｍ（残存部）の円形を呈し、確認面からの深さは23㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ117（第36図、図版20）

ＭＥ48グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.00ｍ×短軸（北東―南西）0.67ｍで方形を呈し、確認面からの深さは32㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ118（第37図）

ＭＩ49・50グリッドで確認された。南東側をＳＫ97に、北東側をＳＫ98に、南西側をＳＫ106に切られている。平面形は長軸（北東―南西）0.55ｍ（残存部）×短軸（北西―南東）0.94ｍ（残存部）の楕円形を呈し、確認面からの深さは15㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は、土師器胴部７点（うち１点は第64図に掲載）、鉄滓３点が出土した。

ＳＫ120（第36図、図版20）

ＭＥ43グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.59ｍ×短軸（北東―南西）0.42ｍの略楕円形を呈し、確認面からの深さは14㎝である。底面はほぼ平坦で、南東側から北西側へ若干傾斜している。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ121（第37図、図版21）

ＭＨ44グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）0.68ｍ×短軸（北西―南東）0.61ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは27㎝である。底面は丸みを帯びていて、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ127（第37図、図版21）

ＭＡ53グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.79ｍ×短軸（北西―南東）1.18ｍの方形を呈し、確認面からの深さは27㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。遺物は、土師器胴部１点が出土した。

ＳＫ128（第37図、図版21）

ＭＡ52グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.87ｍ×短軸（北西―南東）1.03ｍの方形を呈し、確認面からの深さは14㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ129（第38図、図版21）

ＬＳ50グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.76ｍ×短軸（北西―南東）1.29ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは27㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分

けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ136(第38図、図版21)

ＬＳ49・50グリッドで確認された。平面形は長軸(東―西)0.78ｍ×短軸(南―北)0.72ｍの円形を呈し、確認面からの深さは42㎝である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ139(第38図、図版21)

ＬＳ47、ＬＴ47グリッドで確認された。南西側をＳＫ364に切られている。平面形は長軸(北東―南西)1.32ｍ(残存部)×短軸(北西―南東)0.94ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは10㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、縄文土器胴部が１点出土した。

ＳＫ140(第38図、図版21)

ＬＳ46、ＬＴ46グリッドで確認された。平面形は長軸(北東―南西)1.03ｍ×短軸(北西―南東)0.72ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは17㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ141(第38図、図版21)

ＬＴ46グリッドで確認された。平面形は長軸(北東―南西)1.03ｍ×短軸(北西―南東)0.98ｍの円形を呈し、確認面からの深さは14㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、縄文土器胴部１点、土師器口縁部１点が出土した。

ＳＫ142(第38図、図版22)

ＬＴ45・46グリッドで確認された。平面形は長軸(東―西)1.80ｍ×短軸(南―北)0.86ｍの方形を呈し、確認面からの深さは16㎝である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ143(第38図、図版22)

ＬＳ45、ＬＴ45グリッドで確認された。平面形は長軸(南―北)1.56ｍ×短軸(東―西)0.89ｍの方形を呈し、確認面からの深さは27㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。遺物は、縄文土器胴部が１点、土師器胴部２点が出土した。

ＳＫ144(第38図、図版22)

ＬＲ46、ＬＳ46グリッドで確認された。平面形は長軸(北西―南東)1.40ｍ×短軸(北東―南西)0.86ｍの方形を呈し、確認面からの深さは23㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、縄文土器胴部１点、土師器胴部２点が出土した。

ＳＫ147(第39図、図版22)

ＭＡ49・50グリッドで確認された。平面形は長軸(東―西)0.95ｍ×短軸(南―北)0.92ｍの円形を呈し、確認面からの深さは88㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。坑内のほぼ中央部に径22㎝、深さ130㎝のピットが１個穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ150(第39図、図版22)

ＭＡ47・48グリッドで確認された。平面形は長軸(北西―南東)1.65ｍ×短軸(北東―南西)0.97ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは44㎝である。底面は北側が窪んでいる。壁は南東側が緩やかに立ち上がっているのに対し、北西側は開口部まで内傾して立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、縄文土器口縁部２点・胴部１点、土師器胴部１点が出土した。

ＳＫ151（第39図、図版22）

ＬＳ46・47グリッドにかけて確認された。平面形は長軸（南―北）1.09ｍ×短軸（東―西）0.65ｍの方形を呈し、確認面からの深さは13㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ152（第39図、図版22）

ＬＴ46グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.12ｍ（残存部）×短軸（北西―南東）1.05ｍの円形を呈し、確認面からの深さは26㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であった。坑内の北側に径30㎝、深さ45㎝のピットが１個穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ153（第39図、図版22）

ＬＳ48グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.02ｍ×短軸（北東―南西）0.96ｍの円形を呈し、確認面からの深さは66㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は４層に分けられた。坑内のほぼ中央部に径14㎝、深さ52㎝のピットが１個穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ154（第39図、図版23）

ＬＱ52グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.03ｍ×短軸（北西―南東）0.66ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは28㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、縄文土器口縁部１点（第56図に掲載）・胴部１点、土師器胴部１点が出土した。

ＳＫ155（第39図、図版23）

ＬＱ50、ＬＲ50グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.44ｍ×短軸（北東―南西）0.96ｍの方形を呈し、確認面からの深さは21㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。坑内の南側に径27㎝、深さ54㎝のピットが１個穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ156（第40図、図版23）

ＬＲ48グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.77ｍ×短軸（北東―南西）1.26ｍの方形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は南西側が急な角度で立ち上がっているのに対し、北東側は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、土師器胴部１点が出土した。

ＳＫ159（第40図、図版23）

ＬＱ51、ＬＲ51グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.48ｍ×短軸（北西―南東）1.17ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは19㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。　遺物は、土師器胴部４点が出土した。

ＳＫ160（第40図、図版23）

ＭＡ54グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.92ｍ×短軸（北東―南西）0.88ｍの円形を呈し、確認面からの深さは36㎝である。底面は凹凸があり、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ161（第40図、図版23）

ＭＡ49、ＭＢ49グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）2.00ｍ×短軸（北西―南東）1.82ｍの円形を呈し、確認面からの深さは17㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、土師器胴部６点、須恵器１個体１点（第73図に掲載）、鉄滓１点が出土した。

ＳＫ211（第40図、図版23）

ＬＰ45、ＬＱ45グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.66ｍ×短軸（北東―南西）0.52ｍの楕

円形を呈し、確認面からの深さは11cmである。底面はほぼ平坦で、北西側から南東側へ傾斜している。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ216（第40図）

ＭＦ56グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.82ｍ×短軸（北東―南西）1.08ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは25cmである。底面は丸みを帯びていて、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ217（第40図、図版24）

ＭＥ57、ＭＦ57グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.21ｍ×短軸（北西―南東）1.05ｍの方形を呈し、確認面からの深さは35cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、土師器胴部１点が出土した。

ＳＫ219（第40図、図版24）

ＭＦ56・57グリッドで確認された。平面形は長軸（東―西）0.52ｍ×短軸（南―北）0.38ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは14cmである。底面は丸みを帯びていて、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ220（第40図、図版24）

ＭＦ55、ＭＧ55グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.31ｍ×短軸（北西―南東）0.88ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、土師器胴部２点が出土した。

ＳＫ222（第41図）

ＭＦ56・57グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）0.39ｍ（残存部）×短軸（北西―南東）0.54ｍの円形を呈し、確認面からの深さは20cmである。底面は平坦で、北東側から南西側へ傾斜している。壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ225（第41図、図版24）

ＭＦ58グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）2.00ｍ×短軸（北西―南東）1.94ｍの円形を呈し、確認面からの深さは22cmである。底面はほぼ平坦で、南西側から北東側へ傾斜している。壁は北東側を除いて緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、土師器胴部３点・底部１点が出土した。

ＳＫ248（第41図、図版24）

ＬＫ43グリッドで確認された。ＳＫ430の東側を切っている。平面形は長軸（北東―南西）1.43ｍ×短軸（北西―南東）1.32ｍの円形を呈し、確認面からの深さは12cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ249（第41図）

ＬＳ54・55グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.30ｍ×短軸（北西―南東）1.18ｍの円形を呈し、確認面からの深さは82cmである。底面はやや凹凸があり、壁は開口部近くまで内傾して立ち上がり、そこから外傾して立ち上がっている。覆土は４層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ250（第41図）

ＬＱ54グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.84ｍ×短軸（北東―南西）0.62ｍの不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは14cmである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ251（第41図、図版24）

ＬＰ53グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.25ｍ×短軸（北東―南西）0.80ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは22㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ254（第41図、図版24）

ＬＳ51・52グリッドにかけて確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.67ｍ×短軸（北東―南西）0.73ｍの不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは29㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は西側を除いて緩やかに立ち上がっている。覆土は３層に分けられた。遺物は、縄文土器口縁部１点（第56図に掲載）、土師器口縁部１点・胴部９点・底部１点が出土した。

ＳＫ263（第41図、図版24）

ＬＲ51グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.99ｍ×短軸（北東―南西）0.72ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは36㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、縄文土器胴部２点、土師器胴部４点・底部２点（２点とも第65図に掲載）が出土した。

ＳＫ264（第42図、図版25）

ＬＴ48グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.96ｍ×短軸（北東―南西）0.89ｍの円形を呈し、確認面からの深さは22㎝である。底面は中央部が窪んでいて、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。径41㎝、深さ31㎝のピットが坑内の中央部に１本確認された。遺物は出土しなかった。

ＳＫ357（第42図、図版25）

ＬＴ47・48グリッドで確認された。平面形は長軸（東―西）1.40ｍ×短軸（南―北）1.10ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは23㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ358（第42図、図版25）

ＬＴ47・48グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.02ｍ×短軸（北西―南東）0.83ｍの円形を呈し、確認面からの深さは35㎝である。底面は中央部が窪んでいて、壁は北西側を除いて緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、土師器胴部２点が出土した。

ＳＫ364（第38図、図版25）

ＬＴ47グリッドで確認された。ＳＫ139の南西側を切っている。平面形は長軸（北東―南西）0.84ｍ×短軸（北西―南東）0.60ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは25㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、土師器口縁部１点・胴部10点・羽口１点（羽口は第65図に掲載）、鉄滓２点が出土した。

ＳＫ366（第42図、図版25）

ＭＥ55グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.58ｍ×短軸（北東―南西）1.05ｍの長方形を呈し、確認面からの深さは24㎝である。底面はほぼ平坦で、北西側から南東側へやや傾斜している。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ371（第42図、図版25）

ＭＢ44・45グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.65ｍ×短軸（北東―南西）0.58ｍの方形を呈し、確認面からの深さは12㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ376（第42図、図版25）

ＭＡ41・42グリッドで確認された。東側をＳＤ343に切られている。平面形は長軸（北西―南東）2.56ｍ×短軸（北東―南西）1.91ｍ（残存部）の楕円形を呈し、確認面からの深さは56㎝である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は８層に分けられた。遺物は、土師器口縁部７点（うち２点は第65図に掲載）・胴部45点・底部８点、須恵器底部１点（第73図に掲載）、石器２点が出土した。

ＳＫ377（第42図、図版25）

ＭＡ44グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）0.63ｍ×短軸（北西―南東）0.39ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは７㎝である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ378（第43図、図版26）

ＭＢ44グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.83ｍ×短軸（北東―南西）0.42ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは９㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ381（第43図、図版26）

ＬＳ42グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.21ｍ×短軸（北東―南西）1.00ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは24㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は、土師器口縁部２点・胴部９点、鉄滓３点が出土した。

ＳＫ383（第43図）

ＬＮ55グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）0.95ｍ×短軸（北西―南東）0.57ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは15㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ397（第43図）

ＬＳ50・51グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.13ｍ×短軸（北東―南西）0.81ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは17㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、縄文土器胴部４点、土師器胴部１点が出土した。

ＳＫ398（第43図）

ＬＳ51グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.21ｍ×短軸（北東―南西）0.71ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは36㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は４層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ410（第43図、図版26）

ＬＱ43、ＬＲ43グリッドにかけて確認された。平面形は長軸（北西―南東）1.49ｍ×短軸（北東―南西）0.91ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは16㎝である。底面は中央部がやや窪んでいて、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ422（第43図、図版26）

ＬＴ38グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.42ｍ×短軸（北西―南東）1.24ｍの円形を呈し、確認面からの深さは26㎝である。底面は凹凸があり、壁は西側を除いて緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は、土師器胴部７点が出土した。

ＳＫ423（第43図）

ＬＲ54グリッドで確認された。平面形は長軸(南―北)1.34ｍ×短軸(東―西)1.30ｍの円形を呈し、確認面からの深さは47㎝である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ427(第44図、図版26)

ＬＴ39グリッドで確認された。平面形は長軸(北西―南東)1.82ｍ×短軸(北東―南西)1.28ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは29㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ429(第44図)

ＬＲ41グリッドで確認された。平面形は長軸(北西―南東)1.68ｍ×短軸(北東―南西)0.70ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは23㎝である。底面は平坦で、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は、土師器口縁部１点(第65図に掲載)・胴部６点が出土した。

ＳＫ430(第41図)

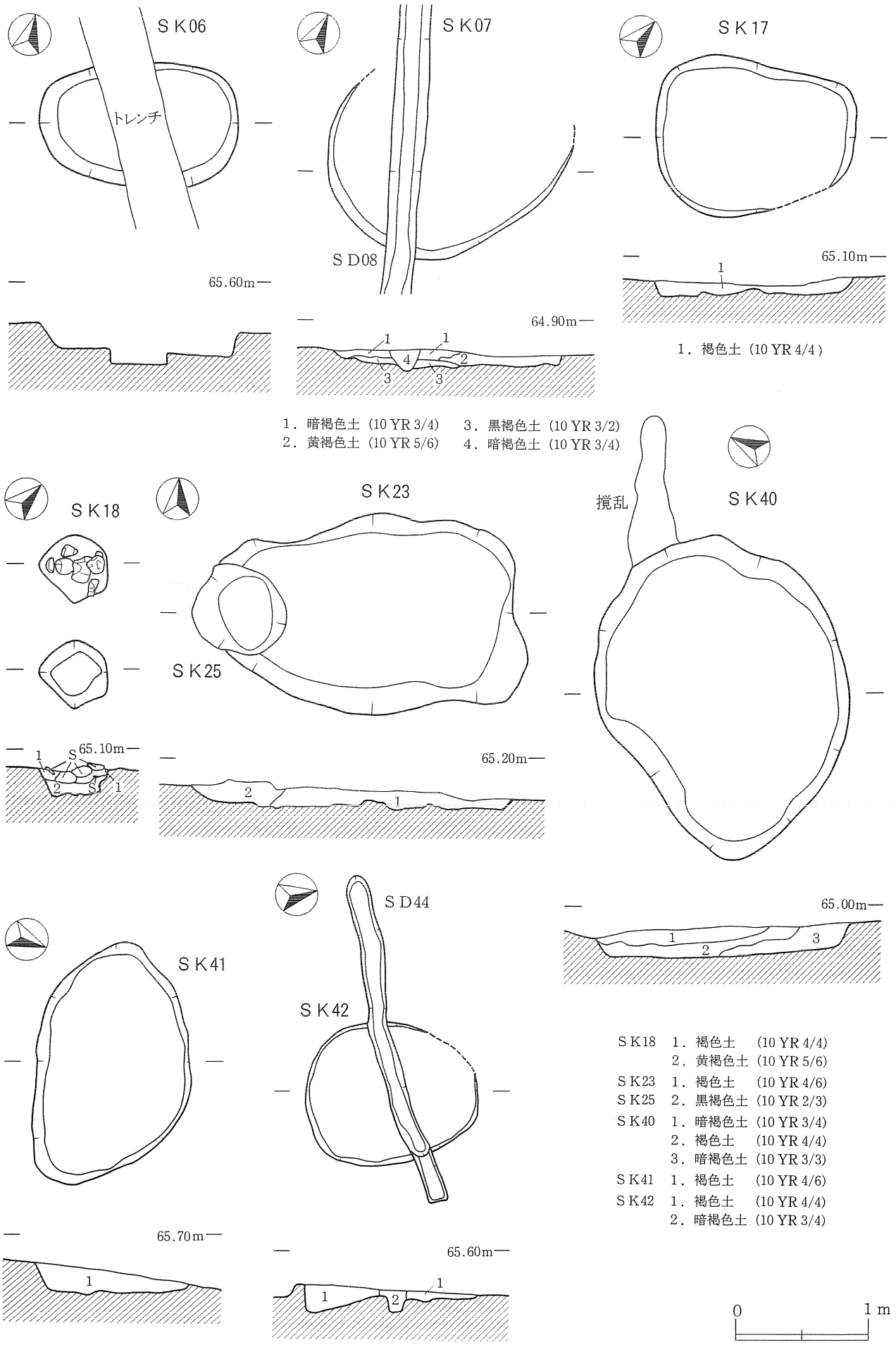
ＬＫ43グリッドで確認された。東側をＳＫ248に切られている。平面形は長軸(北西―南東)0.78ｍ×短軸(北東―南西)0.71ｍの円形を呈し、確認面からの深さは15㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＫ434(第44図、図版26)

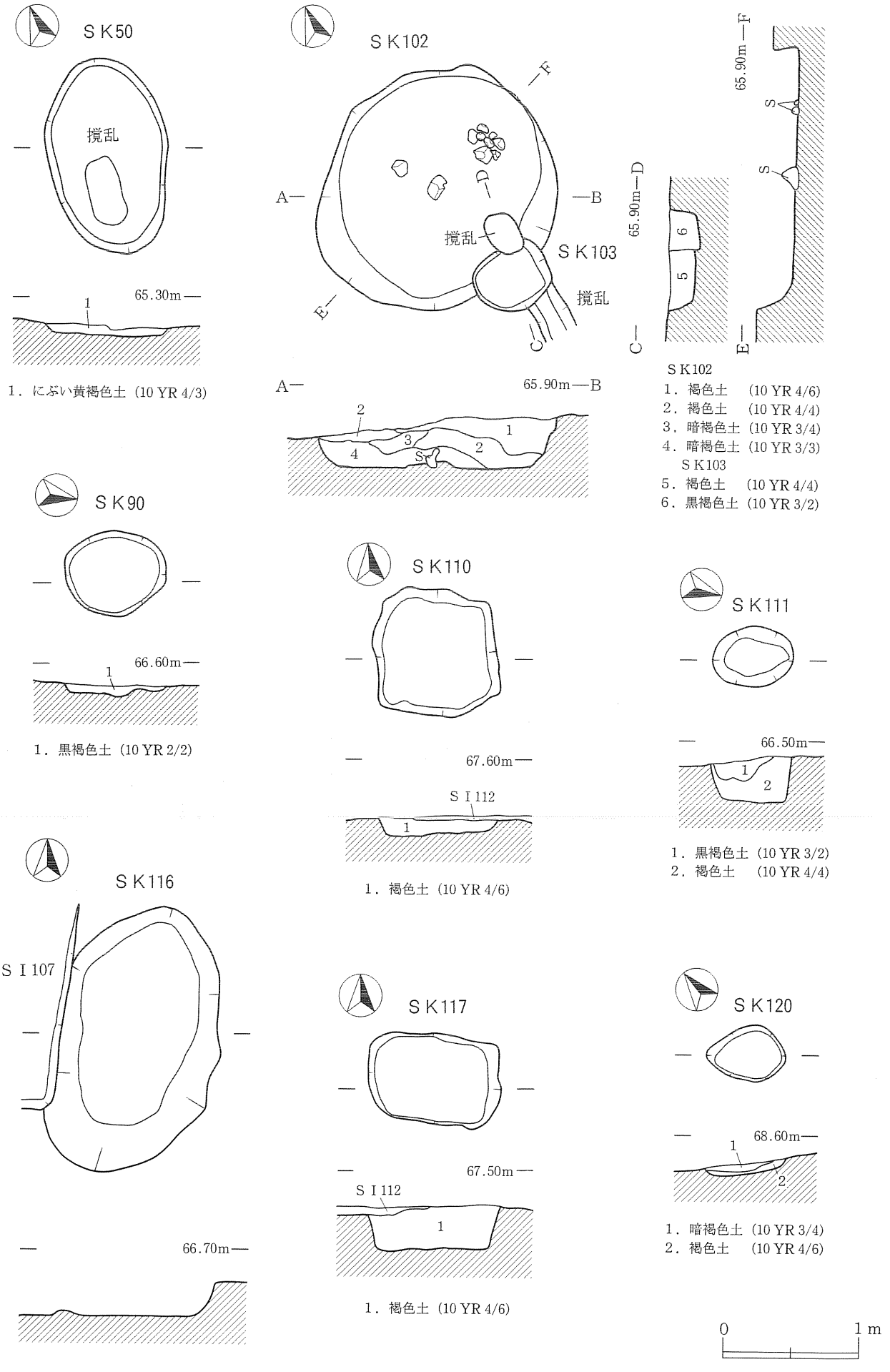
ＬＭ42グリッドで確認された。平面形は長軸(北西―南東)2.72ｍ×短軸(北東―南西)1.23ｍの円形を呈し、確認面からの深さは61㎝である。底面は北西側が窪んでいて、壁は南側を除いて緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ435(第44図)

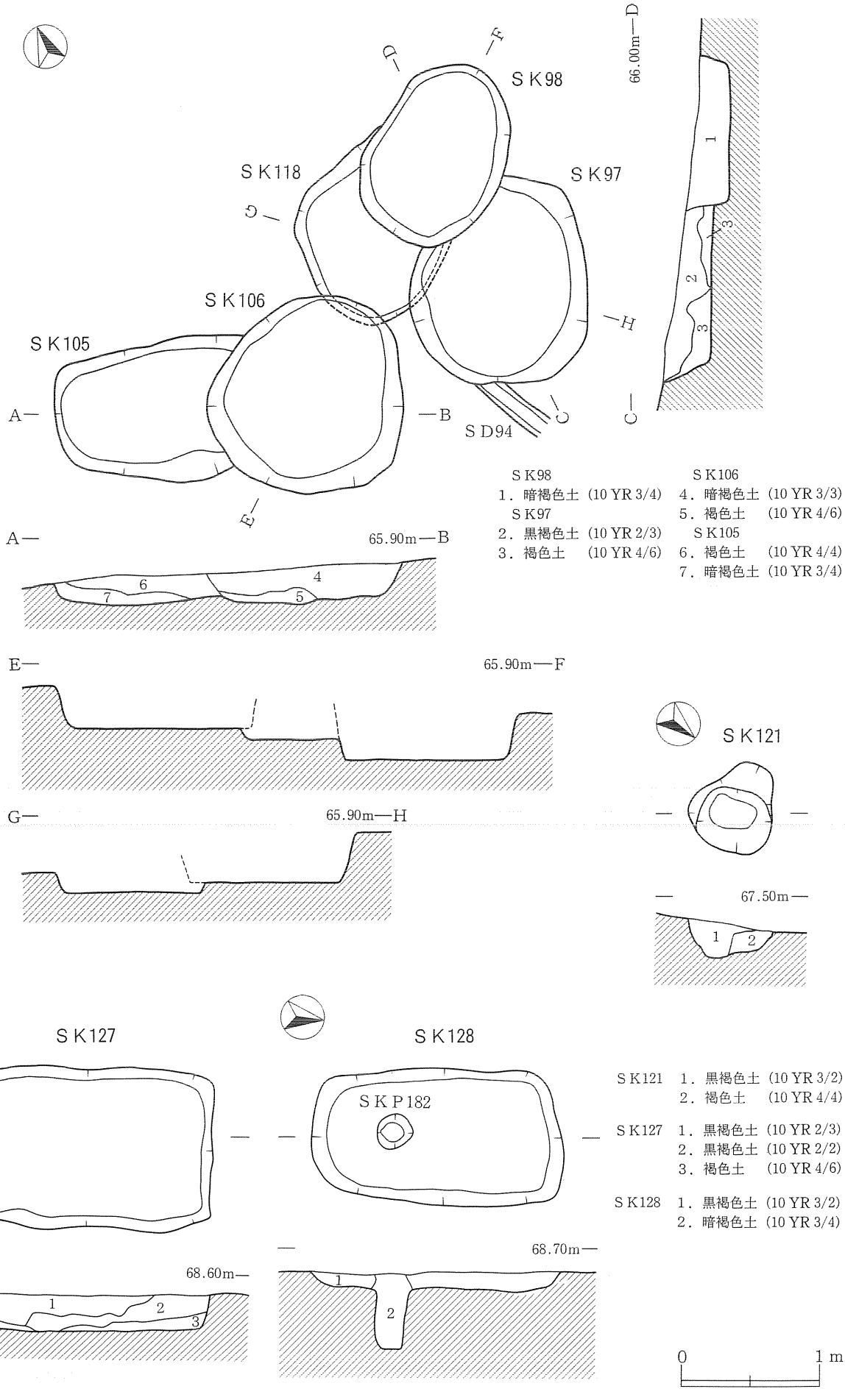
ＬＴ38グリッドで確認された。平面形は長軸(南―北)0.76ｍ×短軸(東―西)0.71ｍの円形を呈し、確認面からの深さは24㎝である。底面は平坦で、北東側から南西側へ緩やかに傾斜している。壁は北側を除いて緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。



第35図　ＳＫ06・07・17・18・23・25・40・41・42



第36図　ＳＫ50・90・102・103・110・111・116・117・120



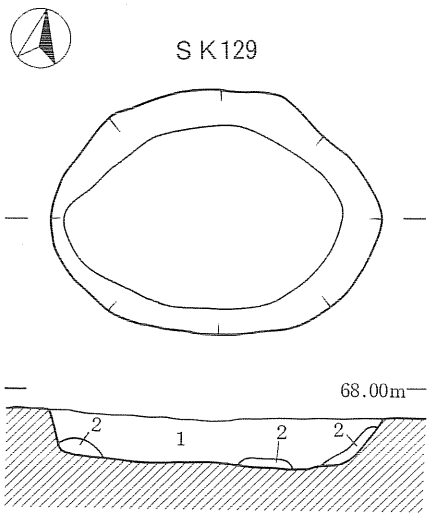
SK98
1．暗褐色土（10 YR 3/4）
SK97
2．黒褐色土（10 YR 2/3）
3．褐色土　（10 YR 4/6）
SK106
4．暗褐色土（10 YR 3/3）
5．褐色土　（10 YR 4/6）
SK105
6．褐色土　（10 YR 4/4）
7．暗褐色土（10 YR 3/4）

SK121　1．黒褐色土（10 YR 3/2）
2．褐色土　（10 YR 4/4）

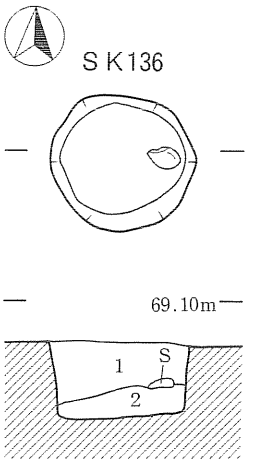
SK127　1．黒褐色土（10 YR 2/3）
2．黒褐色土（10 YR 2/2）
3．褐色土　（10 YR 4/6）

SK128　1．黒褐色土（10 YR 3/2）
2．暗褐色土（10 YR 3/4）

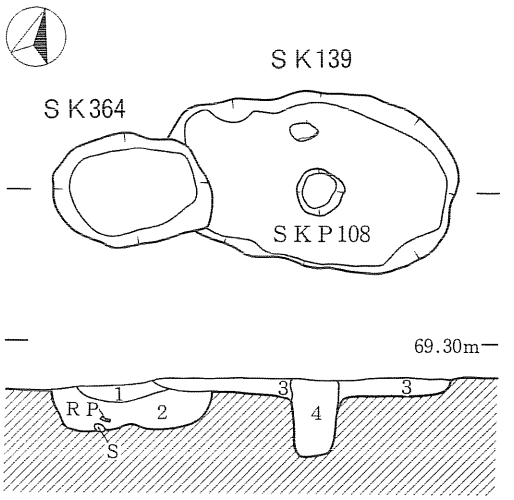
第37図　ＳＫ97・98・105・106・118・121・127・128



1．暗褐色土（10 YR 3/4）
2．黄褐色土（10 YR 5/8）

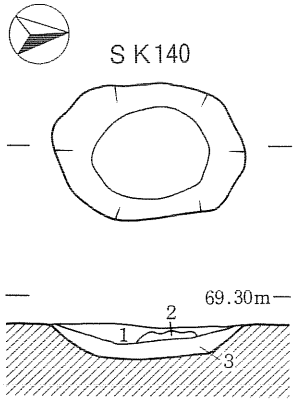


1．褐色土　（10 YR 4/4）
2．にぶい黄褐色土（10 YR 5/4）

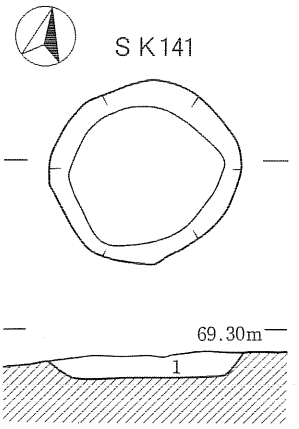


ＳＫ364
1．褐色土　（10 YR 4/4）
2．暗褐色土（10 YR 3/4）

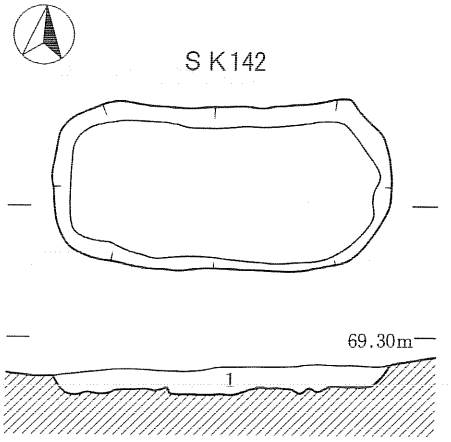
ＳＫ139
3．黒褐色土（10 YR 3/2）
4．褐色土　（10 YR 4/4）



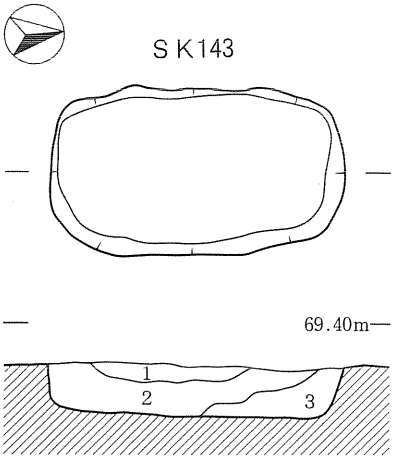
1．黒褐色土　（10 YR 3/2）
2．暗赤褐色土（2.5 YR 3/4）
3．褐色土　（10 YR 4/4）

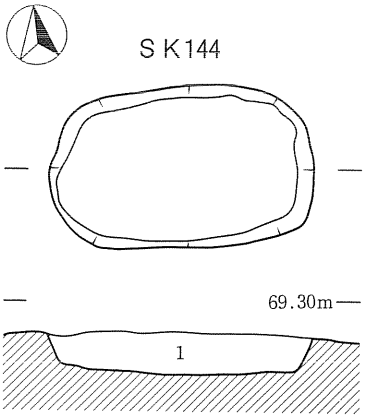


1．褐色土　（10 YR 4/4）



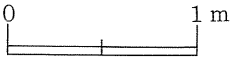
1．黄褐色土（10 YR 5/6）



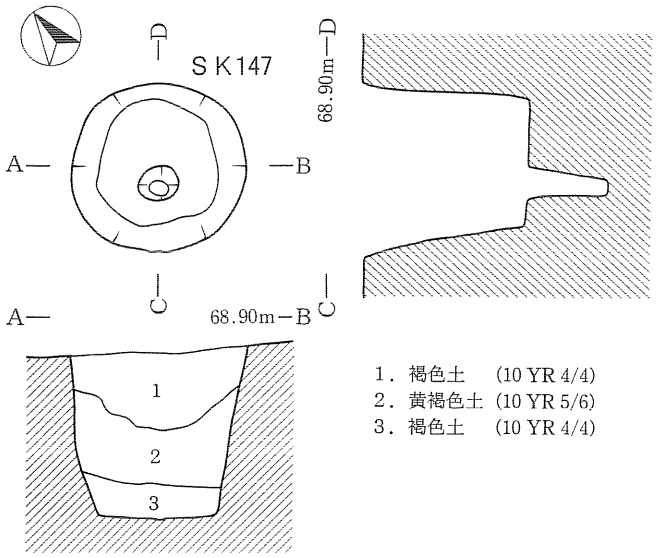


ＳＫ143　1．にぶい黄褐色土（10 YR 4/3）
2．暗褐色土（10 YR 3/4）
3．褐色土　（10 YR 4/4）

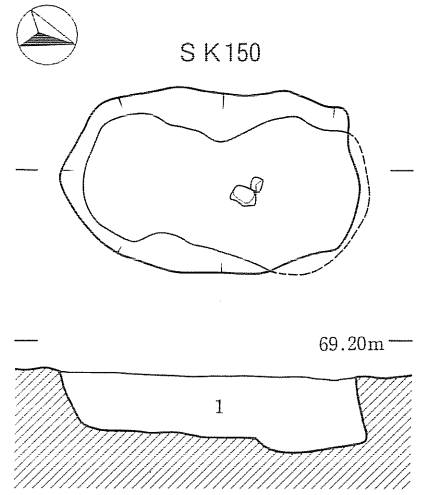
ＳＫ144　1．褐色土　（10 YR 4/4）



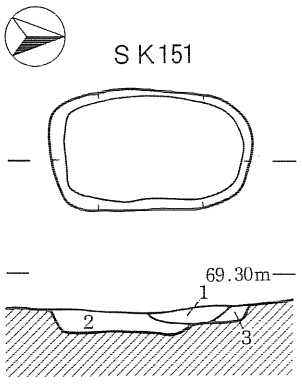
第38図　ＳＫ129・136・139・140・141・142・143・144・364



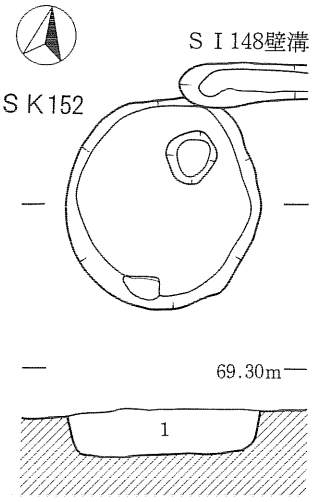
1．褐色土　(10 YR 4/4)
2．黄褐色土 (10 YR 5/6)
3．褐色土　(10 YR 4/4)



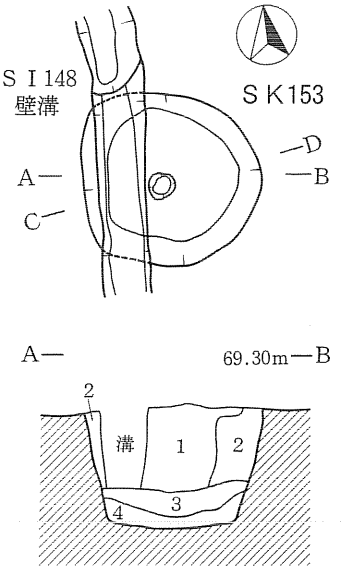
1．褐色土　(10 YR 4/6~4/4)

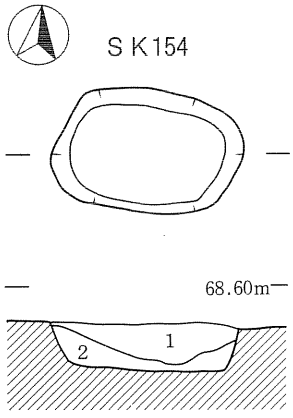


1．にぶい黄褐色土 (10 YR 4/3)
2．暗褐色土　(10 YR 3/4)
3．褐色土　(10 YR 4/4)

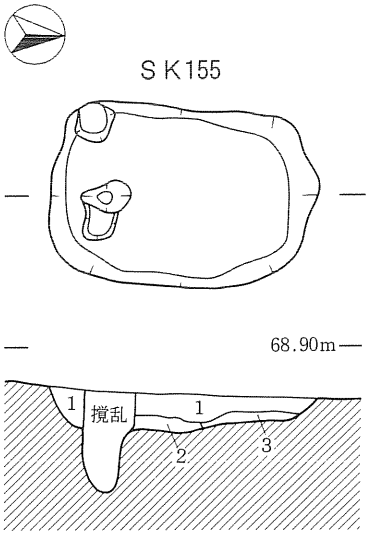


1．褐色土　(10 YR 4/4)





1．黒褐色土 (10 YR 2/3)
2．褐色土　(10 YR 4/4)

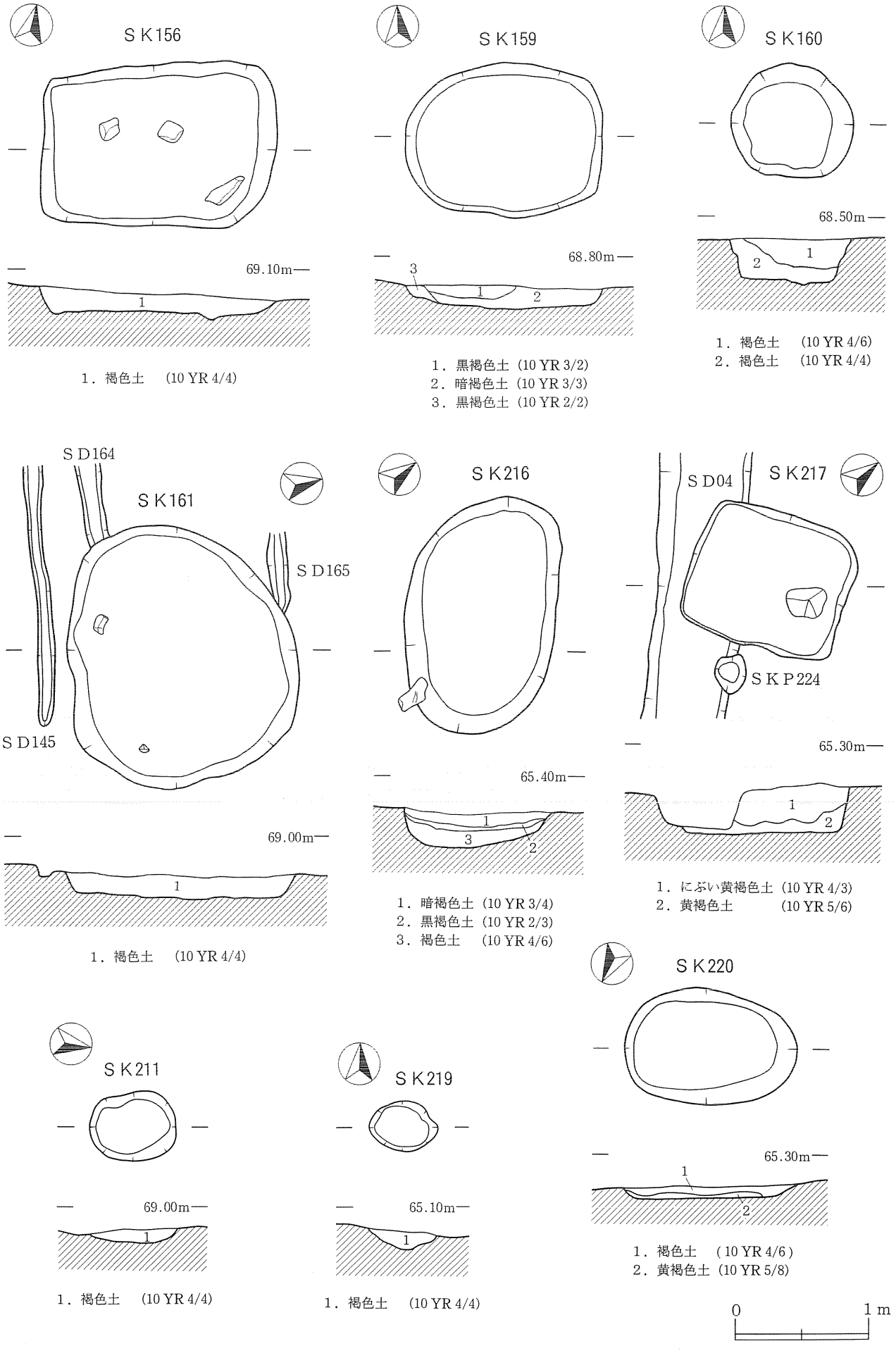


ＳＫ153　1．黒褐色土 (10 YR 3/2)
2．褐色土　(10 YR 4/4)
3．黄褐色土 (10 YR 5/6)
4．にぶい黄褐色土
(10 YR 5/4)

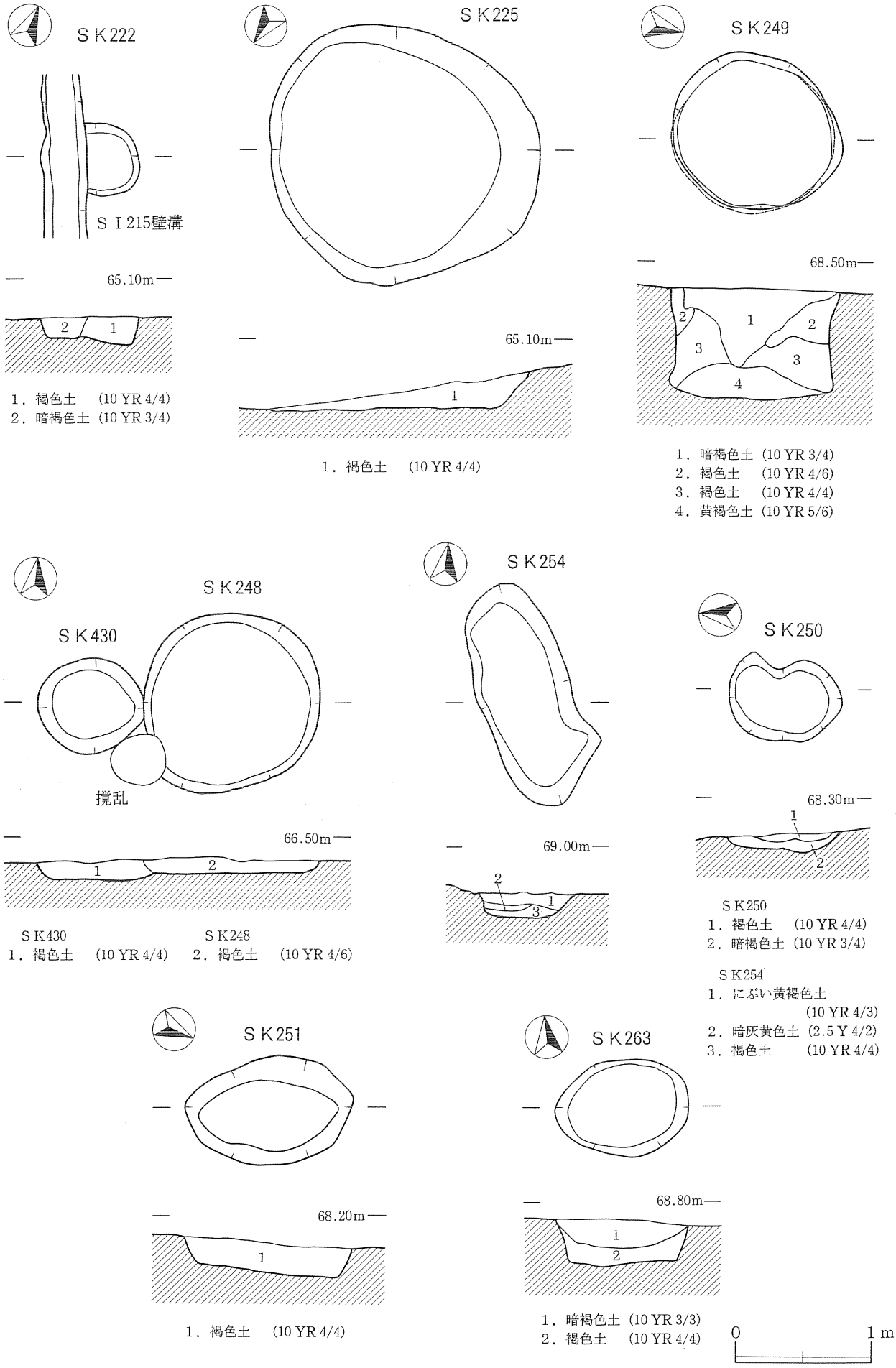
ＳＫ155　1．暗褐色土 (10 YR 3/3)
2．褐色土　(10 YR 4/4)
3．貝層

0　1 m

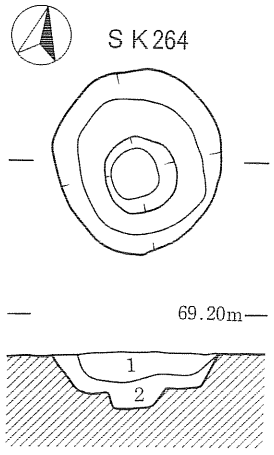
第39図　ＳＫ147・150・151・152・153・154・155



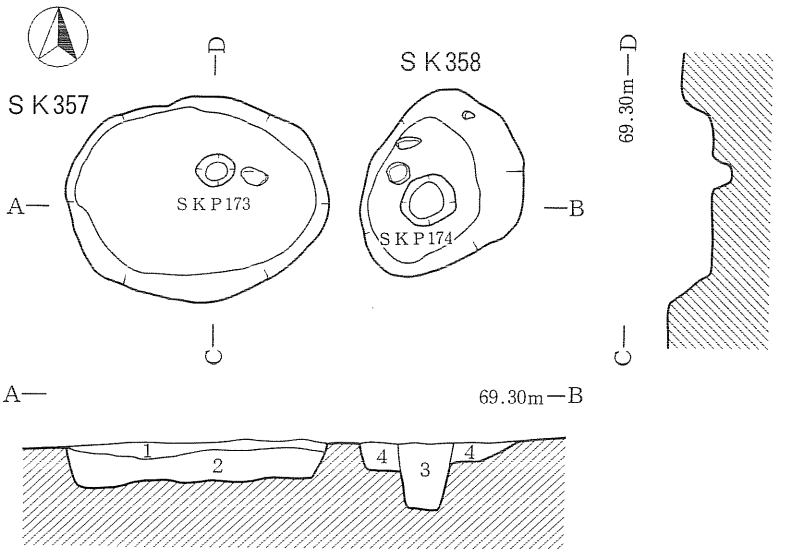
第40図　ＳＫ156・159・160・161・211・216・217・219・220



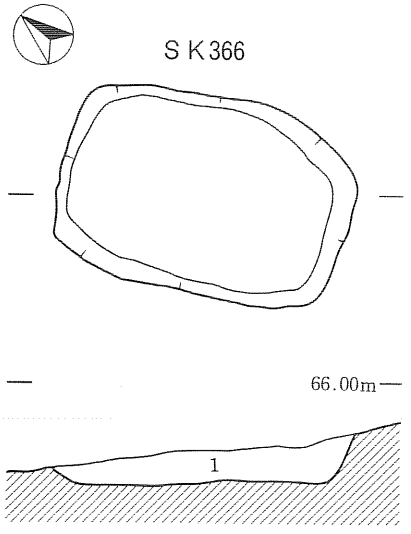
第41図　ＳＫ222・225・248・249・250・251・254・263・430



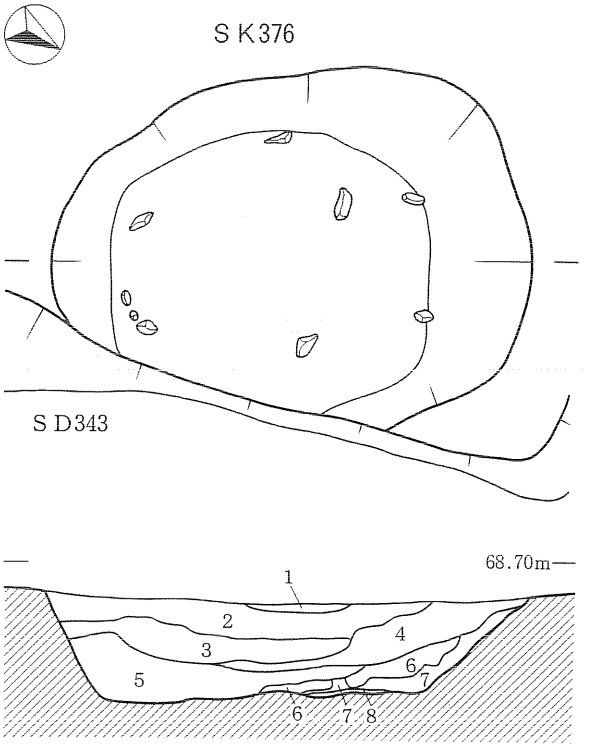
1．暗褐色土（10 YR 3/4）
2．褐色土　（10 YR 4/4）



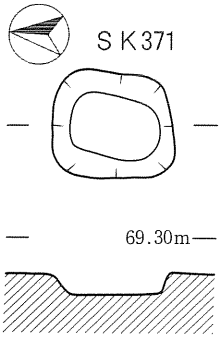
ＳＫ357　1．暗褐色土（10 YR 3/3）　3．黒褐色土（10 YR 2/3）
ＳＫ358　2．褐色土　（10 YR 4/4）　4．暗褐色土（10 YR 3/4）

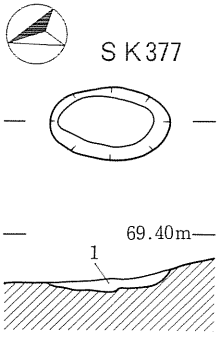


1．暗褐色土（10 YR 3/3）

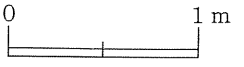


1．暗褐色土（10 YR 3/3）　5．黒褐色土（10 YR 3/2）
2．暗褐色土（10 YR 3/4）　6．黄褐色土（10 YR 5/6）
3．褐色土　（10 YR 4/6）　7．褐色土　（10 YR 4/6）
4．黒褐色土（10 YR 2/3）　8．黒褐色土（2.5 Y 3/1）

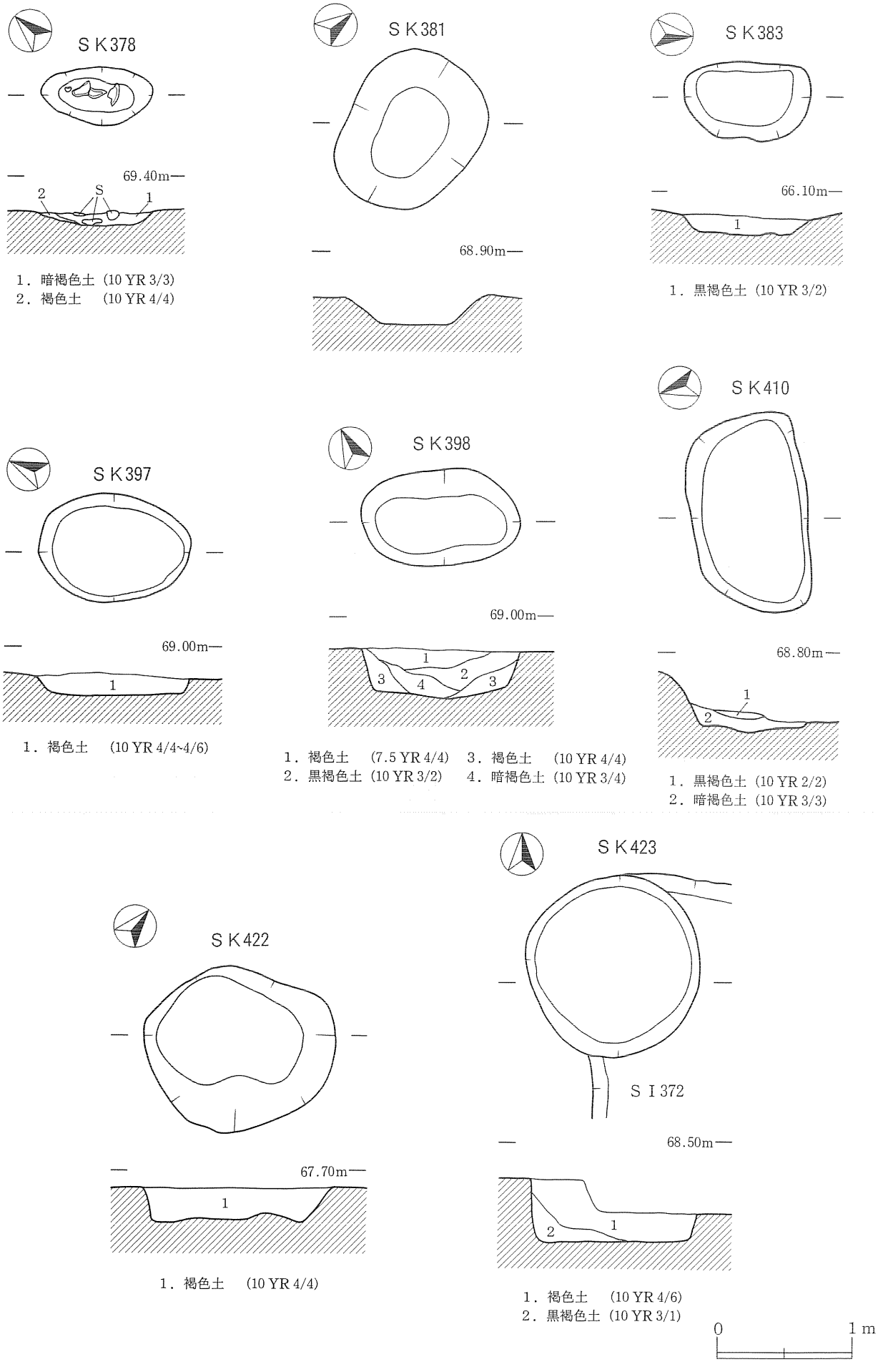




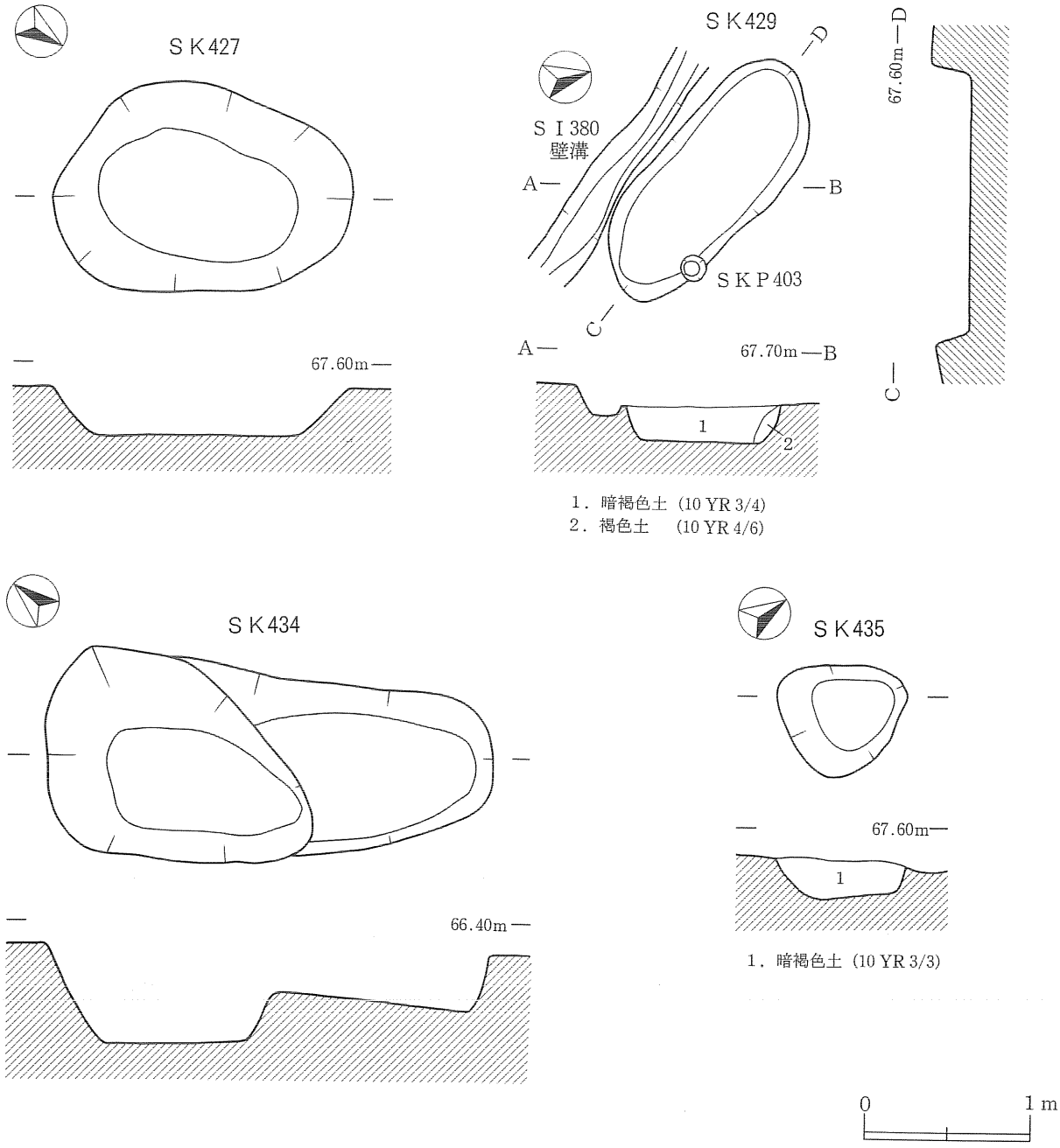
1．黒褐色土（10 YR 2/2）



第42図　ＳＫ264・357・358・366・371・376・377



第43図　ＳＫ378・381・383・397・398・410・422・423



第44図　ＳＫ427・429・434・435

６．集石

ＳＱ242（第45図、図版27）

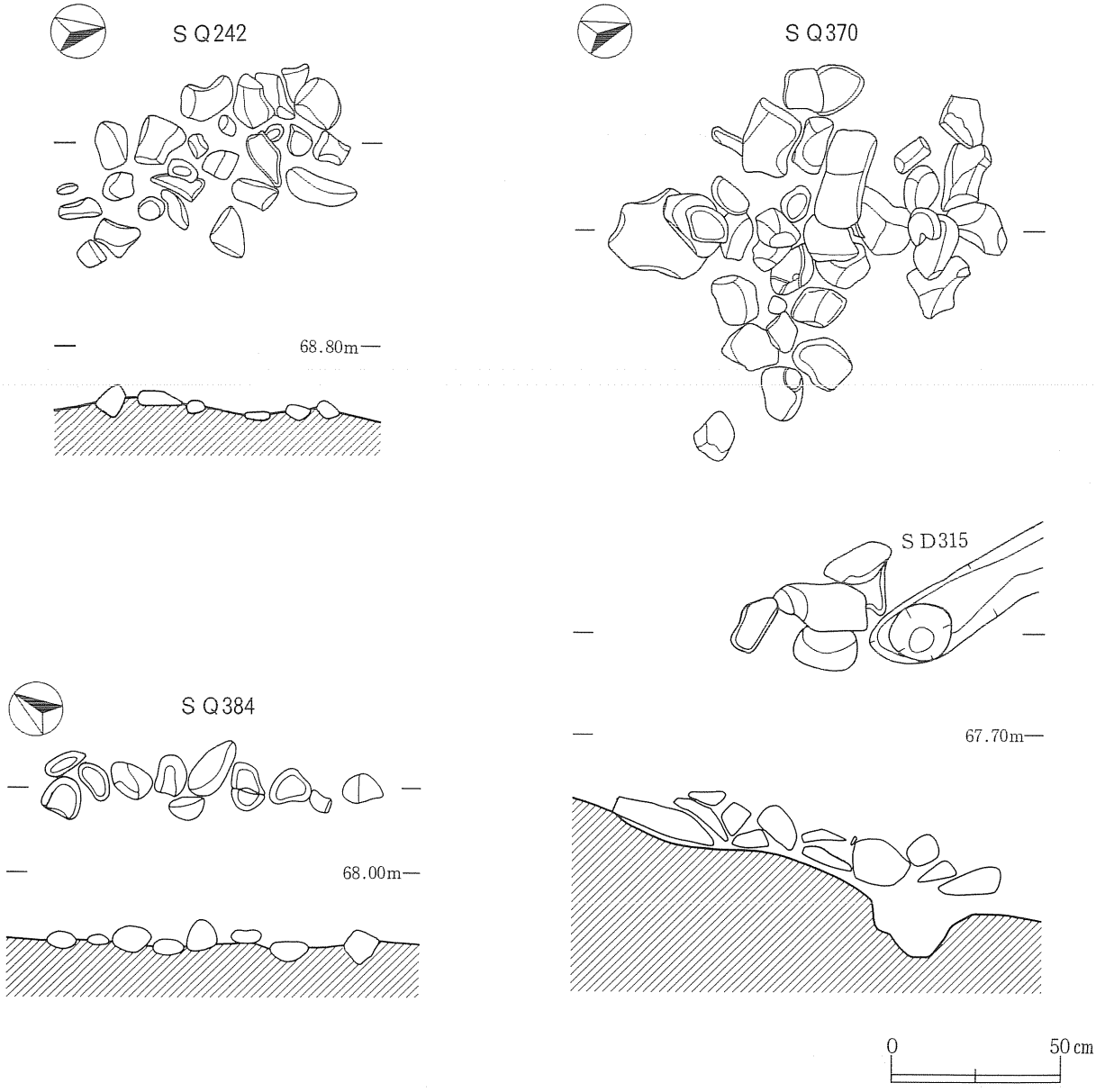
ＭＢ51グリッドで確認された。長さ13～43㎝、幅６～28㎝の握り拳大から人頭大の角礫・円礫計26個で構成されており、平面形は長軸（南－北）1.80ｍ×短軸（東－西）1.10ｍの長い楕円形を呈する。火を受けた痕跡はなく、配石下には何らの施設も検出されなかった。遺物は出土しなかった。

ＳＱ370（第45図、図版27）

ＬＯ52・53グリッドで確認された。長さ10～63㎝、幅10～60㎝の握り拳大から人頭大の角礫・円礫計35個で構成されており、平面形は長軸（北東－南西）2.35ｍ×短軸（北西－南東）2.05ｍの円形を呈する。火を受けた痕跡はなかった。配石下にはＳＤ315が検出されたが、本遺構との関連性は不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＱ384（第45図）

ＬＬ46グリッドで確認された。長さ14～38㎝、幅９～22㎝の握り拳大の角礫・円礫計12個で構成される。平面形は北西―南東方向に直線上に広がる形を呈し、その長さは2.0ｍを測る。火を受けた痕跡はなく、配



第45図　ＳＱ242・370・384

石下には何らの施設も検出されなかった。遺物は出土しなかった。

７．焼土遺構

ＳＮ16（第46図）

ＭＩ53グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）0.41ｍ×短軸（北西―南東）0.35ｍの円形を呈し、確認面からの深さは10㎝である。底面は凹凸があり、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＮ119（第46図）

ＭＥ47グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.76ｍ×短軸（北東―南西）0.59ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは22㎝である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ125（第46図）

ＭＥ48グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）0.31ｍ×短軸（北西―南東）0.25ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは５㎝である。底面はほぼ平坦で、北側から南側へ傾斜している。壁は北側を除いて緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ194（第46図）

ＭＡ51グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.40ｍ×短軸（北東―南東）0.24ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは11㎝である。底面は中央部が窪んでいて、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ195（第46図）

ＭＡ51グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.36ｍ×短軸（北東―南西）0.22ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは８㎝である。底面は中央部が窪んでいて、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ228（第46図）

ＭＭ51、ＭＮ51グリッドで確認された。炉部の平面形は長軸（北西―南東）0.69ｍ（南端は調査区外）×短軸（北東―南西）0.54ｍの円形を呈し、確認面からの深さは９㎝である。東側の袖は長軸（南―北）0.65ｍ（南端は調査区外）×短軸（東―西）0.26ｍ（残存部のみ）の方形を呈し、確認面からの深さは５㎝である。西側の袖は長軸（北西―南東）0.81ｍ（南端は調査区外）×短軸（北東―南西）0.34ｍ（残存部のみ）の略円形を呈し、確認面からの深さは６㎝である。底面はほぼ平坦である。覆土は４層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＮ261（第46図）

ＬＴ48グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）0.63ｍ×短軸（北西―南東）0.59ｍの円形を呈し、確認面からの深さは13㎝である。底面は凹凸があり、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は２層に分けられた。遺物は出土しなかった。

ＳＮ375（第47図）

ＭＢ43グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）0.95ｍ×短軸（北西―南東）0.69ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。底面は北東側が窪んでいて、壁は急な角度で立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ408（第47図）

ＭＪ47・48グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.65ｍ×短軸（北東―南西）0.61ｍの不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは５㎝である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ431（第47図）

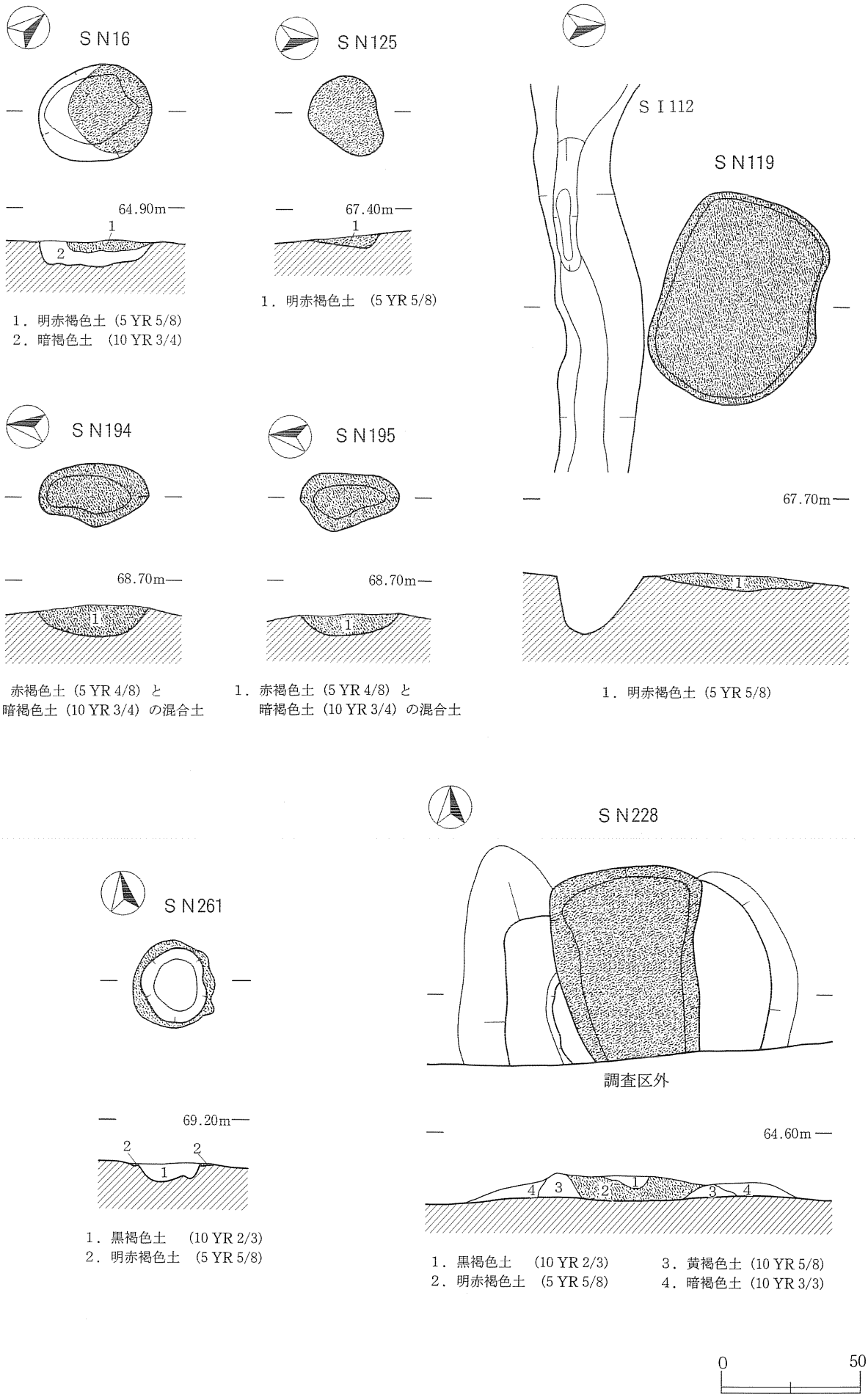
ＬＫ42、ＬＬ42グリッドで確認された。平面形は長軸（北東―南西）1.32ｍ×短軸（北西―南東）0.73ｍの不整な方形を呈し、確認面からの深さは８㎝である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ433（第47図）

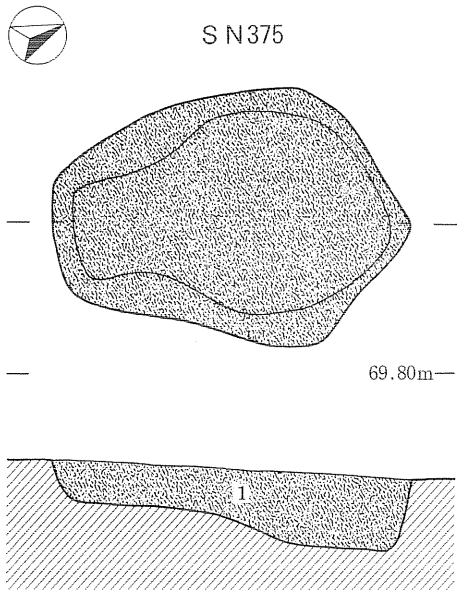
ＬＬ42グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.58ｍ×短軸（北東―南西）0.31ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは８㎝である。底面は北西側がやや窪んでいて、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。

ＳＮ452（第47図）

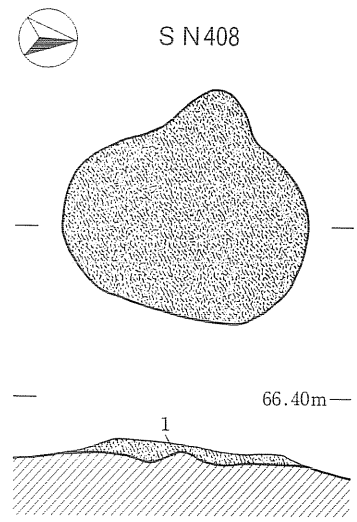
ＭＪ51グリッドで確認された。平面形は長軸（北西―南東）0.51ｍ×短軸（北東―南西）0.46ｍの円形を呈し、確認面からの深さは３㎝である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は１層であった。遺物は出土しなかった。



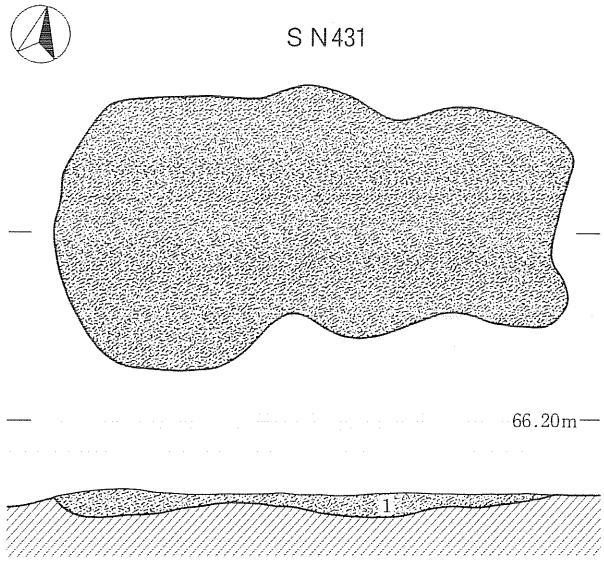
第46図　S N16・119・125・194・195・228・261



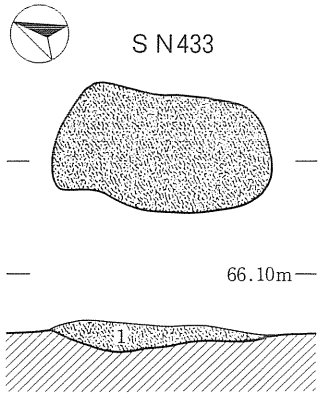
1．極暗赤褐色土（5 YR 2/3）



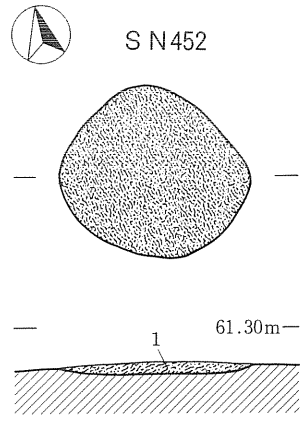
1．明赤褐色土（5 YR 5/8）



1．明赤褐色土（5 YR 5/8）



1．赤褐色土（5 YR 4/6）



1．明赤褐色土（5 YR 5/8）

0　50cm

第47図　S N 375・408・431・433・452

８．溝跡・空堀

①溝跡（付図）

ＳＤ08

ＭＫ50、ＭＬ50・51・52、ＭＭ52・53グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、北西側斜面に開口している。ＳＫ07・ＳＩ75と重複しており、これらを切っている。長さ13.64ｍ、幅16～35㎝、深さ９～20㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ26

ＭＬ52、ＭＭ52・53グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、長さ1.72ｍ、幅17～20㎝、深さ５～13㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ27

ＭＬ52・53グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、ＳＫＰ36・37・38と重複しており、これらに切られている。残存部の長さは3.28ｍ、幅19～26㎝、深さ４～11㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ28

ＭＩ53、ＭＪ53・54グリッドで確認した。北西から南東方向に延び、途中で北東方向に曲がるＬ字形プランを呈する溝である。長さ6.38ｍ、幅17～30㎝、深さ８～19㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ30

ＭＦ53・54、ＭＧ53グリッドで確認した。北東－南西に延びる溝で、長さ4.74ｍ、幅16～26㎝、深さ８～19㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ32

ＭＨ55・56グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、長さは約3.79ｍ、幅８～20㎝、深さ５～15㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ33

ＭＧ55・56、ＭＨ56・57グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、北西側斜面に開口している。長さ6.65ｍ、幅17～31㎝、深さ４～14㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかかった。

ＳＤ44

ＭＪ50グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、ＳＫ42と重複しており、これを切っている。長さ2.54ｍ、幅14～18㎝、深さ３～20㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ53

ＭＩ54・55グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、北西側斜面に開口している。長さ6.14ｍ、幅11～22㎝、深さ３～18㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ54

ＭＨ54・55、ＭＩ55グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、長さ3.25ｍ、幅15～23㎝、深さ５～12㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ77

ＭＭ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝であるが、途中で西方向に曲がり調査区外に入り込んでおり、その全容は不明である。残存部の長さは4.55ｍ、幅15～32㎝、深さ４～22㎝である。断面形はＵ字

形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ93

ＭＧ43・44・45・46、ＭＨ45・46グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ13.14ｍ、幅14～35㎝、深さ11～30㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ94

ＭＨ48・49、ＭＩ49グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、ＳＤ100と重複しており、これを切っている。長さ8.62ｍ、幅10～21㎝、深さ10～16㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ95

ＭＩ48・49グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ4.79ｍ、幅14～23㎝、深さ６～25㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は、土師器口縁部２点（２点とも第66図に掲載）が出土した。

ＳＤ100

ＭＨ47・48・49・50、ＭＩ50・51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、ＳＤ94と重複しており、これに切られている。長さ20.58ｍ、幅10～32㎝、深さ７～25㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は、土師器口縁部２点・胴部４点が出土した。

ＳＤ101

ＭＨ49・50・51、ＭＩ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、後世の攪乱を受けて部分的に欠如しているが、その全長は11.09ｍ、幅13～24㎝、深さ５～16㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ131

ＭＢ52・53・54グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北－南に延びる溝で、ＳＩ130・ＳＫＰ463と重複しており、これらに切られている。一部、範囲確認調査で掘ったトレンチで壊されているが、残存部の長さは7.54ｍ、幅12～18㎝、深さ２～８㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ132

ＭＢ52・53・54グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北－南に延びる溝で、ＳＦ05に切られている。一部、範囲確認調査で掘ったトレンチで壊されているが、長さ5.08ｍ、幅９～18㎝、深さ２～12㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ133

ＭＢ52・53・54グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北－南に延びる溝で、ＳＤ369と重複しており、これに切られている。一部、範囲確認調査で掘ったトレンチで壊されているが、長さ6.40ｍ、幅10～18㎝、深さ１～６㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ145

ＭＡ49、ＭＢ49、ＭＣ49グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。東－西に延びる溝で、ＳＤ04と重複しており、これらに切られている。残存部の長さは7.23ｍ、幅10～26㎝、深さ３～17㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ146

ＭＣ48グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。東－西に延びる溝で、ＳＩ162・ＳＤ163と重複しており、これらに切られている。残存部の長さは2.11ｍ、幅16～20㎝、深さ７～15㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は、縄文土器胴部１点が出土した。

ＳＤ157

ＭＦ54、ＭＧ54グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、長さ2.65ｍ、幅15～26㎝、深さ９～16㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ163

ＭＣ45・46・47・48グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北から南方向に延び、途中で南西方向に屈曲する溝である。ＳＤ146と重複しており、ＳＤ146を切っていてＳＦ05に切られている。後世の攪乱を受けて部分的に欠如しているが、その全長は13.13ｍ、幅10～24㎝、深さ２～10㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ164

ＭＢ49、ＭＣ49グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。東－西に延びる溝で、ＳＫ161と重複しており、これらに切られている。残存部の長さは7.23ｍ、幅10～26㎝、深さ３～17㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ165

ＭＢ49、ＭＣ49グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。東－西に延びる溝で、ＳＫ161・ＳＤ04・ＳＤ166と重複しており、ＳＤ166を切っていてＳＦ05・ＳＫ161・ＳＤ04に切られている。残存部の長さは6.37ｍ、幅11～22㎝、深さ７～27㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ166

ＭＢ49・50グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、ＳＤ165と重複しており、これに切られている。残存部の長さは3.26ｍ、幅13～23㎝、深さ７～17㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ193

ＬＳ49グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、長さ1.55ｍ、幅17～19㎝、深さ12～15㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ206

ＬＯ47、ＬＰ47グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ2.55ｍ、幅11～16㎝、深さ２～10㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ207

ＬＯ47、ＬＰ47グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、長さ5.90ｍ、幅11～17㎝、深さ２～４㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は、東端部から炭化米が集中して出土した。

ＳＤ208

ＬＰ45・46グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ4.15ｍ、幅20～31㎝、深さ11～17㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ209

ＬＯ45、ＬＰ45グリッドで確認した。北から南方向に延び、途中で東方向に曲がるＬ字形プランを呈する溝である。長さ5.61ｍ、幅17～27㎝、深さ４～７㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ210

ＬＮ43・44、ＬＯ44・45グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北西－南東に延びる溝で、ＳＤ04と重

複しており、これらに切られている。残存部の長さは9.28ｍ、幅15～33㎝、深さ２～29㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は、縄文土器胴部２点が出土した。

ＳＤ221

ＭＦ57グリッドのＳＩ215内で確認した。北東－南西に延びる溝で、長さ1.37ｍ、幅15～24㎝、深さ９～10㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ229

ＭＭ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝であるが、南側は調査区外に入り込んでおり、その全容は不明である。残存部の長さは約2.72ｍ、幅24～29㎝、深さ８～14㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ230

ＭＮ53、ＭＯ53グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、長さ5.98ｍ、幅17～34㎝、深さ13～21㎝である。底面には、径17～29㎝、深さ７～13㎝のピット３個が等間隔に穿たれている。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ231

ＭＭ53、ＭＮ53グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、長さ2.29ｍ、幅15～22㎝、深さ４～14㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ244

ＭＧ49グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、一部、範囲確認調査で掘ったトレンチで壊されているため、残存部の長さは2.29ｍ、幅18～22㎝、深さ４～14㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ245

ＭＧ48・49グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、南東側が攪乱で壊されているため、残存部の長さは4.03ｍ、幅15～24㎝、深さ７～15㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ246

ＭＧ58、ＭＨ58グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、長さ4.58ｍ、幅17～26㎝、深さ７～20㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ255

ＬＮ43、ＬＯ43・44グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北西－南東に延びる溝で、ＳＤ04と重複しており、これらに切られている。残存部の長さは5.94ｍ、幅17～24㎝、深さ４～７㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ256

ＬＮ43、ＬＯ43・44グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北西－南東に延びる溝で、ＳＤ04と重複しており、これらに切られている。残存部の長さは5.74ｍ、幅19～37㎝、深さ４～20㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ257

ＬＳ44、ＬＴ43・44、ＭＡ43グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北東－南西に延びる溝で、ＳＦ05に切られている。長さ8.81ｍ、幅14～29㎝、深さ５～31㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は、縄文土器口縁部１点・胴部１点、土師器口縁部３点・胴部11点・底部２点が出土した。

ＳＤ258

ＬＳ44、ＬＴ43・44、ＭＡ43グリッドのＳＦ05の盛土下から確認した。北東－南西に延びる溝で、ＳＦ05に切られている。長さ8.90ｍ、幅12～29㎝、深さ５～31㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ260

ＭＤ42・43、ＭＥ43グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、後世の攪乱を受けて部分的に欠如しているが、その全長は3.33ｍ、幅９～20㎝、深さ２～６㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ269

ＬＮ53、ＬＯ53グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、ＳＤ04と重複しており、これに切られている。一部、範囲確認調査で掘ったトレンチで壊されているが、残存部の長さは約6.40ｍ、幅10～18㎝、深さ１～６㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ270

ＭＢ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ2.19ｍ、幅14～21㎝、深さ５～６㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ312

ＬＮ50・51、ＬＯ50グリッドで確認した。北東－南西に延びる溝で、長さ4.03ｍ、幅15～24㎝、深さ７～15㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ313

ＬＮ51、ＬＯ51、ＬＰ51グリッドで確認した。北東－南西に延びる溝で、長さ5.71ｍ、幅13～26㎝、深さ４～５㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ314

ＬＯ52グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、ＳＤ392と重複しており、これに切られている。残存部の長さは4.58ｍ、幅17～26㎝、深さ７～20㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ315

ＬＯ53・54・55グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、ＳＤ02と重複しており、これに切られている。残存部の長さは12.38ｍ、幅13～27㎝、深さ５～15㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ316

ＬＮ51・52・53、ＬＯ53・54グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ14.15ｍ、幅11～28㎝、深さ５～12㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ317

ＬＭ49・50、ＬＮ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、後世の攪乱を受けて部分的に欠如しているが、その全長は7.31ｍ、幅15～24㎝、深さ５～21㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ318

ＬＮ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ5.87ｍ、幅14～25㎝、深さ６～15㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ319

ＬＮ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、後世の攪乱を受けて部分的に欠如しているが、その全長は3.19ｍ、幅14～24㎝、深さ１～８㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ367

ＭＢ54、ＭＣ54グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、ＳＤ04と重複しており、これに切られている。残存部の長さは4.14ｍ、幅16～21㎝、深さ７～28㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ369

ＭＢ54グリッドで確認した。北西－南東に延びる溝で、一部、範囲確認調査で掘ったトレンチで壊されているため、残存部の長さは約1.00ｍ、幅12～16㎝、深さ１～６㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ392

ＬＯ52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、ＳＤ314と重複しており、これを切っている。長さ12.38ｍ、幅13～27㎝、深さ５～15㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ393

ＬＮ52・53グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ1.89ｍ、幅17～24㎝、深さ３～16㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ394

ＬＮ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、北側が攪乱で壊されているため、残存部の長さは約3.37ｍ、幅11～31㎝、深さ９～23㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は、土師器胴部２点が出土した。

ＳＤ396

ＬＳ50・51、ＬＴ51・52グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、ＳＩ268と重複しており、これに切られている。長さ7.73ｍ、幅13～19㎝、深さ８～16㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ417

ＭＤ47・48グリッドのＳＩ112内で確認した。東－西に延びる溝で、ＳＫＰ191と重複しており、これに切られている。残存部の長さは2.53ｍ、幅23～30㎝、深さ12～24㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ426

ＬＳ37・38・39グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ4.15ｍ、幅16～33㎝、深さ12～16㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ440

ＭＡ38、ＭＢ38グリッドのＳＩ412内で確認した。北西－南東に延びる溝で、長さ5.14ｍ、幅９～21㎝、深さ４～21㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ445

ＬＳ37・38グリッドで確認した。北西から南東方向に延び、途中で南西方向に曲がる逆Ｌ字形プランを呈する溝で、長さ4.49ｍ、幅15～34㎝、深さ13～25㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかっ

た。

ＳＤ455

ＭＧ47、ＭＨ47グリッドで確認した。西から東方向に延び、途中で北方向に曲がるＬ字形プランを呈する溝で、長さ5.61ｍ、幅17～27㎝、深さ４～７㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ459

ＭＧ43・44・45・46グリッドで確認した。北－南に延びる溝で、長さ14.22ｍ、幅14～30㎝、深さ４～17㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ477

ＭＥ43・44グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、長さ2.29ｍ、幅７～20㎝、深さ６～11㎝である。断面形は鍋底形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ478

ＭＤ47、ＭＥ47グリッドで確認した。北東－南西に延びる溝で、後世の攪乱を受けて部分的に欠如しているが、その全長は7.89ｍ、幅７～20㎝、深さ５～18㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ479

ＭＣ42、ＭＤ42グリッドで確認した。東－西に延びる溝で、後世の攪乱を受けて部分的に欠如しているが、その全長は6.92ｍ、幅10～16㎝、深さ２～15㎝である。断面形はＵ字形を呈する。遺物は出土しなかった。

②空堀

空堀と判断される遺構は８条確認している。遺跡北端部には舌状部(大半は調査区外)が位置するが、この基部に４条の空堀が隣接して開削されている。北側からＳＤ01、ＳＤ15、ＳＤ03、ＳＤ02の順となる。各堀は概ね東－西方向に延びるが、北端点に向かい求心するように緩い弧を描く。４条の新旧関係については、直接的な切り合いを持たず、判然としない点もあるが、(旧)ＳＤ03・15→ＳＤ０２→ＳＤ01(新)と考えている。さらに南東端部にも２条の空堀(ＳＤ341・342)が認められるが、地滑り等の自然崩落による地形改変により、詳細は不明確である。また上記２箇所の空堀に囲まれた内側にも２条の堀(ＳＤ04・343)が見られる。２条とも堀の(北)東側に土塁(ＳＦ05・344)を伴う。各堀のうちＳＤ02・03・15は完全に埋没しており、ＳＤ01・342は明らかに空堀と判るように凹状を示し、他はいくらか凹状を呈する形で確認したものである。

ＳＤ01(第48・51図、図版29・30)

調査区北端部に位置する堀のうち最も北に位置し、かつ規模の大きいものである。確認調査した長さは、約33.8ｍ、幅約8.0～8.9ｍ、深さ2.1～4.4ｍである。断面形はＶ字状を呈する。遺物は、陶磁器２点(２点とも第76図掲載)出土した。

ＳＤ02(第48・49・51図、図版29・31)

調査区北端部に位置する堀のうち最も南に位置し、ＳＤ15に並行する。埋没後の空堀上面には近代の炭窯(ＳＷ13)が構築される。また北西側斜面に開口する部分は一部亜炭の採掘により破壊されている。調査した長さは、約56.6ｍ、幅約1.6～6.2ｍ、深さ約0.8～3.6ｍである。断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ03(第48・49図、図版29・30)

調査区北端部、ＳＤ15とＳＤ02の間に位置する。北西部ではＳＤ02同様、亜炭の採掘により破壊されている。調査した長さは、約18.1ｍ、幅約1.4～2.8ｍ、深さ約1.8～2.9ｍで、断面形はＶ字状を呈する。遺物は

出土しなかった。

ＳＤ04(第48・50図、図版32)

調査区両端部の空堀を結ぶかのように存在するＬ字形の堀である。北端部はＳＤ02の西側を並行するように南東方向に延び、ＭＣ54グリッド付近で向きを南に変える。さらにＭＢ42グリッド付近で今度は東に折れ、南端部のＳＤ341に並行するように走る。北部で空堀が途切れる部分については、近年の削平によるものである。確認した総長は約116ｍに及ぶ。幅は約0.5～2.7ｍ、深さはＭＣ54グリッドの屈折している付近で約0.3ｍ、ＭＣ43グリッドの曲がる付近で約0.8ｍ、ＬＫ44グリッドの東端斜面付近で0.9ｍである。断面形は逆台形を呈する。遺物は、縄文土器胴部２点、土師器胴部・把手付土器１点(第66図に掲載)・胴部５点、須恵器１点(第73図に掲載)、陶磁器２点(２点とも第77図に掲載)出土した。

ＳＤ15(第48・49・51図、図版29・30)

調査区北端部、ＳＤ01とＳＤ02の間に位置する。調査した長さは約50.4ｍ、幅約1.6～4.0ｍ、深さ約0.9～1.25ｍである。断面形は逆台形を呈する。遺物は、縄文土器胴部２点、土師器胴部２点出土した。

ＳＤ341(第48・51図)

調査区南東端部にあり、北側にＳＤ04、南東側にＳＤ342が位置する。堀の西端はＳＤ343と接続するが、両者の新旧関係は不明である。長さは約48.1ｍ、幅約2.9～14.0ｍ、深さ約0.4～3.1ｍである。断面形はＶ字形～逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ342(第48・51図)

調査区南東先端部に位置し、北側にＳＤ341と並行するように見られるが地形改変に伴い詳細は不明である。長さ約3.8ｍ、幅約0.9～1.0ｍ、深さ約1.1ｍで、断面形はＶ字状を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＤ343(第48・50図)

調査区南部にあり、北西－南東方向に延びる堀である。北西端ではＳＤ04と接続し、途中でＳＤ341と分離するように配されるが、三者の新旧・同時存在の関係は不明である。調査した長さは、約28.7ｍ、幅約2.3～5.9ｍ、深さ約0.3～1.2ｍで、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

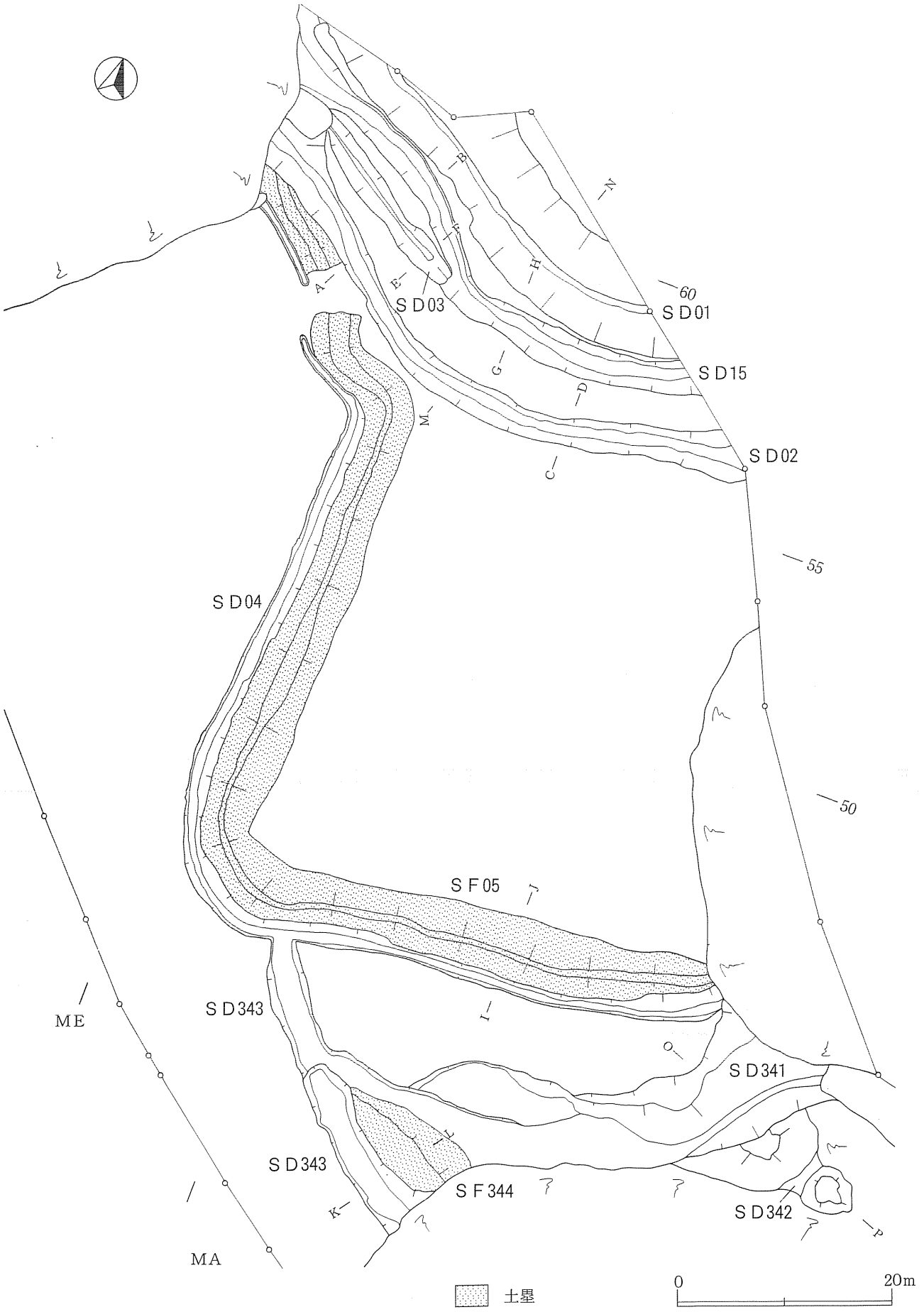
９．土塁

ＳＦ05(第48・50図、図版32)

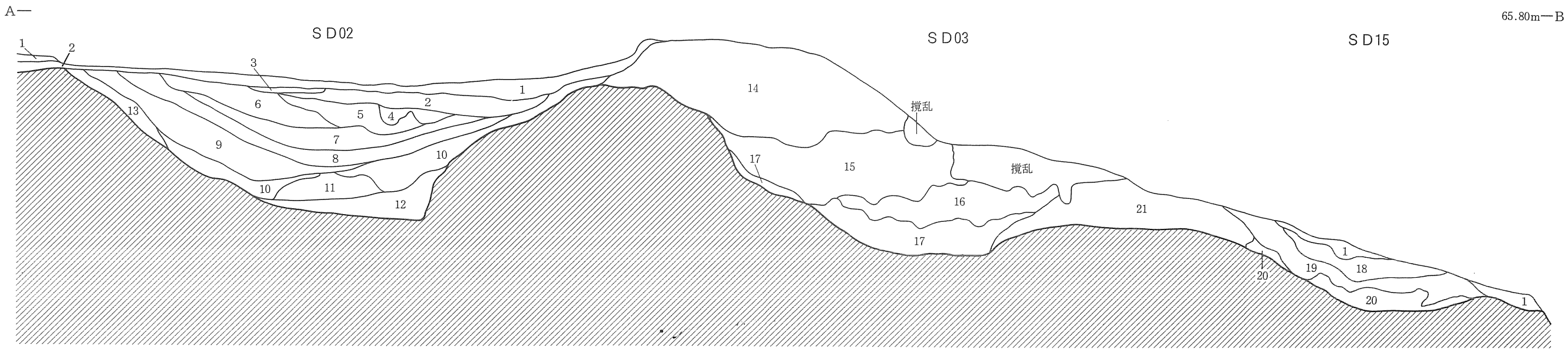
ＳＤ04空堀の(北)東側に沿うように構築された土塁である。北端部ではＳＤ04とＳＤ02の間を埋めるように築かれている。北側で土塁が途切れる部分については、ＳＤ04同様近年の削平によるものである。調査した長さは、約112.5ｍ、基底幅約2.8～6.1ｍ、上幅約0.4～2.0ｍ、高さはＭＢ・ＭＣ55グリッドの屈折している部分で約1.3ｍ、ＭＢ43・44グリッドの曲がる部分で約1.3ｍ、ＬＫ44・45グリッドの東端斜面部分で約0.6ｍである。断面形は蒲鉾形を呈する。遺物は、縄文土器口縁部６点(うち３点は第56図に掲載)・胴部12点、土師器口縁部23点(うち２点は第66図に掲載)・胴部231点・底部24点(うち１点は第66図に掲載)、陶磁器１点(第76図に掲載)出土した。

ＳＦ344(第48・50図)

ＳＤ343空堀の東側に沿うように構築された土塁である。南端部は自然崩落により失われている。残存する長さは、約12.1ｍ、基底幅約０～7.4ｍ、上幅約０～3.5ｍ、高さ約0.9～1.0ｍである。断面形は台形を呈する。遺物は出土しなかった。



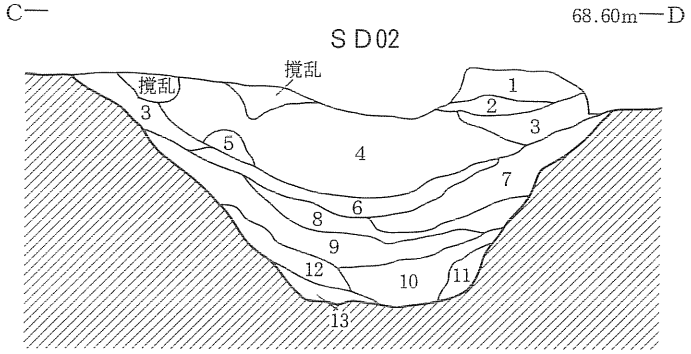
第48図　ＳＤ01・02・03・04・15・341・342・343、ＳＦ05・344



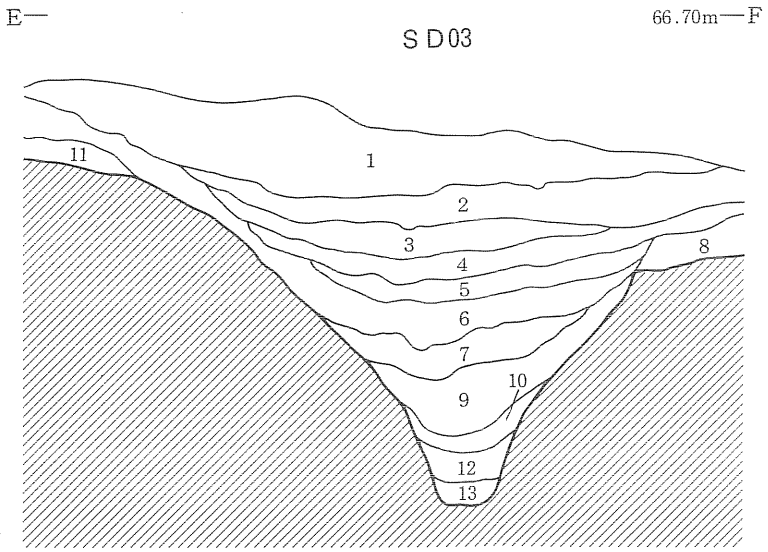
S D02
1．表土
2．黒色土　(10 YR 2/1)
3．褐色土　(10 YR 4/6)
4．黒褐色土　(10 YR 2/3)
5．暗褐色土　(10 YR 3/3)
6．暗褐色土　(10 YR 3/3)
7．褐色土　(10 YR 4/4)
8．黒褐色土　(10 YR 2/2)
9．暗褐色土　(10 YR 3/3)
10．褐色土　(10 YR 4/4)
11．褐色土　(10 YR 4/6)
12．褐色土　(10 YR 4/4)
13．褐色土　(10 YR 4/4)

S D03
14．明黄褐色土　(10 YR 6/6)
15．褐色土　(10 YR 4/4)
16．褐色土　(10 YR 4/4)
17．黄褐色土　(10 YR 5/6)

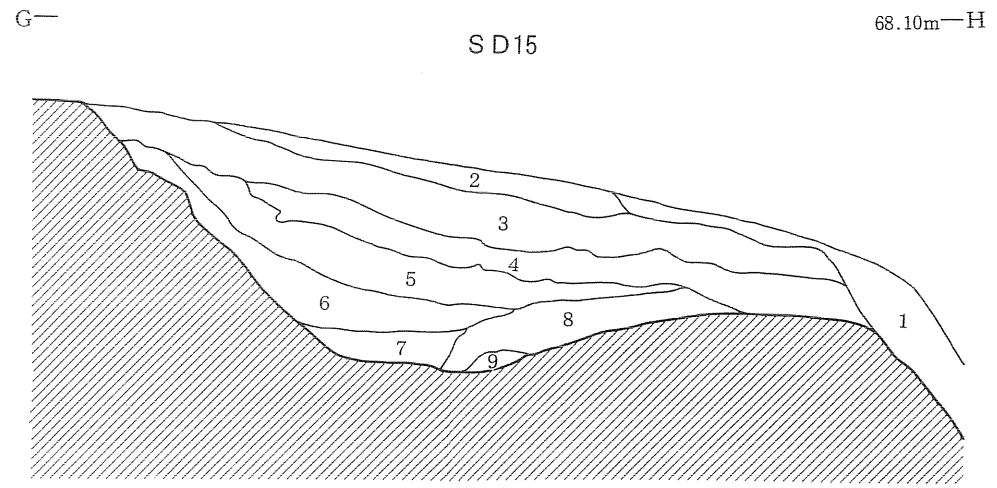
S D15
18．黒褐色土　(10 YR 2/2)
19．黒褐色土　(10 YR 2/2)
20．暗褐色土　(10 YR 3/3)
21．明黄褐色土　(10 YR 6/6)



S D02
1．褐色土　(10 YR 4/4)
2．褐色土　(10 YR 4/6)
3．褐色土　(10 YR 4/4)
4．褐色土　(10 YR 4/4)
5．黄褐色土　(10 YR 5/6)
6．暗褐色土　(10 YR 3/4)
7．褐色土　(10 YR 4/6)
8．黄褐色土　(10 YR 5/6)
9．褐色土　(10 YR 4/6)
10．褐色土　(10 YR 4/6)
11．黄褐色土　(10 YR 5/6)
12．黄褐色土　(10 YR 5/8)
13．褐色土　(10 YR 4/4)



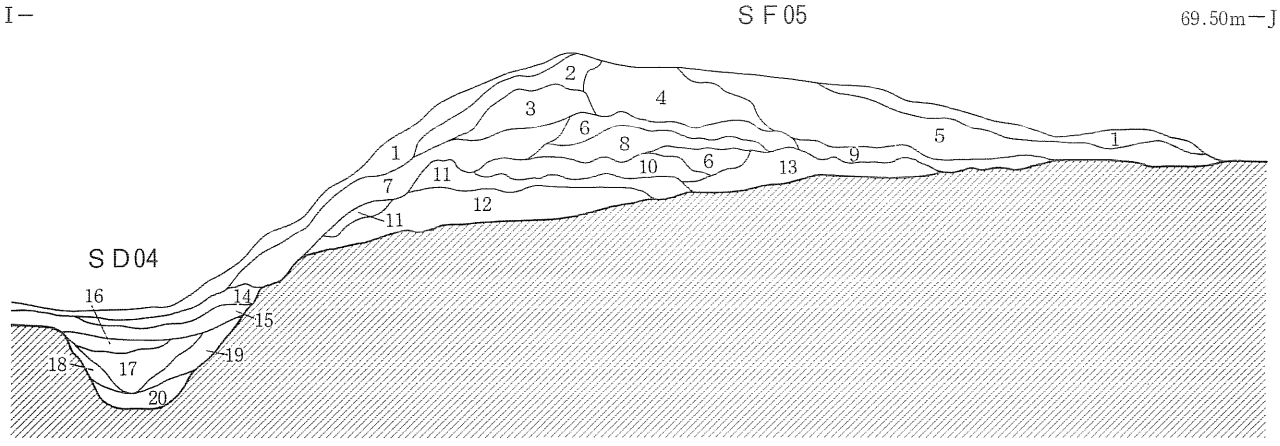
S D03
1．黄褐色土　(10 YR 5/6)
2．褐色土　(10 YR 4/6)
3．褐色土　(10 YR 4/6)
4．浅黄色土　(2.5 Y 7/4)
5．褐色土　(10 YR 4/6)
6．黄褐色土　(10 YR 5/6)
7．褐色土　(10 YR 4/6)
8．黄褐色土　(10 YR 5/6)
9．褐色土　(10 YR 4/6)
10．黄褐色土　(10 YR 5/6)
11．明黄褐色土　(2.5 Y 7/6)
12．黄褐色土　(10 YR 5/6)
13．にぶい黄色土　(2.5 Y 6/4)



S D15
1．褐色土　(10 YR 4/4)
2．褐色土　(10 YR 4/6)
3．褐色土　(10 YR 4/6)
4．褐色土　(10 YR 4/4)
5．黒褐色土　(10 YR 2/2)
6．暗褐色土　(10 YR 3/3)
7．褐色土　(10 YR 4/4)
8．黒褐色土　(10 YR 3/2)
9．褐色土　(10 YR 4/6)

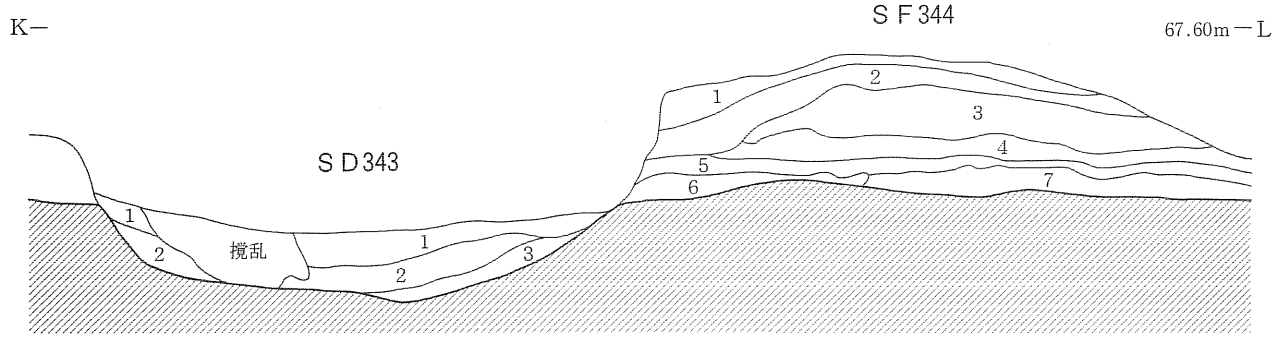
0　2 m

第49図　S D02・03・15土層図



ＳＤ04　16．暗褐色土　(10 YR 3/3)
17．黒褐色土　(10 YR 2/3)
18．暗褐色土　(10 YR 3/3)
19．暗褐色土　(10 YR 3/3)
20．明黄褐色土 (10 YR 6/6)

ＳＦ05　1．表土
2．褐色土　(10 YR 4/4)
3．褐色土　(10 YR 4/4)
4．暗褐色土 (10 YR 3/4)
5．黒褐色土 (10 YR 3/2)
6．褐色土　(10 YR 4/6)
7．暗褐色土 (10 YR 3/4)
8．黒褐色土 (10 YR 2/3)
9．暗褐色土 (10 YR 3/4)
10．暗褐色土 (10 YR 3/3)
11．黒褐色土　(10 YR 2/2)
12．黒褐色土　(10 YR 2/3)
13．黒褐色土　(10 YR 3/2)
14．にぶい黄褐色土 (10 YR 4/3)
15．黒褐色土　(10 YR 3/2)

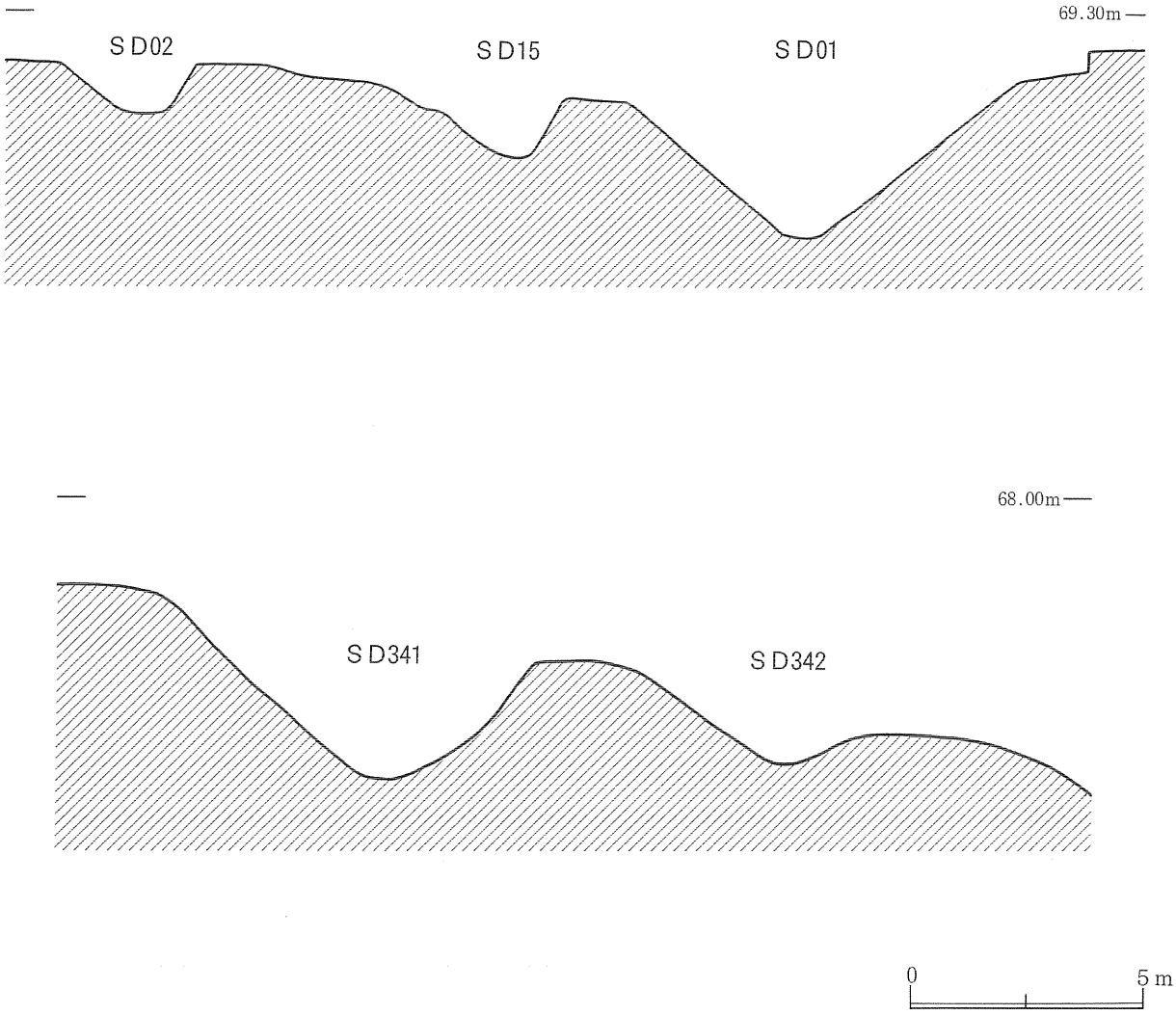


ＳＤ343　1．褐色土　(10 YR 4/4)
2．黒褐色土 (10 YR 3/2)
3．黒褐色土 (10 YR 3/2)

ＳＦ344　1．表土
2．黄褐色土 (10 YR 5/6)
3．黒褐色土 (10 YR 2/2)
4．黒色土　(10 YR 2/1)
5．黒褐色土 (10 YR 2/3)
6．褐色土　(10 YR 4/4)
7．暗褐色土 (10 YR 3/4)

0　2 m

第50図　ＳＤ04・343、ＳＦ05・344土層図



第51図　ＳＤ01・02・15・341・342断面図

10. 塚

調査区南部で東西方向に延びるＳＤ04・ＳＦ05の南側に沿うように、３基の塚(ＳＹ170～172)を確認した。塚は、ほぼ一直線上に位置し、ＳＹ170－171間29ｍ、ＳＹ171－172間20ｍの距離をおいていた。各塚を掘り下げたところ、内部施設は検出できず、さらに土層観察では明瞭な版築等も認められず、積み上げた土の表面をタタキ締めて構築していたことが判明した。

ＳＹ170(付図、第52図、図版33)

ＬＬ43グリッドを中心とする地区に位置し、ＳＩ271・ＳＤ04の上部に構築している。平面形は、基底部での長さ約3.9ｍの隅丸方形(略円形)を呈し、構築面(旧表土：７層)から頂部までの高さは0.92ｍである。遺物は表土層より銭貨(寛永通寶：第84図１)が１枚出土したのみである。

ＳＹ171(付図、第52図、図版34)

ＬＳ42グリッドを中心とする地区に位置し、ＳＤ04の上部に構築している。平面形は、基底部での東西長4.8ｍ、南北長4.6ｍの隅丸方形を呈し、構築面(旧表土：13層)から頂部までの高さは1.1ｍである。遺物は塚北西部の盛土内(第６層)より銭貨(寛永通寶：第84図２)が１枚出土したのみである。

ＳＹ172(付図、第52図、図版35)

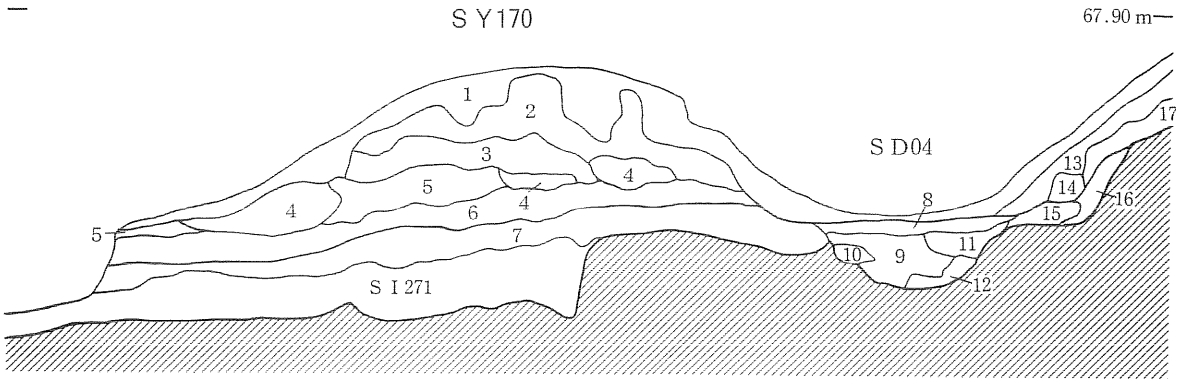
ＭＤ40グリッドを中心とする地区に位置し、西側の裾部は調査区外に及んでいる。平面形は、基底部での東西長5.1ｍ、南北長5.3ｍの隅丸方形を呈し、構築面(旧表土：10・11層)から頂部までの高さは1.1ｍである。同塚の構築にあたっては旧表土を部分的に地山面まで削って、その上に盛土しており、他２基では旧表土にそのまま盛土する相違が見られる。遺物は出土しなかった。

11. 炭窯跡

ＳＷ13(第53図、図版36・37・38)

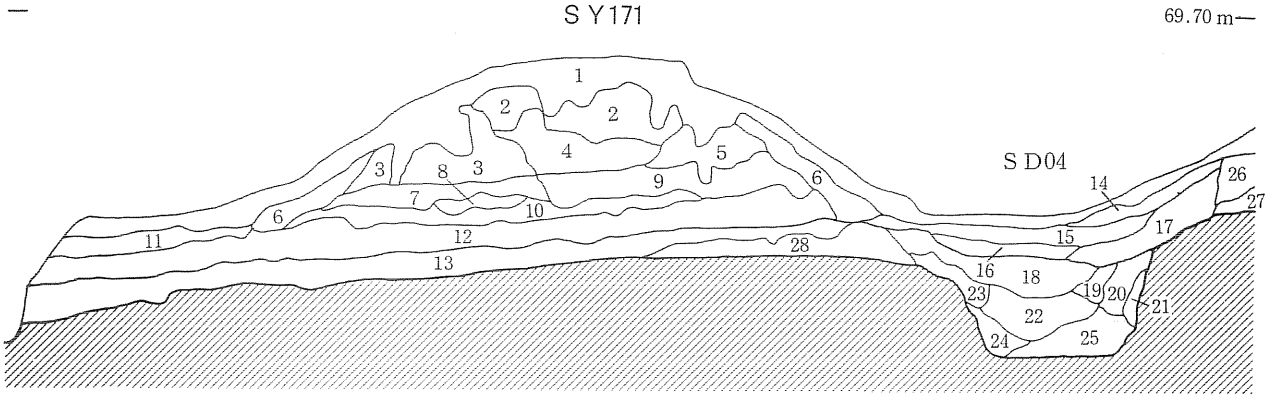
調査区北側にあり、ＭＤ58グリッドにかかるＳＤ02の上部に位置する。本遺構は、埋没してわずかに窪地となったＳＤ02内を効果的に利用して構築したものである。

炭窯跡は表土を除去した段階で径4.2ｍの略円形を呈する炭化物混じりの暗褐色土プランとして確認された。この暗褐色土を排すると径2.2ｍほどの焼土面が現れ(１)、約８㎝掘り下げた内部に灰白色粘土の窯底を確認できた(１層上部)。プラン南東側には長さ25㎝、幅12㎝、厚さ６㎝のレンガが２個置かれていた。これは煙出し(排煙口)と見られ、その内法幅は30㎝となる。排煙口に相対する北西側には焚口(窯口)が位置し、幅50～60㎝の掘り込みが認められる。窯本体(内法)の規模は、長軸(排煙口－窯口)で1.8ｍ、短軸は1.45ｍとなる。粘土貼りの窯底を除去すると人頭大や拳大などの円礫が長さ2.1ｍ、幅1.7ｍの楕円状に敷き詰められており(２)、その下位には、橙色を示す粘土(２層)が貼られていた。さらに２層土を取り除くと、炭化材が多量に出土した(３層)。形状の明確なものを図示すると(３)のようになり、長軸方向に対し直交させて置いていることがわかる。炭化材を取り除いていくと掘り方底面に達する。ここには幅25㎝前後の溝が十字に掘られていた(４)。この溝は窯口方向からさらに西側に延び、排水の施設と考えられる。窯底から掘り方底面までの深さは25㎝ほどになる。



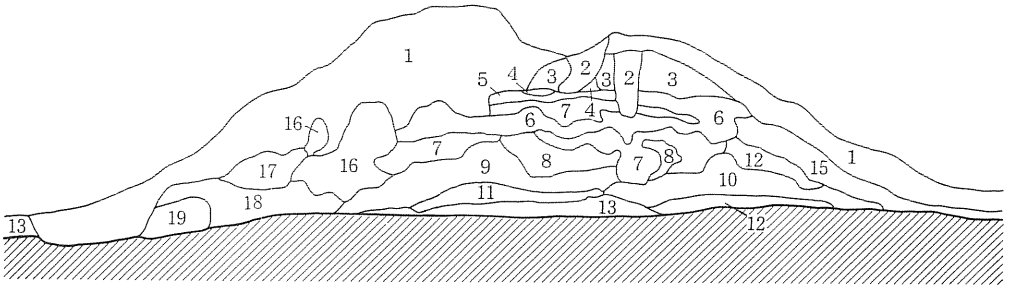
1．暗褐色土（10 YR 3/3）
2．暗褐色土（10 YR 3/3）
3．暗褐色土（10 YR 3/3）
4．褐色土　（10 YR 4/4）
5．暗褐色土（10 YR 3/3）
6．黒褐色土（10 YR 3/2）
7．暗褐色土（10 YR 3/3）
13．褐色土　（10 YR 4/4）
14．褐色土　（10 YR 4/4）
15．黒褐色土（10 YR 3/2）
16．褐色土　（10 YR 4/6）
17．褐色土　（10 YR 4/6~4/4）

S D04
8．褐色土　（10 YR 4/4）
9．黒褐色土（10 YR 3/2）
10．褐色土　（10 YR 4/4）
11．黒褐色土（10 YR 3/2）
12．黄褐色土（10 YR 5/6）



1．暗褐色土（10 YR 3/4）
2．暗褐色土（10 YR 3/4）
3．褐色土　（10 YR 4/4）
4．黒褐色土（10 YR 3/2）
5．暗褐色土（10 YR 3/4）
6．褐色土　（10 YR 4/4）
7．褐色土　（10 YR 4/4）
8．褐色土　（10 YR 4/4）
9．暗褐色土（10 YR 3/4）
10．黒褐色土（10 YR 3/2）
11．黒褐色土（10 YR 2/3）
12．黒褐色土（10 YR 2/2）
13．暗褐色土（10 YR 3/3）
14．褐色土　（10 YR 4/4）
15．暗褐色土（10 YR 3/4）
16．暗褐色土（10 YR 4/4）
17．褐色土　（10 YR 4/4）
26．褐色土　（10 YR 4/4）
27．黒褐色土（10 YR 3/2）
28．褐色土　（10 YR 4/4~4/6）

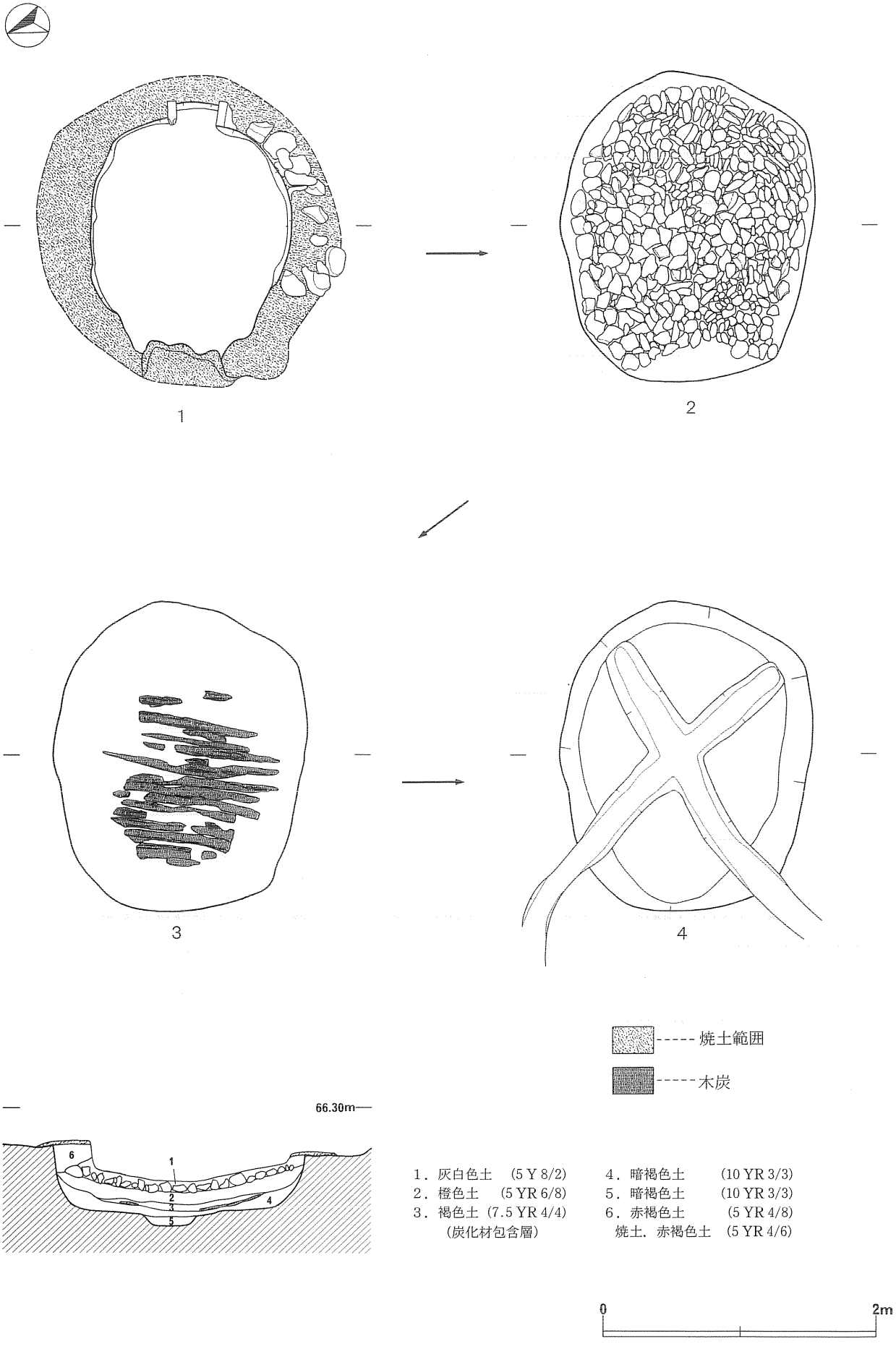
S D04
18．褐色土　（10 YR 4/4）
19．褐色土　（10 YR 4/4）
20．褐色土　（10 YR 4/4）
21．褐色土　（10 YR 4/4）
22．黒褐色土（10 YR 2/2）
23．黒褐色土（10 YR 3/2）
24．暗褐色土（10 YR 3/3）
25．黄褐色土（10 YR 5/6）



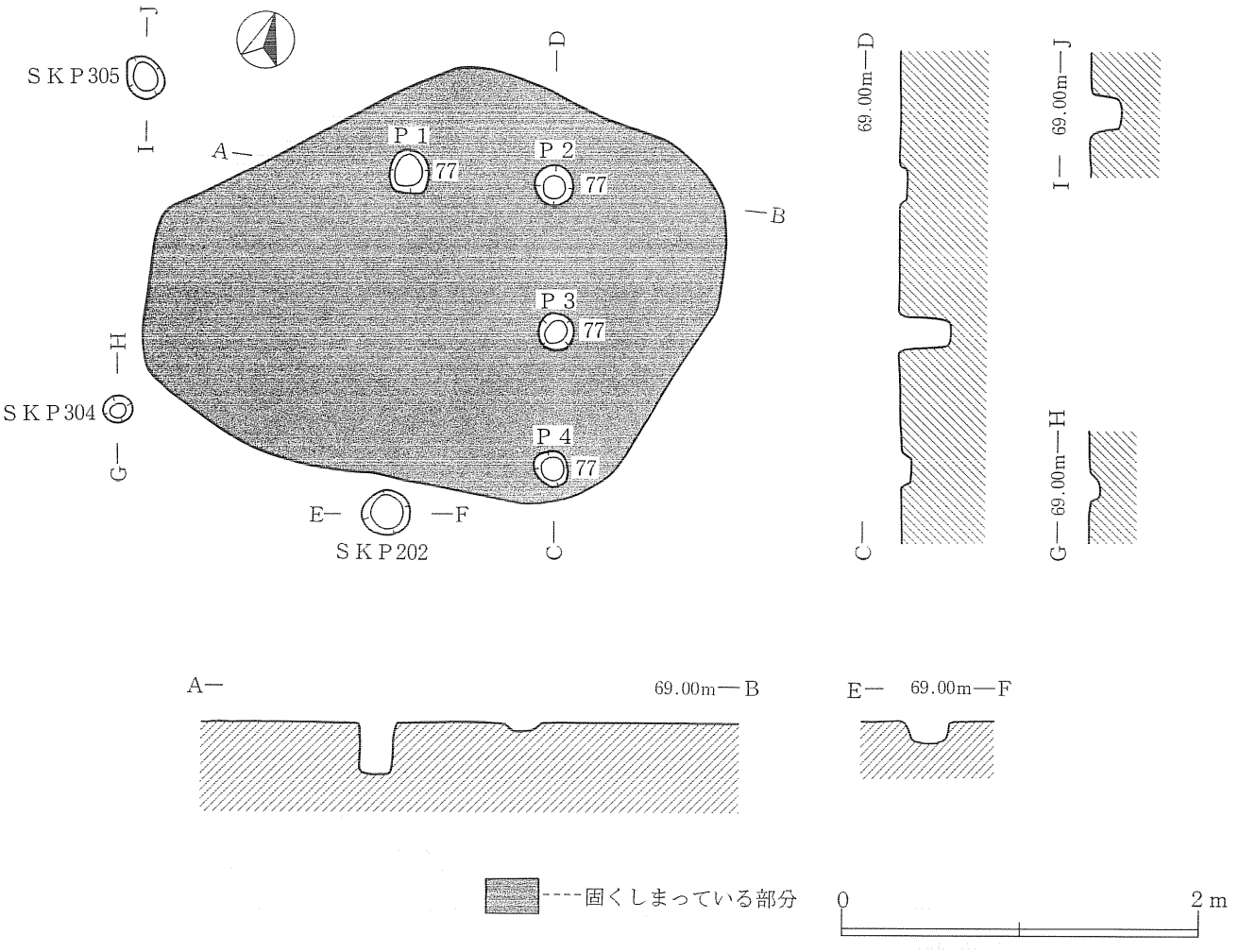
1．暗褐色土（10 YR 3/4、表土・撹乱）
2．黒褐色土（10 YR 2/3、撹乱）
3．黒褐色土（10 YR 2/3）
4．暗褐色土（10 YR 3/4）
5．黒褐色土（10 YR 2/2）
6．暗褐色土（10 YR 3/4）
7．黄褐色土（10 YR 5/6）
8．暗褐色土（10 YR 3/4）
9．暗褐色土（10 YR 3/4）
10．暗褐色土（10 YR 3/3）
11．黒褐色土（10 YR 2/2）
12．黒褐色土（10 YR 3/2）
13．褐色土　（10 YR 4/4）
14．黒褐色土（10 YR 3/2）
15．黒褐色土（10 YR 3/2）
16．黒褐色土（10 YR 3/2）
17．黒褐色土（10 YR 3/2）
18．暗褐色土（10 YR 3/3）
19．暗褐色土（10 YR 3/3）

0　2 m

第52図　S Y 170・171・172


1
2
3
4
焼土範囲
木炭
66.30m
6
1
2
3
4
5
1．灰白色土　(5 Y 8/2)
2．橙色土　(5 YR 6/8)
3．褐色土（7.5 YR 4/4）
（炭化材包含層）
4．暗褐色土　(10 YR 3/3)
5．暗褐色土　(10 YR 3/3)
6．赤褐色土　(5 YR 4/8)
焼土．赤褐色土　(5 YR 4/6)
0
2m

第53図　ＳＷ13



第54図　ＳＸ200

12. その他の遺構

ＳＸ200（第54図）

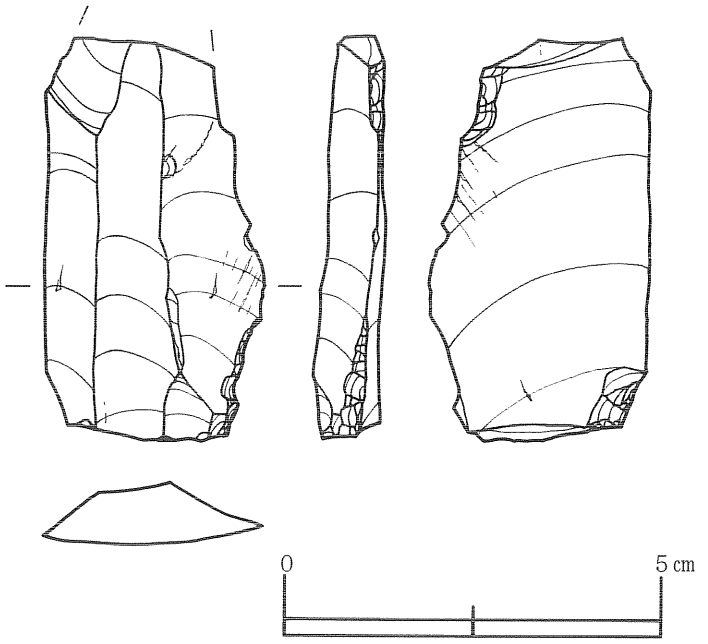
ＬＰ47・48、ＬＱ47・48グリッド地山面で、土間のように非常に硬くしまったプランを確認した。平面形は長軸(北東－南西)3.36ｍ、短軸(北西－南東)2.48ｍであり、ほぼ楕円形を呈している。この範囲内では火熱を受けた痕跡は認められなかった。また、本遺構の周辺には計７個のピットが検出されているが、うち４個(Ｐ１～４)は、硬化面を切り込む形で存在する。この４個は径20～24㎝の円形となり、深さは３～30㎝とばらつきがあるが、柱間距離(Ｐ１－２、Ｐ２－３、Ｐ３－４)はいずれも80㎝の等間となる。さらにＰ２－４は直線的に並ぶ。しかし、これらが建物等を構成するピットとなるのか、さらには硬化面との関係も不明である。遺物はＰ１内より炭化米・雑穀(ヒエ・豆類)が出土した。

第２節　出土遺物

旧石器時代、縄文時代、平安時代、中世、近世などの遺物が出土した。

１．旧石器時代の遺物（第55図）

調査区南部、ＬＱ44グリッドの地山漸移層より旧石器が１点出土した。出土地点を中心とする区域の地山面を精査したが、他に旧石器時代の遺物は確認できなかった。



第55図　旧石器

第55図は石刃を素材とするナイフ形石器である。背面に残る先行剥離痕から両設打面の石核から剥離された石刃の可能性がある。両基部には急角度の調整が加わるが、右側基部が腹面側から、左側基部では背面側からそれぞれ調整されており、錯向剥離であることが判る。基端部はこの調整の後に腹面側からの加撃により折断される。なお先端部も折れているが、折断面の風化度合いから後世の行為と思われる。現存する長さ5.4㎝、最大幅2.9㎝、厚さ９㎝であり、灰～灰白色を呈する珪質泥岩を石材としている。

２．縄文時代の遺物

（１）土器（第56図１～16）

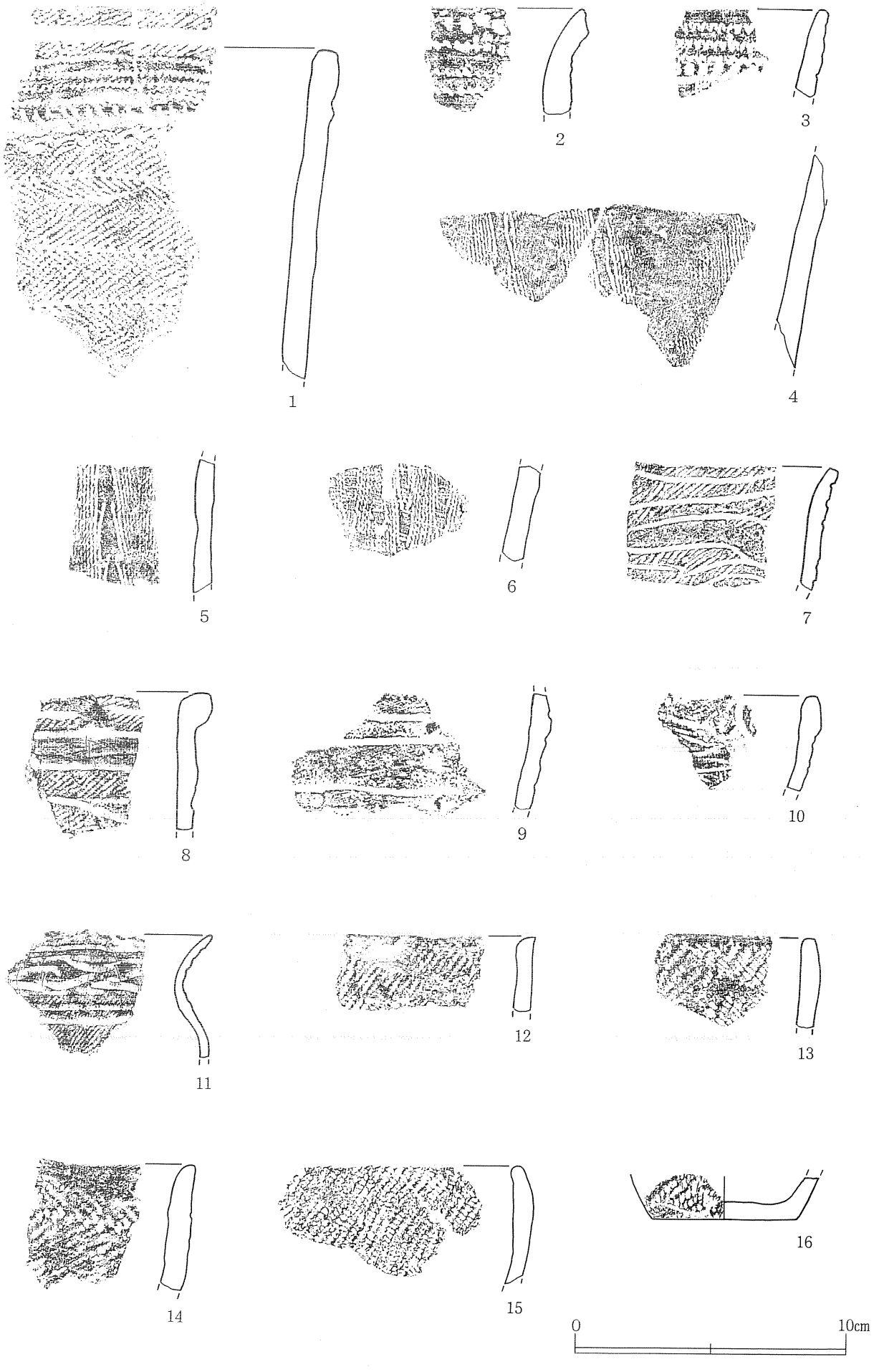
出土した土器はすべて破片で、その数量は遺構内外を合わせて42片（うち遺構内出土は15片）である。また、全体の形状を把握できる接合資料はなかった。なお、土器は前期・後期・晩期のものが出土した。

縄文時代前期の土器（１～６）

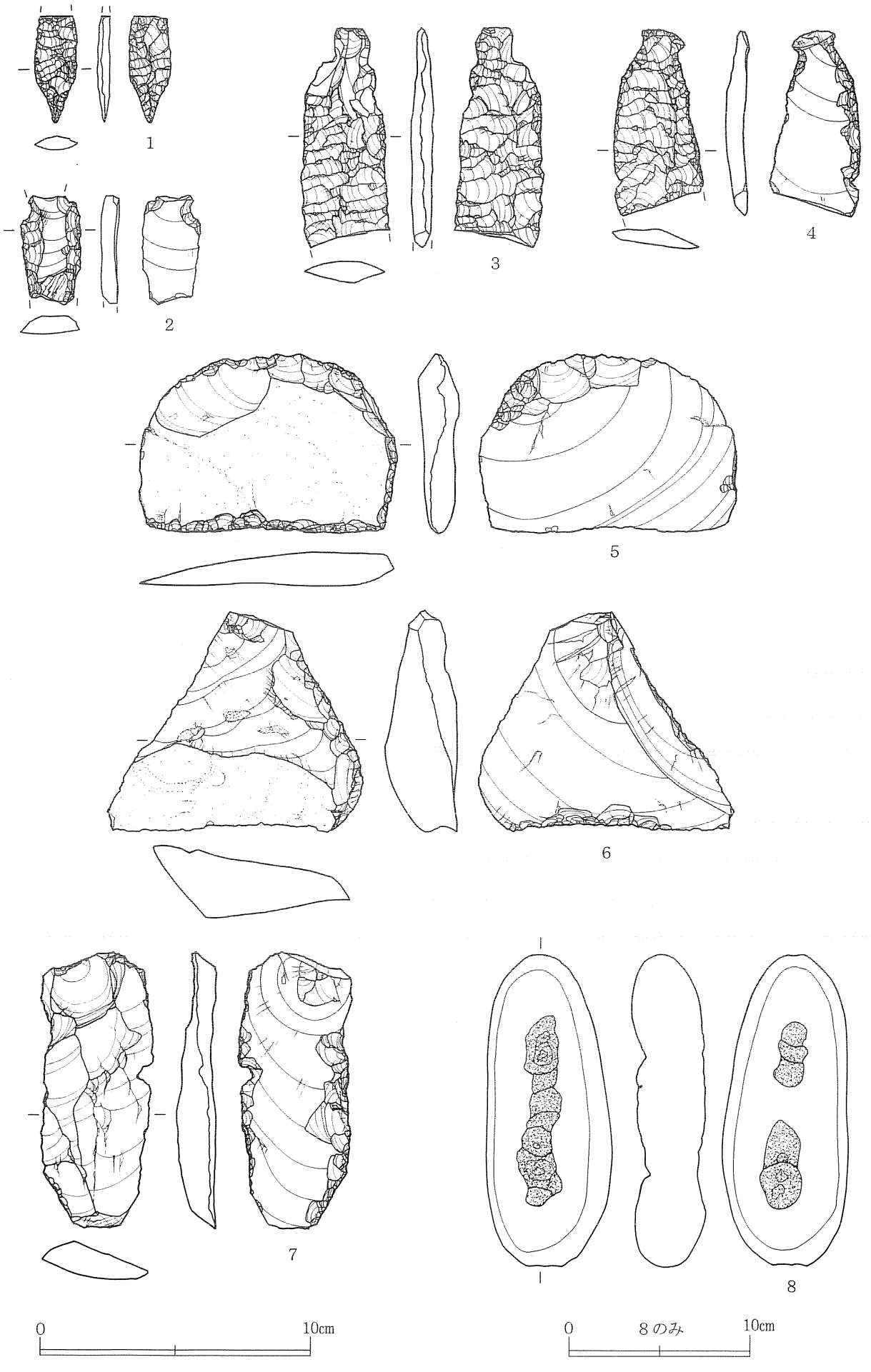
深鉢形土器の口縁部から胴部（１）、口縁部（２）、口縁部から胴部上端（３）、胴部（４～６）の破片である。１は口唇に縄文が回転施文され、口縁部には絡条体の側面圧痕が口縁と平行に５条施されている。頸部には連続刺突列のある細く低い隆帯が施されており、その下部には綾絡文が施されている。胴部にはＬＲとＲＬ原体の結束による羽状縄文が施文されている。２は口唇に口唇に縄文が回転施文され、口縁部には口縁と平行に連続刺突列とその下に絡条体の側面圧痕が数条施されている。３は口縁部に口縁と平行に絡条体の側面圧痕が３条、頸部には縄環の連続刺突列のある細くて低い隆帯が横位に施されている。胴部には原体は判然としないが、撚糸文が認められる。４は縦位にＲ原体の撚糸文、５は縦位にＬ原体の木目状撚糸文、６は縦位にＲ原体の木目状撚糸文が施されている。

縄文時代後期の土器（７～10）

７～10は鉢形土器の口縁部の破片である。いずれも磨消縄文手法による文様が施されるもので、７は地文としＬＲ縄文が、８はＬ撚糸が、９・10には原体は判然としないが、縄文が施されている。また、８の口縁端には瘤状小突起が貼付されおり、９には瘤状小突起が数箇所に付されている。10の口唇には二股に分かれる突起が付されている。



第56図　縄文時代の土器



第57図　縄文時代の石器

第６表　石器計測一覧（縄文時代）

挿図番号	出土地点	器種	大きさ				石質
			最大長	最大幅	最大厚	重量	
57－１	ＭＦ44	石鏃	(40.0mm)	15.5mm	5.0mm	(2.6ｇ)	頁岩
2	ＭＧ53	石匙	(40.5mm)	23.0mm	7.0mm	(8.8ｇ)	頁岩
3	ＬＱ35	石匙	(82.0mm)	33.0mm	8.0mm	(22.0ｇ)	頁岩
4	ＬＴ37	石匙	(69.0mm)	34.0mm	8.5mm	16.0ｇ	頁岩
5	ＭＤ50	スクレイパー	67.0mm	96.0mm	14.5mm	79.4ｇ	頁岩
6	ＬＱ45	スクレイパー	82.0mm	95.0mm	27.0mm	133.6ｇ	頁岩
7	ＬＰ40	スクレイパー	103.0mm	42.0mm	14.0mm	47.1ｇ	頁岩
8	ＭＤ48	凹石	174.0mm	69.5mm	40.5mm	668.6ｇ	安山岩

縄文時代晩期(11)

11は鉢形土器の口縁部から胴部の破片である。口唇に刻み目が施され、口縁部には三叉文、屈曲する部位には２条の沈線が横位に施されている。沈線下の胴部にはＬＲ縄文が施されている。

縄文時代後期から晩期の粗製深鉢形土器(12～16)

縄文時代後期から晩期の範疇におさまると思われる粗製深鉢形土器の口縁部(12～15)、底部下端(16)の破片である。12・13・15の口縁部にはＬＲ縄文、14には原体は判然としないが、羽状縄文が施されている。16はＬＲ縄文が施文されている。

（２）石器(第57図１～８、第６表)

出土した石器は掲載した８点(うち遺構内出土は第57図８の１点)と僅かであった。

１は有茎の石鏃である。先端部を欠損している。両面から丁寧な押圧剥離が施されており、その断面形は凸レンズ状を呈している。

２～４は縦型の石匙である。２はつまみ部とこれに相対する部位を、３・４はつまみ部に相対する部位を欠損している。二次加工は２が背面の周縁と主要剥離面のつまみ部に、３が両面全体に、４が背面全体と主要剥離面のつまみ部と片側縁に施されている。また、２の石匙は３・４の石匙に比して調整が粗雑である。

５～７はスクレイパーである。素材剥片の側縁に二次加工が施されて、刃部が作出されている石器である。５は末端に、６は片側縁と末端、７は両側縁に二次加工を施して、刃部が作出されている。

８はＳＤ04覆土中より出土した凹石である。楕円形を呈する礫で、その両面に凹が作出されている。

３．平安時代の遺物

出土した平安時代の遺物は、土師器・須恵器・羽口・鉄製品・鉄滓などである。ここでは土師器(羽口を含む)と須恵器について述べて、鉄製品等については、第５章第３節を参照いただきたい。なお、土師器と須恵器の出土比率は重量比でみると、土師器50：須恵器１となる。

（１）土師器(第58～72図、第７～９表)

遺構内外より出土した土師器は、甕を主体にごく少量の把手付土器が含まれ、杯類は１点も確認できなかった。また、成・整形に際し、明瞭なロクロを使用した個体はないと観察された。

甕は破片資料が多く、法量・形状について言及できる例は少ないが、高さが30㎝を超すような大型の器はごく僅かにすぎないと思われる。逆に107・108は高さが５㎝未満となり、ミニチュアの類と言えるかもしれない。口縁部の形状は、緩く傾外するものが多いが、ほぼ直線的に立ち上がるもの(21・31など)、内湾するもの(34・44など)も見られる。器面調整は、外面が縦(斜)方向のケズリで口縁部に軽い横ナデを施し、内面は横(斜)方向のナデが一般的である。外面のケズリは、粗い「ナタケズリ」状のものやミガキに近いケズリがある。底部は、砂粒を付着させている「砂底」の個体、ナデ(ケズリ状のナデ、ミガキ状のナデ)を施す個体の両者が混在する。いずれにしろこれらの甕は焼成が良好であるものが多く見受けられる。なお82の外面口縁部には明らかに粘土紐積上げ痕跡と異なる１条の沈線が巡り、内面には籾圧痕が１粒認められる。

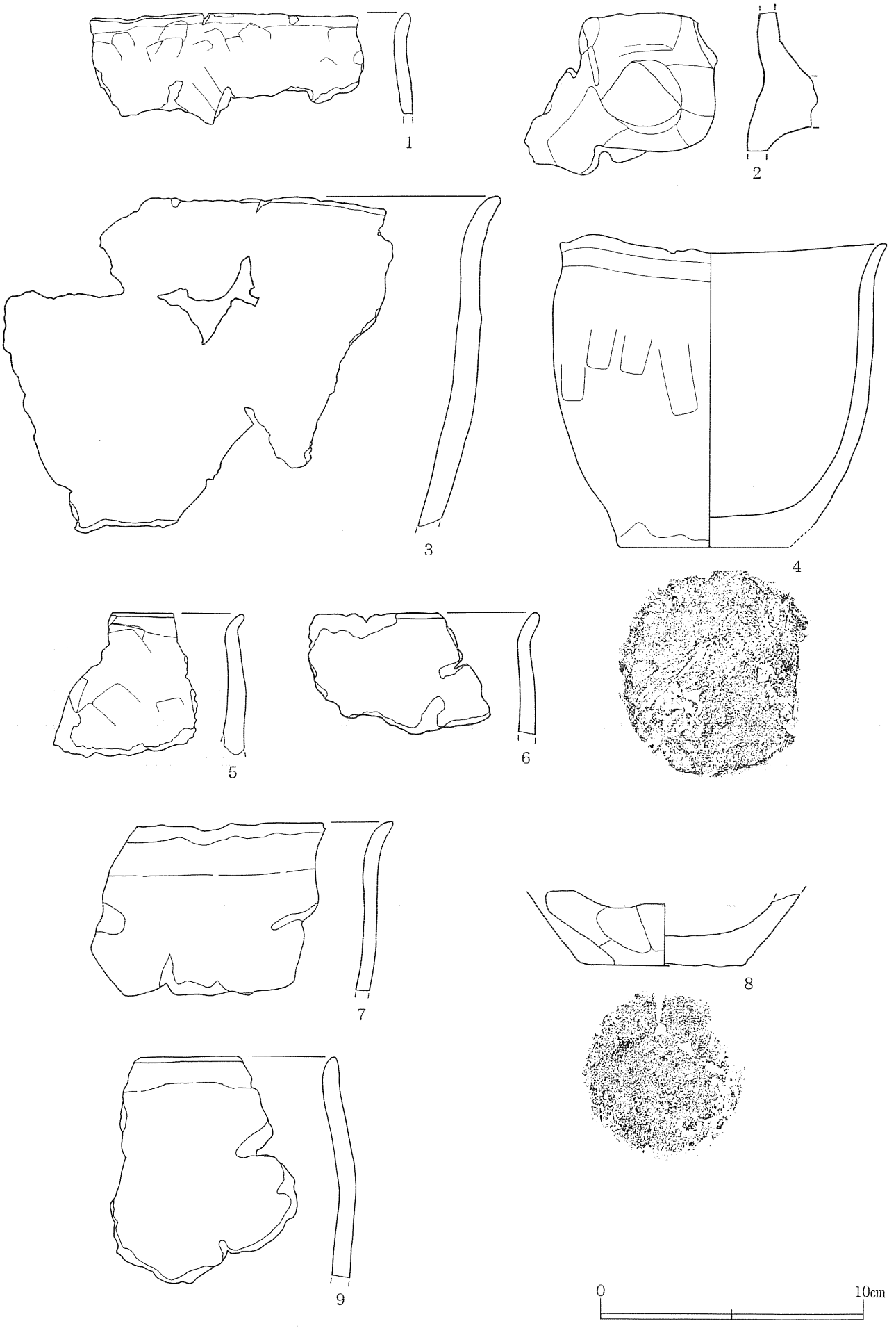
把手付土器は、遺構内４点、遺構外９点の計13点(個体)出土したが、全体の形状の明確なものはない。この他判然としないが、粘土の剥落状態から106も把手付土器であった可能性がある。把手部はいずれも中実で中空のものはない(45は把手部欠落)。把手の付け方は、あらかじめ胴部に孔を穿っておき、棒状の把手を差し込むもの(113・114など)と胴部に直接貼り付けるもの(45・64・110など)の別がある。これらの把手は胴部から横方向あるいはやや上向きに付されるが。64は上向きの度合いが高く、甑の把手状を呈している。器面調整・焼成は小破片が多く不明瞭であるが、基本的に甕と同様と思われる。ただ本種個体は二次的に火熱を受けているものが大部分を占めており、この点でも甕と機能を異にする可能性がある。なお106は、口径8.8㎝、底径6.5㎝、器高6.2㎝の小型の土器であり、形態もさることながら、器面調整の上で他個体とは異質の感がある。厚手で安定性の悪い底部から外面胴部・口縁部にかけては、幅２㎜程のヘラ状工具による粗いミガキが施されており、内面は指頭による横方向の粗いナデとなっている。

一方、羽口は遺構内出土の２個体を掲載している。59は端部が外方にやや広がる形状を示しており、外形は円形ではなく方形に近く、一辺は明らかに平坦となるように整形されている。

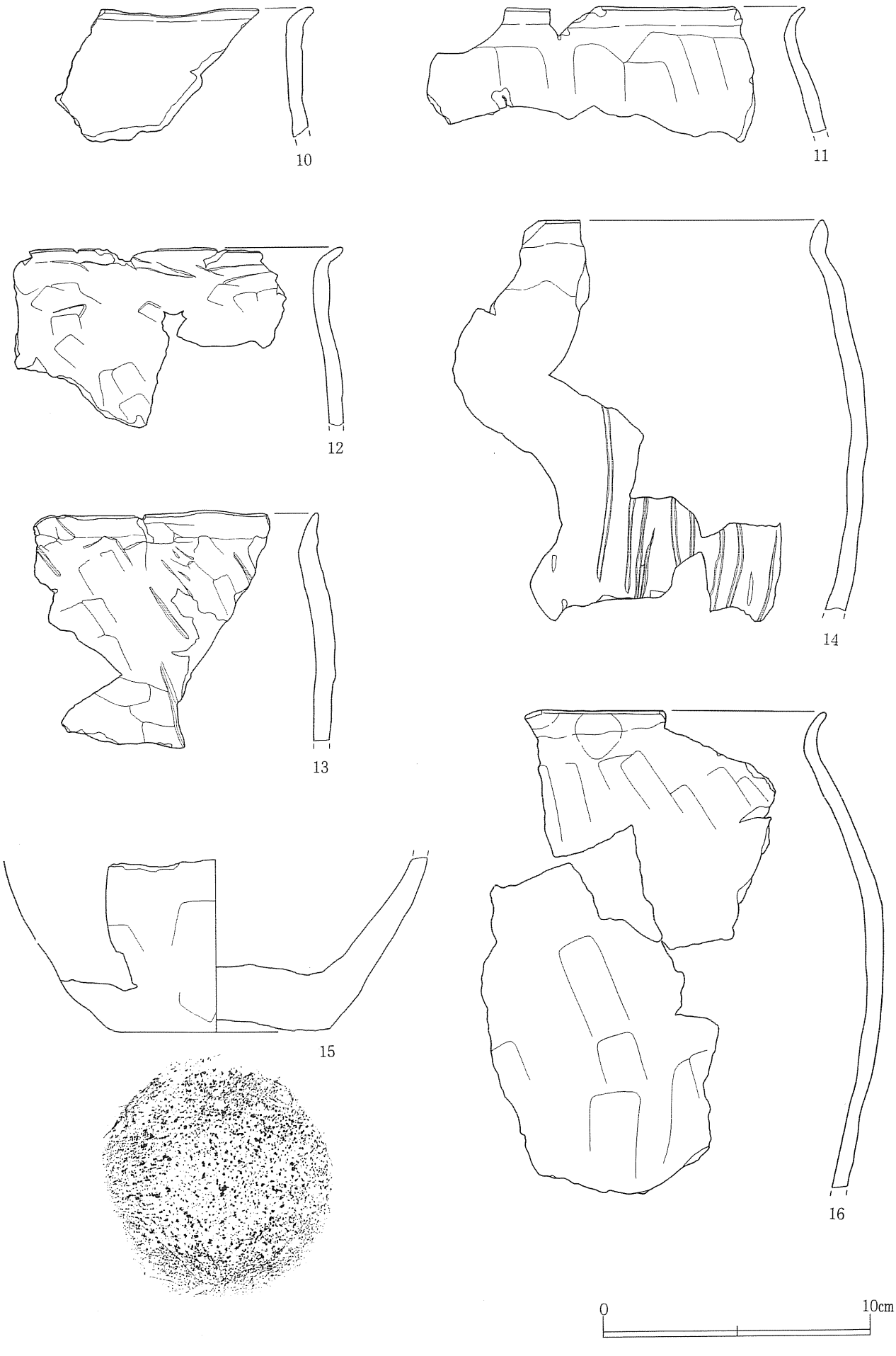
（２）須恵器(第73～75図、第10表)

出土した須恵器は、遺構内５点、遺構外17点の計22点であり、全点図示している。いずれも小破片であり、全体の形状の明らかなものはないが、甕あるいは壺となるものであろう。

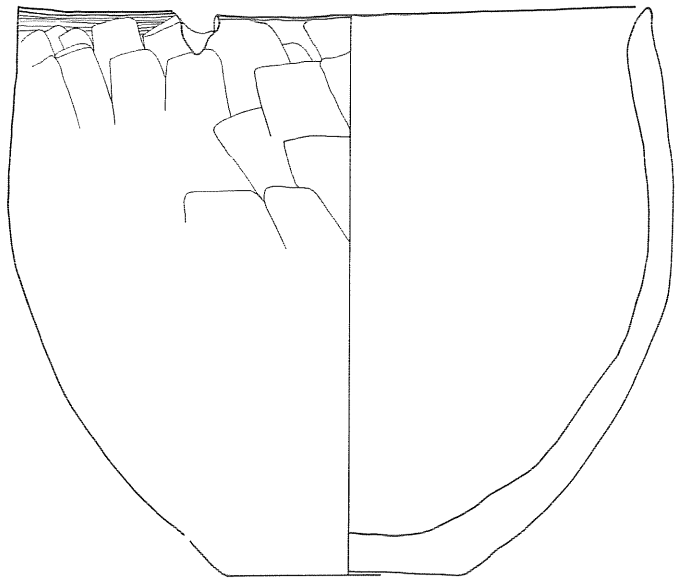
ＳＩ406出土の２は、甕の破片であるが、意図的に円形(径約９㎝)に加工している製品である。半分欠落しているが、内面には顕著な磨面が観察でき、墨の付着は見られないものの、硯を意識したものと思われる。同甕の破片は他にはなく、円形に整形・加工した製品として本遺跡に持ち込まれた可能性がある。



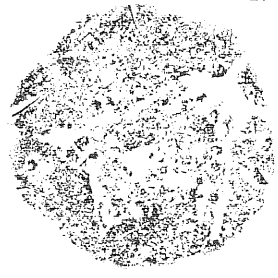
第58図　土師器（１）遺構内出土

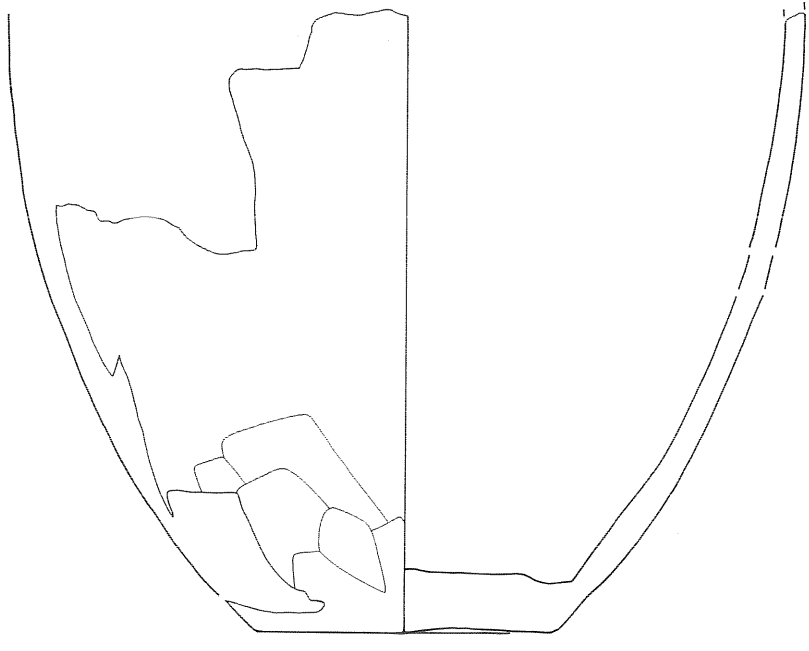


第59図　土師器（２）遺構内出土

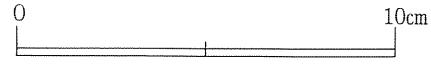


17

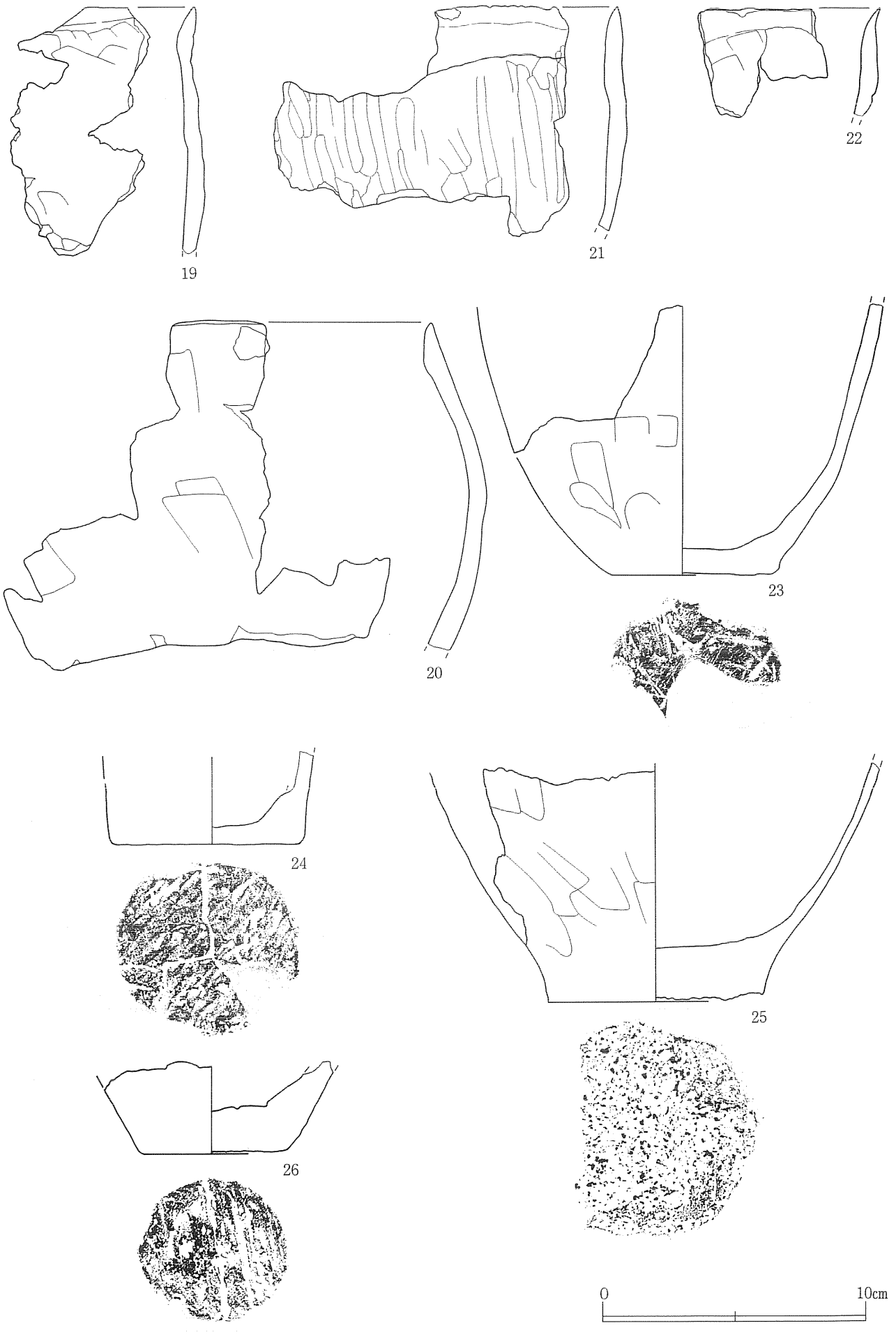




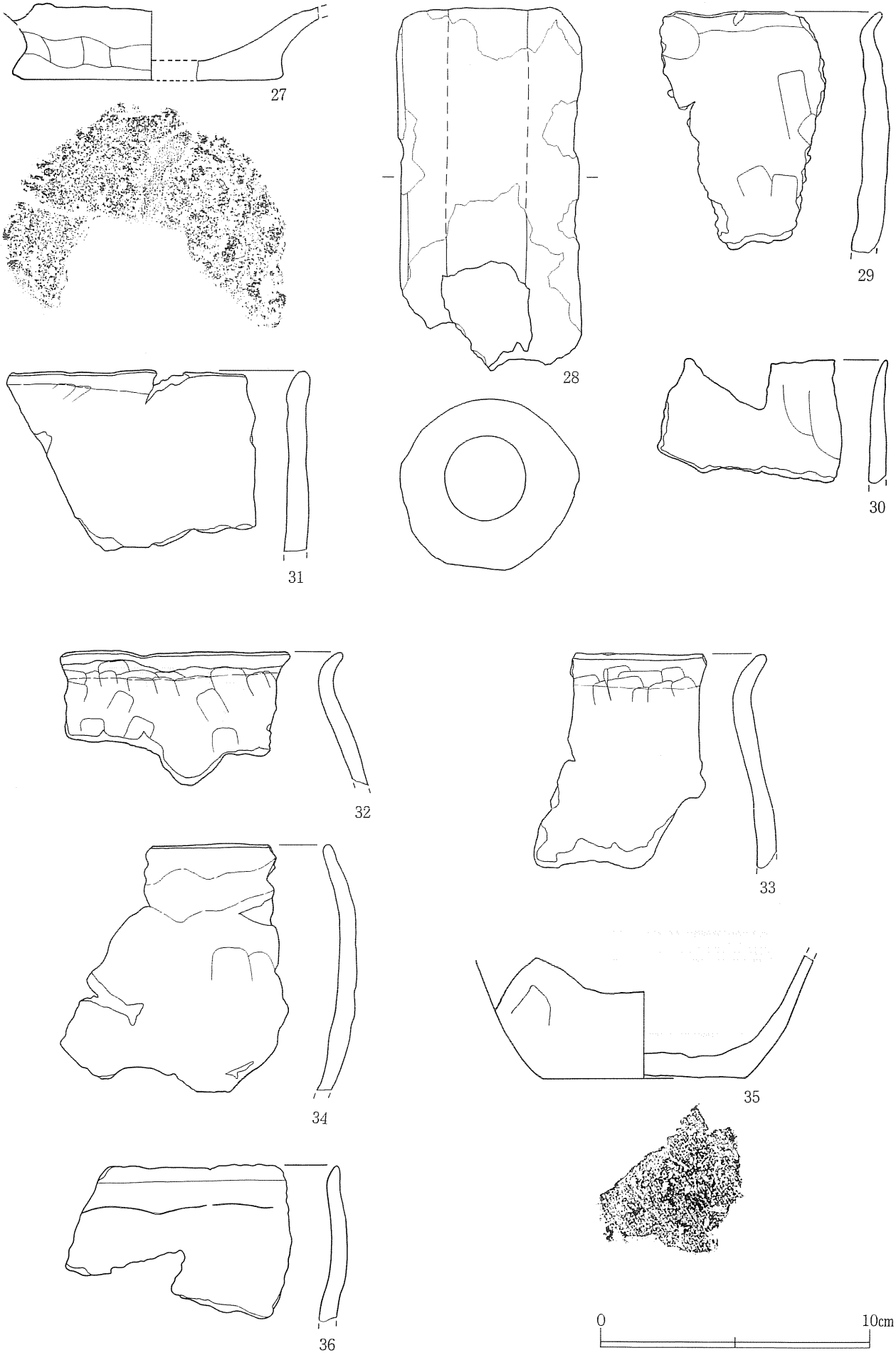
18



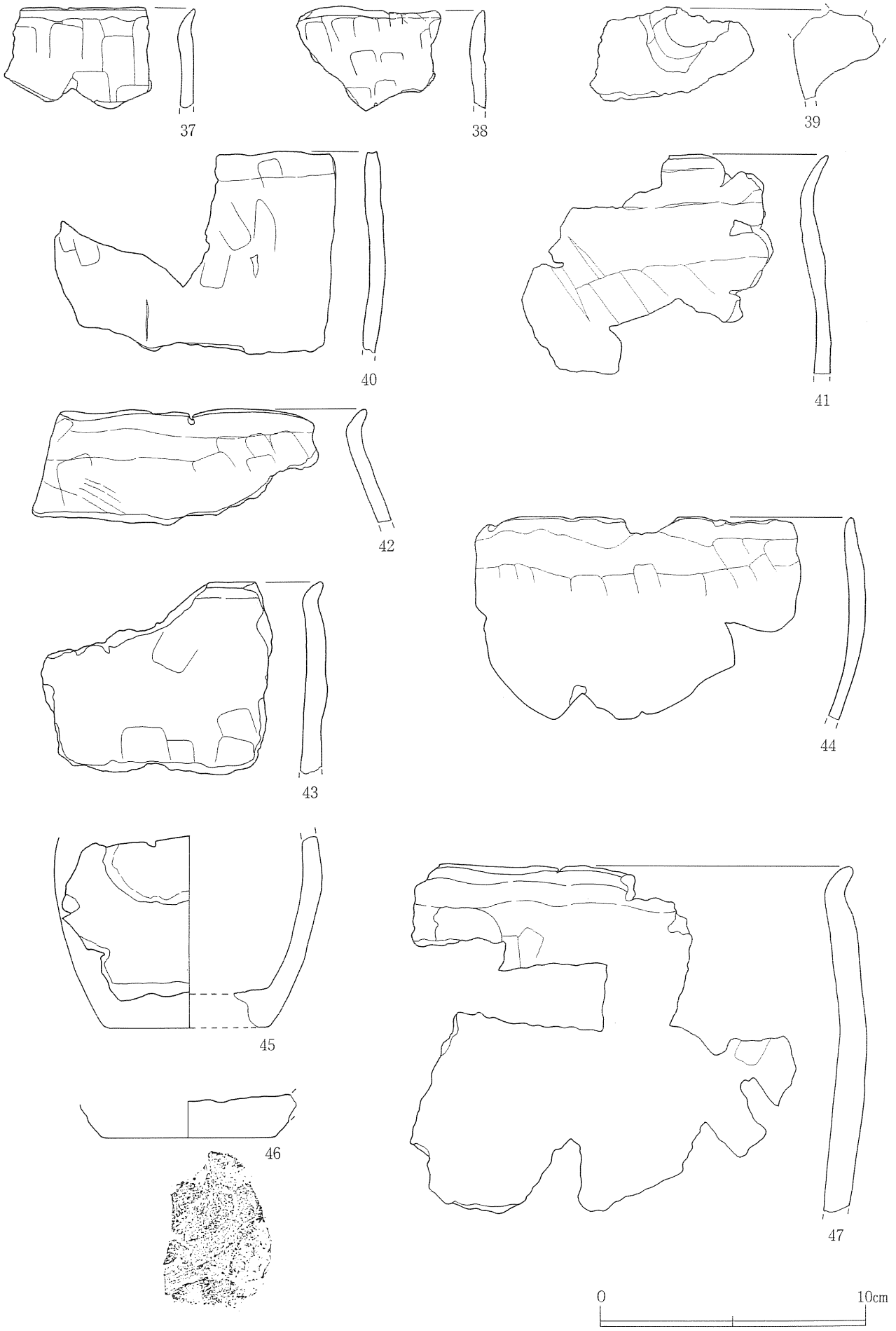
第60図　土師器（３）遺構内出土



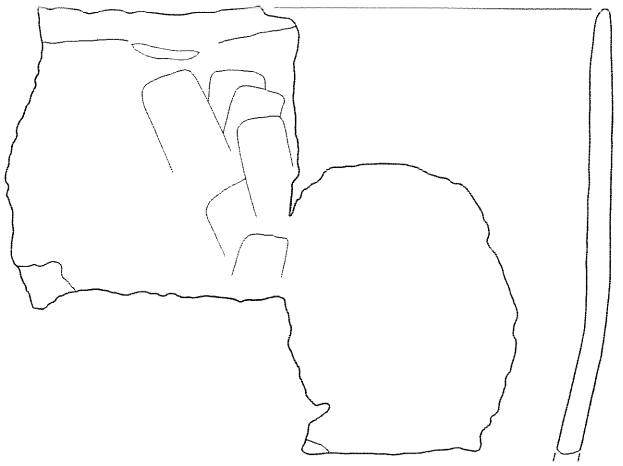
第61図　土師器（４）遺構内出土



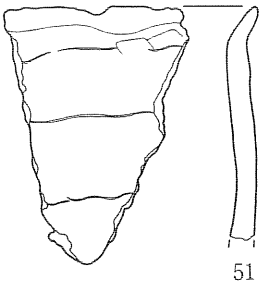
第62図　土師器（５）遺構内出土



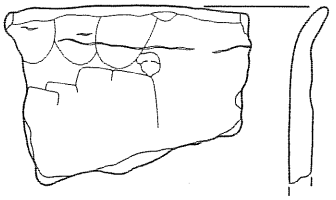
第63図　土師器（６）遺構内出土



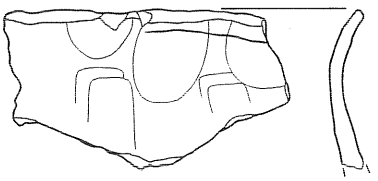
48



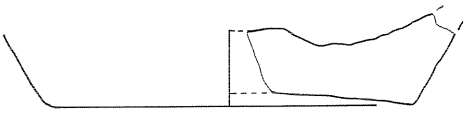
51



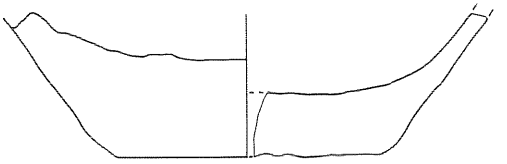
52



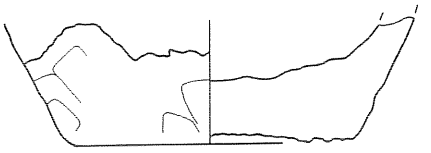
53



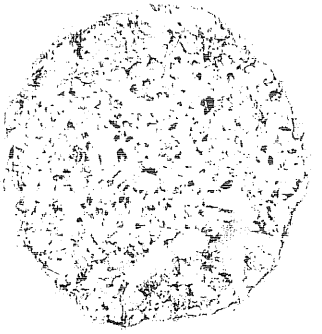
54

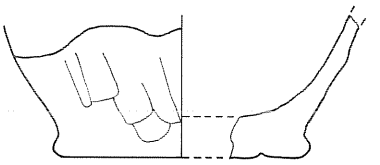


49

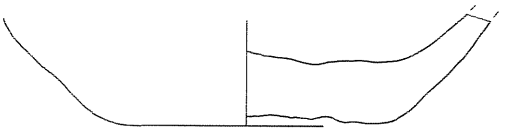


50

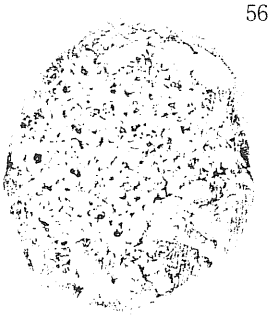




55

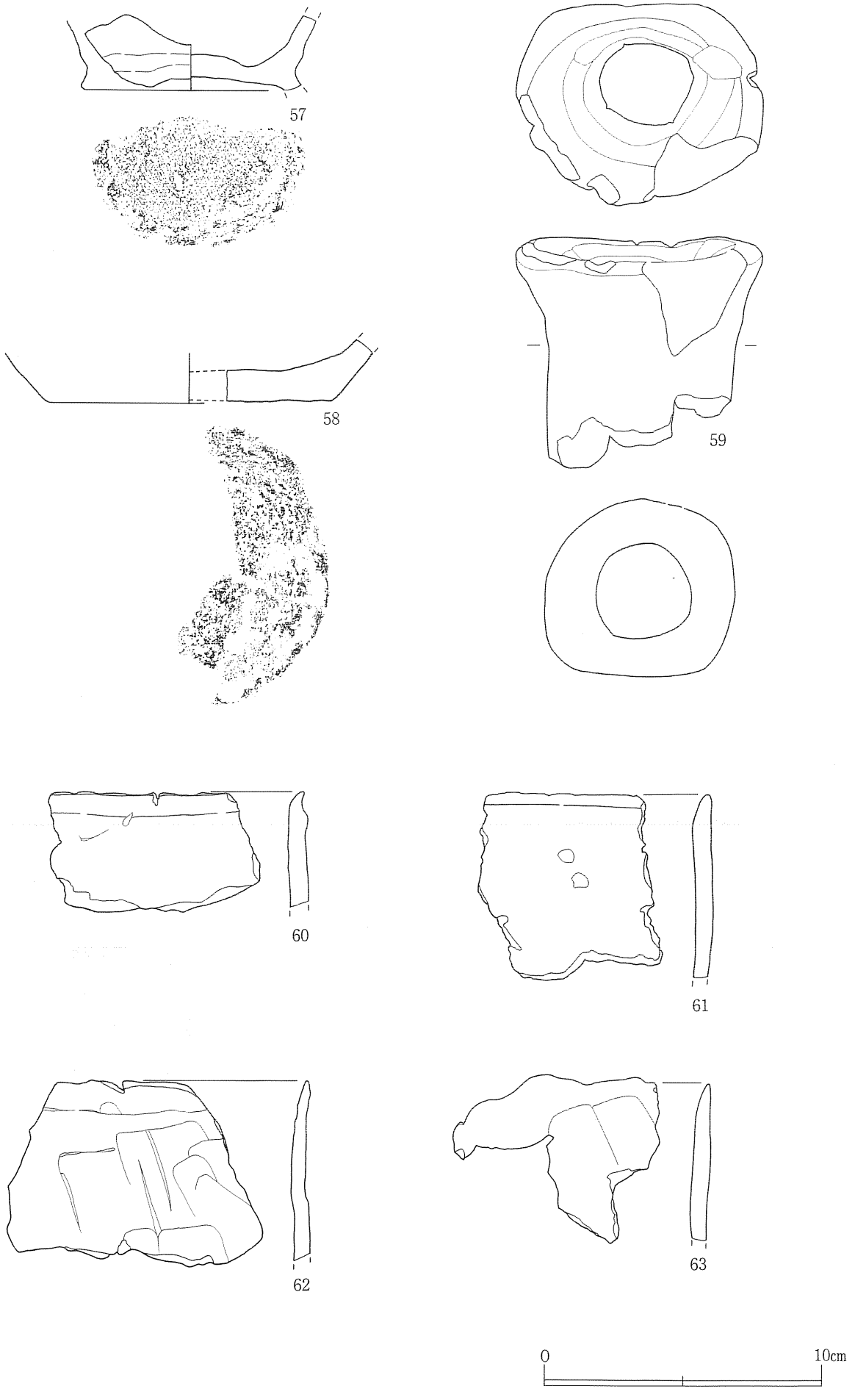


56

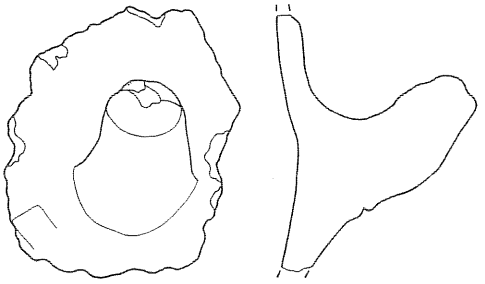


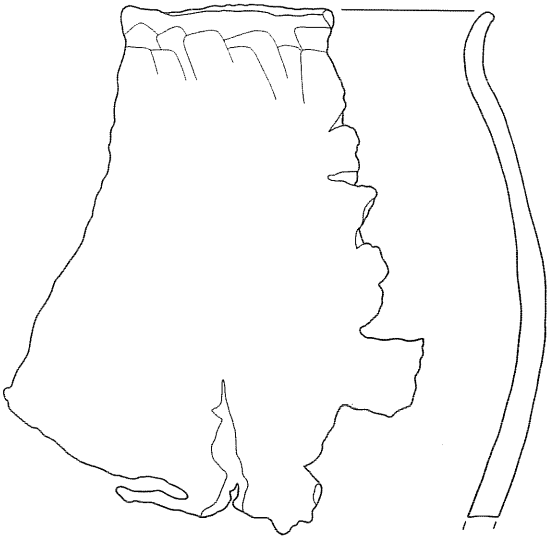
0　10cm

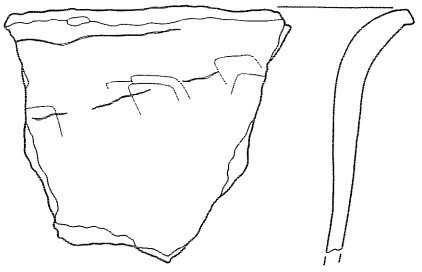
第64図　土師器（７）遺構内出土

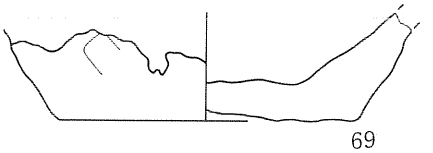


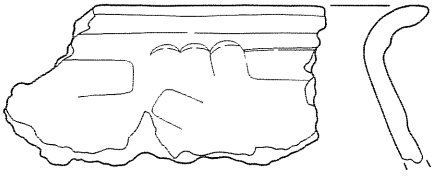
第65図　土師器（８）遺構内出土



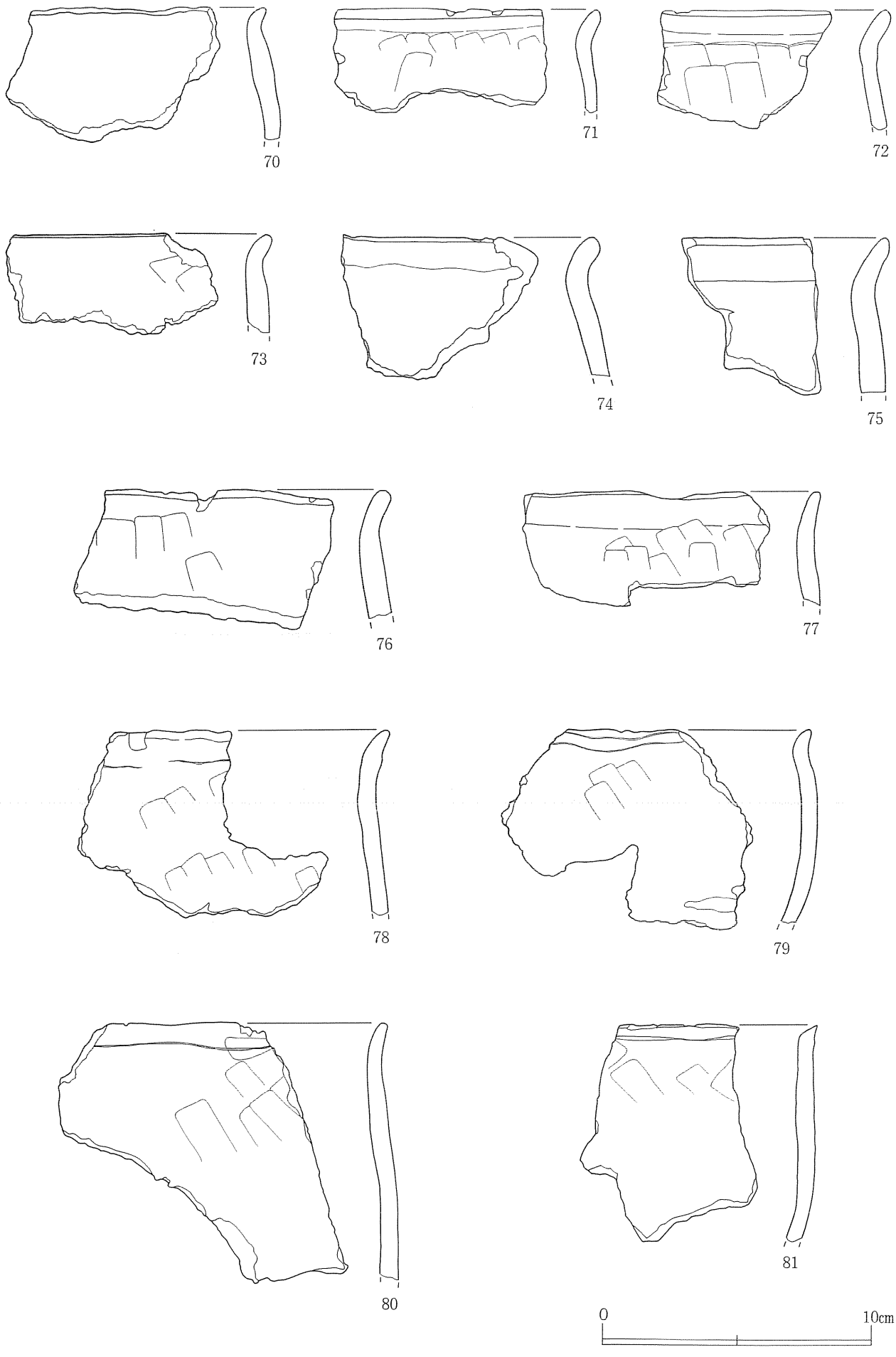




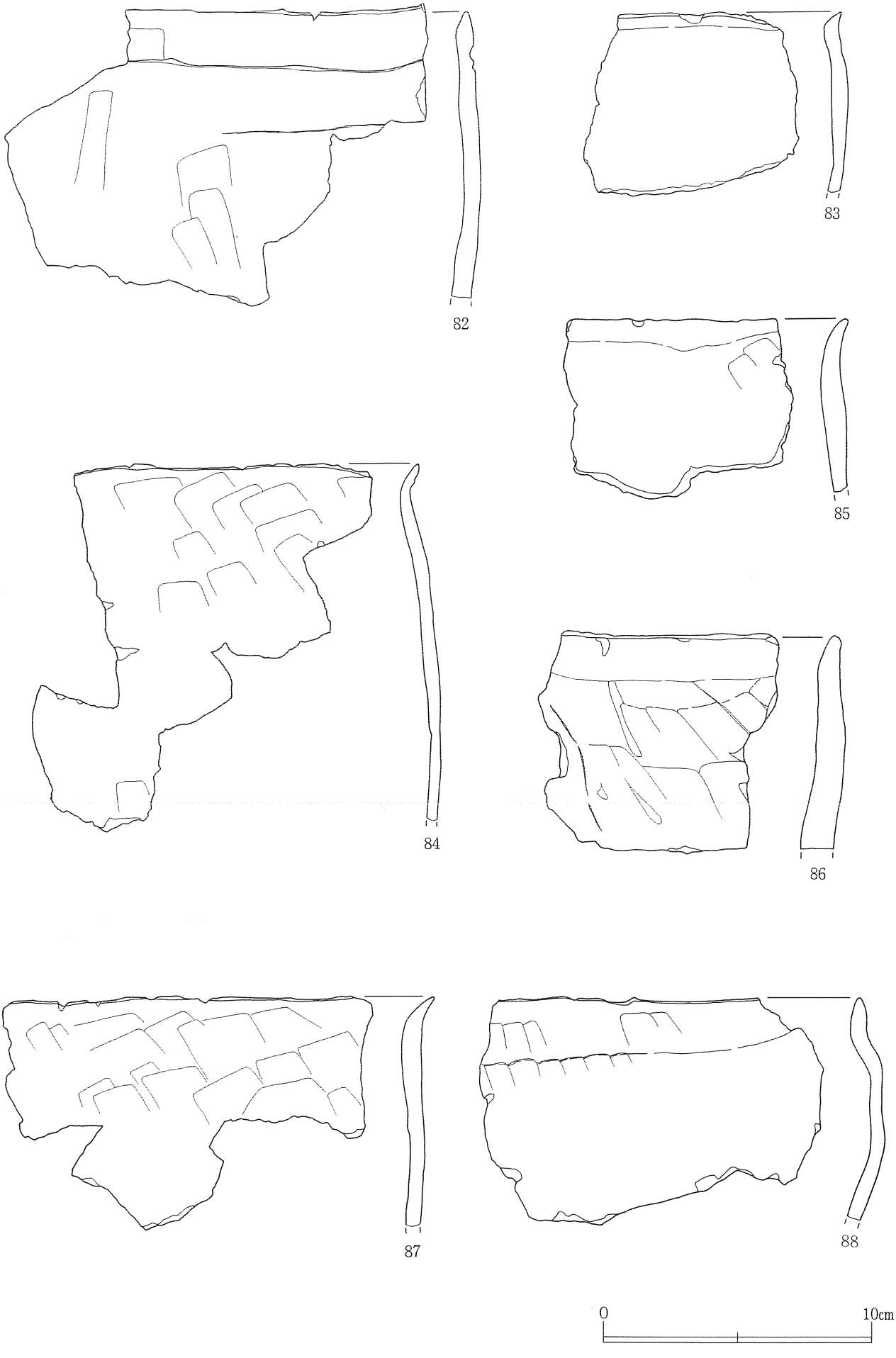




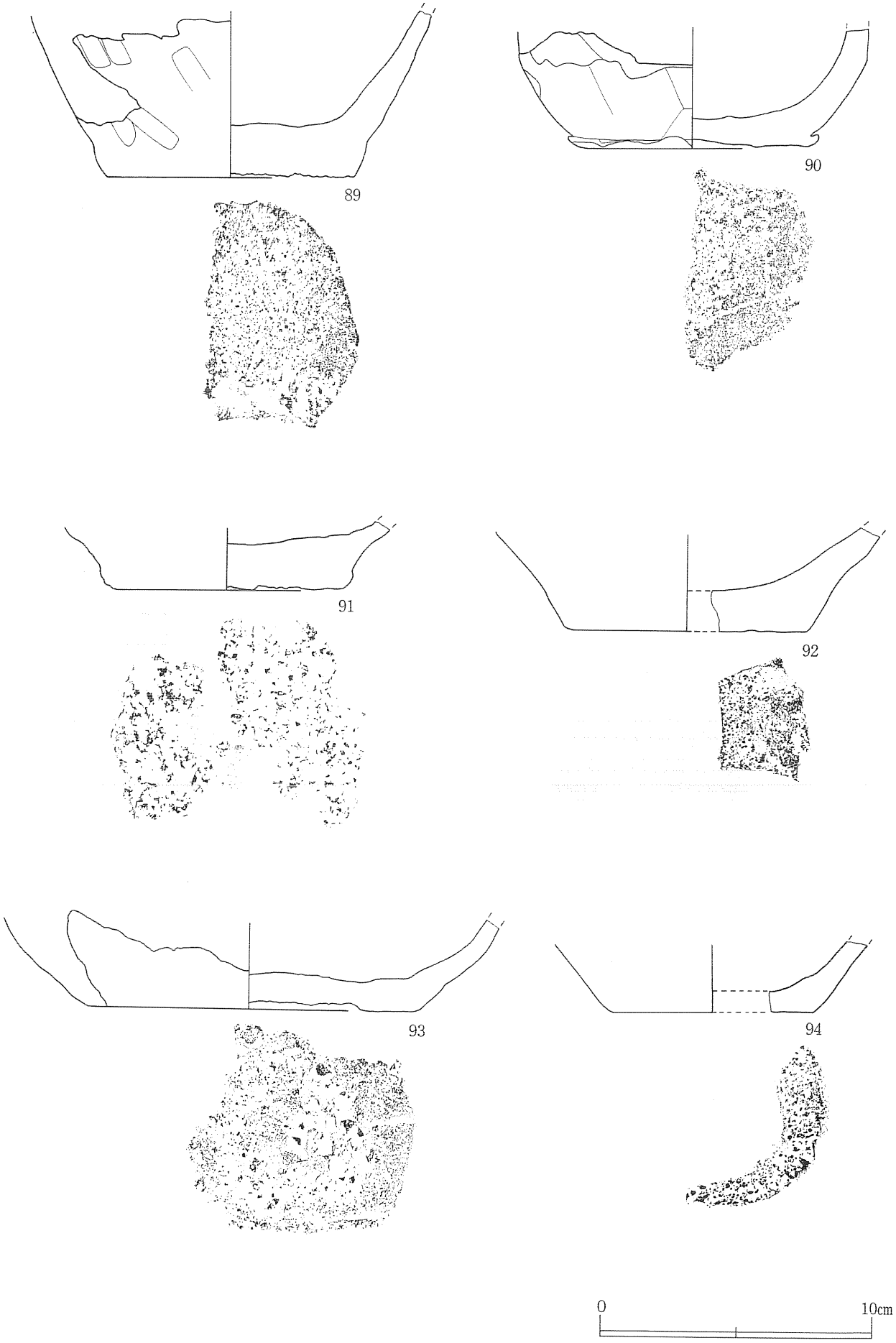
第66図　土師器（９）遺構内出土



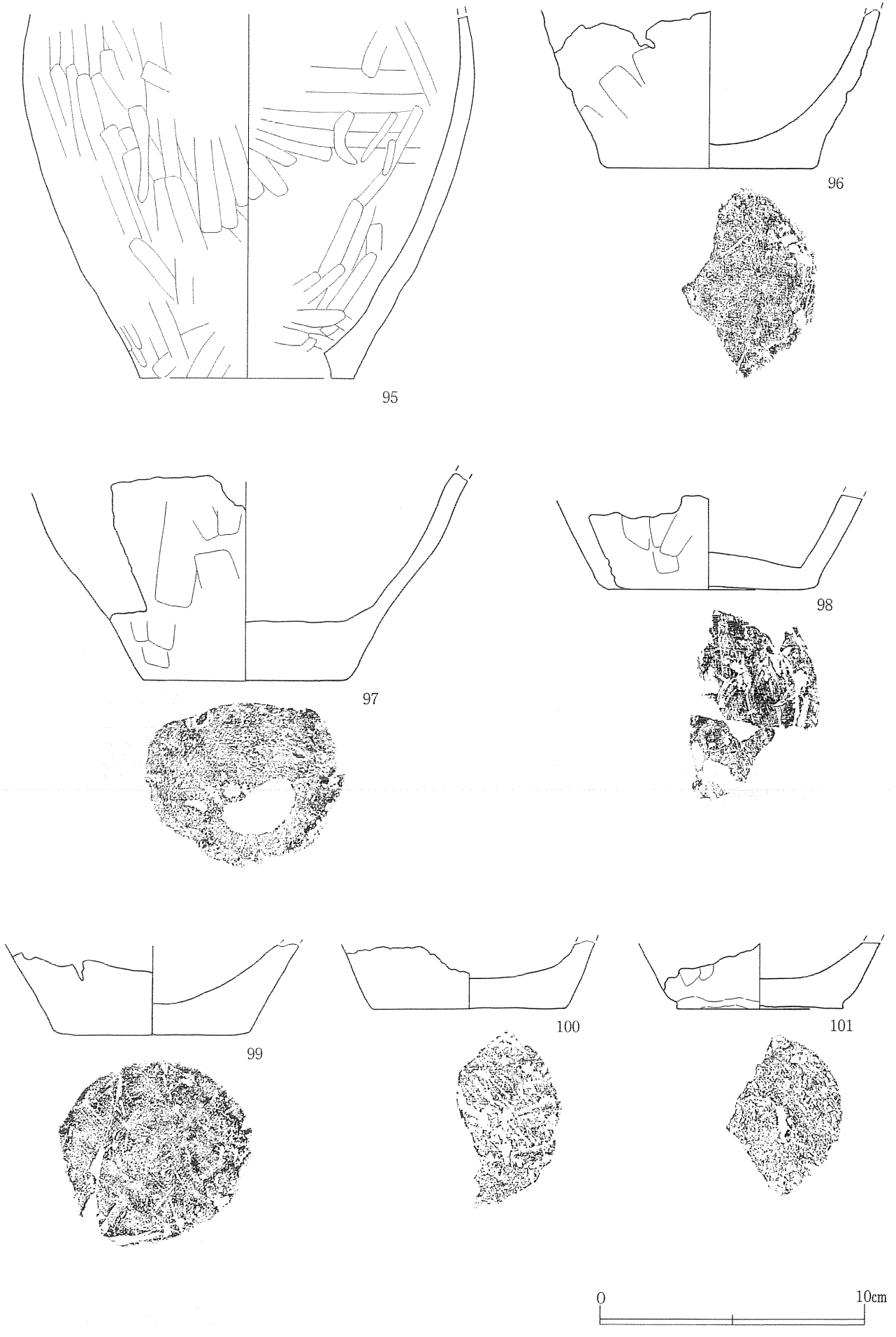
第67図　土師器（10）遺構外出土



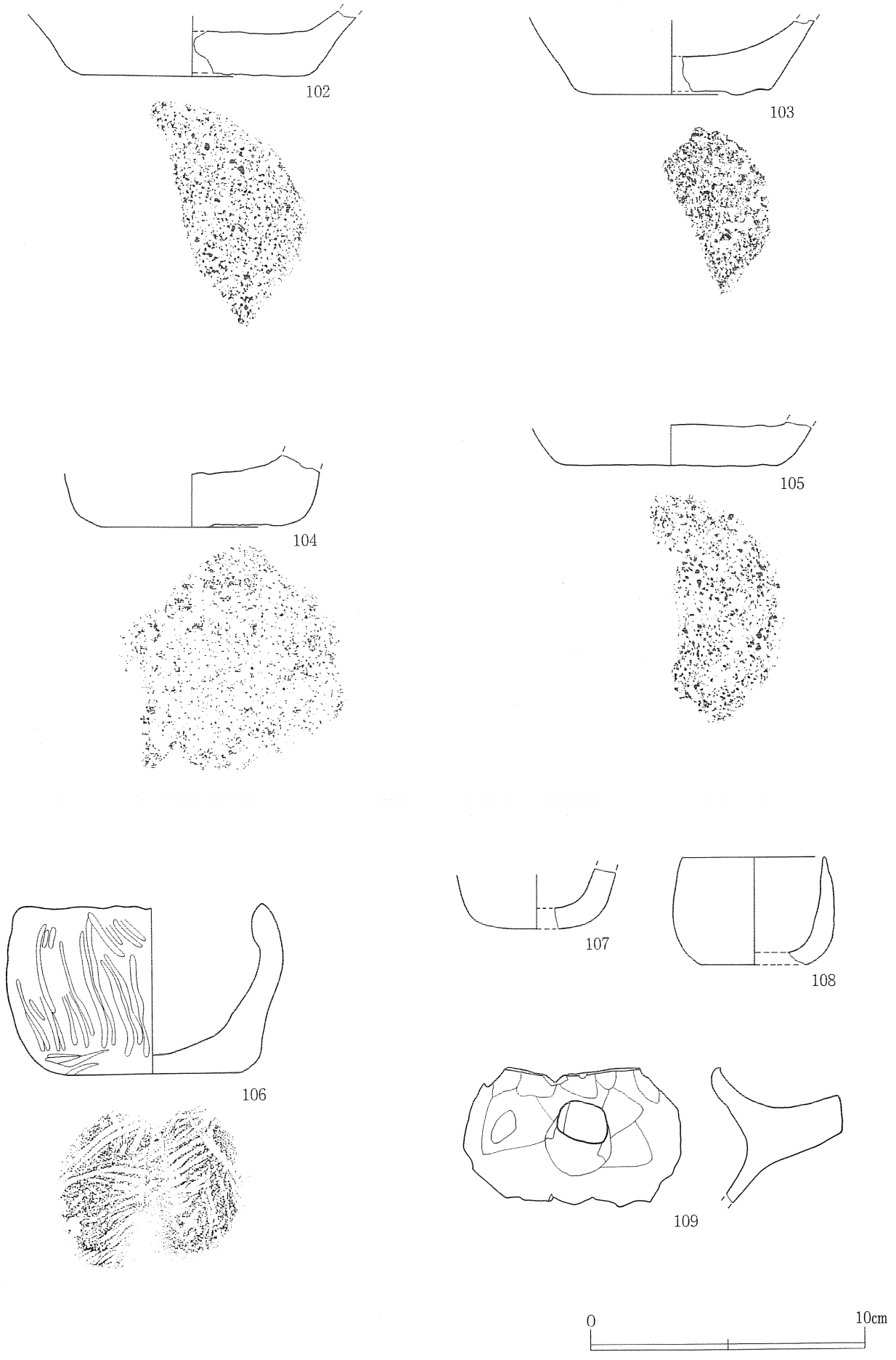
第68図　土師器（11）遺構外出土



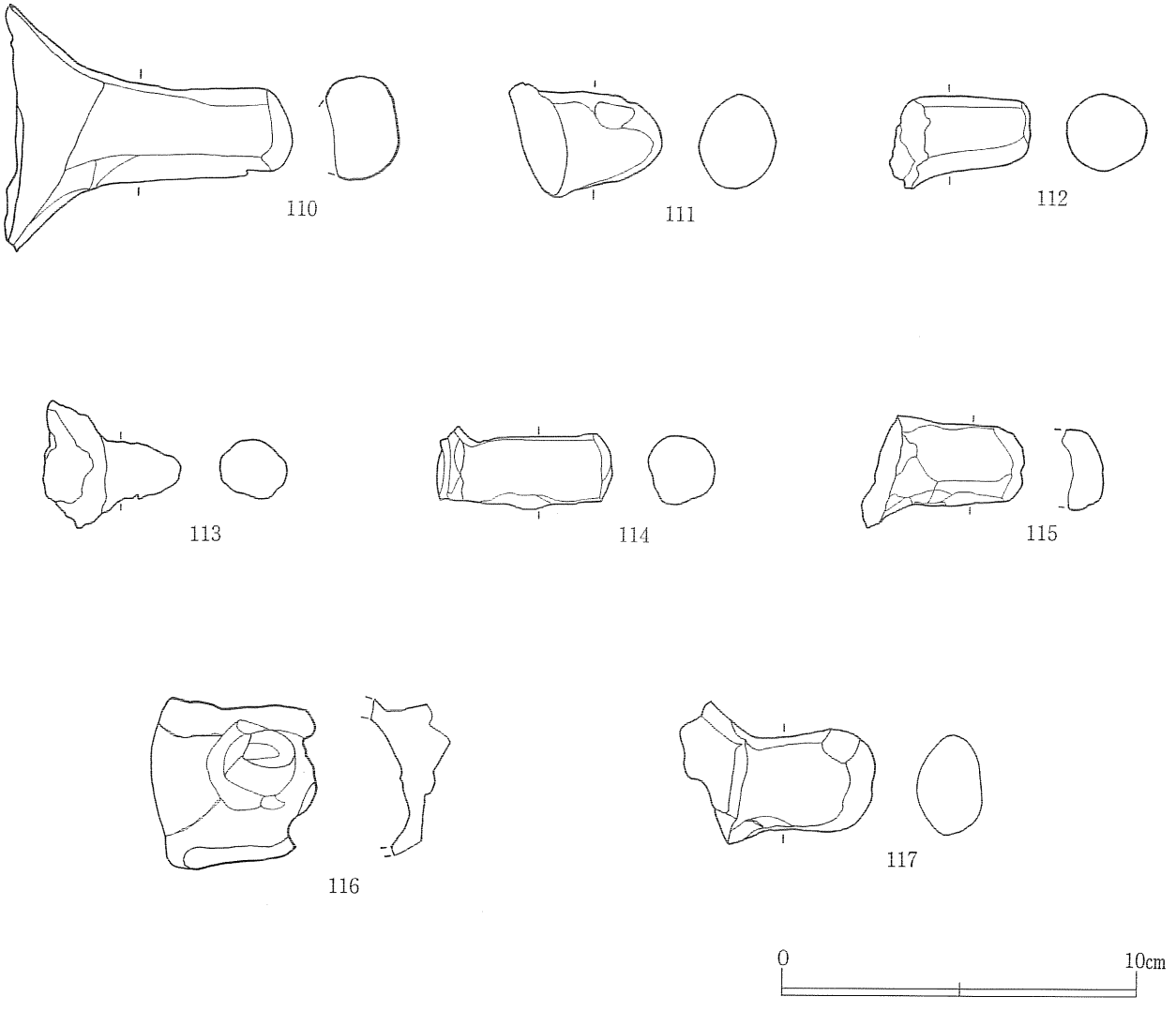
第69図　土師器（12）遺構外出土



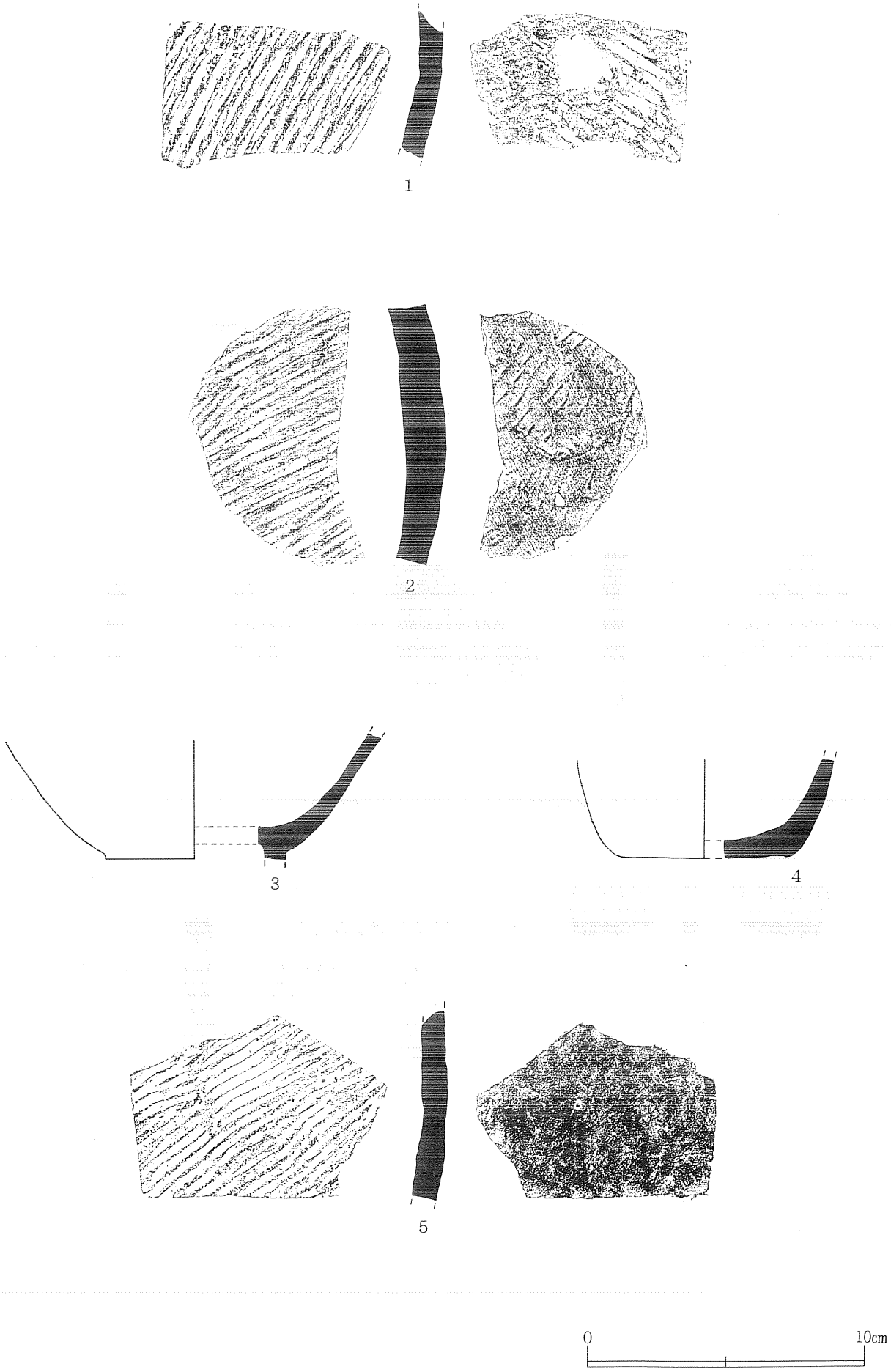
第70図　土師器（13）遺構外出土



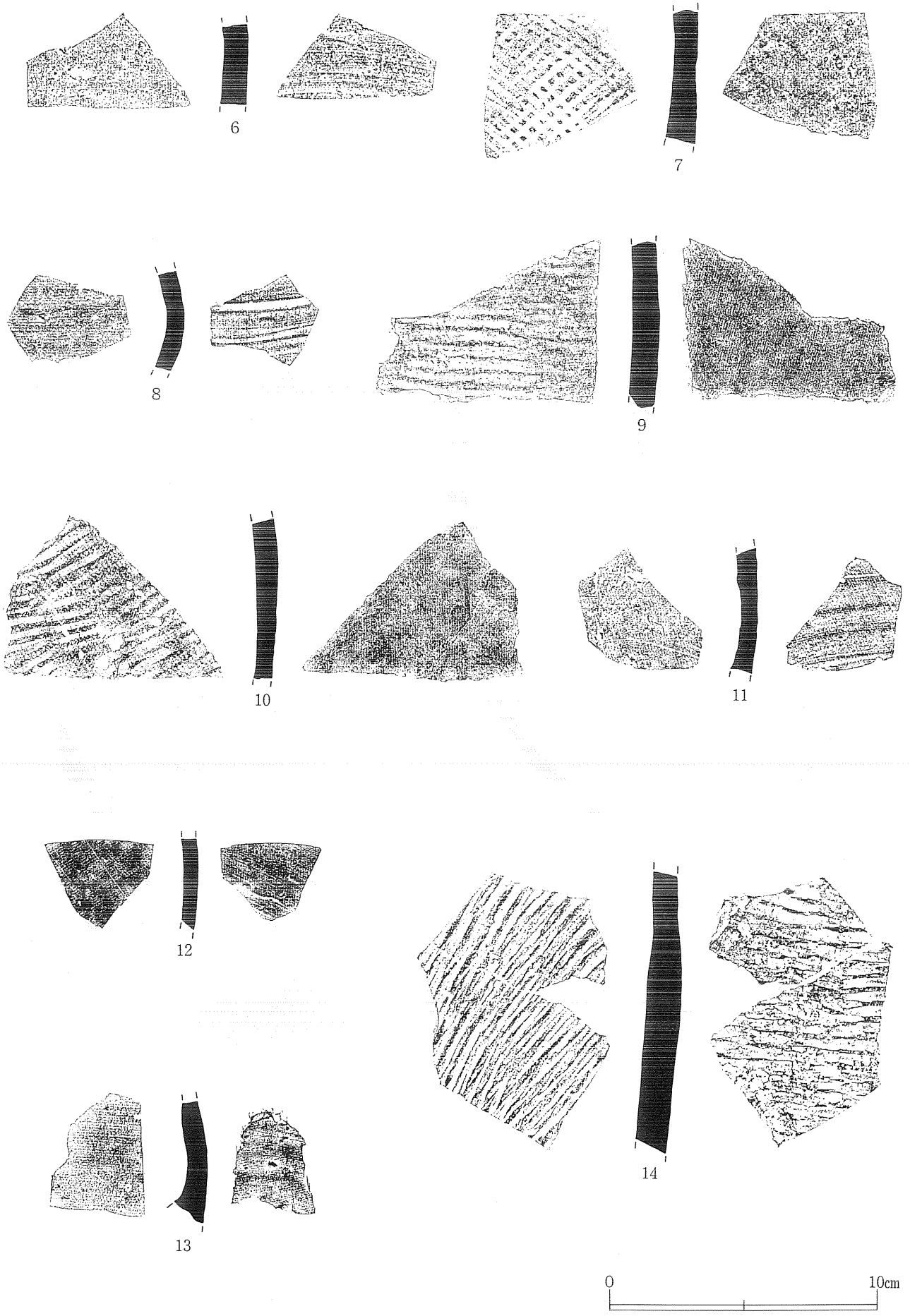
第71図　土師器（14）遺構外出土



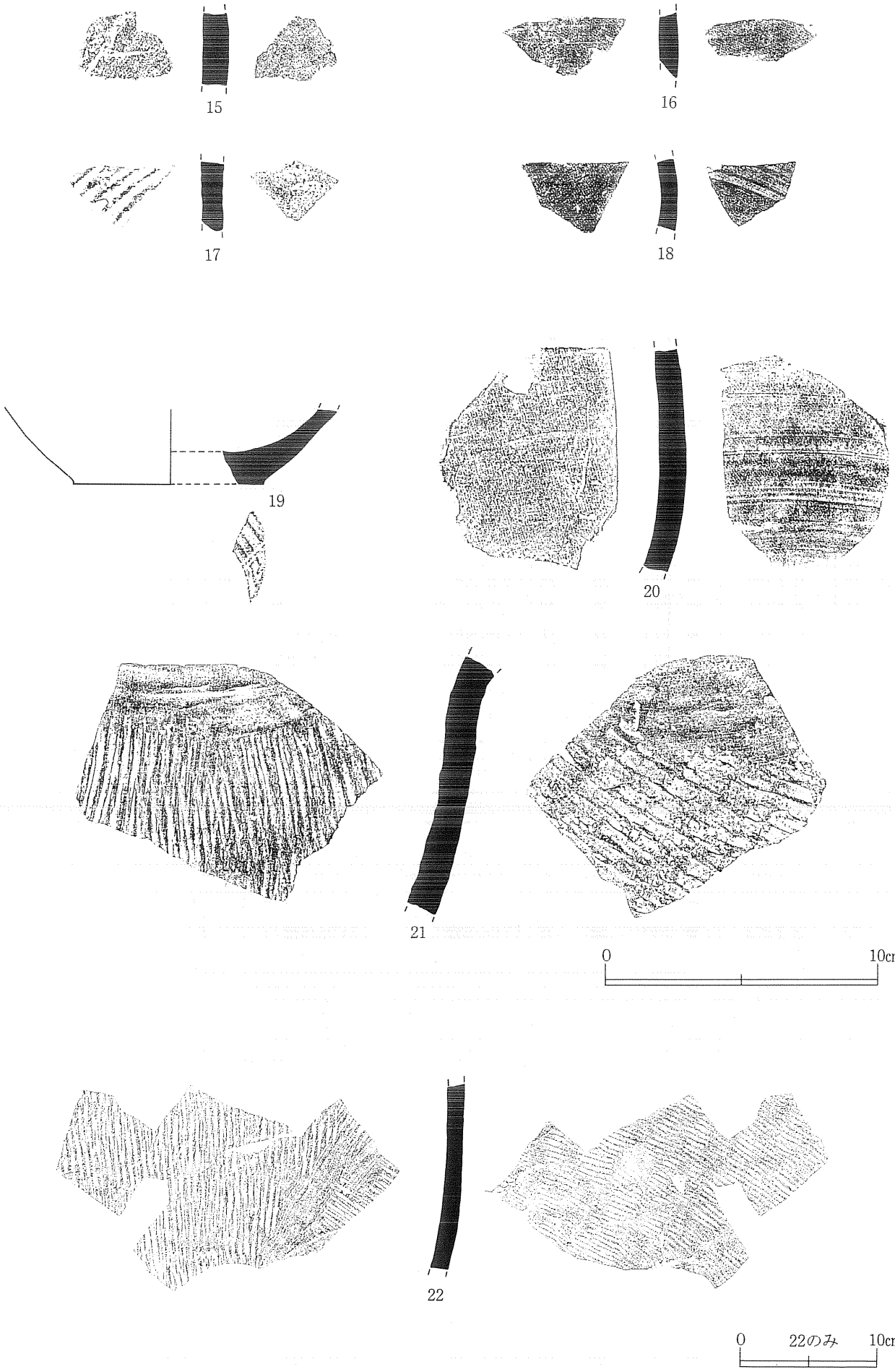
第72図　土師器（15）遺構外出土



第73図　須恵器（１）遺構内出土



第74図　須恵器（２）遺構外出土



第75図　須恵器（３）遺構外出土

第７表　土師器観察表（１）

挿図番号	出土地点	器形	部位	色調 外面	色調 内面	備考
58－1	ＳＩ75	甕	口縁部	7.5YR7/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	
2	ＳＩ75	把手付土器	胴部	10YR3/2黒褐	10YR3/1黒褐	
3	ＳＩ107	甕	口縁部	7.5YR5/3にぶい褐	10YR7/6明黄褐	スス状炭化物付着
4	SI107･373	甕	口縁部から底部	5YR6/6橙	5YR6/8橙	底部径7.5㎝
5	ＳＩ107	甕	口縁部	10YR3/1黒褐	10YR3/1黒褐	
6	ＳＩ112	甕	口縁部	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6明黄褐	
7	ＳＩ112	甕	口縁部	7.5YR7/6橙	7.5YR7/8黄橙	火熱を受けている
8	ＳＩ112	甕	底部	5YR6/6橙	7.5Y2/1黒	底部ナデ、径6㎝
9	ＳＩ112	甕	口縁部	5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	
59－10	ＳＩ115	甕	口縁部	5YR6/6橙	2.5YR5/6明赤褐	ナデ
11	ＳＩ115	甕	口縁部	7.5YR6/6橙	2.5YR7/6橙	
12	ＳＩ115	甕	口縁部	5YR6/6橙	2.5YR5/6明赤褐	
13	ＳＩ115	甕	口縁部	10YR6/6明黄褐	2.5YR5/6明赤褐	
14	ＳＩ115	甕	口縁部	10YR4/4褐	10YR5/4にぶい黄褐	
15	ＳＩ115	甕	胴部から底部	7.5YR7/8黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	底部径8.5㎝、砂粒付着
16	ＳＩ115	甕	口縁部	10YR5/4にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	
60－17	ＳＩ192	甕	口縁部から底部	7.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	底部径7㎝、砂粒付着
18	ＳＩ192	甕	胴部から底部	7.5YR5/6明褐	10YR5/3にぶい黄褐	底部径8㎝、砂粒付着
61－19	ＳＩ192	甕	口縁部	5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	火熱を受けている
20	ＳＩ192	甕	口縁部	2.5YR6/8橙	7.5YR7/6橙	火熱を受けている
21	ＳＩ198	甕	口縁部	5YR6/8橙	5YR6/6橙	
22	ＳＩ198	甕	口縁部	10YR5/1褐灰	5YR2/1黒褐	
23	ＳＩ198	甕	胴部から底部	10YR4/2灰黄褐	10YR6/6明黄褐	底部ナデ、径6.5㎝
24	ＳＩ198	甕	胴部から底部	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	底部ナデ、径7㎝
25	ＳＩ198	甕	胴部から底部	7.5YR6/6橙	10YR7/4にぶい黄橙	底部径7.5㎝、砂粒付着
26	ＳＩ215	甕	底部	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	底部ナデ、径5.5㎝
62－27	ＳＩ238	甕	底部	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	底部ナデ、径10.5㎝
28	ＳＩ240	羽口		2.5Y7/4浅黄	7.5YR6/6橙	外径6.5㎝、内径3㎝
29	ＳＩ240	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR5/4にぶい赤褐	
30	ＳＩ240	甕	口縁部	10YR8/4浅黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	
31	ＳＩ268	甕	口縁部	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/6明黄褐	
32	ＳＩ372	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR6/6橙	
33	ＳＩ372	甕	口縁部	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/6橙	
34	ＳＩ372	甕	口縁部	7.5YR5/6明褐	7.5YR4/1褐灰	
35	ＳＩ372	甕	胴部から底部	10YR6/6明黄褐	10YR6/6明黄褐	底部ナデ、径7㎝
36	ＳＩ372	甕	口縁部	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	火熱を受けている
63－37	ＳＩ373	甕	口縁部	5YR6/6橙	2.5YR5/6明赤褐	火熱を受けている
38	ＳＩ373	甕	口縁部	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR4/2灰褐	
39	ＳＩ373	把手付土器	胴部	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/1褐灰	火熱を受けている
40	ＳＩ373	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR6/6橙	
41	ＳＩ380	甕	口縁部	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	
42	ＳＩ385	甕	口縁部	10YR7/6明黄褐	7.5YR7/4にぶい橙	火熱を受けている
43	ＳＩ385	甕	口縁部	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	
44	ＳＩ385	甕	口縁部	7.5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	
45	ＳＩ385	把手付土器	胴部から底部	5YR6/6橙	5YR5/4にぶい赤褐	火熱を受けている
63－46	ＳＩ385	甕	底部	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/3にぶい黄橙	底部ナデ、径8㎝
47	ＳＩ385	甕	口縁部	5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	火熱を受けている
64－48	ＳＩ428	甕	口縁部	5YR6/6橙	5YR6/6橙	ナデ
49	ＳＩ428	甕	胴部から底部	7.5YR7/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	底部ナデ、径8.5㎝

第８表　土師器観察表（２）

挿図番号	出土地点	器形	部位	色調 外面	色調 内面	備考
64－50	ＳＫＩ267	甕	底部	7.5YR4/3褐	10YR6/4にぶい黄橙	底部径8cm、砂粒付着
51	ＳＫ97	甕	口縁部	10YR4/1褐灰	10YR5/3にぶい黄褐	
52	ＳＫ97	甕	口縁部	10YR4/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	
53	ＳＫ97	甕	口縁部	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR6/4にぶい橙	
54	ＳＫ97	甕	底部	10YR6/6明黄褐	10YR6/2灰黄褐	底部径9.5cm、砂粒付着
55	ＳＫ98	甕	胴部から底部	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	底部ナデ、径6cm
56	ＳＫ118	甕	胴部から底部	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	底部径7.5cm、砂粒付着
65－57	ＳＫ263	甕	底部	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	底部ナデ、径7.5cm
58	ＳＫ263	甕	底部	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	底部径10cm、砂粒付着
59	ＳＫ364	羽口		2.5Y8/1灰白	2.5Y7/2灰黄	径7cm
60	ＳＫ376	甕	口縁部	7.5YR7/6橙	5YR6/6橙	火熱を受けている
61	ＳＫ376	甕	口縁部	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6明黄褐	
62	ＳＫ429	甕	口縁部	7.5YR4/2灰褐	7.5YR5/4にぶい褐	
63	ＳＫＰ480	甕	口縁部	7.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	
66－64	ＳＤ04	把手付土器	胴部	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/4浅黄橙	火熱を受けている
65	ＳＤ47	甕	口縁部	10YR6/6明黄褐	10YR6/6明黄褐	
66	ＳＤ95	甕	口縁部	10YR4/1褐灰	10YR3/1黒褐	
67	ＳＦ05	甕	口縁部	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	
68	ＳＦ05	甕	口縁部	10YR6/6明黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	
69	ＳＦ05	甕	底部	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/4にぶい黄褐	底部ナデ、径8.5cm
67－70	ＭＴ50	甕	口縁部	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	
71	ＬＲ44	甕	口縁部	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	
72	ＬＮ46	甕	口縁部	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	
73	ＬＲ40	甕	口縁部	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	
74	ＭＦ45	甕	口縁部	5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	
75	ＬＲ40	甕	口縁部	2.5YR6/6橙	2.5YR6/4にぶい橙	
76	ＬＱ48	甕	口縁部	2.5YR6/6橙	5YR6/4にぶい橙	
77	ＭＩ52	甕	口縁部	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	
78	ＬＭ43	甕	口縁部	2.5YR6/6橙	2.5YR6/4にぶい橙	
79	ＬＲ42	甕	口縁部	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	
80	ＬＴ40	甕	口縁部	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	
81	ＭＡ40	甕	口縁部	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/6橙	火熱を受けている
68－82	ＭＥ52	甕	口縁部	5YR6/6橙	10YR4/2灰黄褐	
83	ＬＱ51	甕	口縁部	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	
84	ＬＲ40	甕	口縁部	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	火熱を受けている
85	ＭＦ44	甕	口縁部	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	
86	ＭＥ57	甕	口縁部	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	火熱を受けている
87	ＭＦ46	甕	口縁部	7.5YR7/6橙	7.5YR4/6褐	火熱を受けている
88	ＭＥ52	甕	口縁部	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	火熱を受けている
69－89	ＬＱ53	甕	胴部から底部	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	底部径10cm、砂粒付着
90	ＬＲ36	甕	胴部から底部	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR6/6橙	底部径12cm、砂粒付着
91	ＬＲ41	甕	底部	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	底部径９cm、砂粒付着
92	ＭＨ51	甕	胴部から底部	5YR5/6明赤褐	10YR7/3にぶい黄橙	底部砂粒付着
93	ＭＦ56	甕	胴部から底部	7.5YR7/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	底部径12cm、砂粒付着
94	ＬＤ54	甕	胴部から底部	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	底部径７cm、砂粒付着
70－95	ＭＪ47	甕	胴部から底部	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	底部ナデ
96	ＬＮ50	甕	胴部から底部	10YR5/4にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	底部ナデ、径8cm
97	ＬＮ51	甕	胴部から底部	10YR3/2黒褐	10YR5/3にぶい黄褐	底部ナデ、径6.5cm
98	ＭＡ45	甕	胴部から底部	10YR3/1黒褐	10YR4/1褐灰	底部ナデ、径8cm

第９表　土師器観察表（３）

挿図番号	出土地点	器形	部位	色調 外面	色調 内面	備考
70－99	ＬＳ47	甕	底部	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	底部ナデ、径7cm
100	ＭＤ45	甕	底部	10YR5/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	底部ナデ、径6.5cm
101	ＬＤ44	甕	底部	5YR6/4にぶい橙	10YR6/4にぶい黄橙	底部ナデ、径6cm
71-102	ＭＧ44	甕	底部	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR5/4にぶい褐	底部径8.5cm、砂粒付着
103	ＬＲ49	甕	底部	7.5YR3/2黒褐	10YR4/2灰黄褐	底部径7cm、砂粒付着
104	ＬＳ37	甕	底部	2.5YR4/4にぶい赤褐	2.5YR4/4にぶい赤褐	底部径8cm、砂粒付着
105	ＬＮ53	甕	底部	10YR4/2灰黄褐	10YR7/4にぶい黄橙	底部径10cm、砂粒付着
106	ＭＤ48	甕	口縁部から底部	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	底部径7cm、把手付か
107	ＭＫ50	甕	胴部から底部	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	
108	ＭＡ51	甕	口縁部から底部	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	
109	ＭＡ53	把手付土器		10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	
72-110	ＭＢ47	把手付土器		7.5YR7/6橙	5YR7/6橙	火熱を受けている
111	ＭＤ48	把手付土器		5YR7/6橙	（外面のみ）	火熱を受けている
112	ＭＢ55	把手付土器		2.5YR6/6橙	（外面のみ）	火熱を受けている
113	ＭＣ48	把手付土器		2.5YR6/6橙	（外面のみ）	火熱を受けている
114	ＬＰ44	把手付土器		7.5YR7/4にぶい橙	（外面のみ）	
115	ＬＰ41	把手付土器		7.5YR4/1褐灰	（外面のみ）	火熱を受けている
116	ＭＦ57	把手付土器		5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	
117	ＭＫ49	把手付土器		10YR6/4にぶい黄橙	（外面のみ）	

第10表　須恵器観察表

挿図番号	出土地点	器形	部位	色調 外面	色調 内面	備考
73－１	ＳＩ215	甕	胴部	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	外面タタキ目
2	ＳＩ406	甕	胴部	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/2灰黄褐	転用硯
3	ＳＫ161	壷	胴部から底部	2.5Y6/3にぶい黄灰	2.5Y6/2黄灰	
4	ＳＫ376	壷	胴部から底部	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/3にぶい黄灰	
5	ＳＤ04	甕	胴部	2.5Y4/1黄灰	2.5Y4/1黄灰	
74－６	ＬＯ46	甕か壺	胴部	2.5Y4/1黄灰	2.5Y6/2灰黄	
7	ＬＱ36	甕	胴部	7.5YR1.7/1黒	7.5YR2/1黒	
8	ＬＰ54	甕か壺	胴部	2.5Y6/1黄灰	2.5Y5/2暗灰黄	
9	ＬＯ50	甕	胴部	2.5Y2/1黒	2.5Y4/1黄灰	
10	ＬＳ41	甕	胴部	10YR2/1黒	10YR2/1黒	
11	ＭＡ48	甕か壺	胴部	10YR3/1黒褐	10YR3/4暗褐	
12	ＭＤ48	甕か壺	胴部	2.5Y4/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	
13	ＭＧ54	甕か壺	胴部	2.5Y3/1黒褐	2.5Y5/1黄灰	
14	ＭＤ59	甕	胴部	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	
75－15	ＭＨ55	甕か壺	胴部	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	
16	ＭＬ52	甕か壺	胴部	2.5Y4/1黄灰	10YR3/4暗褐	
17	表採	甕か壺	胴部	5Y2/1黒	5Y5/1灰	
18	表採	甕か壺	胴部	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	
19	ＬＳ45	甕か壺	胴部から底部	2.5Y6/2灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	
20	ＭＥ52	甕か壺	胴部	5Y4/1灰	2.5Y6/2灰黄	
21	ＭＦ45	甕	胴部	5Y4/1灰	2.5Y5/2暗灰黄	
22	NO56・MG56	甕	胴部	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	スス状炭化物付着

４．中世・近世の遺物

（１）陶磁器（第76～83図、第11・12表、図版39～46）

出土した陶磁器は、図示した64点（個体）を含め約120点である。このうち遺構内出土は、わずか７点にすぎない。遺物の産地は、中国産と国内産に大きく分けられる。前者は明代の染付であり５点出土している。後者は越前、備前、瀬戸・美濃、肥前及び地場（東北）などである。時期的には、瀬戸・美濃の一部と越前が15世紀代（後半）に溯る可能性を残すが、概ね16世紀から18世紀代までと見ることができる。

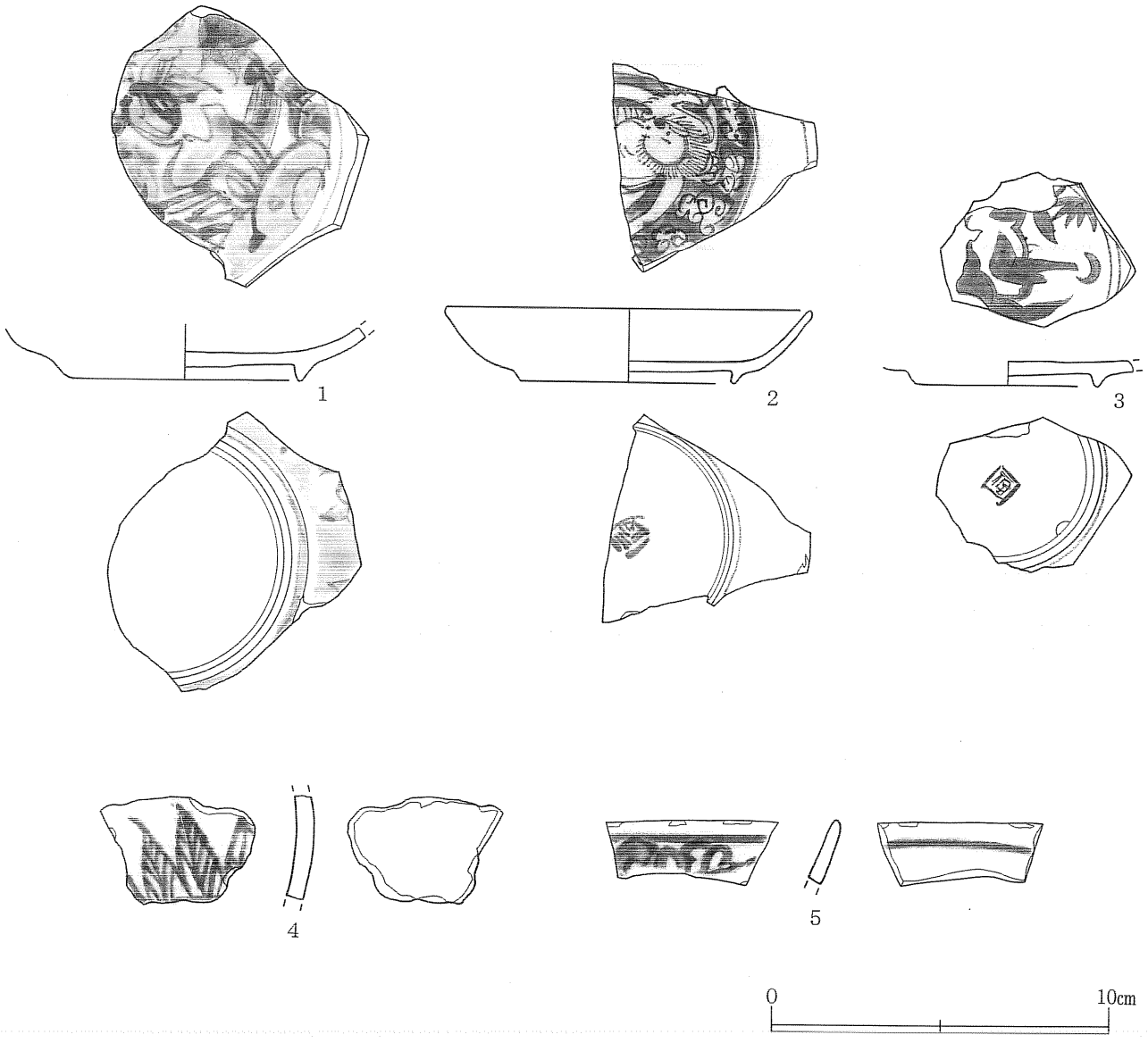
①中国産磁器（第76図１～５、図版39）

５点出土のうち３点（１～３）は遺構内出土であり、空堀（ＳＤ01）と土塁（ＳＦ05）内から得られている。これら３点は、景徳鎮産と判断される染付皿であり、16世紀代に時期を求めることができる。２の見込みには、龍あるいは獅子の図柄が意匠されている。また、遺構外出土の２点（４・５）は、福建系の染付碗と思われ、16世紀中葉から17世紀初頭に位置づけられる。

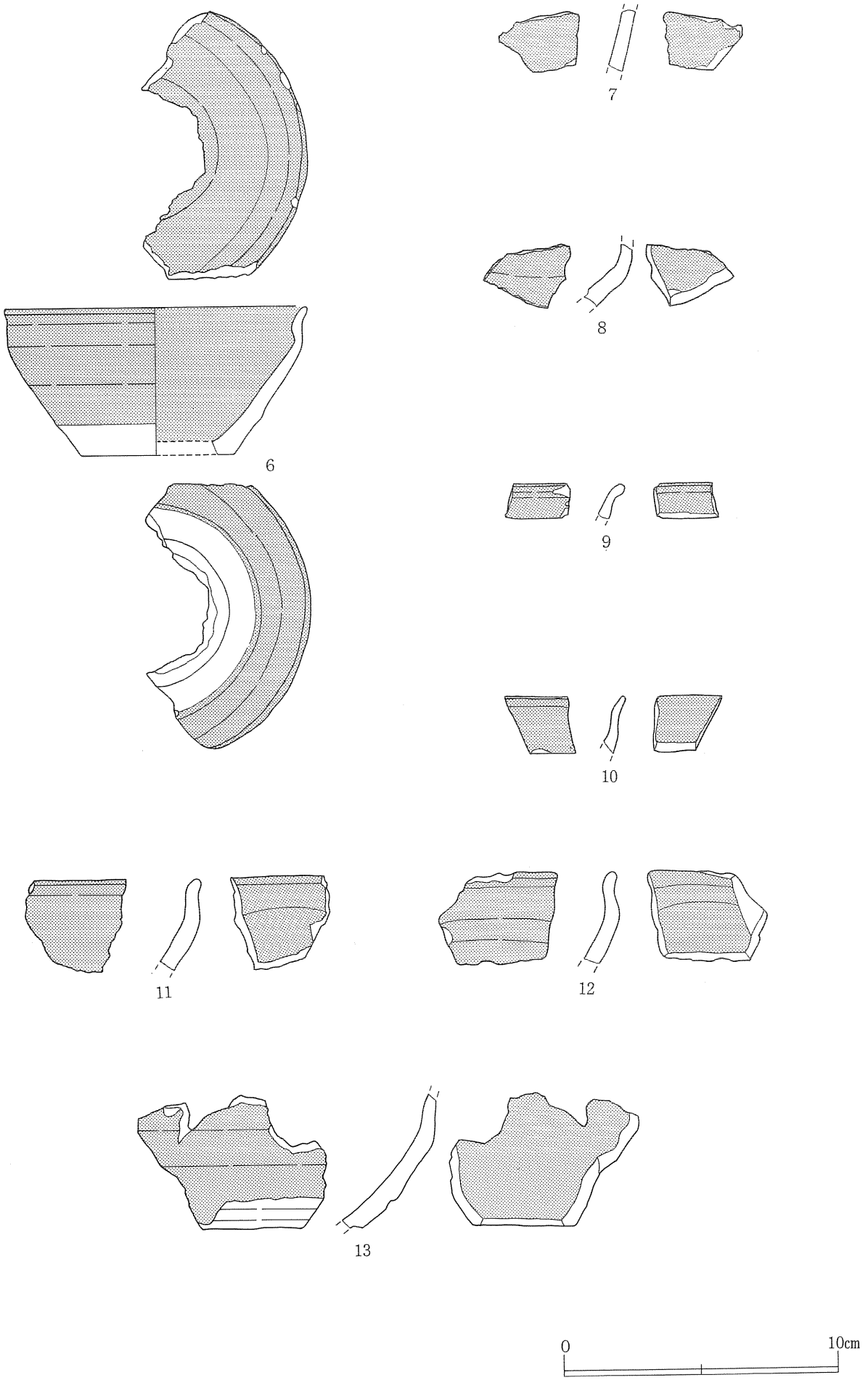
②国内産陶磁器（第77図６～第83図64、図版40～46）

100点を超す国内産陶磁器は、小破片が多く産地を同定できない資料もある。遺構内では４点出土しており、いずれも瀬戸・美濃産である。６・13はＳＤ04空堀出土の天目茶碗、ＳＫＩ137出土の15とＳＫ127出土の23は灰釉丸皿となり、各個体とも15世紀第４四半期から16世紀中葉に収まる。なお15は、ＳＫＩ137覆土上位と遺跡外（ＭＢ52グリッド）出土の接合個体である。両者は約15ｍの距離をおいて発見されている。

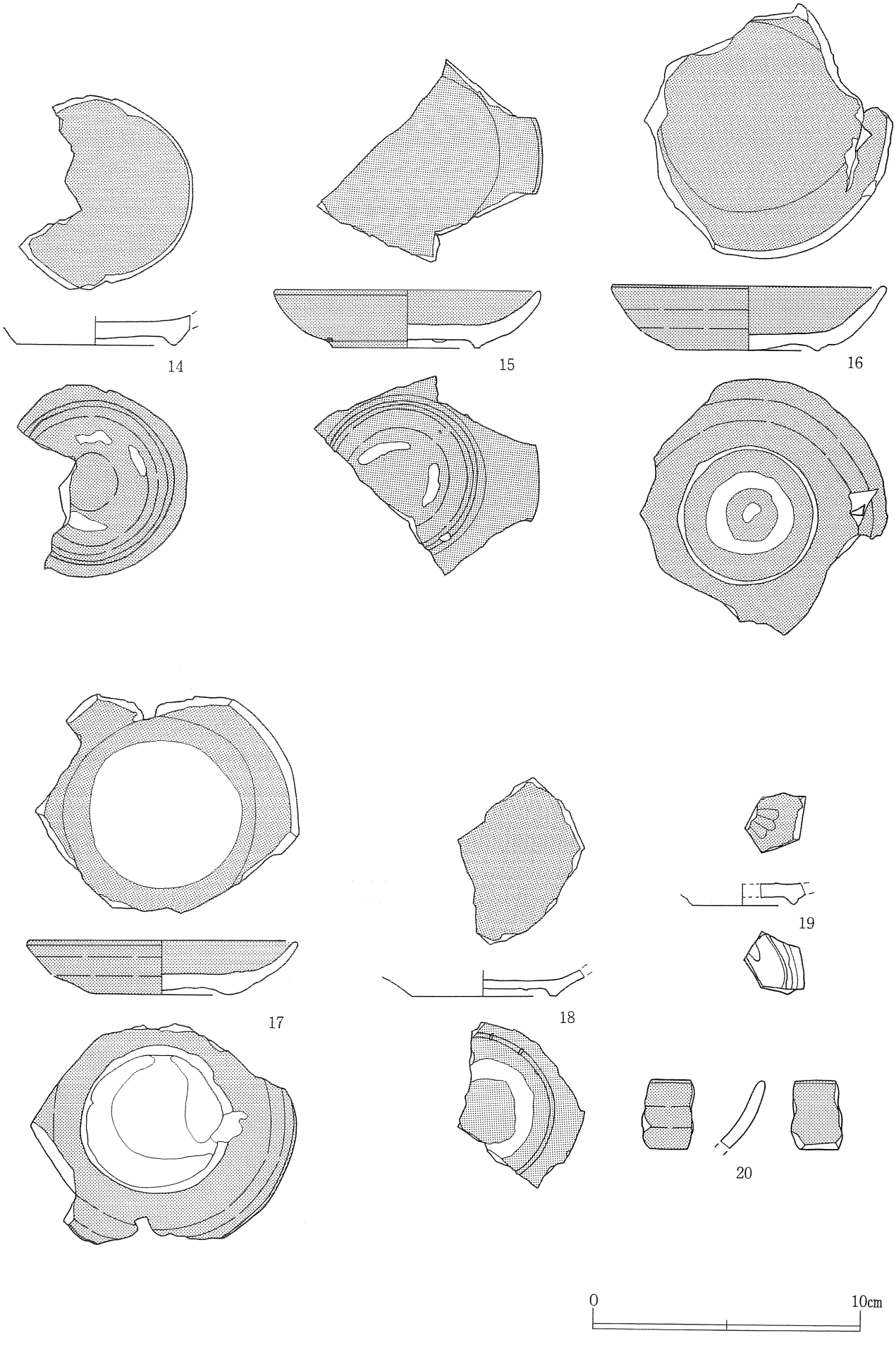
また遺構外では、瀬戸・美濃の天目茶碗・灰釉丸皿など、肥前の染付皿・碗など、越前・備前の摺鉢などが出土している。



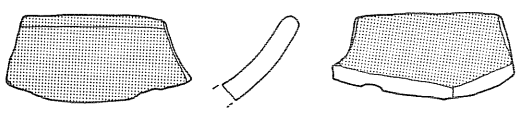
第76図　陶磁器（１）



第77図　陶磁器（２）

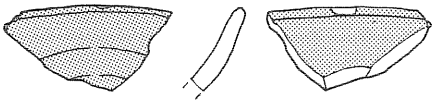


第78図　陶磁器（３）

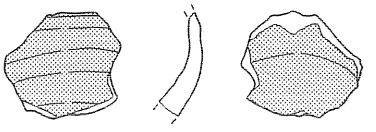


21

22

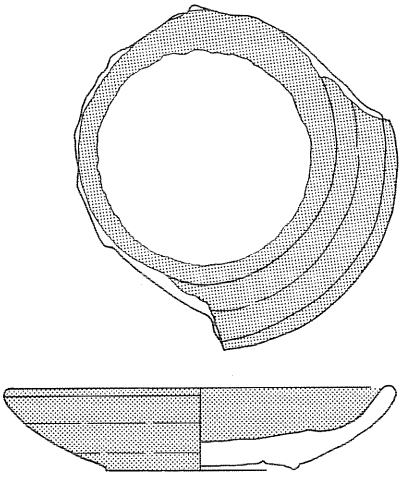


23

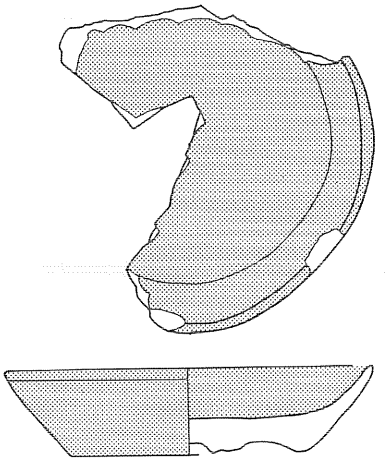


24

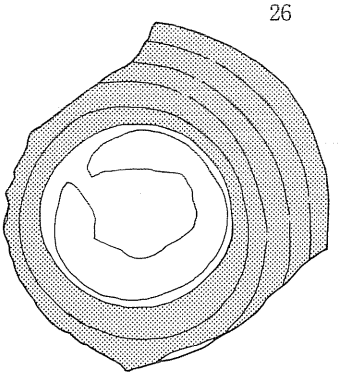
25

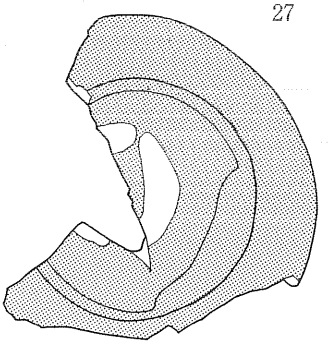


26



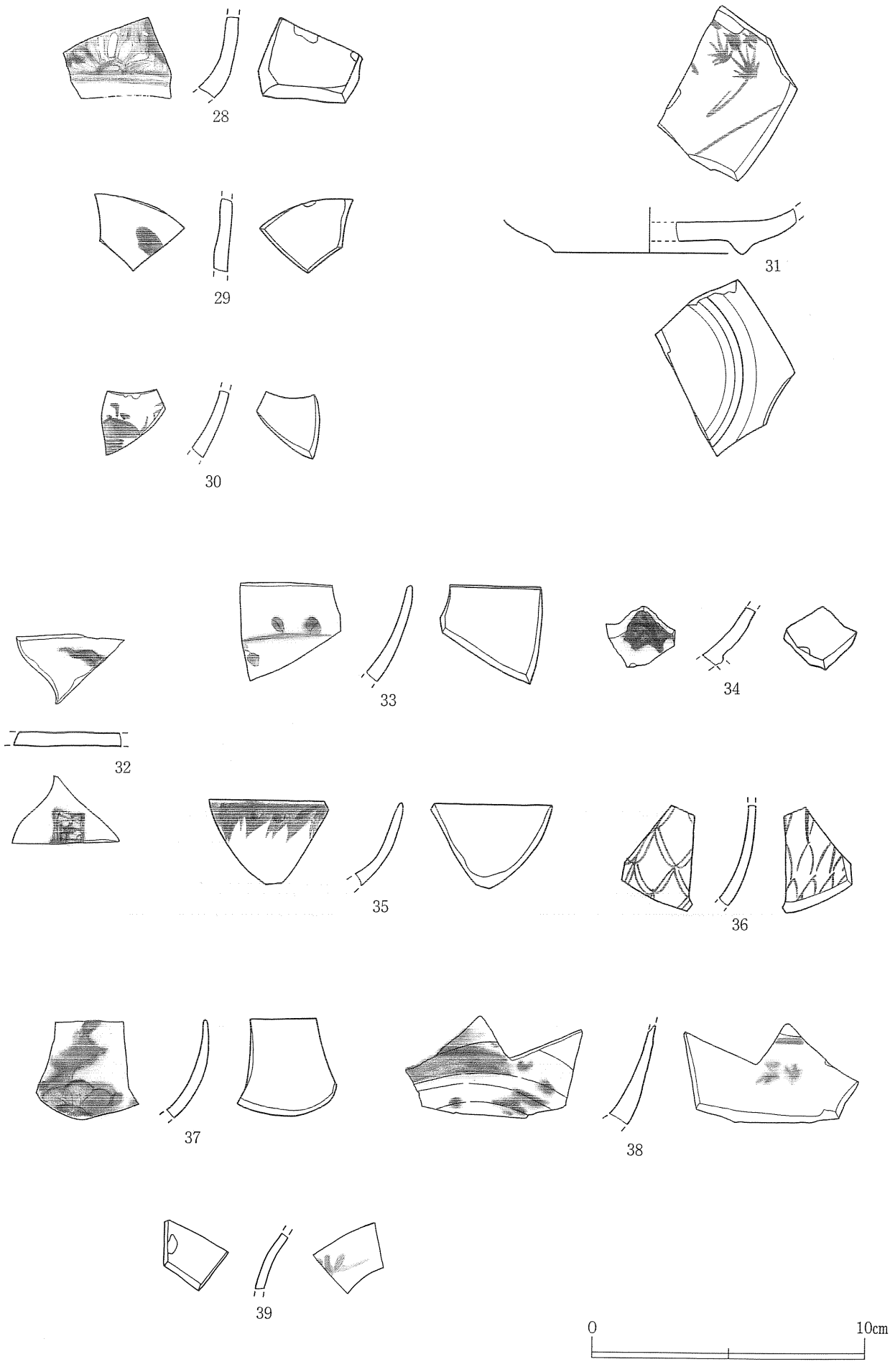
27



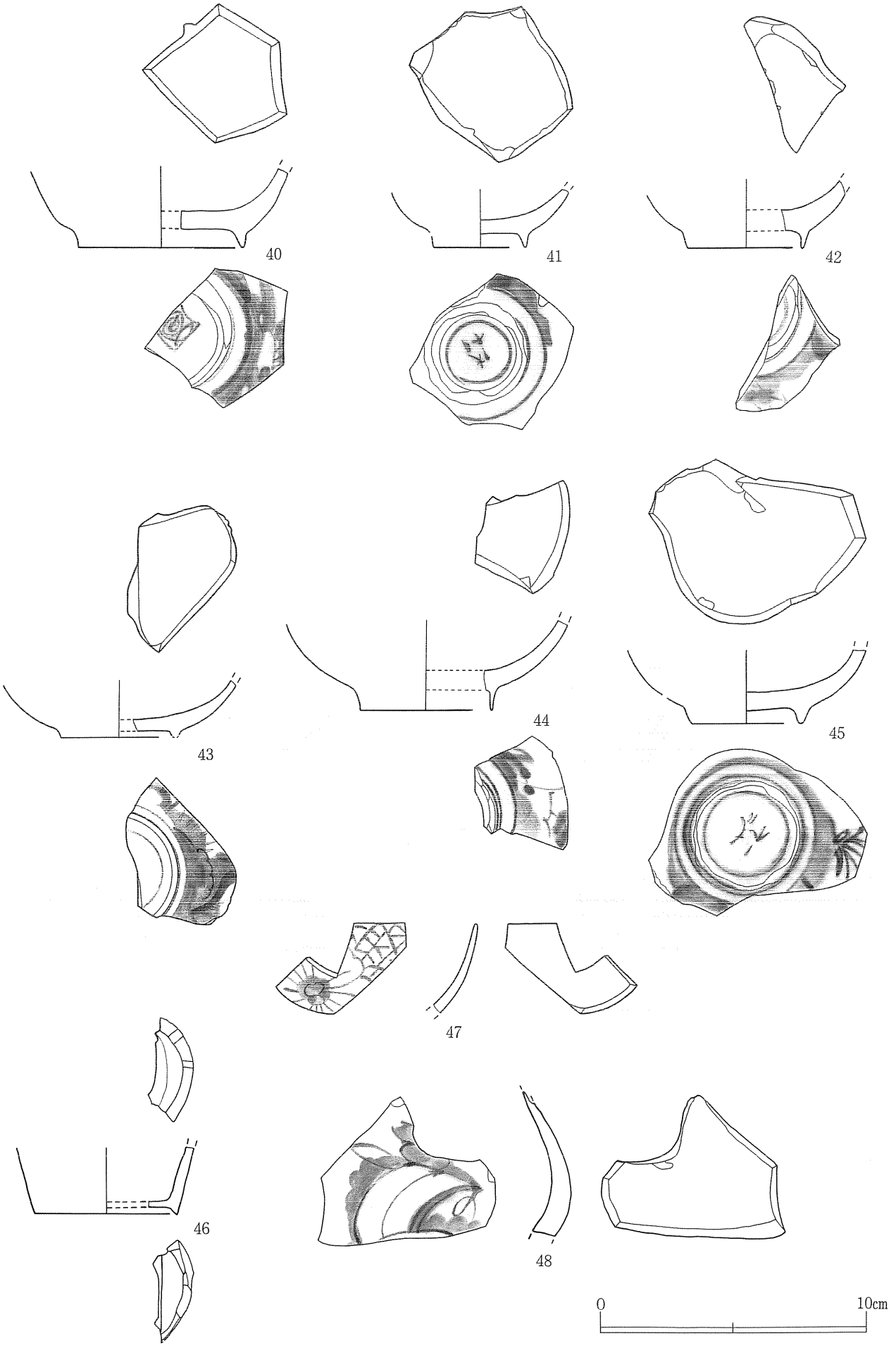


0　10cm

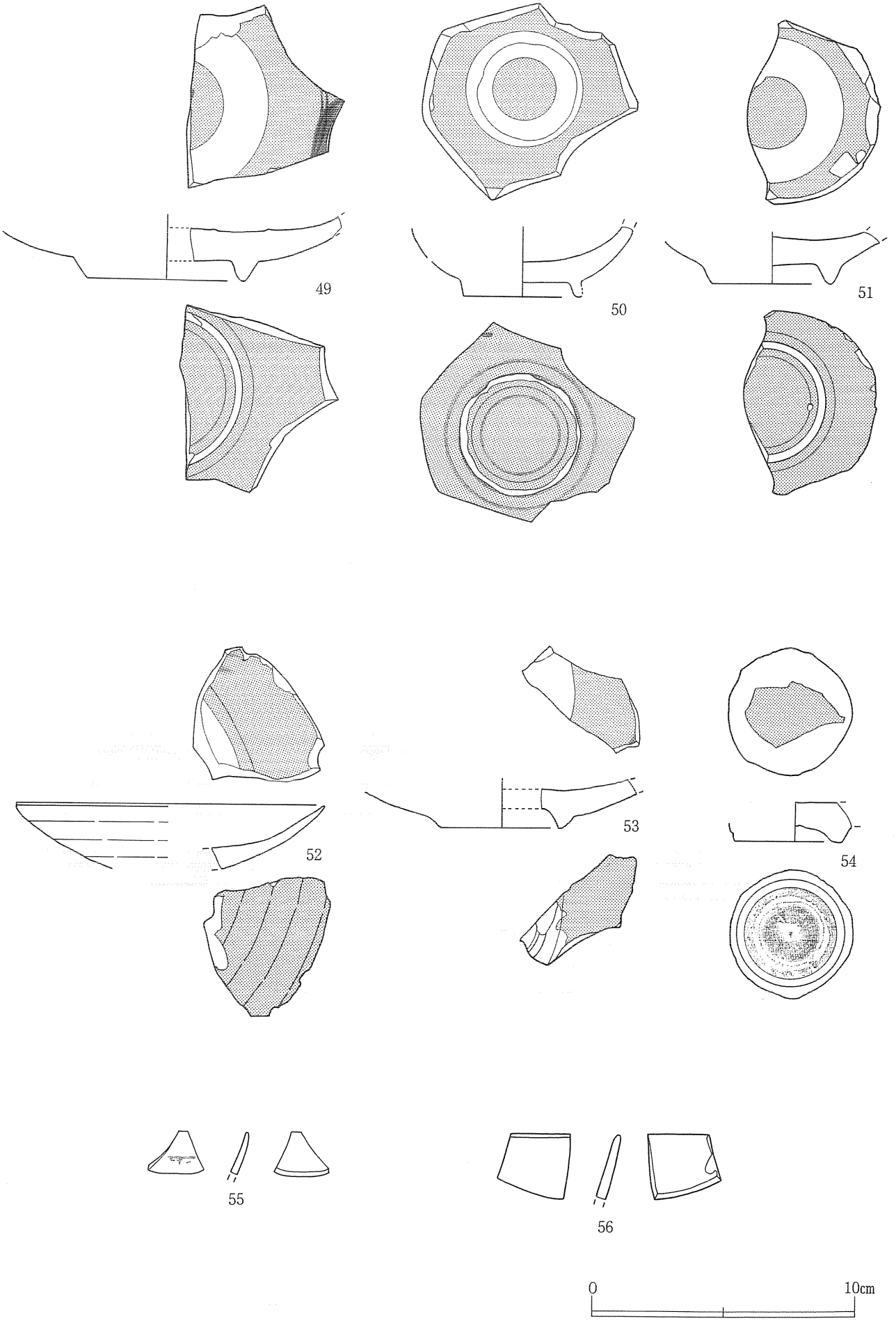
第79図　陶磁器（４）



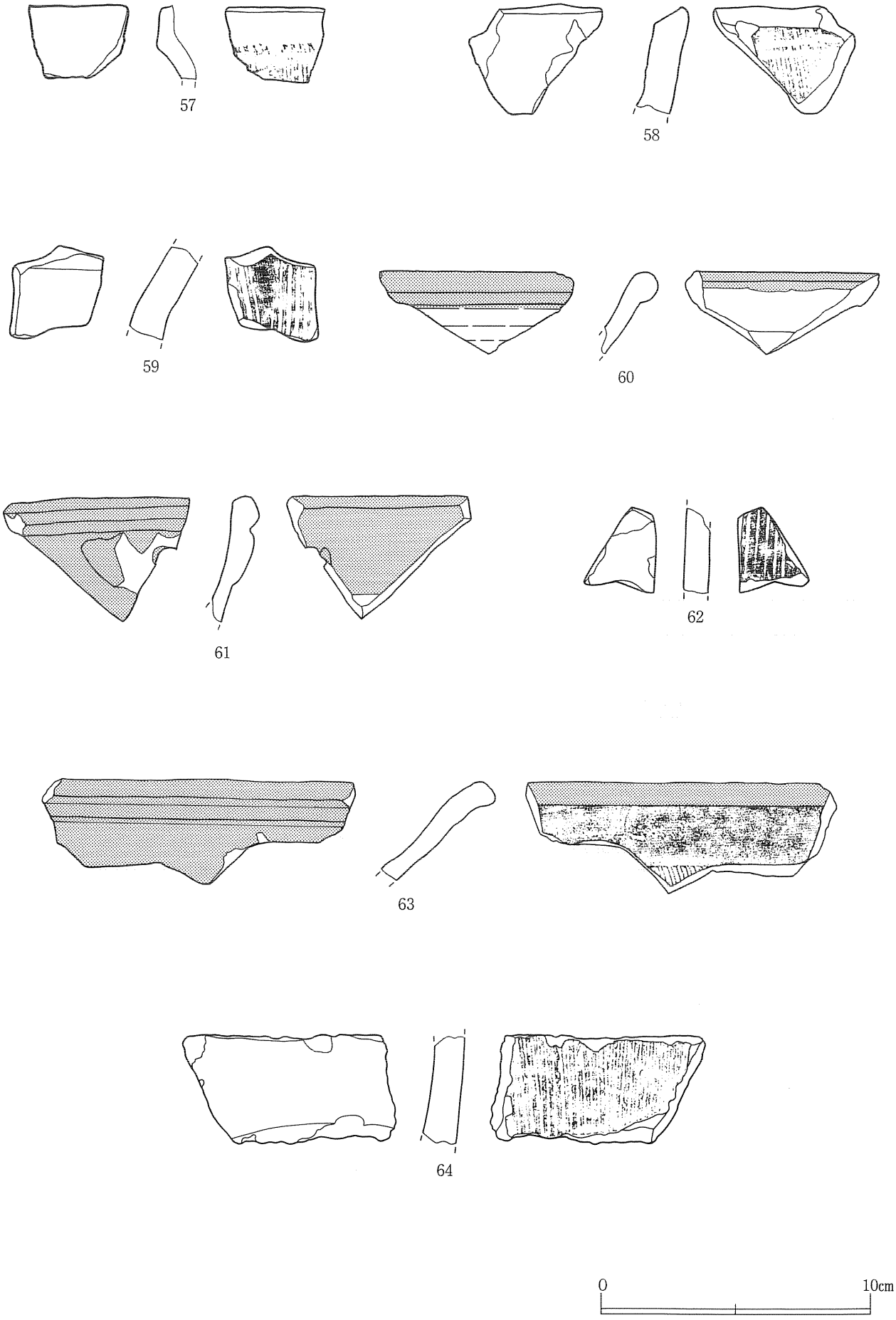
第80図　陶磁器（５）



第81図　陶磁器（６）



第82図　陶磁器（７）



第83図　陶磁器（８）

第11表　陶磁器観察表（１）

挿図番号	出土地点	産地	器種	文様	時期	備考
76－１	ＳＤ01	景徳鎮		裏は唐草文	16世紀前半～中葉	口縁外反り
2	ＳＦ05	景徳鎮		龍か獅子	16世紀後半	内弯
3	ＳＤ01	景徳鎮		枝と鳥、裏は角福	16世紀後半	内弯
4	ＬＴ48	福建系		蕉葉文	16世紀中葉～末葉	酸化気味で焼成不良
5	ＭＩ52	福建系		蓮華文	16世紀後半～17世紀初頭	染付の下に化粧掛け、被熱
77－６	ＳＤ04	瀬戸・美濃	天目茶碗		後Ⅳ期（新）	
7	ＬＰ51	瀬戸・美濃	天目茶碗		後Ⅳ期（新）か	
8	ＬＲ52	瀬戸・美濃	天目茶碗		後Ⅳ期（新）か大窯２	
9	ＬＳ49	瀬戸・美濃	天目茶碗		大窯１	灰釉流し
10	ＬＱ50	瀬戸・美濃	天目茶碗		大窯１	
11	ＬＲ49	瀬戸・美濃	天目茶碗		大窯２か	
12	ＬＱ53	瀬戸・美濃	天目茶碗		大窯２	
13	ＳＤ04	瀬戸・美濃	天目茶碗		大窯３	
78－14	ＬＯ40	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯１か２	
15	ＳＫＩ137	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯２	
16	ＬＱ40	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯２	
17	ＬＲ49	瀬戸・美濃	灰釉内禿皿		大窯３	
18	ＭＢ51	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯２	
19	ＭＧ53	瀬戸・美濃	灰釉丸皿	印花文	大窯２	
20	ＬＰ46	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯２	
79－21	ＭＡ57	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯２	
22	ＬＰ53	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯２	
23	ＳＫ127	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯２	
24	ＬＮ45	瀬戸・美濃	灰釉丸皿		大窯２か３	
25	ＬＱ44	瀬戸・美濃	灰釉丸碗か		大窯１～３	
26	ＭＢ52	瀬戸・美濃	灰釉丸皿			
27	MA52、53	瀬戸・美濃	灰釉丸皿			
80－28	ＭＥ53	肥前	染付碗	半菊文	1630～1640年代	初期伊万里
29	ＭＪ51	肥前	染付瓶		17世紀中葉	
30	ＬＭ45	肥前	染付	山水文	17世紀中葉	
31	ＬＤ46	肥前	皿	笹	17世紀中葉	
32	ＭＪ49	肥前有田	染付皿		1655～1670年代	ハリ支え
33	ＭＢ52	肥前	染付碗	植物	17世紀末葉～18世紀前半	
34	ＬＯ47	肥前	染付碗		17世紀末葉～18世紀前半	コンニャク印版
35	ＬＱ50	肥前	染付小碗	雨降り文	18世紀前半	

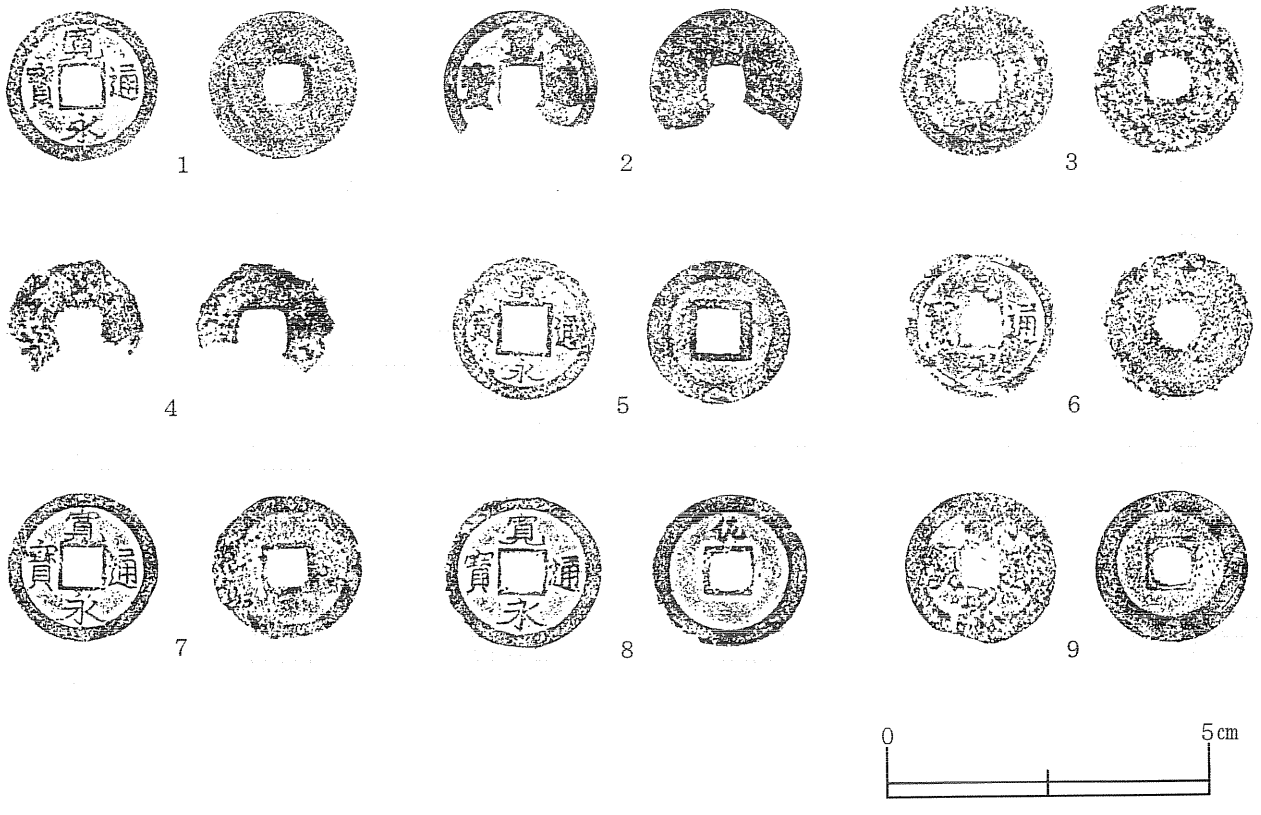
第12表　陶磁器観察表（２）

挿図番号	出土地点	産地	器種	文様	時期	備考
80－36	ＭＤ43	肥前	染付碗		18世紀前半	
37	ＬＳ51	肥前	染付碗	樹文	18世紀前半	
38	ＭＩ51	肥前	染付皿		18世紀	
39	ＭＩ53	肥前	染付碗		18世紀前半	
81－40	ＭＢ51	肥前	染付碗	裏銘は渦福	18世紀前半	
41	ＭＩ50	肥前	染付碗	裏銘は大明年製	18世紀前半頃	
42	ＬＰ49	肥前	染付碗		18世紀前半	
43	ＭＢ53	肥前	染付	岩と草花	18世紀前半頃	
44	ＭＤ45	肥前	染付碗		18世紀前葉～中葉	
45	ＭＬ51	肥前			18世紀前葉～中葉	
46	ＭＫ48	肥前	白磁か		18世紀前半	蕎麦猪口
47	ＭＨ57	肥前	染付碗	氷列文	18世紀前葉～中葉	
48	ＭＨ50	肥前	染付碗		18世紀前葉～中葉	
82－49	ＭＩ49	肥前	染付皿		18世紀中葉～末葉	アルミナ砂
50	ＬＳ45	肥前	染付碗		18世紀前葉～中葉	光沢あり、上塗なし
51	ＭＥ54	肥前	碗		18世紀後半	
52	ＭＨ53	肥前	染付皿		18世紀	
53	ＬＰ45	肥前	染付皿		18世紀	
54	ＭＣ41	肥前	染付皿		18世紀	
55	ＭＬ53	肥前	皿		18世紀	酸化気味
56	ＭＨ55	肥前	碗		18世紀	
83－57	ＭＡ48	越前	摺鉢		15世紀～16世紀	
58	ＬＮ45	越前			15世紀～16世紀	
59	ＭＡ45	備前	摺鉢		16世紀	
60	ＭＩ51	肥前	摺鉢		17世紀後半	玉縁　鉄釉を口にのみ掛ける
61	ＭＧ55	肥前	片口鉢		17世紀後半～18世紀前半	外…刷け目か
62	ＭＤ47	肥前系	摺鉢		18世紀～19世紀	叩き成形か
63	ＬＲ51	肥前系	摺鉢		18世紀～19世紀	
64	ＭＧ56	大阪の堺	摺鉢		18世紀～19世紀	備前の流れをくむ

（２）銭貨（第84図１～９、図版47）

本遺跡では、遺構内外より９枚の銭貨が出土した。うち２枚は塚出土（塚の項で記述）であり、他の７枚は遺構外であるが、塚の位置する調査区南部に集中することから、これに何らかの関連をもつ資料と思われる。銭名は判読不能の４を除く８枚が、江戸時代に流通した「寛永通寶」であり、背に（銭の裏）には、８にのみ「佐」の文字が陽刻されている。「佐」は新潟県佐渡相川で鋳造（初鋳：享保２年＝1717年）された銭であることを示している。

ＳＹ170塚出土の１は、「永」字の末画が大きく跳ね上がる特徴から、現在の秋田市川尻（秋田刑務所近辺）に銭座を構え鋳銭した秋田川尻銭と判断される。同銭は元文３年（1738）を初鋳とし、延享２年（1745）に鋳銭が中止されている。銭貨は盛土内から出土していることから、塚の構築時期は18世紀第２四半期か、これ以降となるであろう。



第13表　出土銭貨一覧表

番号	出土地区	量　　目	直　径	番号	出土地区	量　　目	直　径
1	ＳＹ170	2.2	2.4	6	ＭＢ 53	2.7	2.4
2	ＳＹ171	1.6	2.35	7	ＭＣ 42	2.3	2.35
3	ＬＱ 36	2.5	2.4	8	ＭＣ 42	3.2	2.4
4	ＭＡ 52	1.2	測定不能	9	ＭＣ 42	3.0	2.4
5	ＭＢ 41	2.0	2.3	※量目単位：ｇ、直径単位：cm			

第84図　銭　　貨

第５章　自然科学的分析

第１節　火山灰分析、放射性炭素年代測定結果

株式会社　古環境研究所

１．火山灰分析

（１）はじめに

秋田県域には、鳥海火山や十和田火山さらに秋田駒ヶ岳、寒風山、目潟などの第四紀火山が分布している。そして後期旧石器時代以降の地層や土壌の中には、これらの火山のほかに北海道の洞爺火山、さらには九州地方の阿蘇火山や姶良火山などの噴火に由来するテフラ(火山砕屑物，いわゆる火山灰)が分布している。したがって秋田県域では、これらのテフラを利用して地層の層位など知ることができるようになっている。これらテフラの中には、理化学的な年代測定をはじめとする多くの手法により噴出時代が明らかにされた示標テフラがあり、これらを過去の時間と空間の軸として編年を行う火山灰編年学(テフロクロノロジー)が考古学的な編年研究においても盛んに利用されている。

鷹巣町脇神館跡の発掘調査でもテフラ粒子が検出されたことから、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試み、土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。

（２）屈折率測定

①測定試料と測定方法

調査分析の対象となった試料は、発掘調査担当者により採取されたＭＤ56グリッドの軽石(試料番号８)およびＭＤ58グリッドの火山灰砂層(試料番号９)の２試料である。測定は位相差法(新井，1972)による。

②測定結果

屈折率の測定結果を第14表に示す。試料番号８(ＭＤ56グリッド)には、軽石が比較的多く含まれている。色調は黄白色で、最大径は1.5㎜である。火山ガラスの屈折率(ｎ)は、1.506－1.510である。また重鉱物としては、斜方輝石のほかに単斜輝石が認められる。含まれる斜方輝石の屈折率(γ)は1.706－1.708である。

この軽石は、火山ガラスの屈折率、重鉱物の組み合わせ、さらに斜方輝石の屈折率などから、十和田火山起源と考えられる。層位学的および考古学的な資料にかけていることから示標テフラとの同定は非常に難しいが、遺跡の位置を考慮すると、約1.2～1.3万年前の十和田八戸テフラ(To-HP，Hayakawa、1985，町田・新井，1992)やそれに連続して噴出した八戸火砕流堆積物(To-H，Hayakawa、1985，町田・新井，1992)あるいは3.3万年前以前の十和田大不動火砕流(To-Of，Hayakawa、1985，町田・新井，1992)に由来する可能性が考えられる。

試料番号９(ＭＤ58グリッド)には、軽石が多く含まれている。色調は白色で、その最大径は4.0㎜である。火山ガラスの屈折率(ｎ)は、1.501－1.504である。また重鉱物としては、斜方輝石のほかに単斜輝石が認められる。含まれる斜方輝石の屈折率(γ)は1.706－1.708である。このテフラ粒子は、915年に十和田火山から噴出した十和田ａ火山灰(To-a，大地，1972，町田ほか，1981)、あるいは同じ噴火活動で発生した毛馬内火砕流堆積物(内藤，1966，町田ほか，1981)に由来する可能性が大きいと考えられる。

いずれにしても、分析者が現地の土層断面を観察記載する機会を得ることがなかったことから、試料の散状や層位に関する資料を多く持ち合わせていない。したがって、詳細についてのコメントは難しいが、少な

くても後者については資料の岩相などから、To-a または毛馬内火砕流堆積物の水成再堆積層と考えられる。したがって、その堆積年代は915年以降と推定される。

（３）小結

脇神館跡において採取された２試料について屈折率測定を行った。その結果、いずれも十和田火山起源のテフラ粒子あるいはテフラ粒子が含まれていると推定された。とくにＭＤ58グリッドの砂層中のテフラ粒子については、915年に十和田火山から噴出した十和田ａ火山灰（To－a）、あるいは同じ噴火活動で発生した毛馬内火砕流堆積物に由来すると考えられ、試料の堆積年代は915年以降と推定された。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定ーテフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀　研究，11，ｐ.254－269.

Hayakawa, Y (1985) Pyroclastic geology of Toawada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo., 60, p.507-592.

町田　洋・新井房夫（1992）　火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

内藤博夫（1966）秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形．地理評，39，p.463-484.

大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11，ｐ.232-233.

第14表　脇神館跡における屈折率測定結果

試料	軽石				重鉱物	
	量	形態	色調	屈折率	組成	opx の屈折率
8	＋＋	pm	黄白	n:1.506-1.510	opx ＞ cpx	γ :1.706-1.708
9	＋＋＋	pm	白	n:1.501-1.504	opx ＞ cpx	γ :1.706-1.708

＋＋＋＋　：とくに多い，＋＋＋　：多い，＋＋　：中程度，＋：少ない，

－：認められない．　pm ：軽石型，　opx ：斜方輝石，cpx ：単斜輝石．

屈折率の測定は位相差法（新井，1972）による．

２．放射性炭素年代測定結果

（１）試料と方法

試料	採取地点	試料	前処理・調整	測定法
1	ＳＫＩ137	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成	β-線計数法
2	ＳＫ155	貝	酸によるエッチング ベンゼン合成 低濃度処理	β-線計数法
3	ＳＫ376	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	ＡＭＳ法
4	ＳＫ398	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成 低濃度処理	β-線計数法
5	ＳＷ13	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	ＡＭＳ法
6	ＭＡ44Ｇ	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成 低濃度処理	β-線計数法
7	ＭＡ48Ｇ	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成 低濃度処理	β-線計数法

（２）測定結果

試料	^{14}Ｃ年代	δ^{13}Ｃ (年 BP)	補正^{14}Ｃ年代 (‰)	暦年代 (年 BP)	測定 No (Beta-)
1	310±50	-27.0	280±50	交　点: AD 1650 2SIGMA: AD 1485 TO 1675, AD 1770 TO 1800, AD 1940 TO 1950 1SIGMA: AD 1525 TO 1560, AD 1630 TO 1665	101748
2	410±70	-6.0	720±70	交　点: AD 1285 2SIGMA: AD 1205 TO 1400 1SIGMA: AD 1206 TO 1305	101749
3	910±40	-21.3	970±40	交　点: BC 1035 2SIGMA: BC 1000 TO 1175 1SIGMA: BC 1020 TO 1055, BC 1090 TO 1150	101750

4	2940±70	-28.9	2880±70	交　点: BC 1020 2SIGMA: BC 1265 TO 855 1SIGMA: BC 1135 TO 930	101751
5	90±30	-22.7	130±30	交　点: AD 1695, 1725, 1815, 1920 2SIGMA: AD 1675 TO 1775, AD 1800 TO 1945 1SIGMA: AD 1680 TO 1745, AD 1805 TO 1935, AD 1890 TO 1905	101752
6	120±80	-24.6	120±80	交　点: AD 1700,1720, 1820,1855, 1860,1920 2SIGMA: AD 1650 TO 1950 1SIGMA: AD 1670 TO 1780, AD 1795 TO 1945	101753
7	390±60	-25.8	370±60	交　点: AD 1495 2SIGMA: AD 1430 TO 1655 1SIGMA: AD 1450 TO 1640	101754

①^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在(1950年ＡＤ)から何年前(ＢＰ)かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

②δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比(^{13}C/^{12}C)。この値は標準物質(ＰＤＢ)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

③補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

④暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年ＢＰより古い試料には適用できない。

⑤測定No.

betaは、アメリカのβ(ベータ)社の測定番号を示す。加速器はオランダのグローニンゲン(Groningen)大学の機器が用いられた。

第２節　炭化材の樹種、種実遺体の種類、貝類の種類、土坑への遺体埋納の可能性、平安時代の炉について、堆積層の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．分析目的および手法

（１）炭化材の樹種

中世の竪穴状遺構（ＳＫＩ137）から出土した炭化材について、樹種同定により樹種を明らかにし、用材選択に関する資料を得る。

（２）種実遺体の種類

ＳＫＩ137，ＳＫＰ212，ＳＢ274-Ｐ１・７の覆土中から取り上げられた種実遺体の種類を同定し、周辺植生および植物利用に関する資料を得る。

（３）貝類の種類

ＳＫＩ155覆土中から土壌とともに取り上げられた貝類の洗い出しおよび同定を行い、当該期の食生活に関する資料を得る。

（４）土坑への遺体埋納の可能性

各土坑（ＳＫ254，376，429）に遺体が埋納されたか否かを検討するため、覆土のリン・カルシウム分析を行う。

（５）平安時代の炉について

平安時代の炉に鉄滓があったか否かを検討するため、蛍光Ｘ線分析による主成分分析を行う。なお、分析元素はSiO_2，TiO_2，Al_2O_3，Fe_2O_3，MnO，MgO，CaO，Na_2O，K_2O，P_2O_5の10元素とした。

（６）堆積層の分析

ＭＤ58グリッドの堆積層３点（黒色土・焼土・砂質土）について、腐植の形成過程などを明らかにするため、腐植分析を行う。

２．炭化材の樹種

（１）試料

試料は、各遺構から出土した炭化材19点（試料番号１～19）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に第15表に記した。

（２）方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（３）結果

樹種同定結果を第15表に示す。試料番号１，２，８には２種類が認められた。また、試料番号16～18は樹皮であったため、種類の同定には至らなかった。これらの炭化材は、針葉樹１種類（ヒノキ科）、広葉樹２種類（クリ・モクレン属）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はスギ型、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・クリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc.)　　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互上に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・モクレン属(M agnolia)　　モクレン科

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および２～４個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～40細胞高。

・イネ科タケ亜科(Gramineae subfam. Bambusoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

第15表　炭化材の樹種同定結果

番号	試料内容	時代	用途など	樹種
1	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
				イネ科タケ亜科
2	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
				イネ科タケ亜科
3	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
4	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
5	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
6	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
7	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
8	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
				イネ科タケ亜科
9	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
10	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
11	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
12	ＳＫＩ137出土炭化物	中世	住居構築材？	ヒノキ科
13	ＳＫ398出土炭化物	平安時代	燃料材？	クリ
14	ＭＡ44グリッド出土炭化物		不明	ヒノキ科
15	ＭＢ48グリッド出土炭化物		不明	ヒノキ科
16	ＳＷ13出土炭化物	大正時代	燃料材？	樹皮
17	ＳＷ13出土炭化物	大正時代	燃料材？	樹皮
18	ＳＷ13出土炭化物	大正時代	燃料材？	樹皮
19	ＳＷ13出土炭化物	大正時代	燃料材？	モクレン属

３．種実遺体の種類

（１）試料

同定する試料は、計５点である。採取遺構などの情報は、同定結果と併せて表に記す。

（２）方法

試料には、水洗選別がすでに行われていたものも存在したが、種実の表面に多量の土壌が付着していたので、土壌試料と併せて、同様な処理を実施した。試料を数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、泥化させる。その後0.5㎜の篩を通じて水洗するが、炭化物はもろいので、水流を弱くかつ短時間で行うよう努めた。特に砂分が多い試料は、1.8に調整した塩化亜鉛水溶液中に投入し、浮遊してくる炭化物のみを回収することにより、砂分と炭化物を分離した。炭化物を風乾後、双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の抽出と同定を行う。さらに、種類によっては走査型電子顕微鏡による観察と写真撮影を行い、同定精度を高めた。

（３）結果

結果を第16表に示す。検出された種類はいずれも炭化している。検出された種類は、イネ、ヒエ(近似種)、ソバ、マメ類、アカザ科－ヒユ科である。以下に形態的特徴を記す。

・イネ(Oryza sativa L.)　イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。大きさは４㎜程度。胚が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。

・ヒエ近似種(cf.Panicum Crus-galli L. var. fru-mentaceum Trin.)　イネ科ヒエ属

炭化した胚乳ならびに穎が検出された。胚乳は大きさ１㎜程度。円盤状で、胚の存在した部分が欠如しているように見える。アワ、ヒエ、キビなどの雑穀類は、外見が近似していることから、炭化した胚乳からだけでは識別するのが難しく、穎の表面構造を詳しく調査する必要がある。今回は、試料番号23，24から検出された試料に内穎が付着している個体が存在したため、これらの一部について、表面を走査型電子顕微鏡で観察し、種の同定を試みた。穎の表面構造による、アワ、ヒエ、キビの区別は、松谷(1980，1984)などを参考にした。観察の結果、内穎表面の長細胞の形態は、長さと幅の比率はほぼ同じか幅の方が若干広いことがわかった。また、側壁は波状になり突出する(これを側枝とよぶ)が、側枝がきわめて長く、先端ほど細くなり、さらに側枝自体も波状の構造を示している。このような構造をもつ種類を、上記の報文を参考に検討すると、ヒエの形態に一致することから、観察を行った個体はヒエであると思われる。同一遺構から検出されていることを考慮すると、保存の悪い個体も含めて、すべてヒエである可能性が高いが、すべての個体について検討したわではないので、近似種とした。

・ソバ(Fagopyrum esculentum Moench)　タデ科ソバ属

炭化した果実が検出された。３稜があり、大きさは６㎜程度。果皮は菱形に近く、これが３枚組合わさっている。果皮は薄く、やや光沢がある。

・マメ類(Legumnosae)　マメ科

炭化した種子が検出された。大きさは７㎜程度。側面に一文字状の溝が存在する。大きさからいえば、アズキや小型のインゲンマメに近いが、現在の栽培種を古代のものにそのままあてはめるのは危険だとする考えもあることから(南木，1991)、ここではマメ類とする。

・アカザ科－ヒユ科(Chenopodiacese － Amaranthaceae)

種子が検出された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは１㎜程度。側面に「へそ」がある。表面は細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

第16表　種実遺体の同定結果

番号	試料内容	種　類	個数
20	SKI137覆土中	イネ	多数
		ヒエ近似種	2
21	SKI137覆土中	イネ	多数
22	SKP212覆土中	ヒエ近似種	塊状
		マメ類	多数
23	SB274-P1覆土中	イネ	35
		ヒエ近似種	多数
24	SB274-P7覆土中	イネ	多数
		ヒエ近似種	82
		ソバ	2
		マメ類	4
		アカザ科-ヒユ科	2

４．出土した貝類の種類

（１）試料

試料は、ＳＫ155覆土から採取された１点である。試料は、土壌と共に一括採取されている。

（２）方法

篩に試料を入れ、水洗により土壌を洗い流したのち、貝類を採取し乾燥させた。貝類の形態的な特徴を肉

眼で観察し、種類を同定する。

（３）結果

貝類は全てカワシンジュガイ(Margarififera　laevis)に同定された。本種類は淡水産の貝であり、食用となる。当時も食料として利用されていた可能性がある。

５．土坑への遺体埋納の可能性

（１）試料

試料は、ＳＫ254，376，429の覆土から採取された土壌試料３点(試料番号26～28)である。

（２）方法

・試料調整

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mm φのふるいを通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、４時間)により測定する。

・リン・カルシウムの測定

土壌標準分析・測定法委員会(1986)、土壌養分測定法委員会(1981)、京都大学農学部農芸化学教室(1957)を参考に以下の操作工程で行った。

風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO_3)約５mℓを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸($HClO_4$)約10mℓを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mℓに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量(P_2O_5mg/ｇ)とカルシウム含量(CaOmg/ｇ)を求める。

（３）結果

分析結果を第17表に示す。試料番号26、27、28のいずれにおいても、リン酸含量が3.0P_2O_5mg/ｇを越える値が得られた。一方、カルシウム含量は、試料番号26で3.36CaOmg/ｇという値が得られたが、他の２点はいずれも0.01CaOmg/ｇ未満であった。

第17表　リン・カルシウム分析結果

試料名	リン酸含量(P_2O_5mg/g)	カルシウム含量(CaOmg/ｇ)
26	3.69	3.36
27	6.62	0.01>
28	3.84	0.01>

注．リン酸、カルシウムの単位は、ともに乾土１ｇあたりのmgで表示。

６．平安時代の炉について

（１）試料

試料は、ＳＫ261(炉)内から採取された土壌試料１点(試料番号29)である。

（２）方法

測定は、以下に示す条件で行った。

・装　置

理学電機工業社製ＲＩＸ1000(ＦＰ法のグループ定量プログラム)

・試料調整

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜φのふるいを通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、４時間)により測定した後、振動ミル(平工製作所製ＴＩ100；10㎖容タングステンカーバイト容器)で微粉砕した(微粉砕試料)。この微粉砕試料をマッフル(電気炉)を用いて800℃で４時間焼成した後、ガラスビートを以下の条件で作成した。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491Ａ1)

溶剤及び希釈率；融剤(ホウ酸リチウム)5.000ｇ：試料0.500ｇ

剥離剤；LiI (熔融中２回投入)

溶融温度；1200℃　約７分

・測定条件

Ｘ線管；Cr (50Kv－50mA)

スペクトル；全元素 K_a

分光結晶；LiF,　PET,　TAP,　Ge

検出器；F-PC,　SC

計数時間；PeaK40sec,　Back20sec

（３）結果

分析結果を第18表に示す。最も高い値を示したのは SiO_2 で、60.09％であった。また鉄滓などに認められる Fe_2O_3 含有量は8.25％、TiO_2 含有量は0.90％であった。

第18表　主成分分析結果

試料名	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	(単位)
29	60.09	0.90	19.46	8.25	0.14	1.71	2.59	1.16	1.08	0.36	(wt％)

７．堆積層の分析

（１）試料

試料は、ＭＤ58グリッドの堆積層から採取された土壌試料３点(試料番号30～32)である。

（２）方法

・試料調整

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜φのふるいを通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、４時間)により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.50㎜φのふるいを全通させる(微粉砕試料)。

・有機炭素

微粉砕試料0.100～0.500ｇを100㎖三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Ｎクロム酸・硫酸混液10㎖を正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2％フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2Ｎ硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C％)を求め、1.724を乗じて腐植含量(％)を算出した。

・腐植の光学性

腐植の抽出は、炭素含量100㎎に相当する重量の微粉砕試料を100㎖容三角フラスコに正確に秤とり、0.5％NaOH (水酸化ナトリウム)溶液50㎖(炭素：液＝１：500)を加える。30℃で１時間振とうした後、0.1％高分

子凝集剤溶液１～２滴を加え、よく振り混ぜ、4000rpm(回転)、15分間の遠心分離で透明な抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液10mℓを50mℓ容メスフラスコにとり、水で定容とする。この時点で５倍に希釈され、NaOHの濃度は0.1%ととなる。この希釈溶液について400，600nmの吸光度を測定する。色が濃い場合には、600nmの吸光度が0.100近くなるように、0.1% NaOH溶液でさらに希釈する(測定は抽出後、３時間以内)。これら測定値からＣＤ値(Color Density)、⊿logＫ値を次の式で算出する。

・$\Delta \log K = \log K_{400} - \log K_{600} = \log(K_{400} / K_{600})$

・ＣＤ(抽出腐植原液の600nmの吸光度)＝600nmの吸光係数×希釈倍率

（３）結果

分析結果を第19表に示す。土色は、試料番号30が黒色の強い色を呈する。一方、試料番号31，32では黒色よりも黄色の色調がやや強く、明らかに土色が異なる。しかし、有機炭素量の結果では、顕著な差は認められない。一方、腐植の光学的特徴では、⊿logＫやＭＩ値に顕著な違いが認められる。

腐植の光学性からは、試料番号30はＡ型腐植酸のように腐植化度の最も高い腐植とみられる。一方、試料番号31，32の腐植は、Ｂ型腐植酸に類似する腐植化度とみられる。

⊿logＫ値：⊿logＫ値は、Ａ、Ｂ、Ｐ、ＲＰの腐植酸型(熊田，1981)を決定する際の⊿logＫと対応し、腐植化度の指標としてみることができる。例えば、Ａ型腐植酸は黒ボク土特有の腐植酸とされているが、その⊿logＫは他の型の腐植酸に比較して低く、腐植の面から見た他の土壌型との区分の重要な指標とされてきた。大羽・本名(1984)では、このＡ型腐植酸に分類される土壌をNaOH抽出液のみで抽出し、その⊿logＫ(今回と同じ手法による測定値)を数多く求めた結果、⊿logＫ≦0.650の場合にはそのほとんどがＡ型腐植酸に分類され、0.650を黒ボク土と非黒ボク土の判定基準としている。

第19表　腐植分析結果

試料名	有機炭素含量(%)	腐植含量(%)	⊿log K	ＣＤ(Color Density)	腐植酸型
30	12.56	21.65	0.59	12.6	A
31	4.11	7.09	0.60	8.8	A
32	0.76	1.30	0.60	4.2	A

ＣＤ値(Color Density)：ＣＤ値は、従来の腐植形態分析法(熊田，1981)による「腐植抽出割合×ＰＱ(抽出腐植中の腐植酸部の割合)×ＲＦ(腐植酸単位あたりの色の濃さ)」的性格をもつ指標で、ＣＤ値の高いものほど芳香属な構造に富み、ＣＤ値が低いものほど脂肪属な構造に富むといわれている(本名・山本，1992)。

〈引用文献〉

土壌標準分析・測定法委員会編(1986) 土壌標準分析・測定法．354p.，博友社．

土壌養分測定法委員会編(1981) 土壌養分分析法．440p.，養賢堂．

熊田恭一(1981) 腐植酸の化学的性質(２)．「土壌有機物の化学　第２版」，p43-79，学会出版センター．

京都大学農学部農芸化学教室編(1957) 農芸化学実験書 第１巻．411p.，産業図書．

松谷暁子(1980) 十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について．浦幌町郷土博物館報告，16，p.5-13．

松谷暁子(1984) 走査電顕像による炭化種実の識別．「古文化財の自然科学的研究」，p.631-637，同明舎．

南木睦彦(1991) 栽培植物．「古墳時代の研究　4　生産と流通」，石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編，p165-174，雄山閣．

本名俊正・山本定博(1992) 腐植の簡易分析法．日本土壌肥料学会編「土壌構成成分解析法」，p.7-35，博友社．

大羽　裕・本名俊正(1984) 黒ボク土判定のための腐植の分析法．土肥誌，55，p.55-61．

第３節　鉄滓・鉄器類の調査

新日鐵グループ
(株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ
釜石文化財保存処理センター

１．いきさつ

秋田脇神館跡出土鉄滓および鉄器類の分析を行い、それぞれの特徴を明らかにする。

２．分析試料および項目

分析試料は６点で、そのうち鉄滓①は140×90×60㎜で約550ｇの重さである。鉄滓②は100×100×40㎜で約610ｇの重量を有している。両鉄滓は平均的な箇所から分析試料を採取した。鉄器類３点(鉄斧・槍先・刀子)は、釜石文化財処理センターにて組織観察および成分分析用に採取された試片を用いた。また、金属玉は直径12㎜程度の大きさで、表面層から0.5㎜程の破片を採取し分析に供した。第20表に分析試料の一覧と分析項目を示す。

第20表　分析試料と分析項目

試料	出土場所	分析項目			
		外観観察	ミクロ組織	EPMA分析	成分分析
鉄滓①	SI107	○	○	○	○
鉄滓②	SI215	○	○	-----	○
鉄斧③	SI373	-----	○	-----	○
槍先④	SKI267	-----	○	-----	○
刀子⑤	SI428	-----	○	-----	○
金属玉	LL43	○	-----	○	-----

組織観察用試料は、真空下でエポキシ系樹脂に埋め込み組織を固定し後、粗研磨はエメリー紙で、仕上げ研磨はダイヤモンドペーストを用いて行った後、光学顕微鏡にて観察を行った。また、必要に応じEPMA(X線マイクロアナライザー)により鉱物相の判定を行った。なお、組織判定に用いた装置は以下の通りである。

光学顕微鏡　　NEW－NOVAX Ⅱ型(オリンパス社製)
EPMA　　CMA－733 型(日本電子社製)
　　印加電圧　　15kV
　　試料電流　　0.05 μA

一方、成分分析試料は超音波洗浄器を用いてエタノール中で土砂等の付着物を取り除き、乾燥後鉄鉢にて微粉砕し含有される元素の定量をJIS法に準拠して行った。

３．分析結果

(１) 鉄滓①(SI107)

第21表に成分分析値を示す。T・Feは50数％台と通常の鉄滓のレベルである。また、Tiは３％弱と高い値を示し砂鉄が使用されたことが判る。図版50は外観とマクロ・ミクロ組織を示す。表面は茶褐色を示し、一部には変質した粘土が付着している。鉱物相は灰色を示すウスタイト(FeO)・暗灰色で長柱状の結晶が

ファヤライト(2FeO － SiO_2)そしてマトリックスは非晶質珪酸塩である。図版51には、同試料の鉱物相のEPMA（X線マイクロアナライザー）による主要元素の分布写真を示す。灰色鉱物のウスタイト結晶中には、Ti が点状あるいは周囲に存在していることが観察される。また、僅かであるがチタン化合物が認められる。これは、砂鉄粒子中の Ti 分が反応によってマトリックス中に拡散して行く途中の組織とみなすことが出来る。

（２）鉄滓②(SI215)

第21表に成分分析値を示す。鉄滓①とほぼ同様の化学組成を示し、Ti 分も高いことから砂鉄が使用されたことが判る。図版52は外観とマクロ・ミクロ組織を示す。表面は茶褐色で椀型状の形状を示す。鉱物相は、ウスタイト・ファヤライト・非晶質珪酸塩と大きく結晶成長したチタン化合物から成る。

（３）鉄斧③(SI373)

第22表に成分分析値を示す。P が高く Cu ならびに Co がやや高めの値を示す。図版53には断面マクロおよびミクロ組織を示す。周囲および中心部は赤錆で、中心部は空孔となっている。黒錆は中間部に存在し、そこからは僅かに金属鉄が網目状に存在していることが観察される。しかし非金属介在物は見当たらない。

（４）槍先④(SKI267)

第22表に成分分析値を示す。特徴ある成分元素は見当たらない。図版54に槍先の断面マクロ・ミクロ組織を示す。周囲は錆化が進み一部に土砂を巻き込んでいる。黒錆層中には鉄斧と同様、僅かであるが金属鉄が網目状に残存しているが非金属介在物は見当たらない。

（５）刀子⑤(SI428)

第22表に成分分析値を示す。P が高く Cu および Co がやや高い値を示す。図版55は刀子の断面マクロ・ミクロ組織を示す。周囲および中心部は赤錆になっており、中心部には大きな空孔も存在する。黒錆層は中間部に僅かに存在する。この黒錆層からは僅かであるが金属鉄が残存するが非金属介在物は見当たらない。

第21表　鉄滓の成分分析結果（wt%）

試　料	T・Fe	M・Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MaO	TiO_2	K_2O
鉄滓①	54.0	0.45	57.3	13.6	17.2	3.12	1.39	1.25	2.86	0.95
鉄滓②	55.9	0.45	54.9	18.9	11.9	3.86	1.16	1.68	4.61	0.69

第22表　鉄滓の成分分析結果（wt%）

	T・Fe	P	Cu	Ni	Co	Ti
鉄斧③	71.4	0.180	0.010	0.005	0.026	0.006
槍先④	31.6	0.027	0.005	<0.005	<0.005	0.063
刀子⑤	61.3	0.084	0.014	<0.005	0.043	0.012

（６）金属玉(LL43)

第23表には金属玉の EPMA 半定量分析結果を、また図版56には外観および破片の電子像を示す。

第23表　金属玉の EPMA による半定量分析結果（wt%）

Si	Al	Mg	K	Cl	Fe	Cr	Cu	Sn	Pb	Ag
12.3	4.1	0.2	1.7	2.1	2.4	0.1	----	38.9	29.2	<0.1

表面は薄茶色を示し、全体にわたって土砂が薄く付着しており、微細な亀裂が無数に存在する。ほぼ、球形に近くその直径は約12mm φである。一方、EPMA による半定量分析の結果、検出された元素は Sn,Pb,Fe

等の金属成分とSi，Al，Mg等の土砂成分である。このうち、金属玉の主成分は濃度割合からみて、SnとPbとみなすことができる。SnとPbの割合をみると、第24表に示した如く金属玉は「半田」と判断される。

第24表

	Sn	Pb
半田の組成	60	40
金属玉の組成	57.1	42.9

4．まとめ

鉄滓2点、鉄器類3点および金属玉について分析した結果は以下の通りである。

（1）2種の鉄滓は、Ti分が高く砂鉄を使用したために生成した鉄滓である。

（2）両鉄の構成鉱物相は、ウスタイト(FeO)・ファヤライト($2FeO-SiO_2$)・チタン化合物および非結晶質珪酸塩から成る。

（3）鉄器類のうち、鉄斧および刀子はP，Coがやや高いことが特徴的である。しかし、槍先の成分からは特徴づける元素は見当たらなかった。

一方、金属鉄が殆ど残っておらず、介在物および金属組織からそれぞれの鉄器を特徴づけることは出来なかった。

（4）金属玉は「半田」の組成から成る。

以上

第6章　まとめ

脇神館跡の発掘調査は、県道木戸石鷹巣線建設事業に係った遺跡中央部について実施した。調査の結果、平安時代、中世、近世、近代の遺構が検出され、旧石器時代、縄文時代、平安時代、中世、近世などの遺物が出土した。旧石器時代、縄文時代については遺構が検出されなかったため、当該期における具体的な様子は不明である。したがって本章では、遺跡のあり方を示す資料が多い平安時代と中世について主に記述することにし、併せて近世の塚と近代の炭窯跡にも若干ふれてまとめとしたい。

1　平安時代

館が形成される前段階、すなわち古代(平安時代)の景観はどうであろうか。出土遺物がなく帰属時期を明確にできない遺構もあるが、大略としては、竪穴住居などで構成される集落が存在していたことに間違いはない。その時期は、遺構内外出土の土器組成の上から平安時代末葉に比定される。その土器組成とは、土師器では甕を主体としてわずかに把手付土器を伴うものの坏類は欠落し、少量の須恵器も甕・壺類のみで坏類は認められない。このような土器組成をもつ集落は、鹿角市太田谷地館跡[(1)]・下沢田遺跡[(2)]などで確認されており、ここでの年代観を援用しているものである。

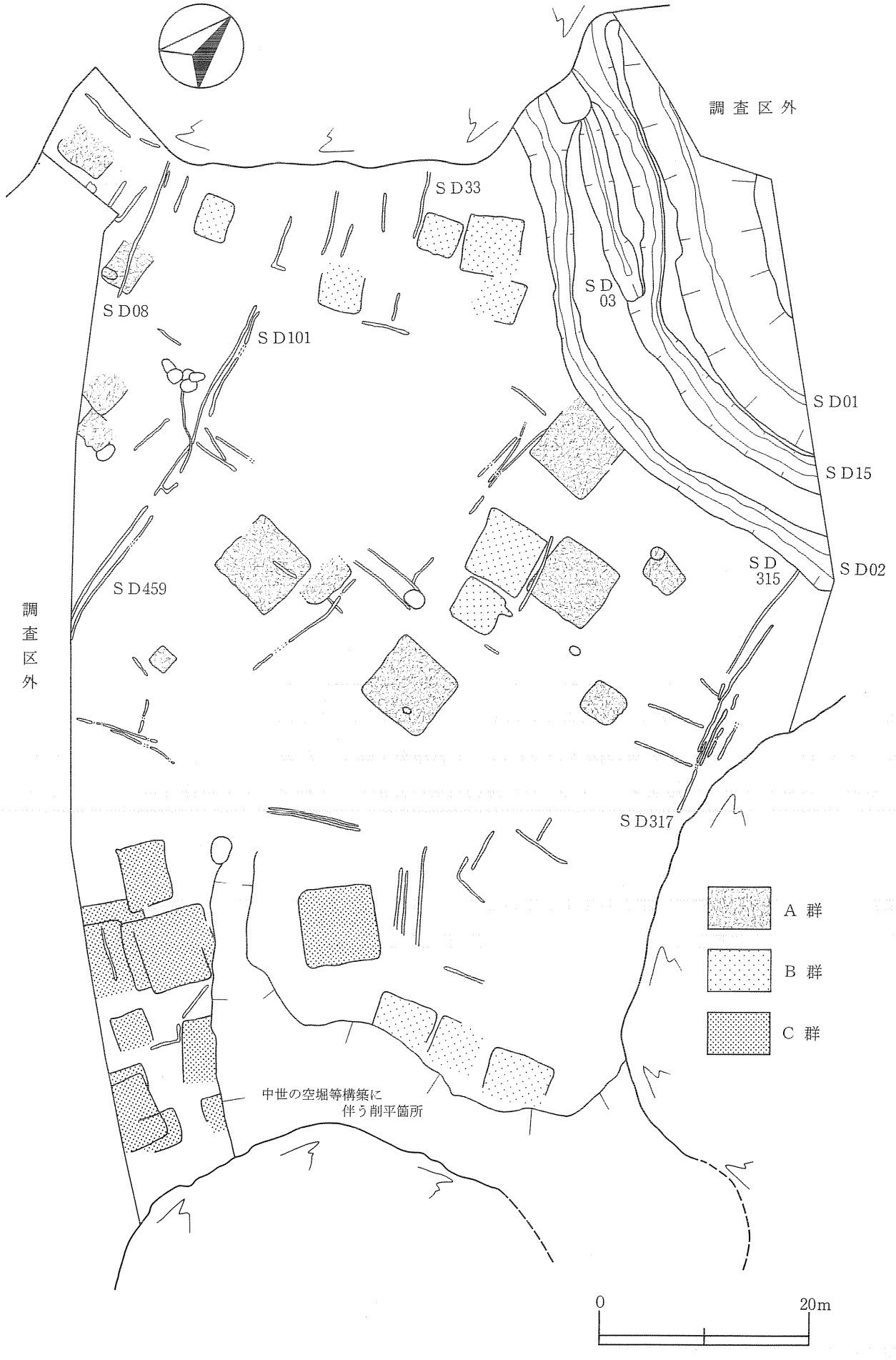
平安時代末葉(あるいは後葉)とされる時期の集落は前述2遺跡を含め、沖積面との比高が大きい台地上(多くは舌状台地先端部)に立地する傾向が強く、中世に見られるような大溝・空堀を伴う防御的集落も登場する[(3)]。太田谷地館では、小さな舌状台地基部に時期差はあるものの3条の空堀が緩い弧状に開削され、舌状先端部を居住域としている。このあり方は、まさに本遺跡北端部の4条の空堀と景観的に酷似し、調査区外の北端部側にも居住域を推定できる。

それでは脇神館の空堀も古代に構築された可能性はないのか。一般には空堀が検出された段階で「空堀は中世のもの」と思いこんでしまう。実際的には中世の空堀である事例が圧倒的に多いであろうが、先述の太田谷地館の空堀がこの原則をうち破った。古代においても中世の空堀と同形態の開削工事を行っていたのである。そこで、今一度脇神館の空堀を見てみよう。形態だけでは古代か中世かの識別できない。ただ空堀の確認状況から調査区北端部のＳＤ02・03・15の3条だけは完全に埋没しており、残り5条の堀は程度の差はあれ開口していた。さらに前3条では中世期の遺物は出土していない。このことから断定はできないものの、少なくとも北端部の3条の堀は古代に属する可能性がある、と推測できる。なお配置的に見て、現況において開口していたＳＤ01についてもその構築時期は古代に遡るかもしれない。

以上のことから、平安時代の脇神館は、竪穴住居跡、空堀(一部)、溝跡、土坑(土師器・須恵器出土)、竪穴状遺構・焼土遺構(一部)などで構成される集落であったと考えられよう。

さて、土器組成から見た脇神館集落は、その存続時期が限定されそうであると言えるかもしれないが、調査区南端部での竪穴住居の重複などから、一定期間の存続は明確である。ところが住居全体の配置を通覧すると、住居どおしの重複は比較的少ない。このことは、集落・住居の変遷を推定する上での障害となる。本集落の分析にあたっては、竪穴住居跡の規模や構造(カマド・壁溝・ピットなど)に視点をおいた方法が考えられる。一方で竪穴あるいは溝跡の軸線方向からグルーピングすることで導き出される情報もあろう。ここでは後者の視点でまとめてみたい。

まず竪穴住居の中軸線を求めていくと、ばらつきはあるものの次の3群に分けられる。



第85図　古代の遺構概略図

A群：主軸方位がほぼ南－北となる遺構、ＳＩ112・148・268など11軒が該当する。

B群：主軸方位が西に20～30°振れる遺構、ＳＩ192・223・271など10軒が該当する。

C群：主軸方位が西に50°前後大きく振れる遺構、ＳＩ380・385・415など12軒が該当する。

また各群にはそれぞれ溝が伴うようであり、たとえば調査区東端部（ＳＤ315・317など）と西部（ＳＤ101・459など）はその方向性からA群あるいはB群に、北西端部の溝（ＳＤ08・33など）はB群に帰す施設であった可能性がある。このように群別すると、A群は調査区中央部で東西方向に点在し、B群は調査区北西端部、中央部、南東部の３箇所に分散し、C群は調査区南西端部にのみ分布を示し、それぞれが排他的に位置させているとも見て取れる（第85図）。

現段階ではこれ以上言及する材料を持たないが、集落の変遷については出土遺物の検討と合わせて、今後再構成していきたいと考えている。

最後に出土遺物のうち、把手付土器と須恵器甕転用硯について若干ふれておきたい。

把手付土器は、前述の太田谷地館跡・下沢田遺跡など秋田県内では米代川上流域の鹿角地方（鹿角市、小坂町）の数遺跡でのみ出土する地域性の強い遺物とされていた。ところが平成７年に二ツ井町教育委員会が発掘調査を実施した加代神館跡[4]で把手付土器が出土し、米代川中流域にもこの種の遺物が分布することが明らかとなった。その後、鷹巣町法泉坊沢Ⅱ遺跡[5]及び本遺跡でも追認された経緯がある。この土器は、形状から他器種との識別は容易だが、用途については「鍛冶施設及びその作業に使用される道具[6]」と想定する報告もあるが決しているわけではない。鉄生産関連の遺物とする根拠は、精（製）錬あるいは鍛冶関係の遺構が検出される遺跡である点とこの土器が二次的に火熱を受けている事例が多い点であろう。確かに後者は本遺跡においてもあてはまるが、前者については、この時期この地域の集落には粗密はともかく何らかの鉄関連の遺構が見られるのが一般的であり、この点から言えばその用途については再考の余地はあると考える。

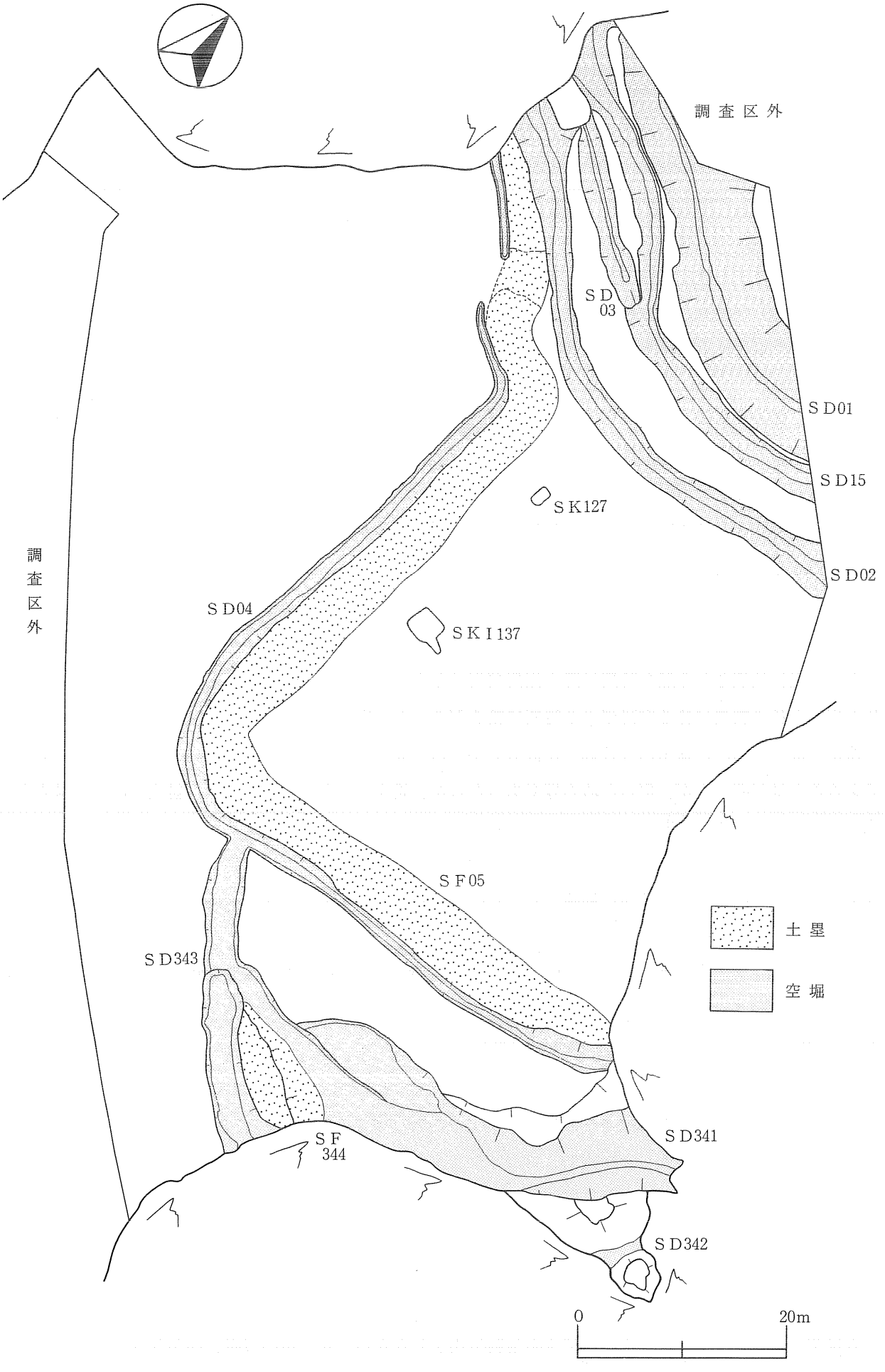
またＳＩ406竪穴住居跡出土の第73図２の遺物は、須恵器甕を転用した硯と見る[7]。大甕（破片）を円形に加工・整形し、内面を研磨して硯面としている。ただ墨の付着は認められず硯としての機能は果たしていなかったと判断される。同様の出土例は、県内では小坂町はりま館遺跡[8]、鹿角市歌内遺跡[9]、能代市福田遺跡[10]、鷹巣町伊勢堂岱遺跡・河辺町上野遺跡[11]にある。はりま館の事例は土師器坏を転用（内面が硯面）したものであるが、本遺跡を含めいずれも竪穴住居跡から出土していることが共通する。各遺跡での須恵器の組成・出土量から推測すると、遺跡内で製品に加工したのではなく、硯（硯との認識の有無は不明）として各集落に搬入された品と考える。

2　中世

中世の遺構としては空堀、土塁、竪穴状遺構、土坑などが検出された（第86図）。ＳＢ274掘立柱建物跡についてもピット内より中世遺構（ＳＫＩ137）に伴って出土した炭化米・雑穀が認められることから当該期とすることができるかもしれない。

空堀は８条検出されたが、前述のように遺跡北端部に位置する４条（ＳＤ01・02・03・15）は古代に遡る可能性を指摘した。ただ明らかに中世と判断されるＳＦ05土塁は、その北部でＳＤ02に沿うように構築されていることから、中世期においてもＳＤ02は開口していたと見ることができる。このことは古代に構築された堀を中世においても使用していた可能性を示すことにもなり、現況において凹状を呈していたＳＤ01にも当てはまろう。

土塁のうち、調査区中央部でＬ字状に構築されるＳＦ05は、その盛土中より16世紀後半代の中国産磁器（第



第86図　中世の遺構概略図

76図2)が出土したことから当該期と判断された。一方、南部で確認されたＳＦ344は遺物の出土はなかったが、ＳＦ05と同時期のものとしておきたい。なおＳＦ05出土の磁器は染付皿であり、見込みに龍か獅子を意匠とした文様が認められる。同様の皿は青森県浪岡町浪岡城跡[12]でも出土している。

竪穴状遺構はＳＦ05土塁の東側、ＬＴ49・ＭＡ49グリッドの地山面で検出されたＳＫＩ137の１基のみである。平面プランが隅丸方形で、その東壁南寄りに細長い出入口が設けられている。竪穴内からは柱、板材、屋根に葺いた萱などが出土した。また炭化米や雑穀(ヒエ・豆類)が多く出土したことから、食糧を蓄える倉庫として作られたものと考えられる。さらに確認面から深さ70㎝下の面には炭化材が敷かれたように検出され、部分的に壁際でも横方向に板のような炭化材が見つかっている。覆土は堅くしまっており、その中には藁状の炭化したものや焼土が含まれていた。おそらくこの竪穴は火災にあったものと考えられる。なお、覆土中から16世紀後半にあたる瀬戸・美濃産の陶器が出土していることから、構築時期はＳＦ05と同時期であると判断される。

このような竪穴状遺構が検出された城館跡には、二ツ井町竜毛沢館跡[13]、鹿角市妻の神Ⅲ遺跡[14]・乳牛平遺跡[15]・小豆沢館跡[16]・新斗米館跡[17]などがあげられる。

脇神館跡がいつの頃の中世城館であるかは、土塁・竪穴状遺構及びその周辺から出土した陶磁器の年代によって、戦国時代の初め(約450年前)には使用されていたと思われる。しかし、いつ、誰が何を目的として造り、いつまで使われた城館なのかははっきりしない。

3　中世以降

土塁・空堀に代表される館の時期以降の空間利用はどうなっているのか。おそらく近世(江戸時代)に構築された塚と近代の製炭に係る窯構築の２時期に動きがあったと思われる。

本遺跡３基の塚は、台地南側の稜線上に直線的に並ぶ。調査の結果、内部に一切の施設を持たない盛土遺構であることは判明したが、何のための塚であったのか、見当がつかない。ただ塚の盛土内あるいは表土より銭貨が出土しており、時期については言及可能である。

ＳＹ170とした塚の盛土内から、秋田川尻銭とされる寛永通寶が出土している。同銭は元文３年(1738)から延享２年(1745)の限られた時期に鋳銭されたものであり、このことから塚の構築時期は、18世紀第２四半期かこれ以降と判断される。

寛永通寶を伴う塚の確認調査例は、大館市餌釣館跡(２基)、比内町中野円墳状遺構、田代町上岩瀬、秋田市一ツ森遺跡、横手市富ケ沢４号塚の５遺跡６基にある[18]。各塚の平面形状は、前３者が脇神例と同様に円・方墳状(一辺３～６ｍ台)に、後２者は長円状(長軸10ｍ以上)となる。ＳＹ170塚のように盛土中に銭貨が認められるのは、中野・上岩瀬・一ツ森であり、他はＳＹ171塚同様に表土層で銭貨が出土している。なお内部施設が確認できたのは、上岩瀬のみであり、石組の内部に錫杖・小刀などと共に銭貨が出土している。塚とは「人工的に丘状に盛り土した場所で、墓所とする説と祭り場だとする説[19]」がある。経塚・十三塚・一里塚などは出土遺物、塚の配置、文献などから築造の意図・目的・年代が比較的推測し易い。しかし冠の付かない「塚」は、どのように解すればよいのか。今まで引用した各塚について、その性格等に言及したものは少なく、富ケ沢４号塚では「江戸時代に構築された「地境」、もしくは信仰のための塚である可能性が高い[20]」と記すに留まる。

一方炭窯跡については、年代を特定できる遺物は出土しなかったが、窯の規模、構築法などから、大正時代末から昭和初期にかけてその構築・製炭が推奨された白炭窯(吉田窯)であったと思われる[21]。この窯には日

窯と日落窯の2種があり、前者は一日一回製炭を終わる窯を指し、窯の長軸(内法)は4尺または5尺となる。また後者は一回の製炭を終わるのに一昼夜以上を要する窯を指し、窯の長軸は6尺または7尺となる。本窯跡の長軸は1.8m(約6尺)であることから、日落窯であったようである。さらに窯の構造についても、現在吉田窯の築設法が文献として残っており、これを参照すると脇神館の炭窯が文献の記載に習って構築していることが分かる。同形態の炭窯跡は河辺町石坂台Ⅷ遺跡[22]でも調査されている。

以上のことから、今回の調査で脇神館跡は、旧石器時代、縄文時代前期・後期・晩期、平安時代末葉、中世(戦国時代)、近世、近代の複合遺跡であることが判明した。特に平安時代の終わり頃の集落の様子や、中世城館の構造を知る上で貴重な資料を得ることができた。

註

1　秋田県教育委員会「太田谷地館跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1988(昭和63年)

2　鹿角市教育委員会『下沢田遺跡発掘調査報告書』1984(昭和59年)

3　高橋　学「秋田県における平安時代の防禦集落」『考古学ジャーナル』387　1995(平成7年)

4　二ツ井町教育委員会「加代神館跡」『東北電力(株)北奥幹線新設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1996(平成8年)

5　秋田県教育委員会『法泉坊沢Ⅱ遺跡』1998(平成10年)

6　註2文献　p113

7　この種の硯は、猿面硯とも呼ばれることもあるが、研究者により須恵器甕などの破片を転用した硯である説と、当初から意識的に硯として製作されたとする説が示され、議論が分かれている。

奈良国立文化財研究所「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』41　1983(昭和58年)

8　秋田県教育委員会『はりま館遺跡発掘調査報告書』1990(平成2年)

9　秋田県教育委員会「歌内遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』1982(昭和57年)

10　秋田県教育委員会「福田遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1989(平成元年)

11　両遺跡とも秋田県教育委員会が発掘調査を実施した遺跡(伊勢堂岱：平成7年、上野：平成9年)であり、未報告。

12　浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ⅴ』1983(昭和58年) p119

13　秋田県教育委員会『竜毛沢館跡発掘調査報告書』1990(平成2年)

14　秋田県教育委員会「妻の神Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ』1984(昭和59年)

15　秋田県教育委員会「乳牛平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ』1984(昭和59年)

16　秋田県教育委員会「小豆沢館遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』1982(昭和57年)

17　鹿角市教育委員会『鹿角市新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書』1980(昭和55年)

18　高橋学「秋田県内出土の銭貨資料集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第11号　1996(平成8年)

19　宮田登「塚」『日本民俗事典』大塚民俗学会　1972(昭和47年)　p459

20　秋田県教育委員会「富ケ沢4号塚」『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書』1992(平成4年)

21　秋田山林会『木炭と其製造法』1923(大正13年)

22　秋田県教育委員会「石坂台Ⅷ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』1986(昭和61年)

報告書抄録

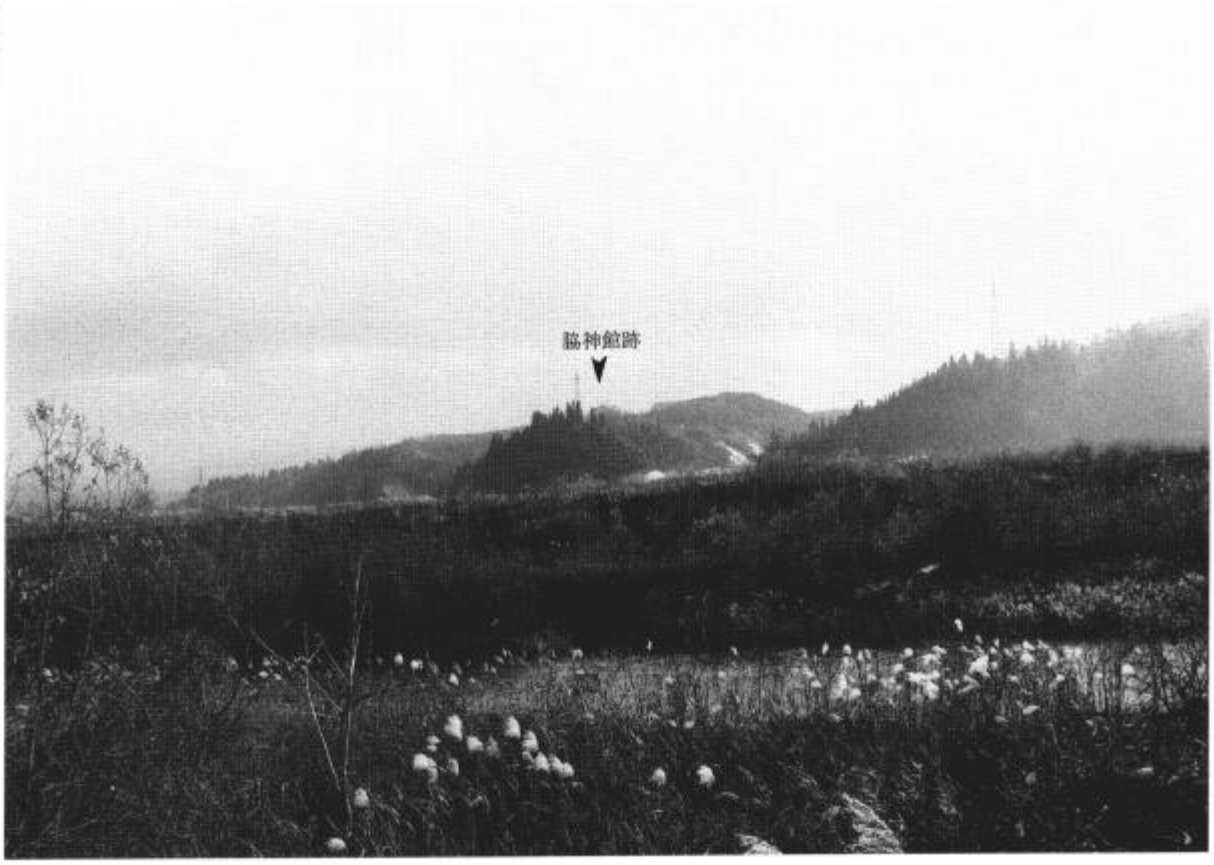
ふりがな	わきがみたてあと
書名	脇神館跡
副書名	県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
巻次	1
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第284集
編著者名	栗澤光男・高橋　学・熊谷　誠
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　　TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
わきがみたてあと 脇神館跡	あきたけんきたあきたぐん 秋田県北秋田郡 たかのすまちわきがみあざ 鷹巣町脇神字 たたらのさわ　ほか タタラノ沢31外	053210	—	40° 11′ 35″	140° 23′ 15″	19960513 ～ 19961115	8,090m²	県道木戸石鷹巣線建設事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
脇神館跡	散布地	旧石器時代	竪穴住居跡　33軒	旧石器	
		縄文時代	竪穴状遺構　4基	縄文土器・石器	
	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡　1棟	土師器・須恵器	
	城館跡	中世	柱穴様ピット　123基	陶磁器・銭貨	
		近世	土坑　79基	鉄製品・鉄滓	
		近代	集石　3基	炭化米・雑穀	
			焼土遺構　12基		
			溝跡　69条		
			空堀　8条		
			土塁　2条		
			塚　3基		
			炭窯跡　1基		
			性格不明遺構　1基		

1．調査区遠景上空から（西→東）

図版2



1．調査区遠景（北→南）

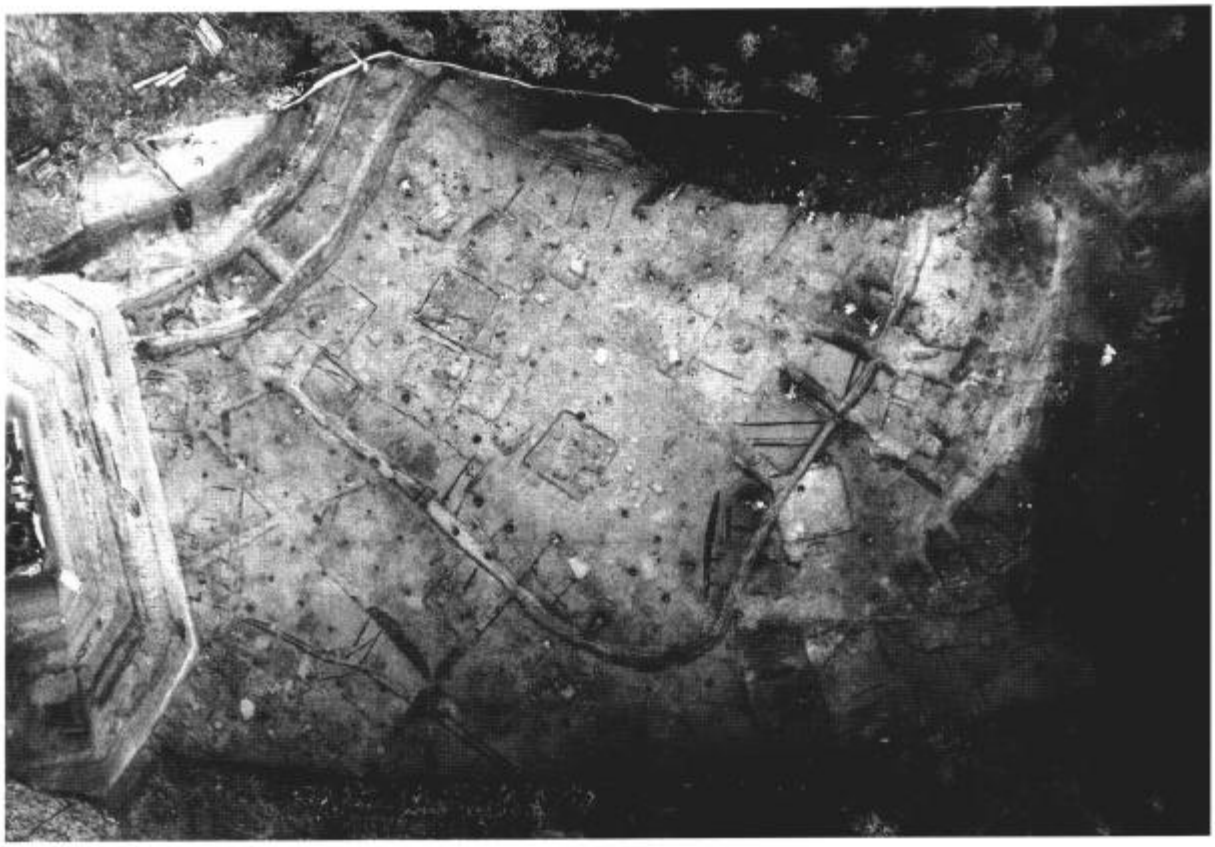
2．調査前全景上空から（東→西）

1．調査途中全景上空から（真上）

2．調査途中全景上空から（南→北）

図版4

1．調査後全景上空から（南東→北西）



2．調査後全景上空から（真上）

1．調査後北西部（東→西）

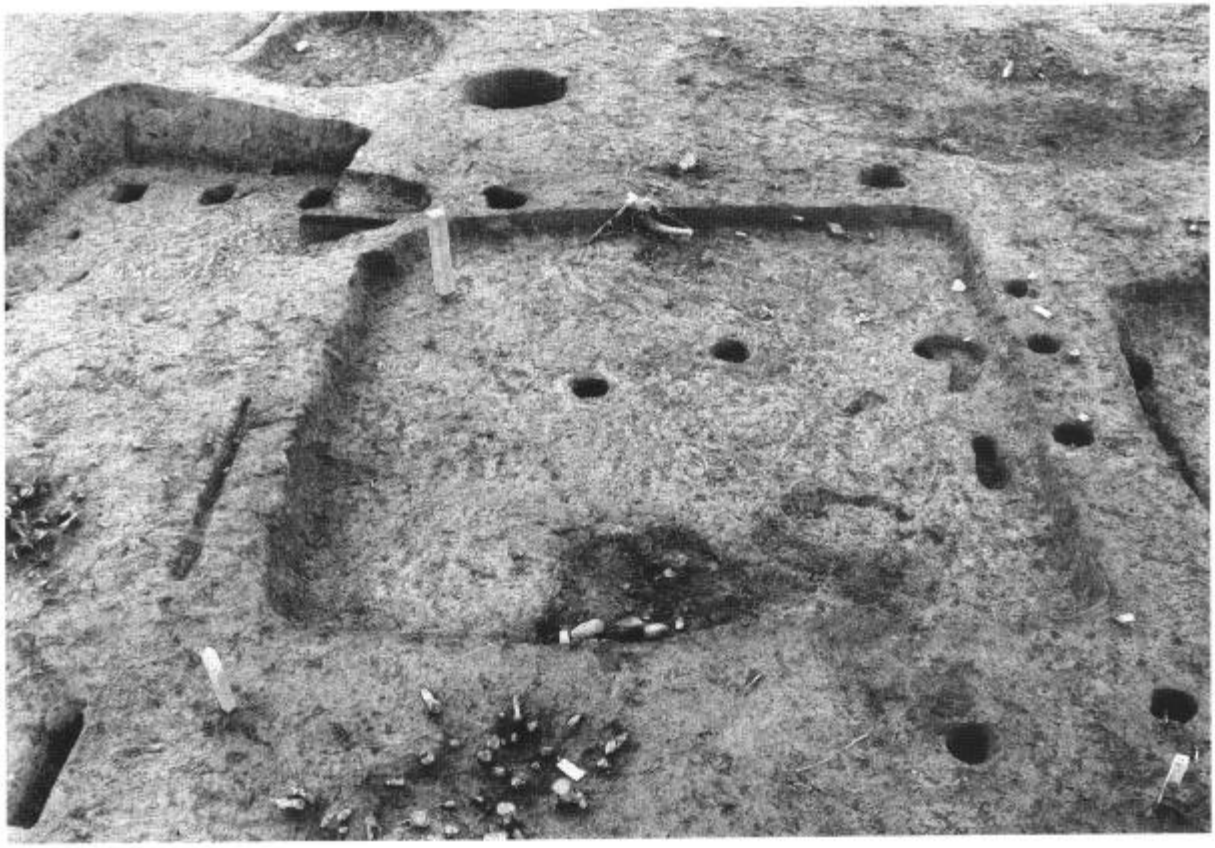
2．調査後北西部（北東→南西）

図版6

1．S I 11（東→西）

2．S I 130（真上）

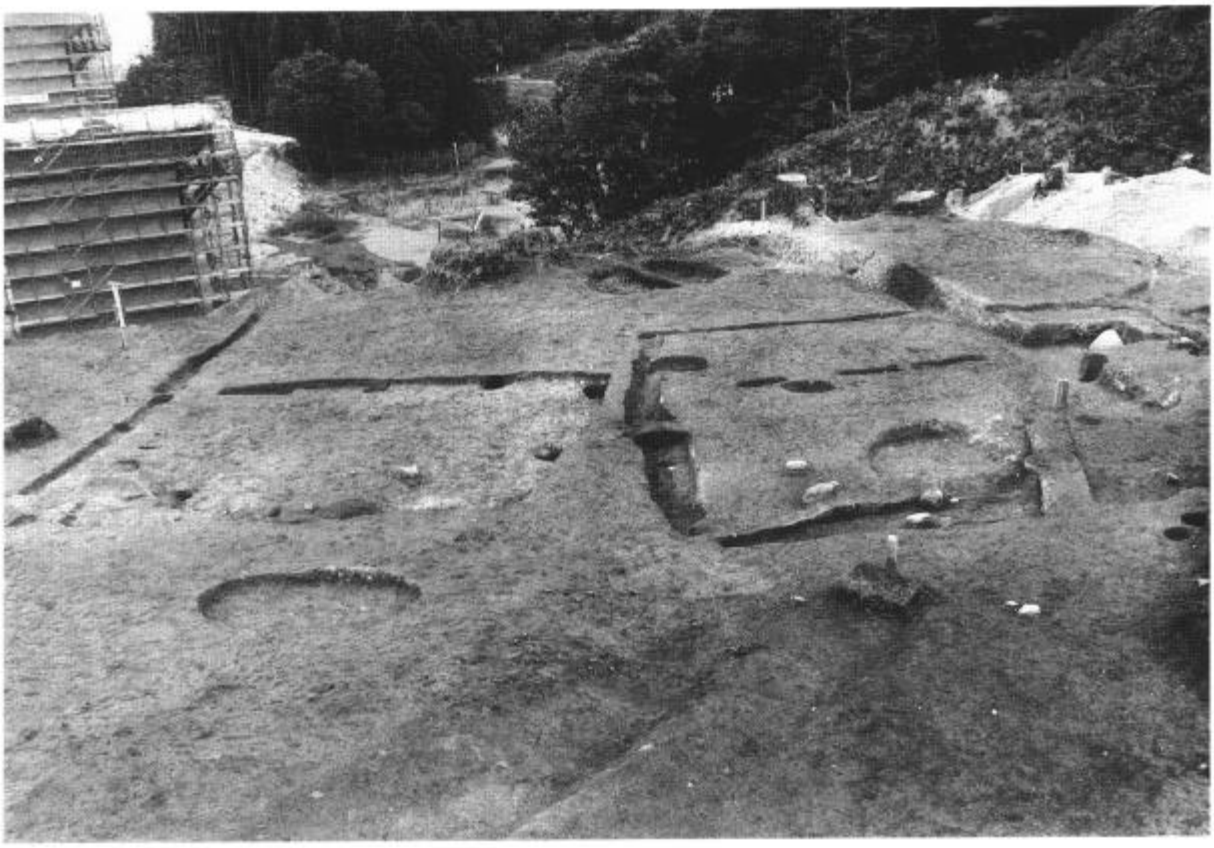
1．S I 148（東→西）



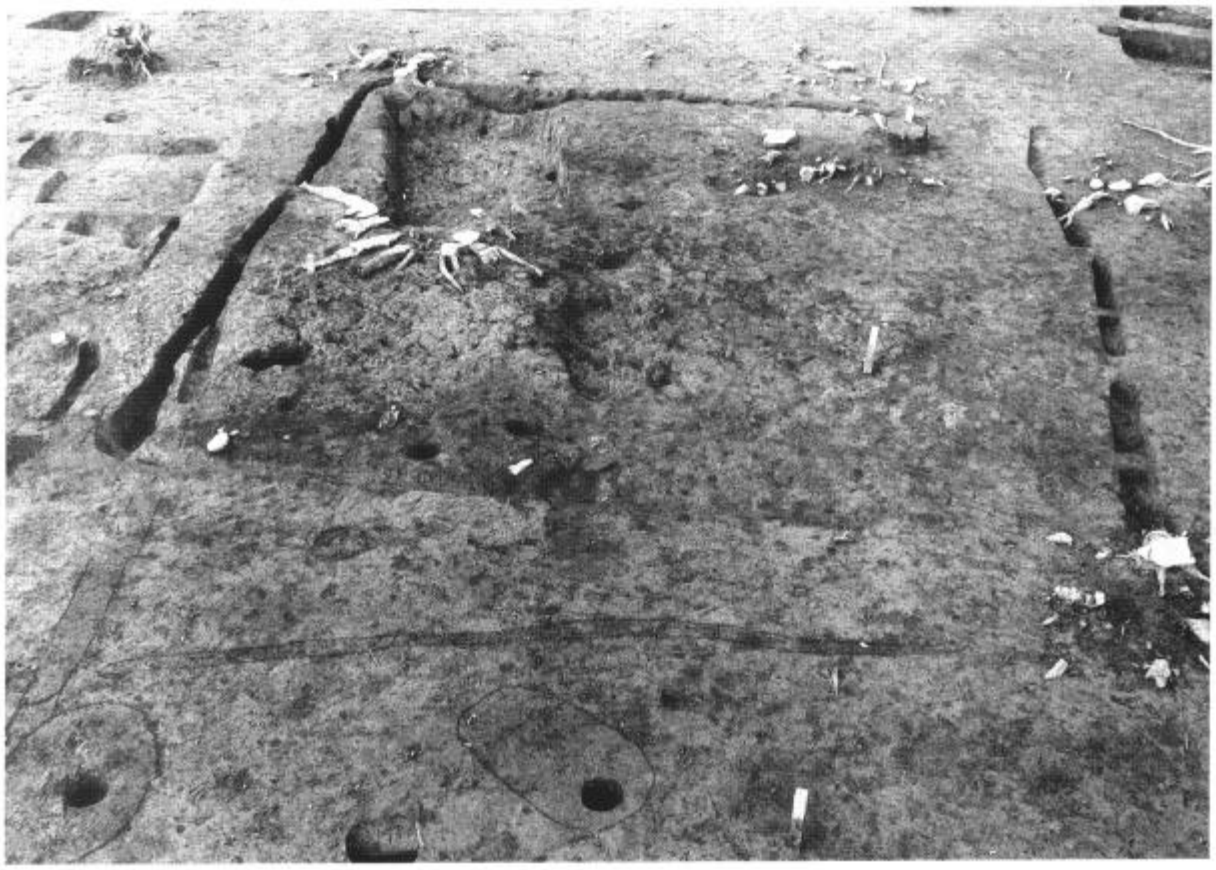
2．S I 192（東→西）

図版8

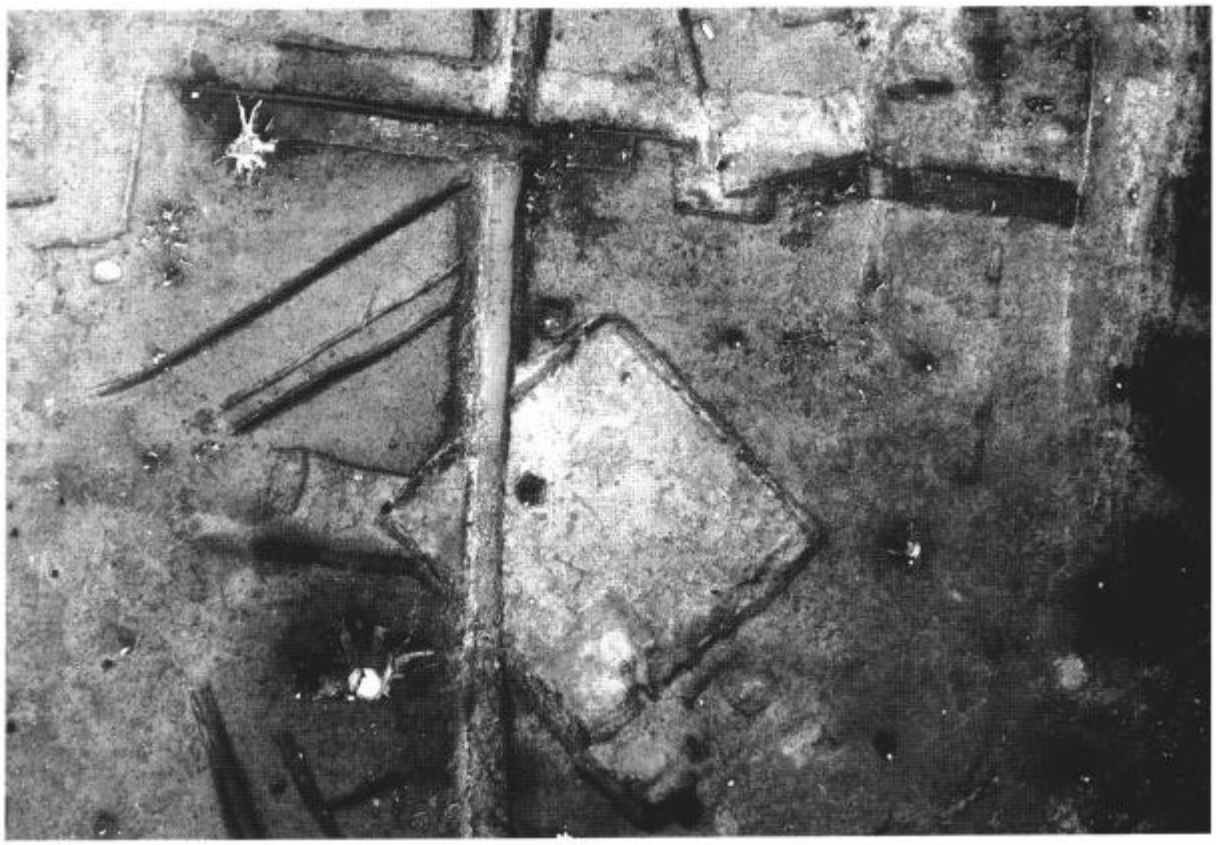
1．S I 198（真上）



2．S I 215（右）・223（左）（南東→北西）

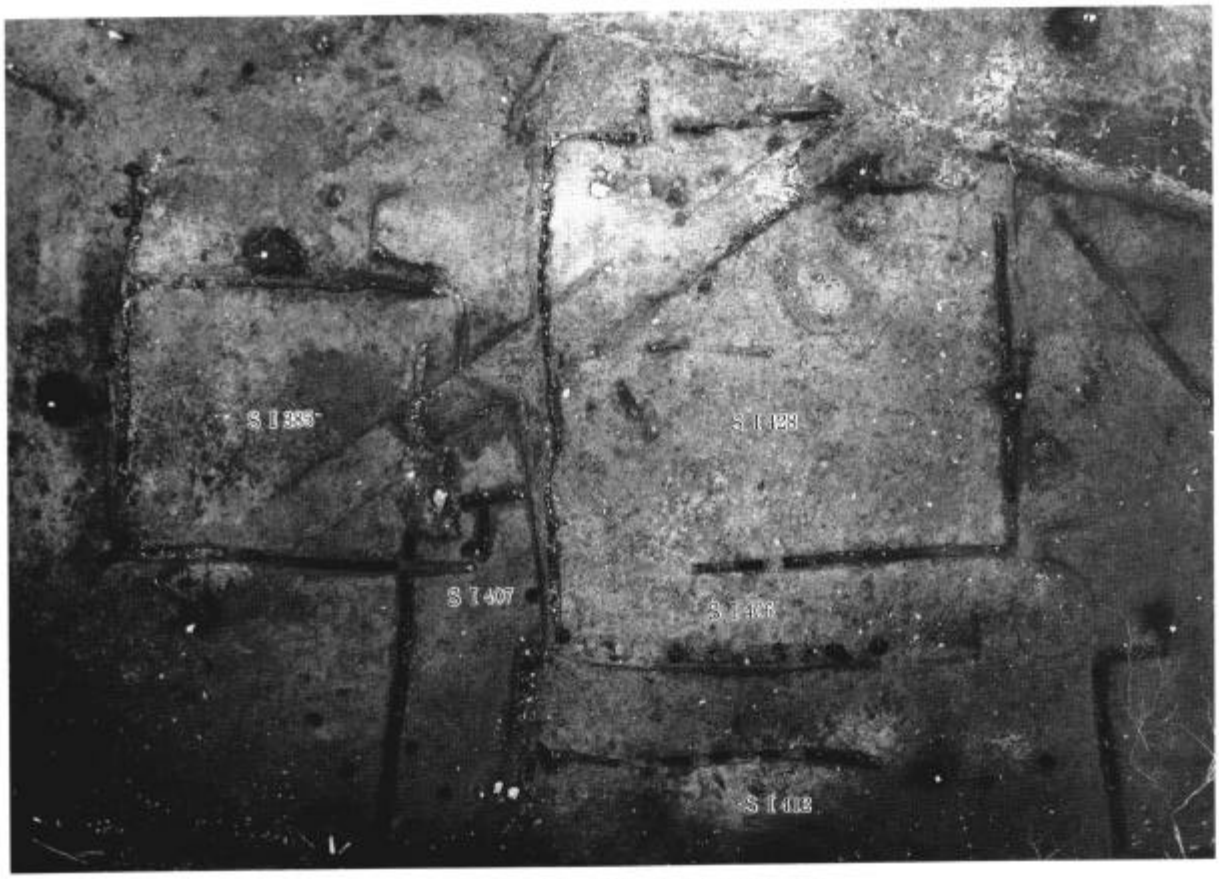


1．S I 268（南→北）

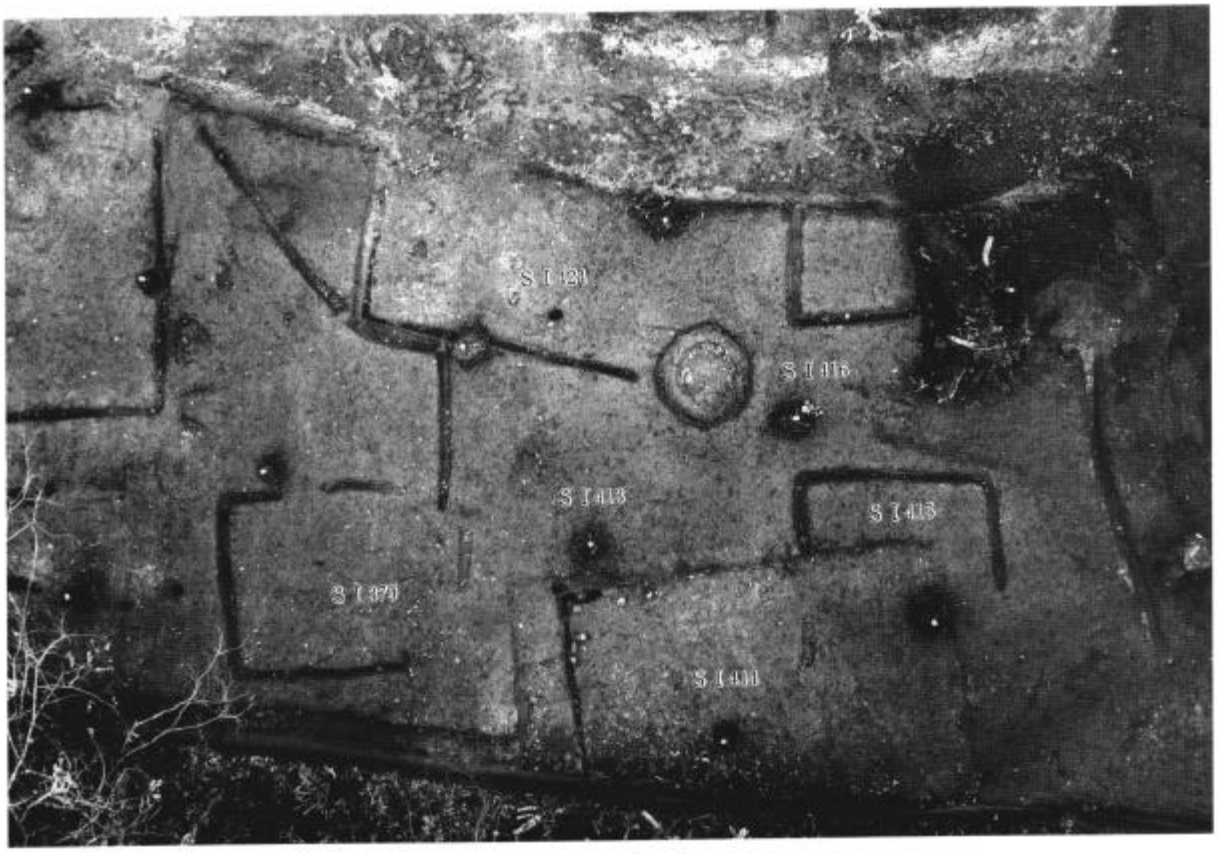


2．S I 380（真上）

図版10

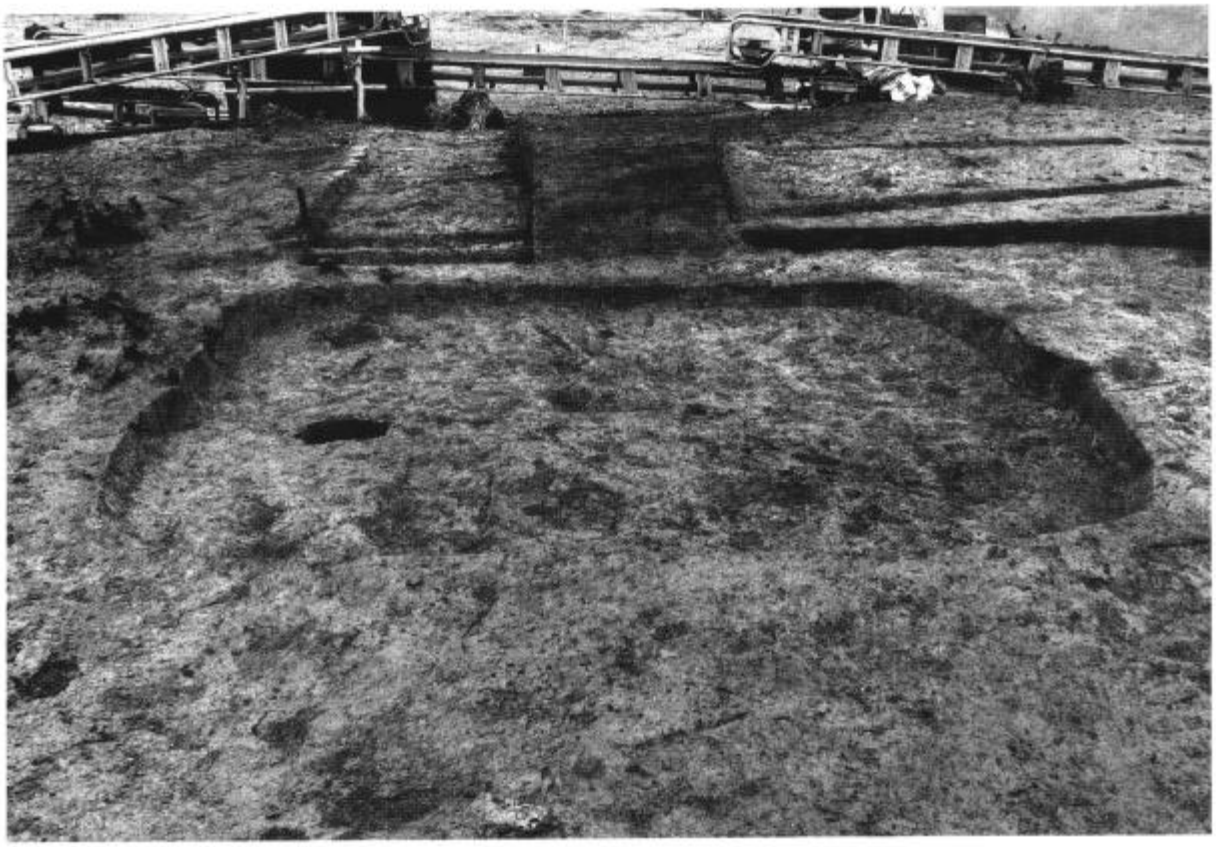


1．S I 385・406・407・412・428（真上）



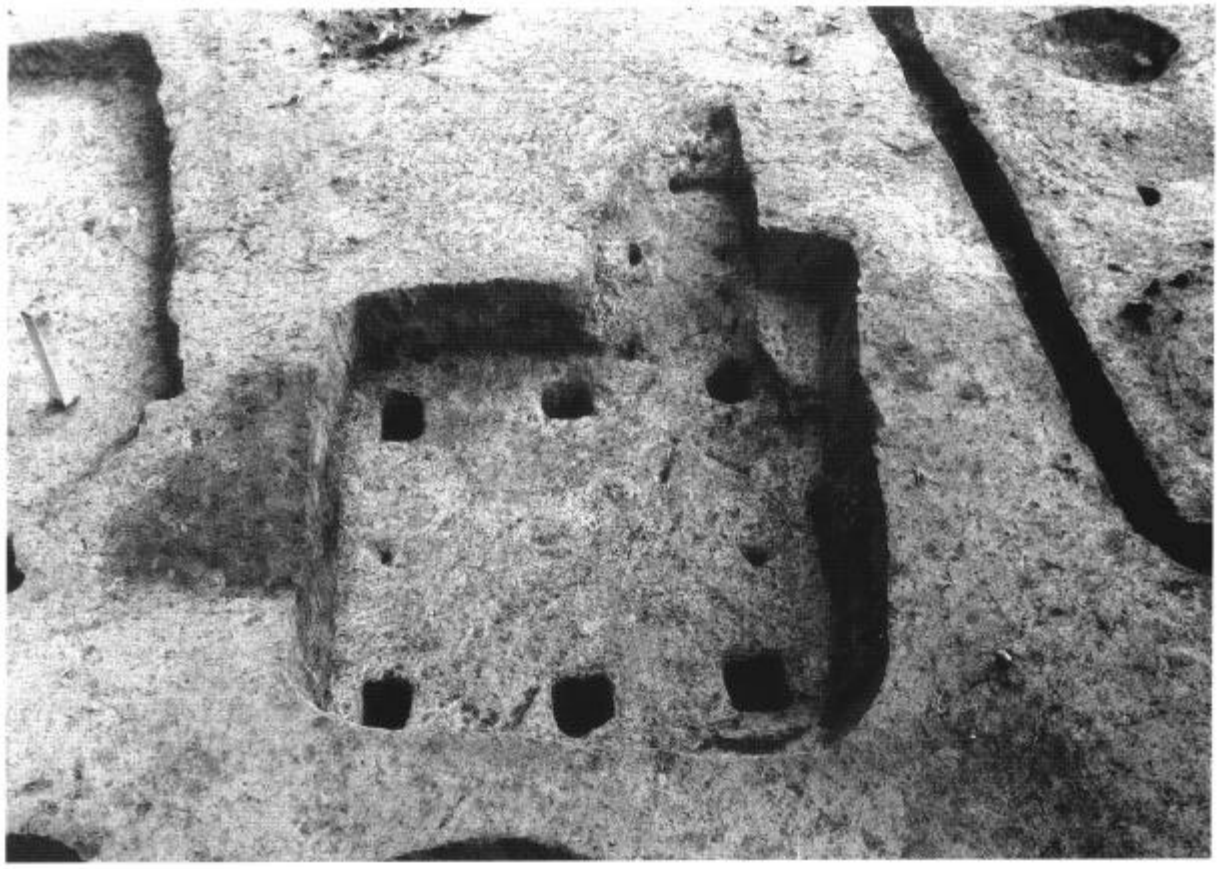
2．S I 379・413・414・415・416・424（真上）

1．ＳＫＩ122（西→東）

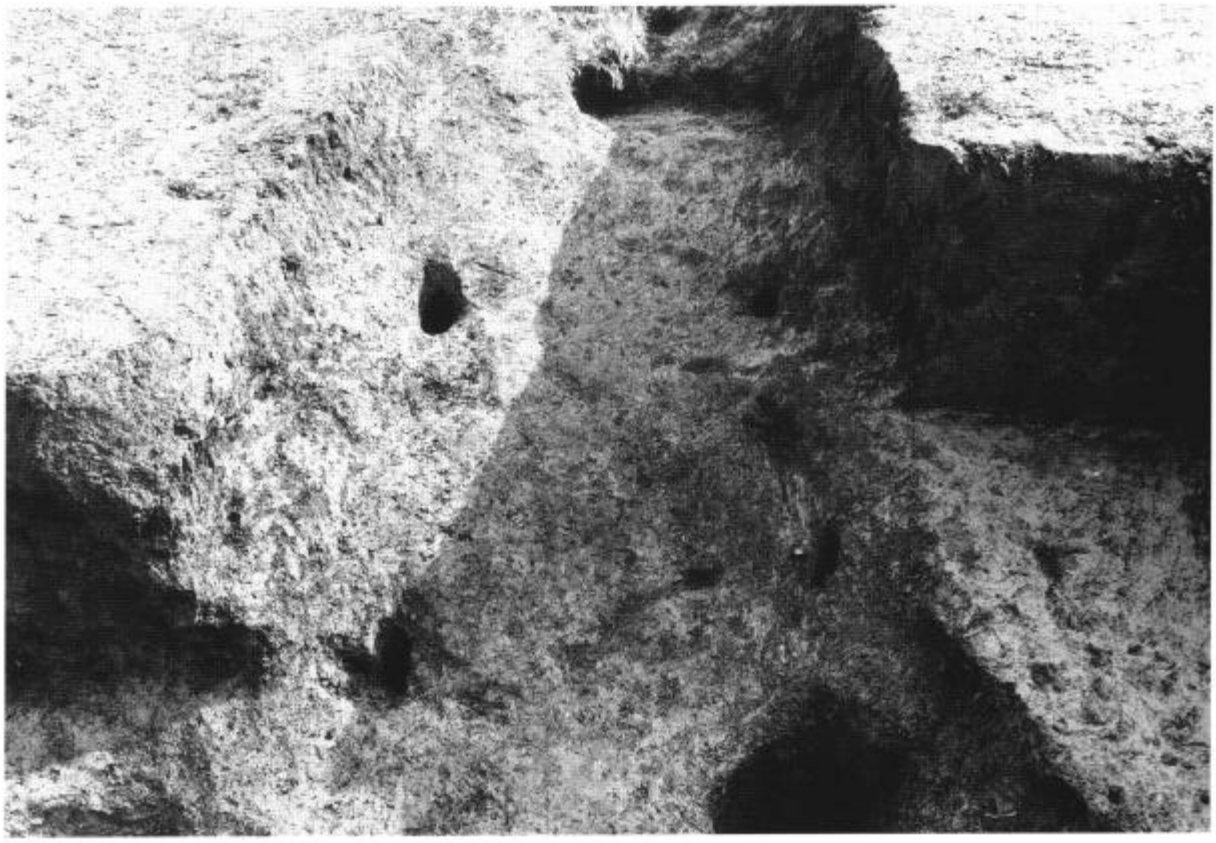


2．ＳＫＩ128（東→西）

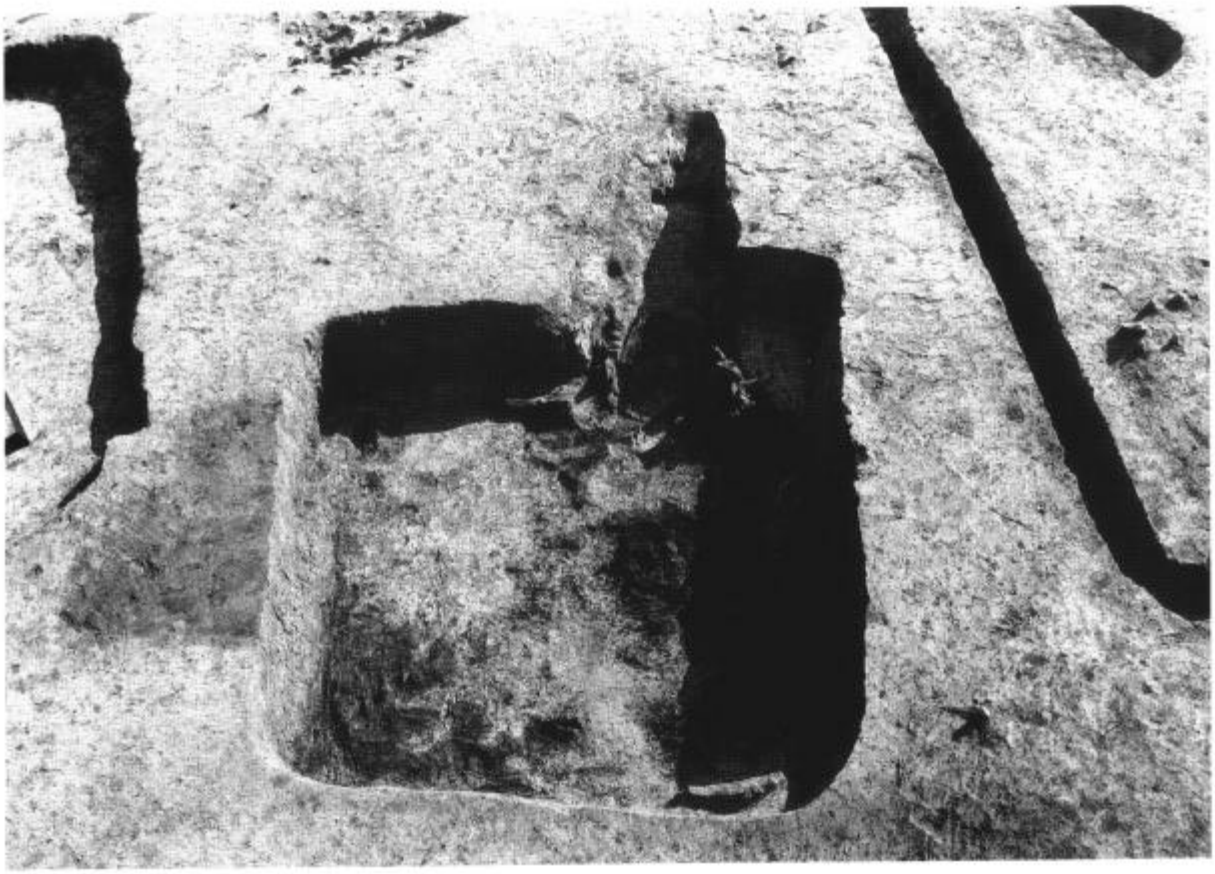
図版12



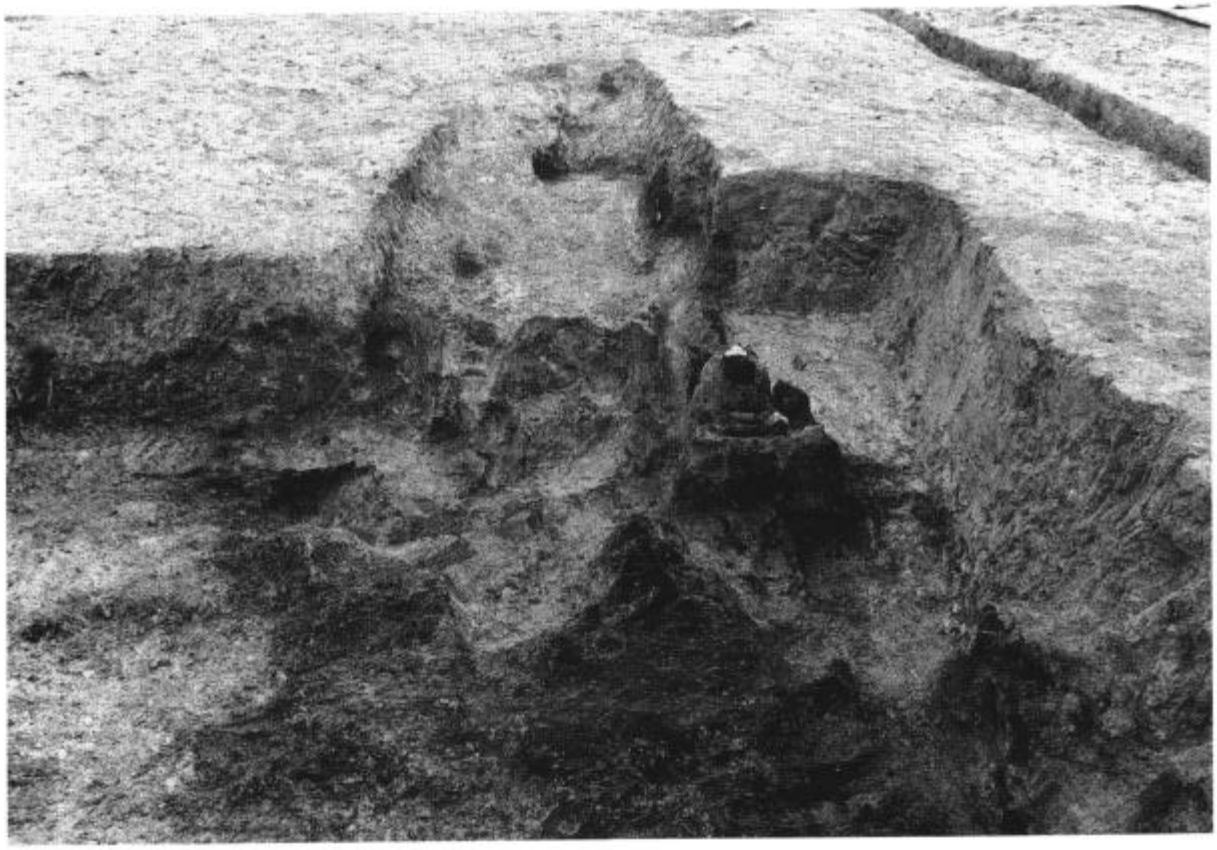
1．ＳＫＩ137（西→東）



2．ＳＫＩ137の出入り口（西➡東）



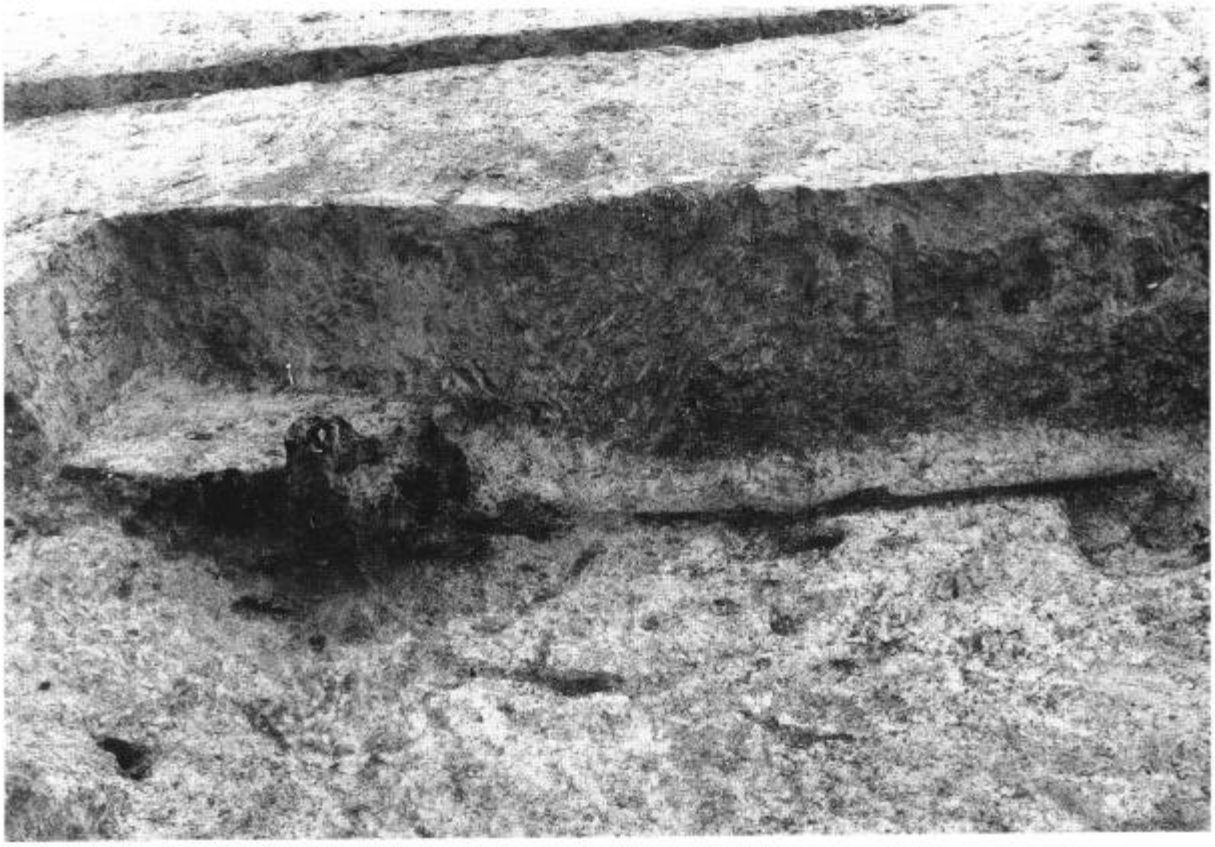
1．ＳＫＩ137炭化材出土状況（1）（西→東）



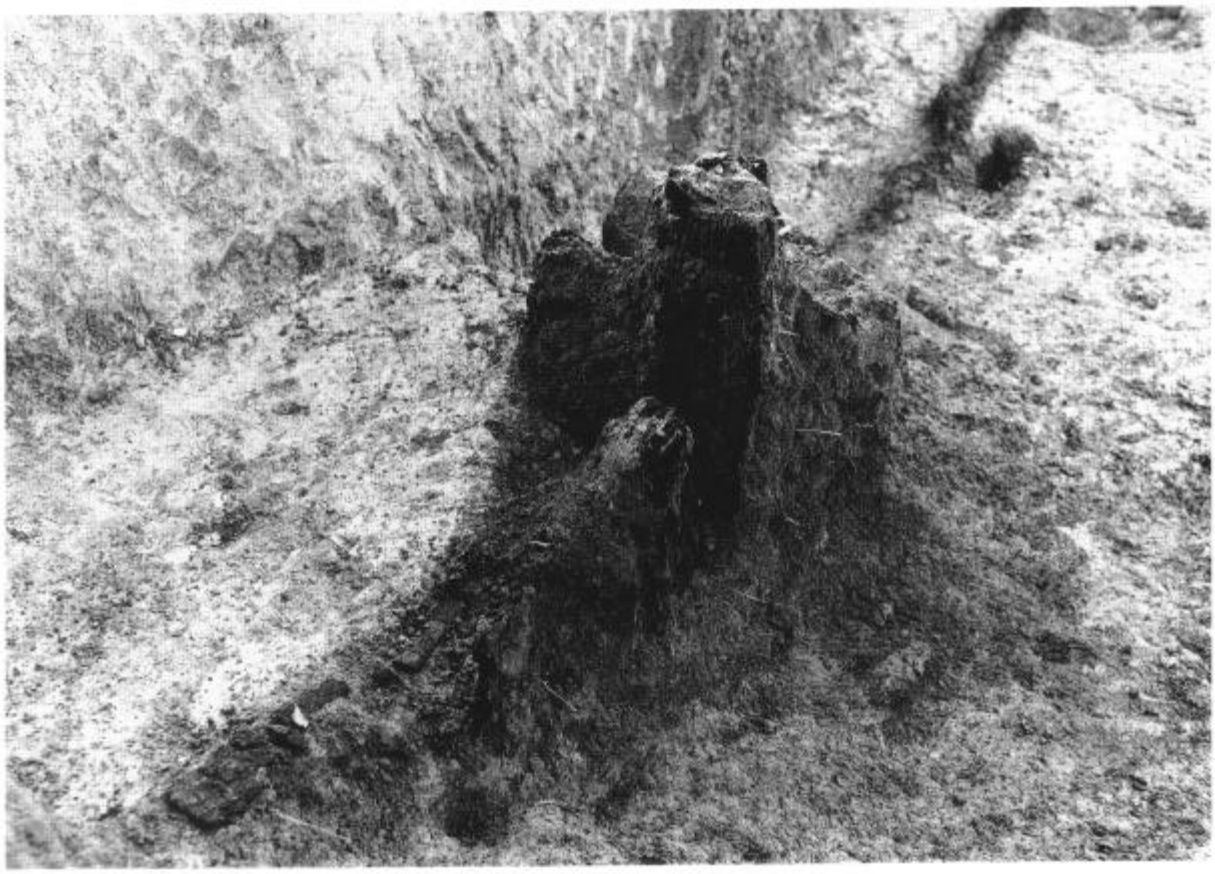
2．ＳＫＩ137炭化材出土状況（2）（西→東）

図版14

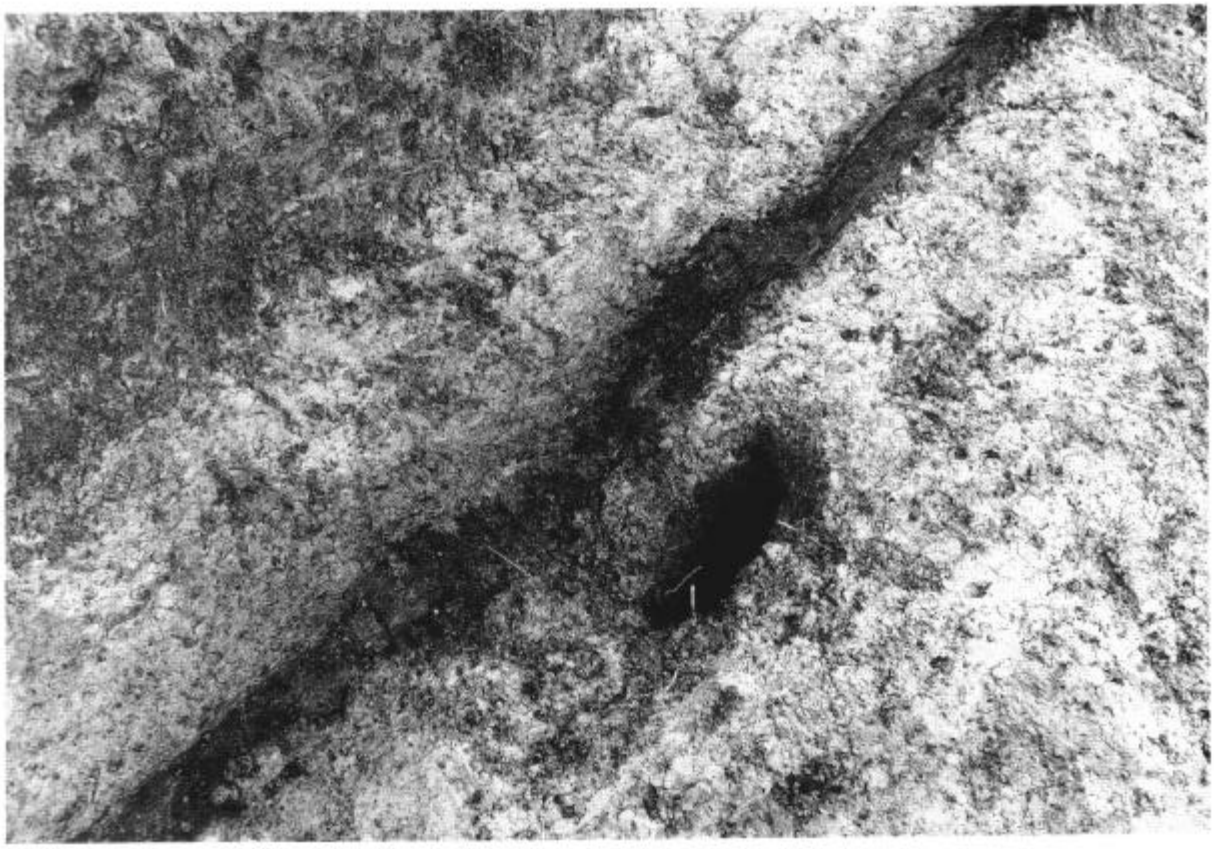
1．ＳＫＩ137炭化材出土状況（３）（真上）



2．ＳＫＩ137炭化材出土状況（４）（北→南）



1．ＳＫＩ137炭化材出土状況（５）（北東→南西）

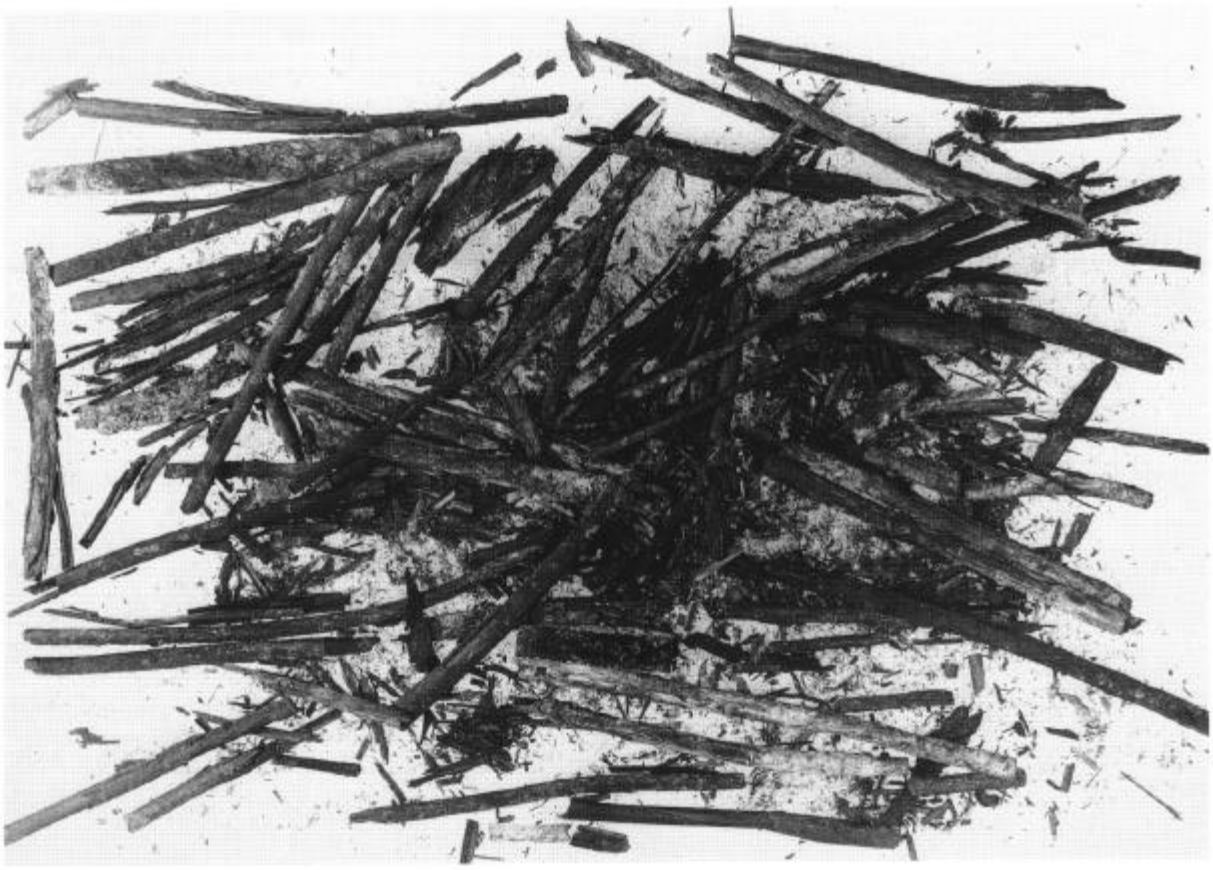


2．ＳＫＩ137炭化材出土状況（６）（北東→南西）

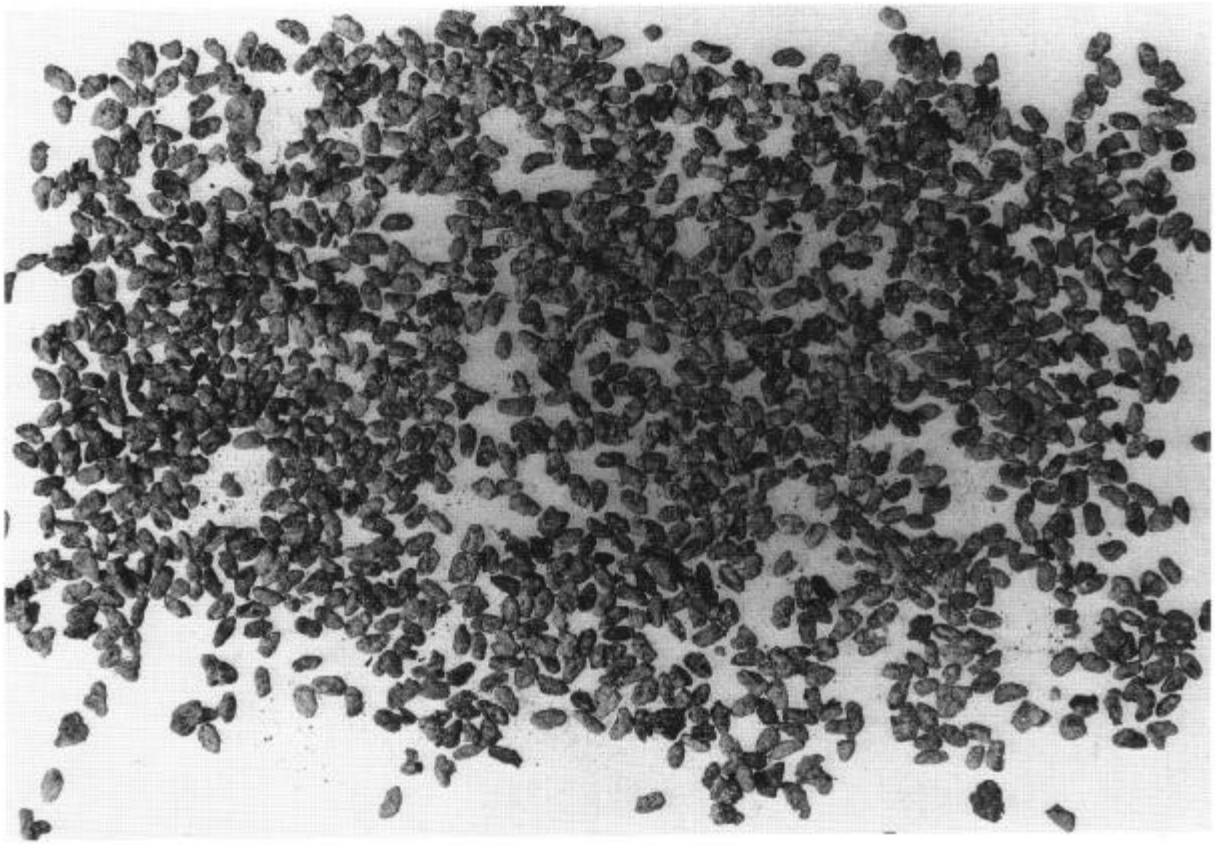
図版16

1．ＳＫＩ137炭化材出土状況（７）（真上）

2．ＳＫＩ137炭化米等出土状況

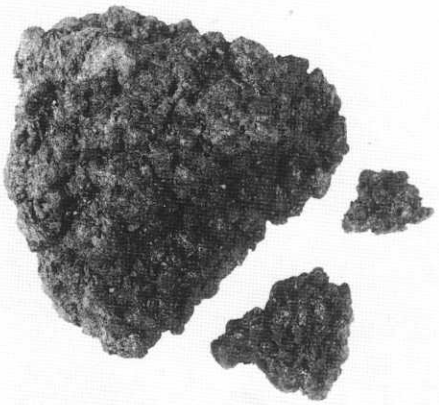


1．ＳＫＩ137炭化材（萱）

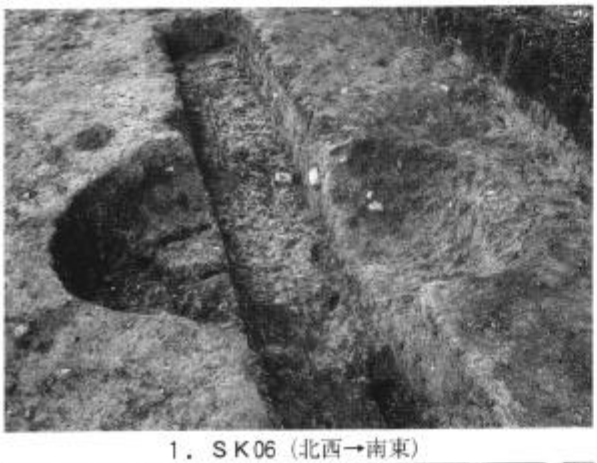


2．ＳＫＩ137炭化米

1．ＳＫＩ137炭化米出土状況

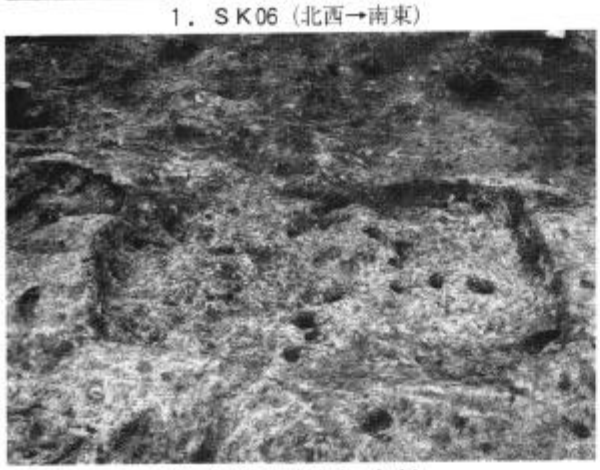


2．ＳＫＩ137炭化米

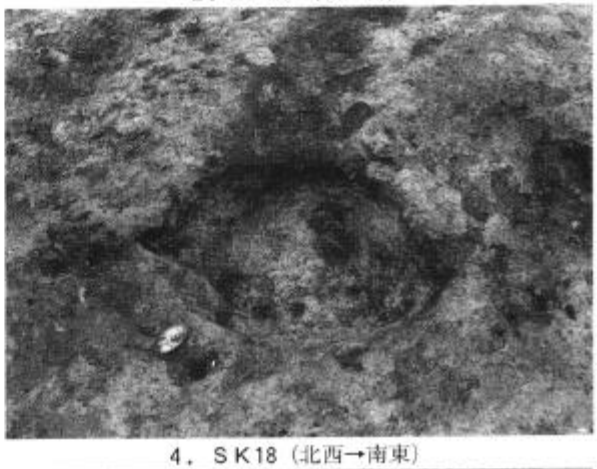


1．ＳＫ06（北西→南東）

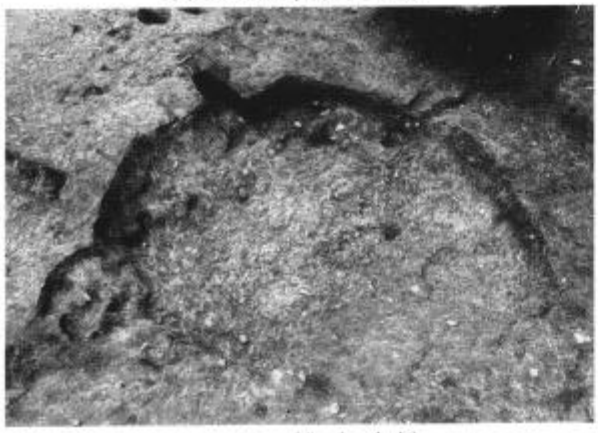
2．ＳＫ07（北→南）



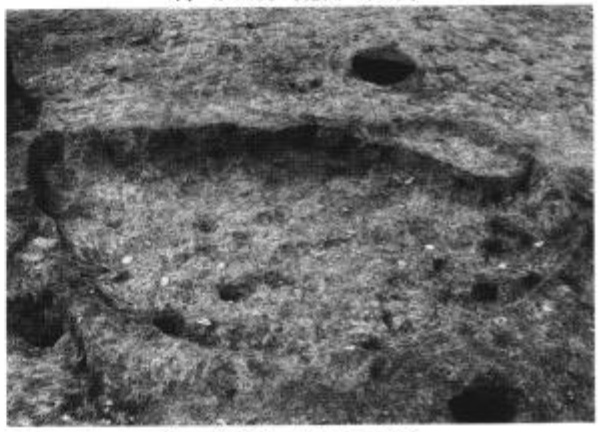
3．ＳＫ17（北西→南東）



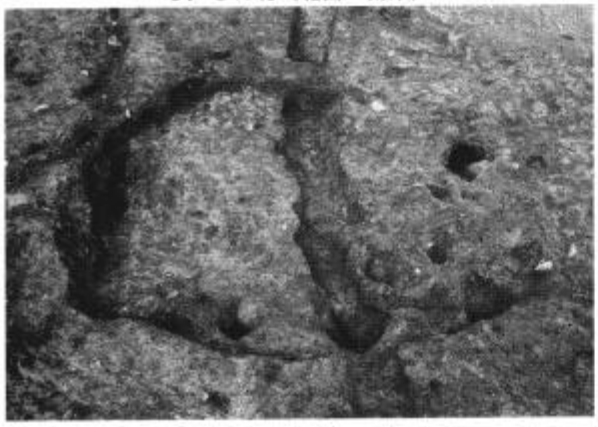
4．ＳＫ18（北西→南東）



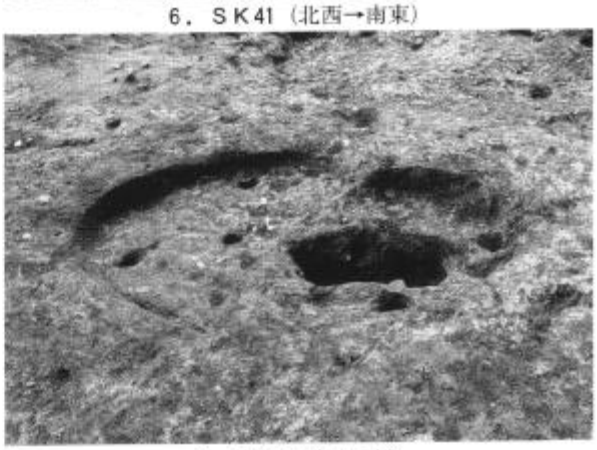
5．ＳＫ40（北西→南東）



6．ＳＫ41（北西→南東）



7．ＳＫ42（東→西）

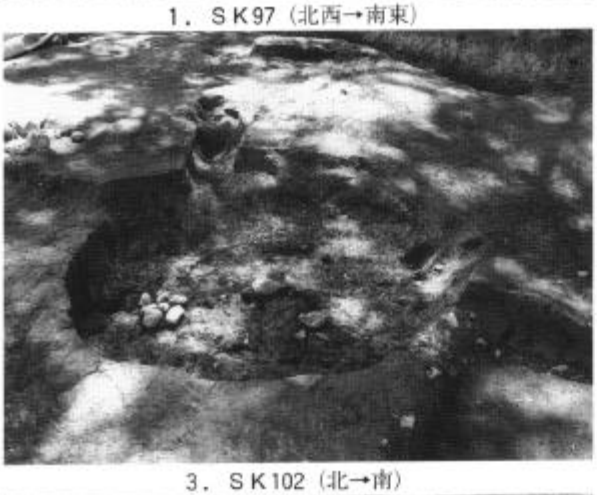


8．ＳＫ50（西→東）

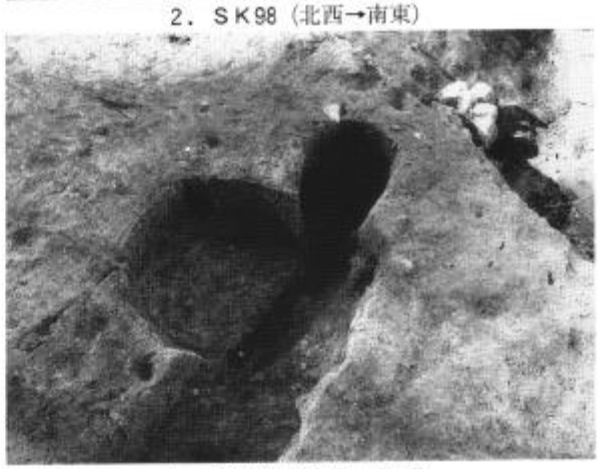
図版20

1．ＳＫ97（北西→南東）

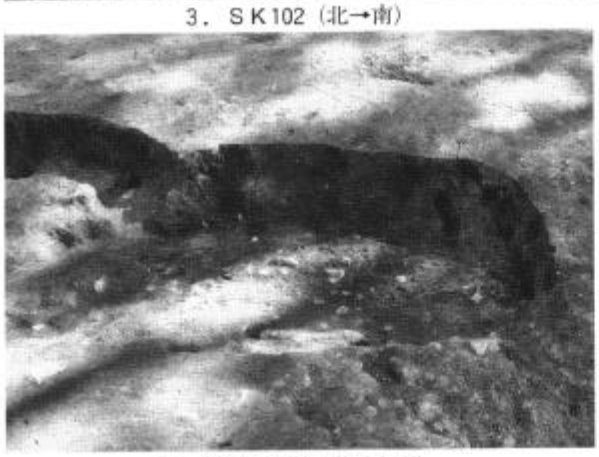
2．ＳＫ98（北西→南東）



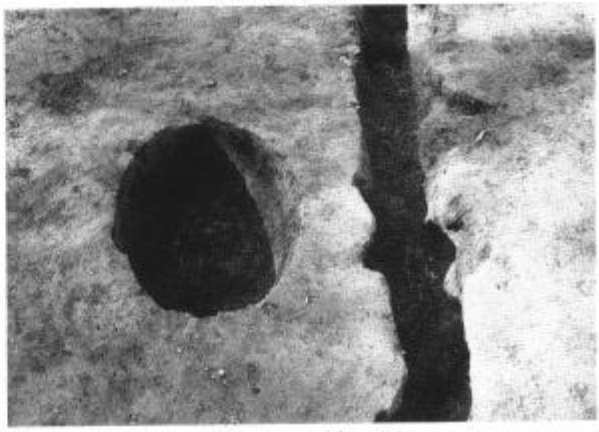
3．ＳＫ102（北→南）



4．ＳＫ103（南東→北西）

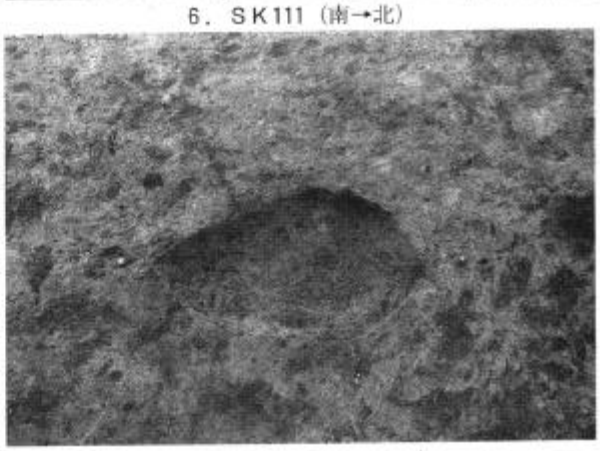


5．ＳＫ105（北東→南西）



6．ＳＫ111（南→北）

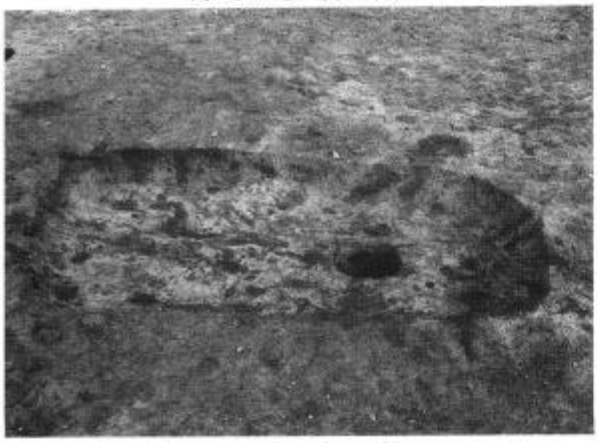
7．ＳＫ117（西→東）



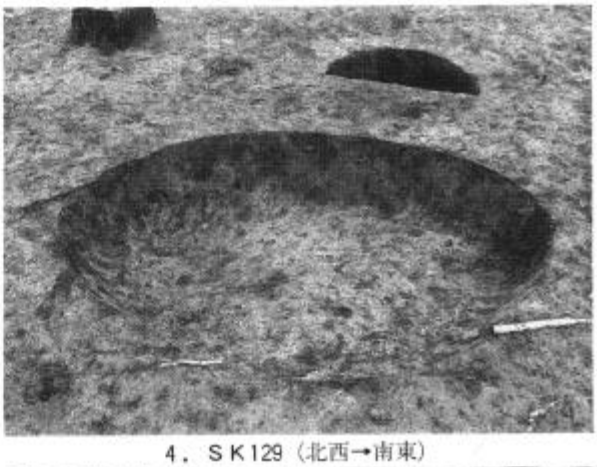
8．ＳＫ120（南西→北東）

1．ＳＫ121（東→西）

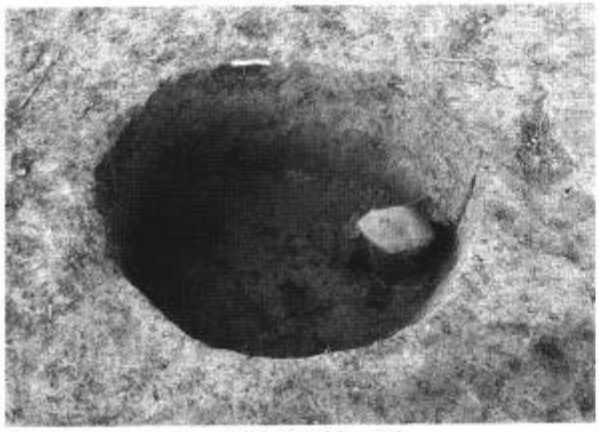
2．ＳＫ127（西→東）



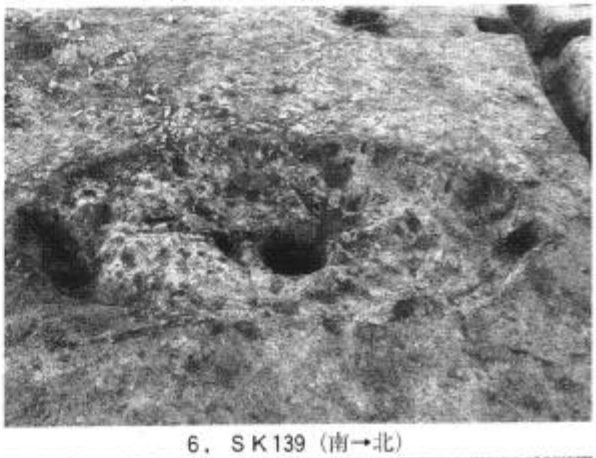
3．ＳＫ128（西→東）



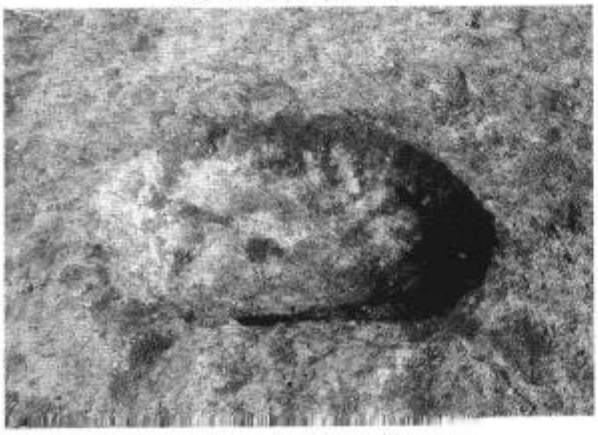
4．ＳＫ129（北西→南東）



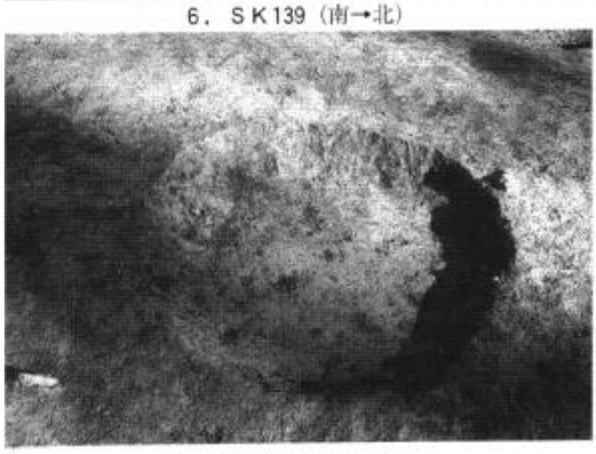
5．ＳＫ136（南→北）



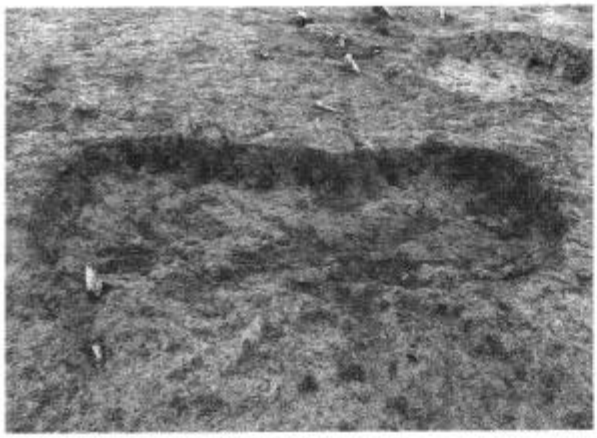
6．ＳＫ139（南→北）



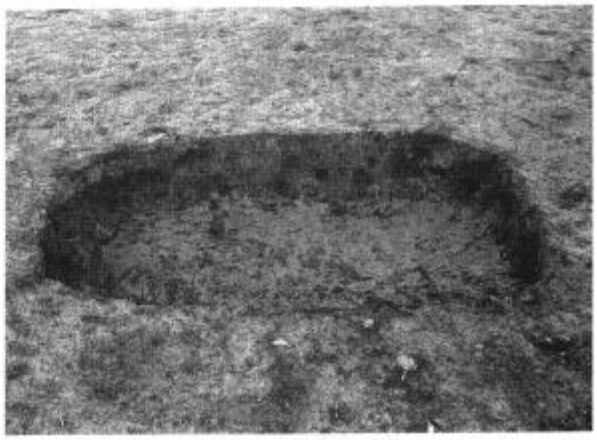
7．ＳＫ140（西→東）



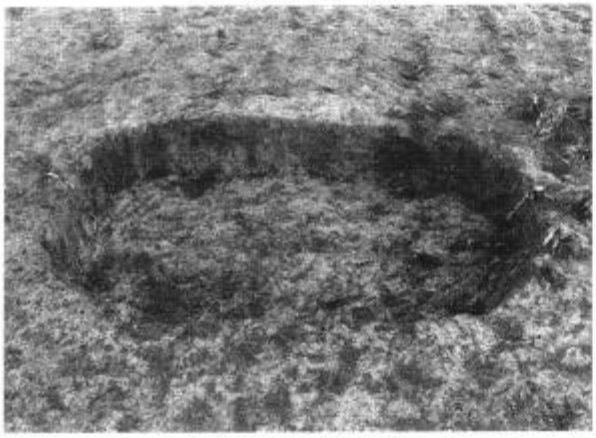
8．ＳＫ141（北西→南東）



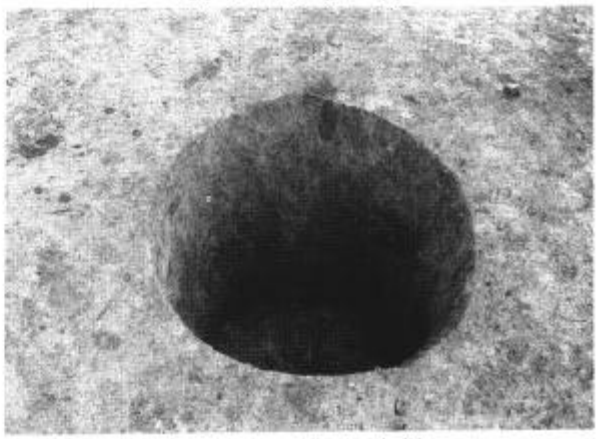
1．ＳＫ142（南→北）



2．ＳＫ143（西→東）

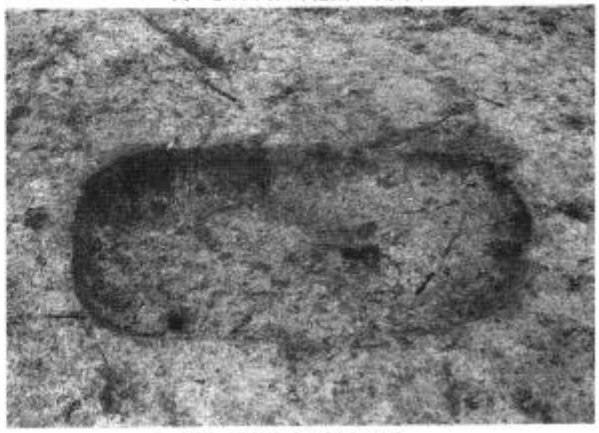


3．ＳＫ144（北→南）

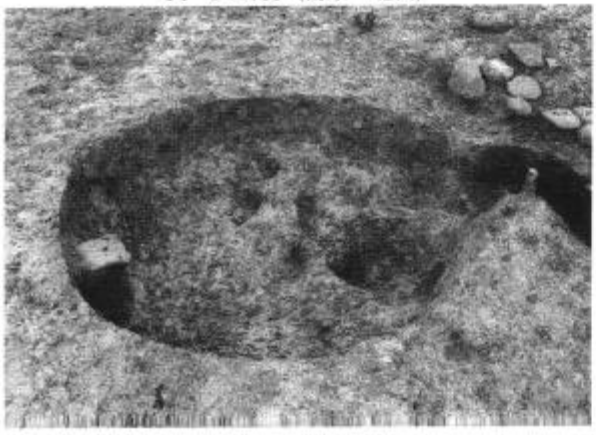


4．ＳＫ147（北西→南東）

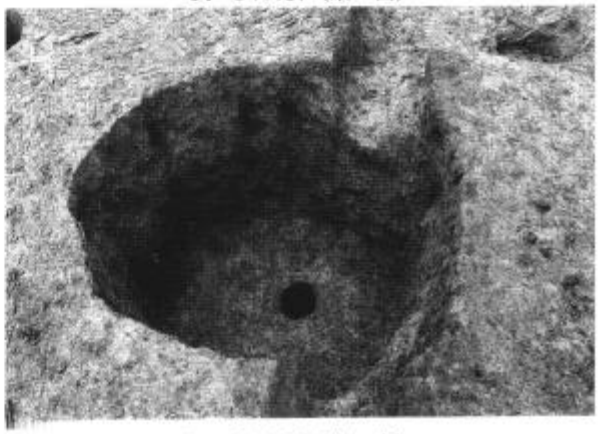
5．ＳＫ150（南東→北西）



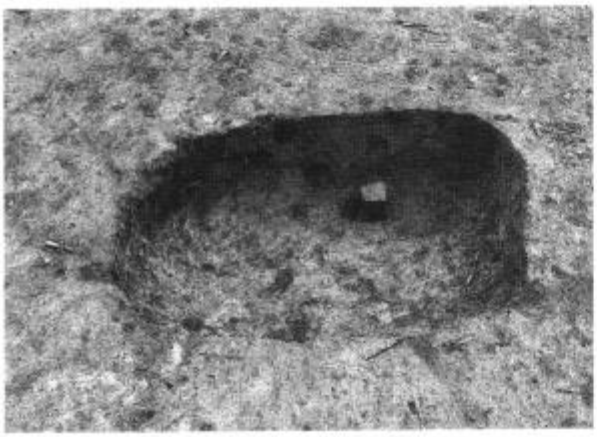
6．ＳＫ151（東→西）



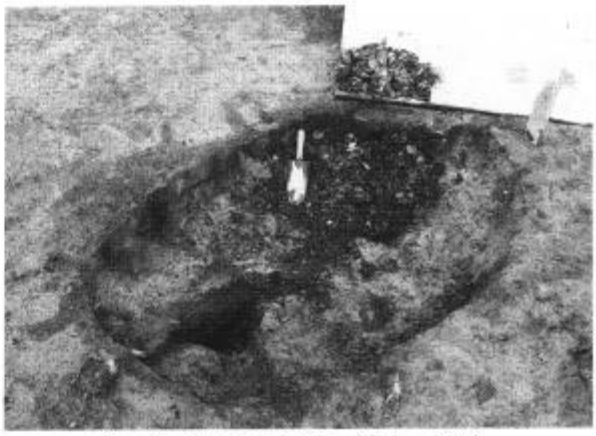
7．ＳＫ152（東→西）



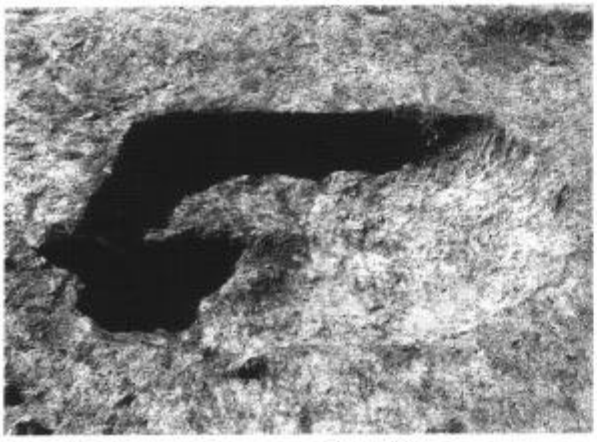
8．ＳＫ153（北→南）



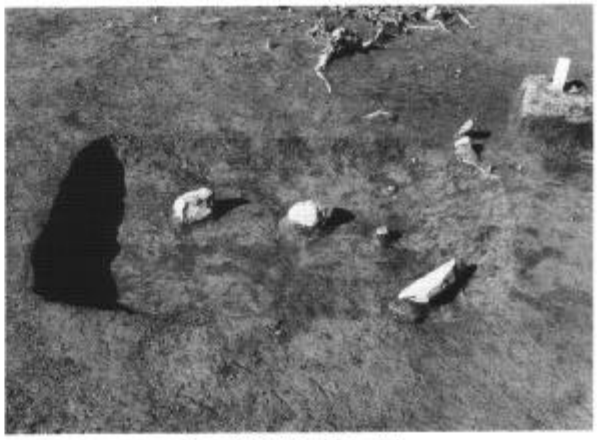
1．ＳＫ154（北→南）



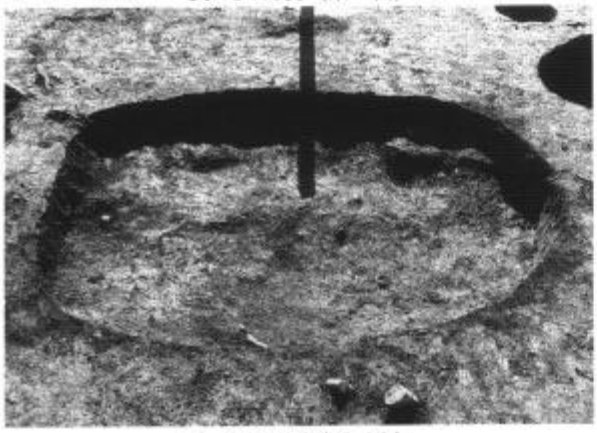
2．ＳＫ155貝出土状況（南東→北西）



3．ＳＫ155（東→西）



4．ＳＫ156（南→北）



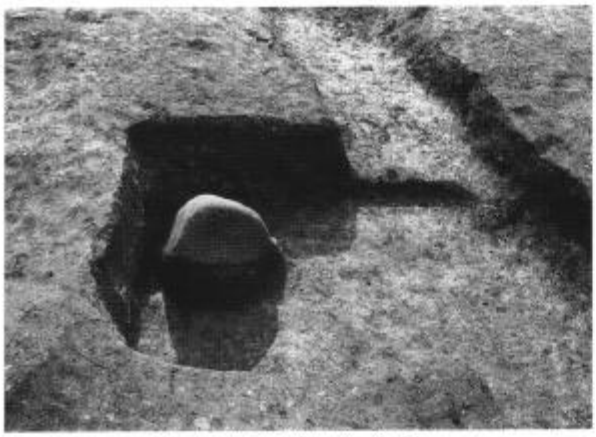
5．ＳＫ159（北→南）

6．ＳＫ160（西→東）

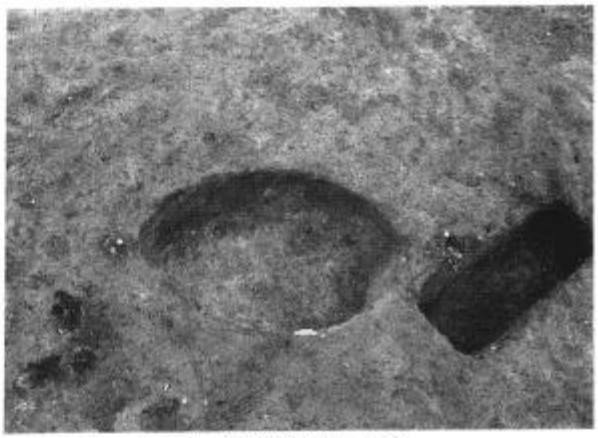
7．ＳＫ161（東→西）

8．ＳＫ211（東→西）

図版24

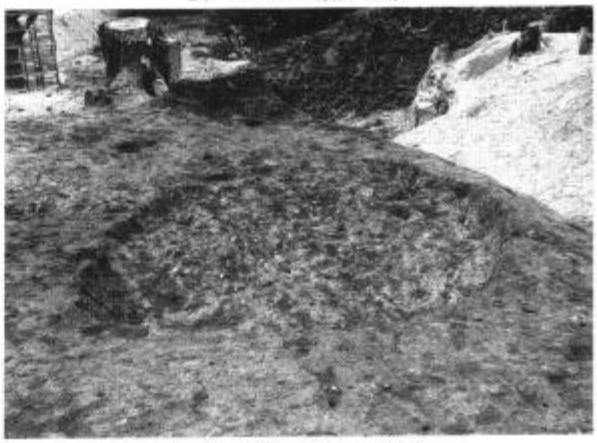


1．ＳＫ217（北西→南東）

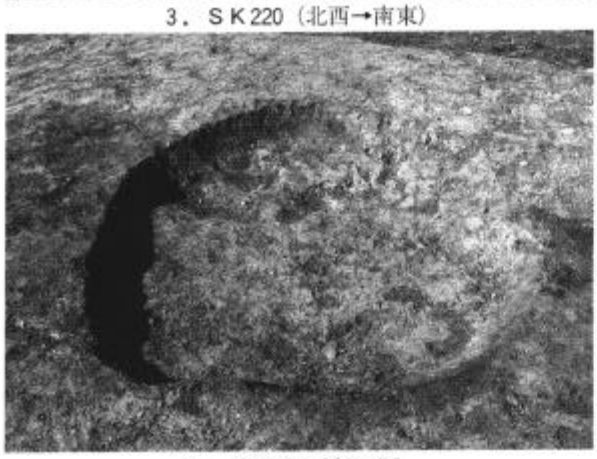


2．ＳＫ219（北→南）

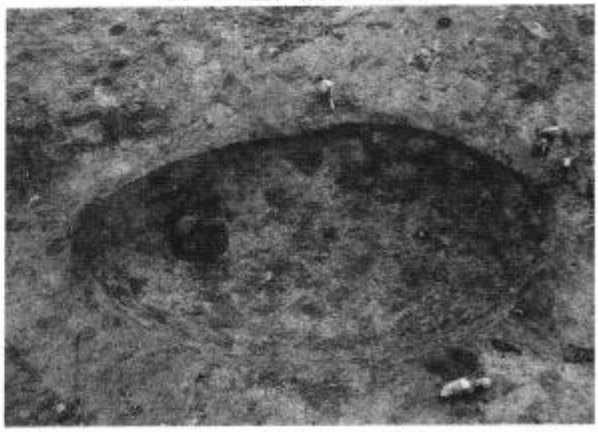
3．ＳＫ220（北西→南東）



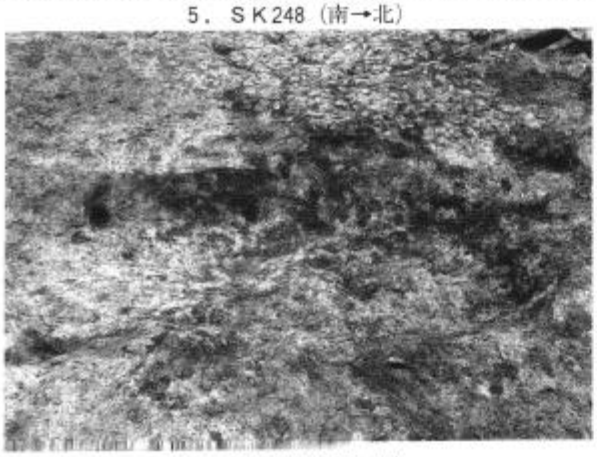
4．ＳＫ225（南東→北西）



5．ＳＫ248（南→北）

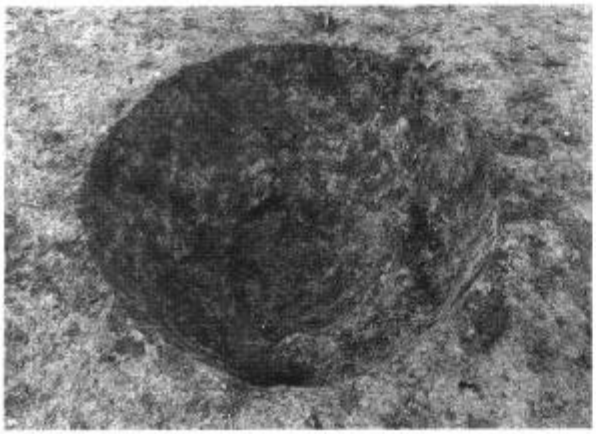


6．ＳＫ251（北東→南西）

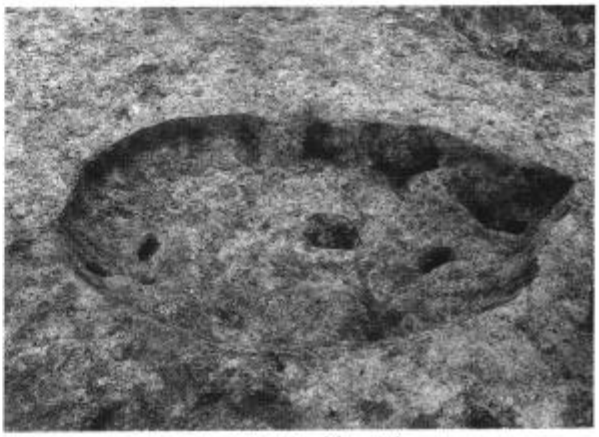


7．ＳＫ254（東→西）

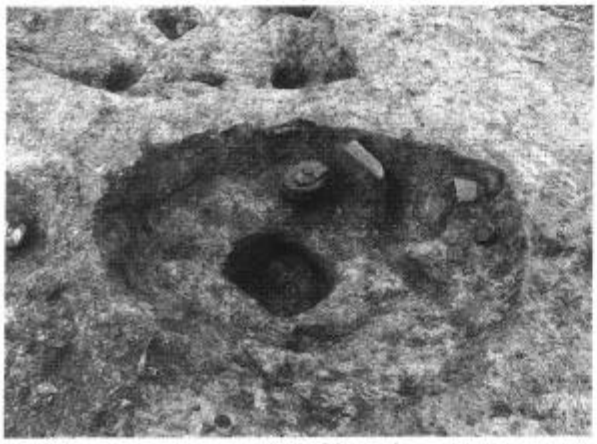
8．ＳＫ263（南→北）



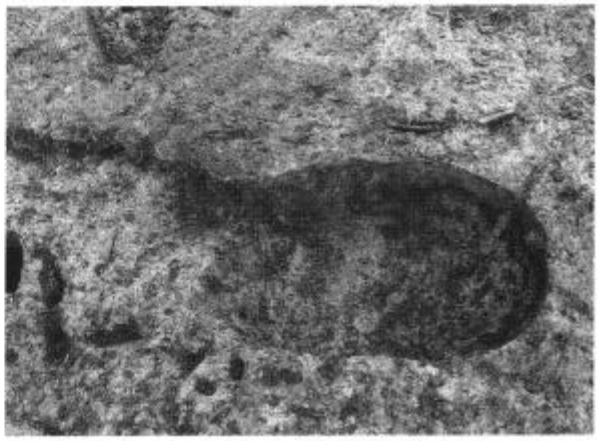
1．ＳＫ264（北東→南西）



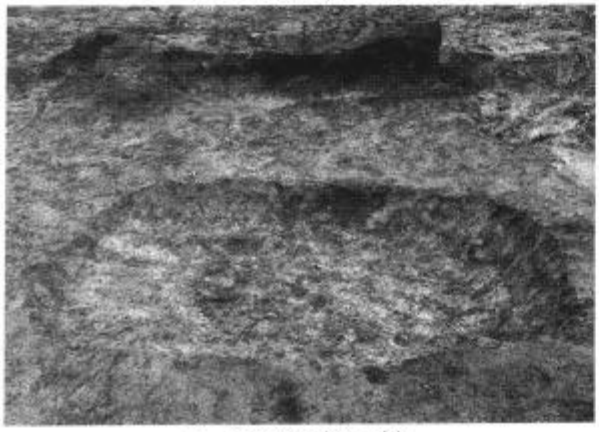
2．ＳＫ357（南→北）



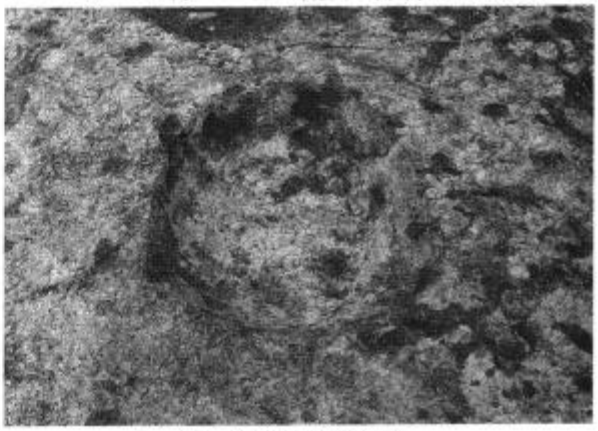
3．ＳＫ358（南→北）



4．ＳＫ364（北西→南東）

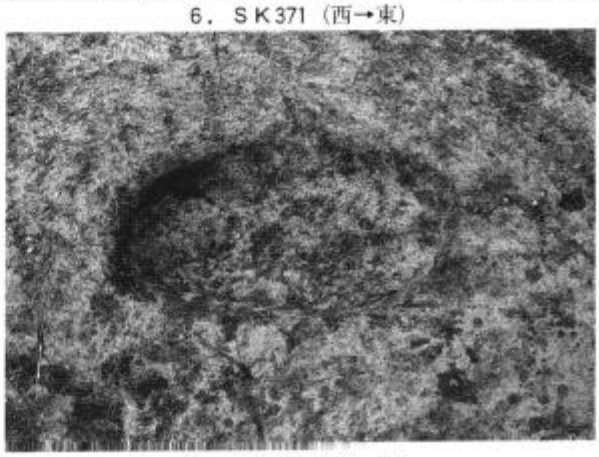


5．ＳＫ366（西→東）



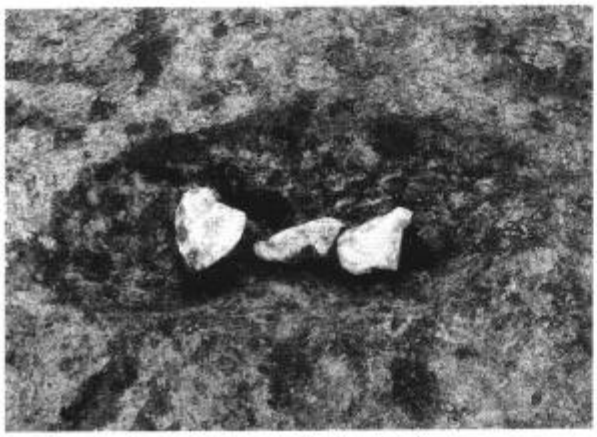
6．ＳＫ371（西→東）

7．ＳＫ376（東→西）

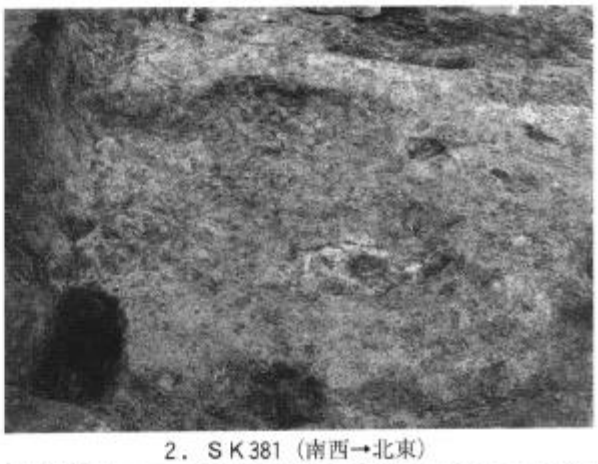


8．ＳＫ377（南→北）

図版26



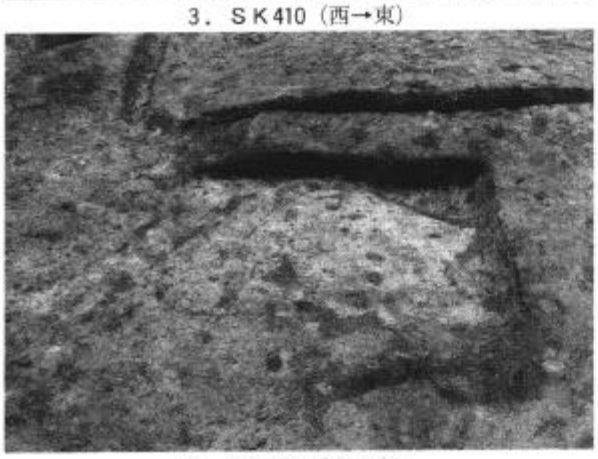
1．ＳＫ378（北東→南西）



2．ＳＫ381（南西→北東）

3．ＳＫ410（西→東）

4．ＳＫ422（北→南）



5．ＳＫ427（西→東）

6．ＳＫ434（北西→南東）

1．ＳＱ242（東→西）

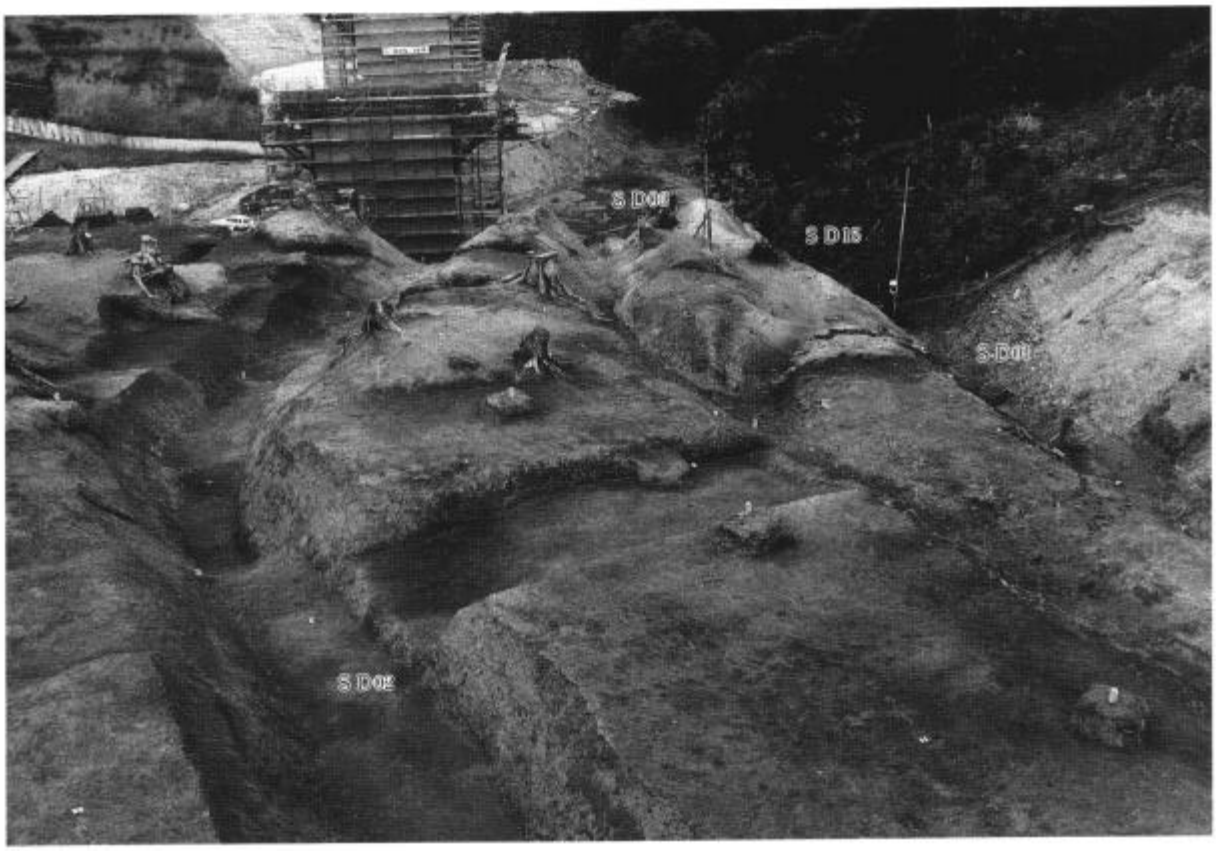
2．ＳＱ370（南→北）

図版28

1．調査区北端部の空堀全景（南西→北東）

2．調査区北端部の空堀全景（真上）

1．SD01・02・03・15開口部（北西→南東）



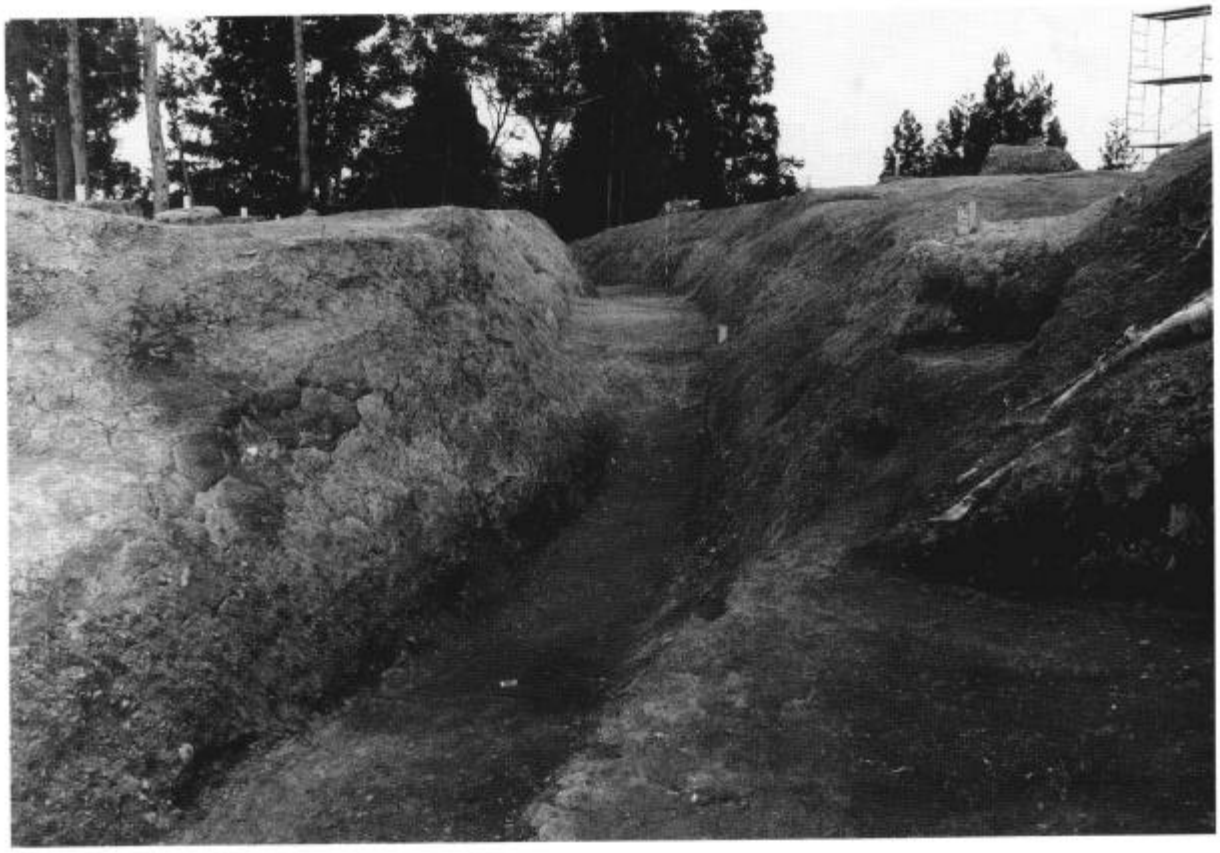
2．SD01・02・03・15（南東→北西）

図版30

1．SD01・03・15（南東→北西）

2．SD01・15（南東→北西）

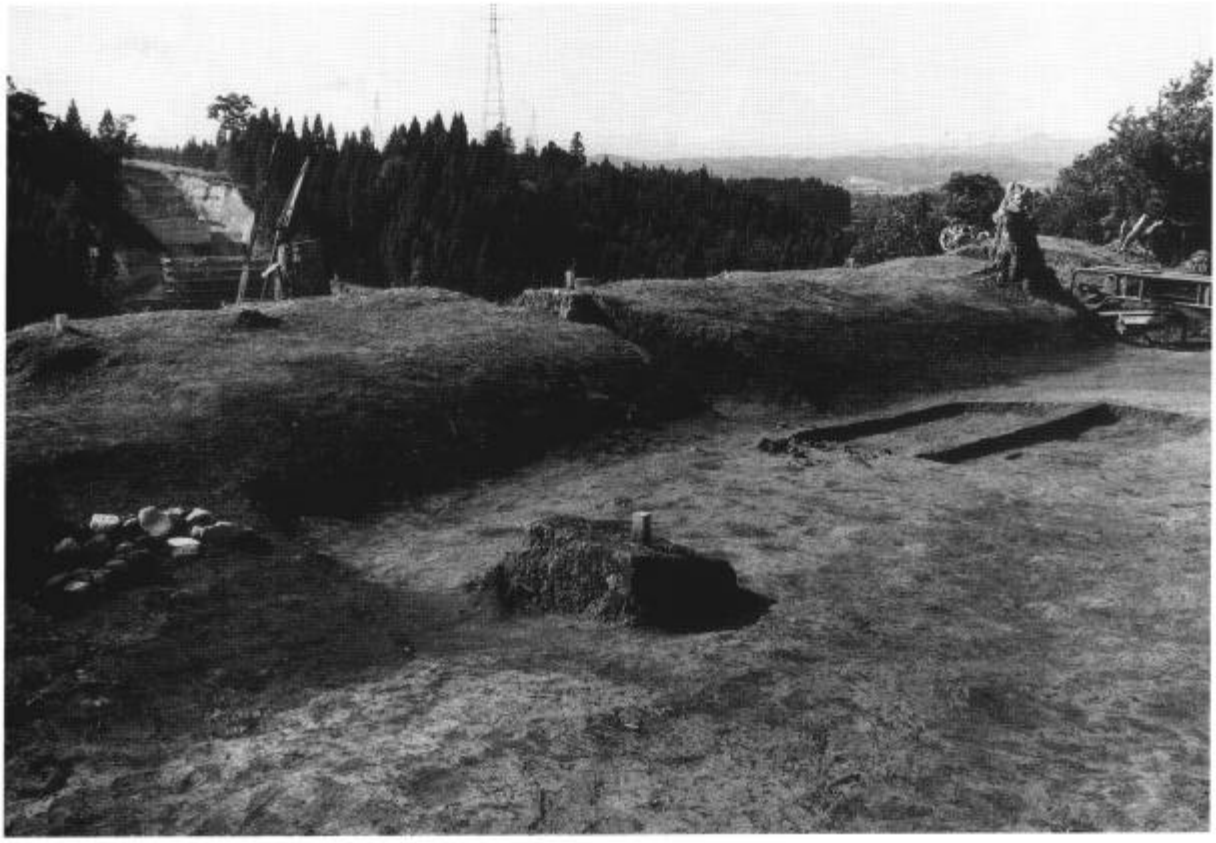
1．ＳＤ02（南東→北西）



2．ＳＤ02（北西→南東）

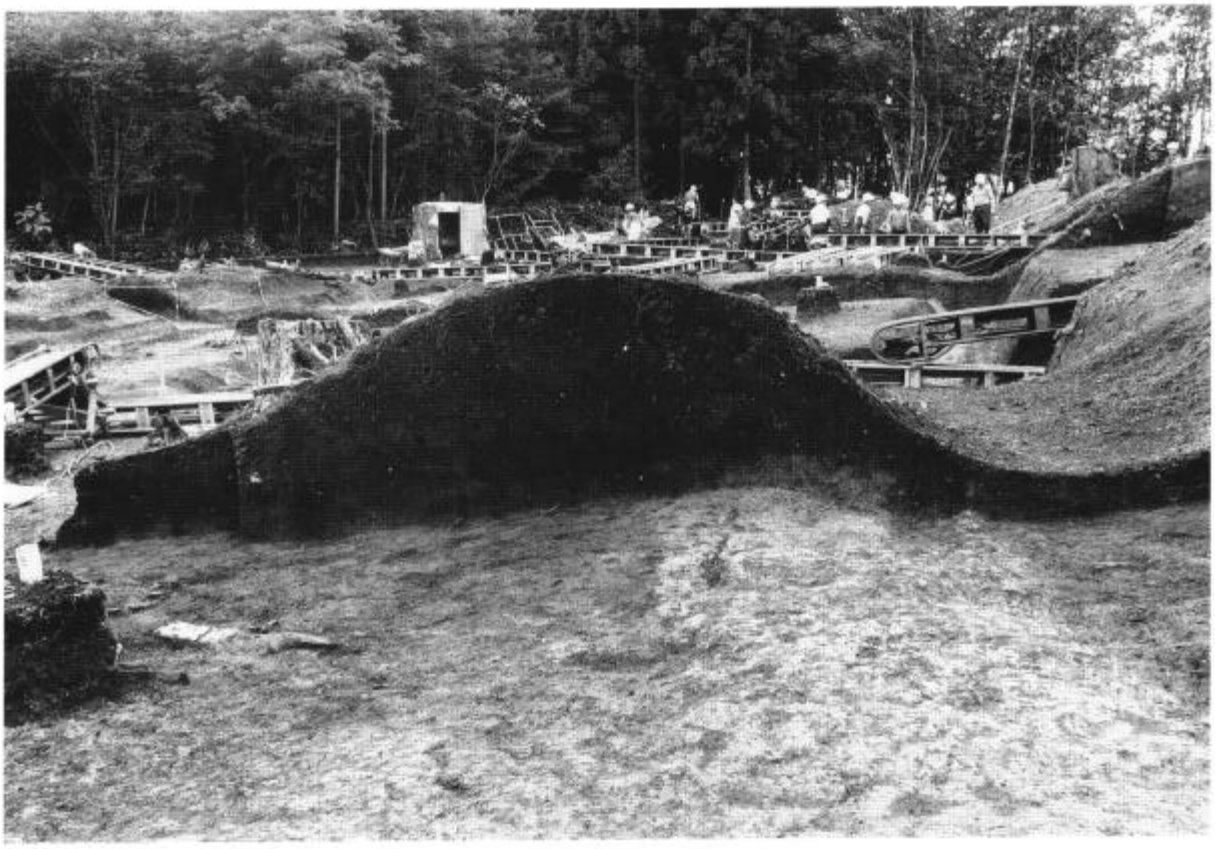
図版32

1．ＳＤ04・ＳＦ05（北→南）



2．ＳＦ05（南東➡北西）

1．ＳＹ170（東→西）



2．ＳＹ170土層（東→西）

1．ＳＹ171（南西→北東）

2．ＳＹ171土層（東→西）

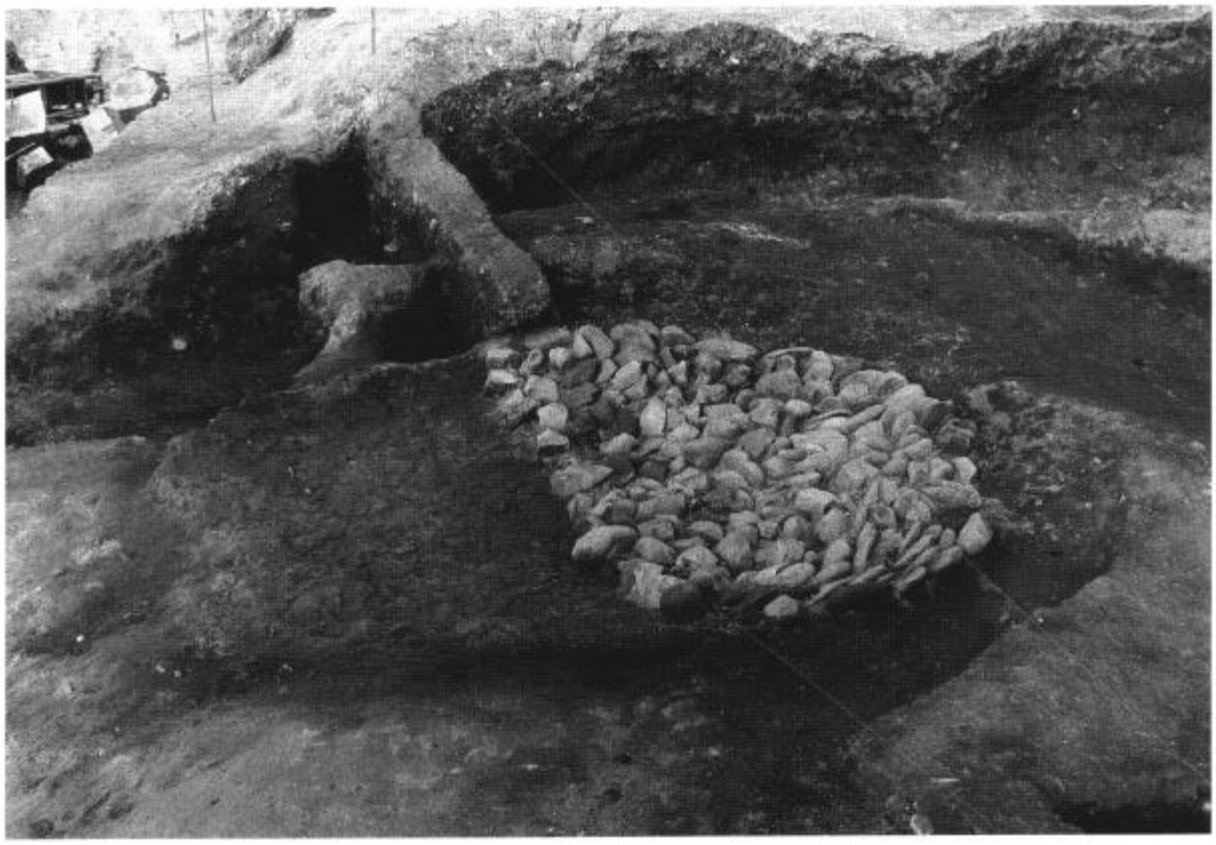
1．ＳＹ172（南東→北西）

2．ＳＹ172土層（東→西）

1．SW13検出状況（北東→南西）

2．SW13上部構造完掘状況（調査途中）（北西→南東）

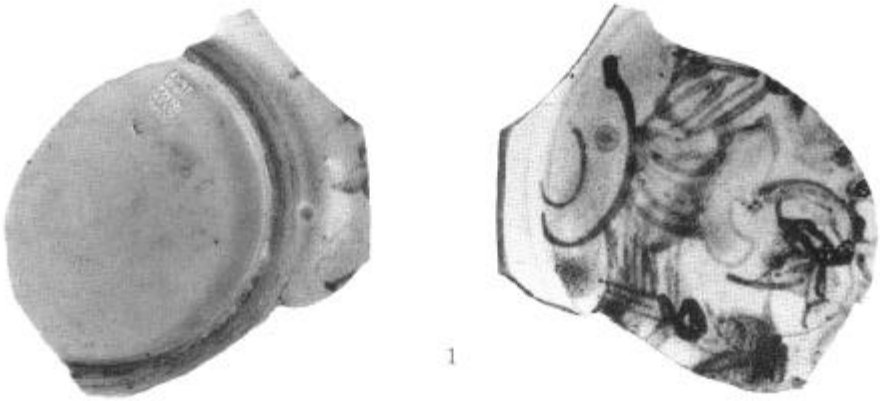
1．ＳＷ13下部構造の礫出土状況（北西→南東）



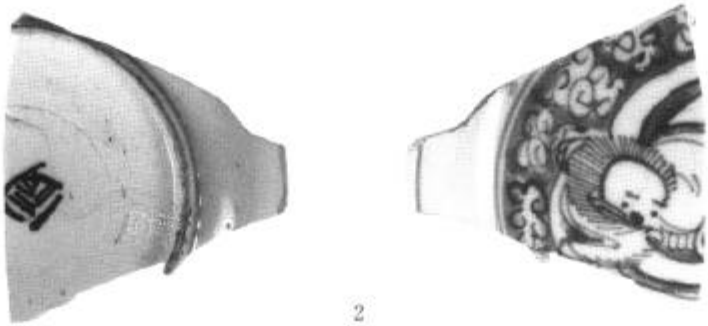
2．ＳＷ13礫下の粘土出土状況（西→東）

1．ＳＷ13炭化材出土状況（北西→南東）

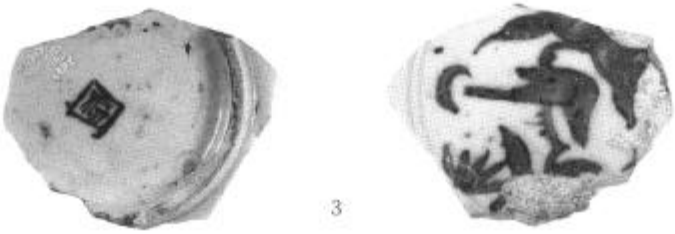
2．ＳＷ13下部構造完掘状況（南→北）



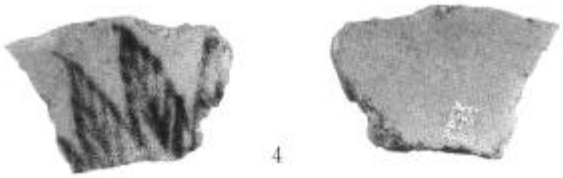
1



2



3



4

5

陶磁器〈1〉

6

7

8

9

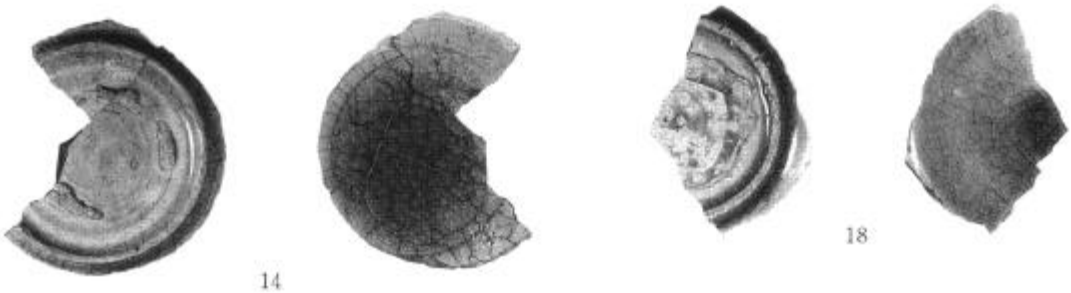
10

11

12

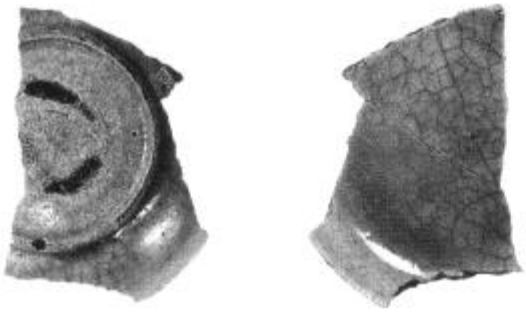
13

陶磁器（2）

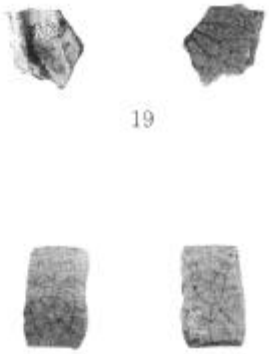


14

18

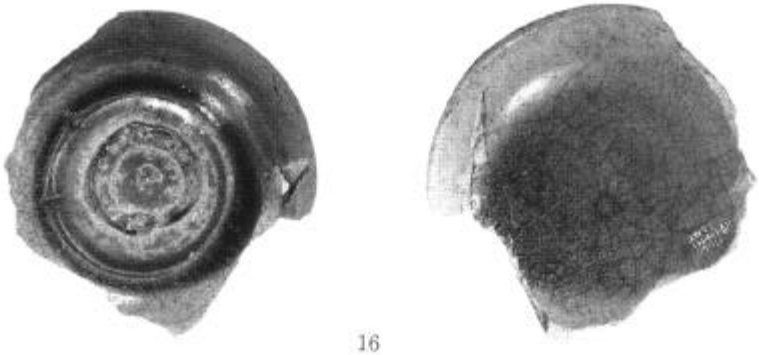


15

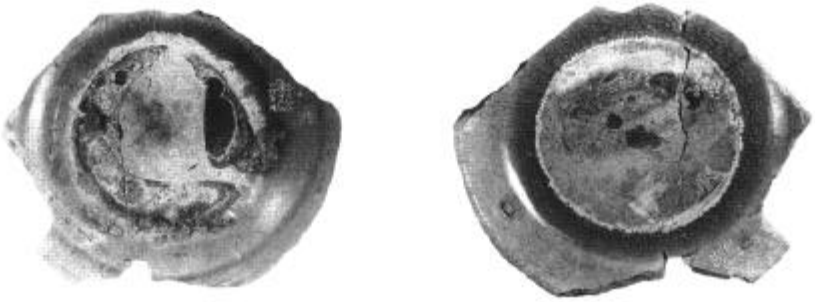


19

20



16



17

陶磁器（3）

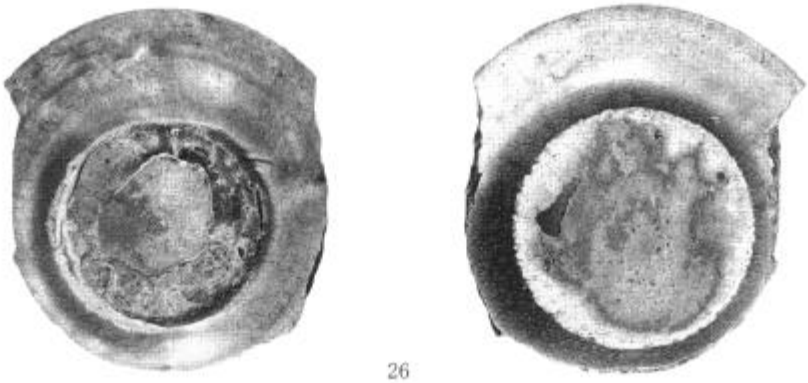
21

22

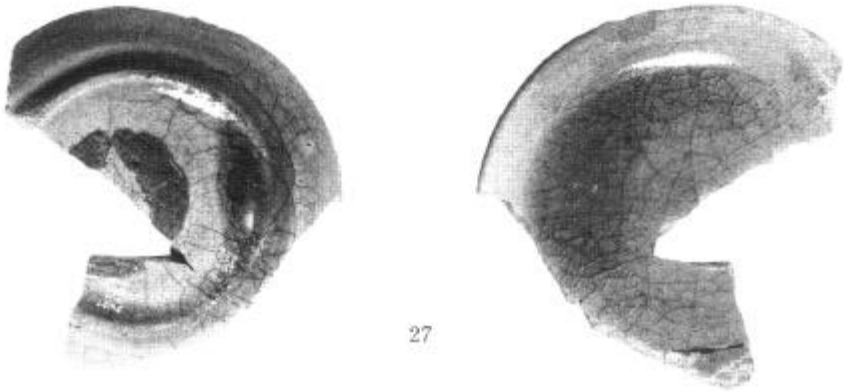
23

24

25



26



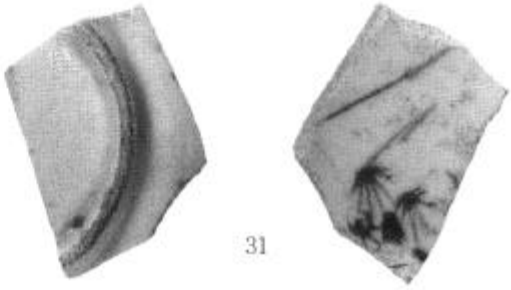
27

陶磁器（4）

28

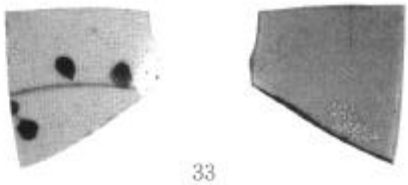
29

30



31

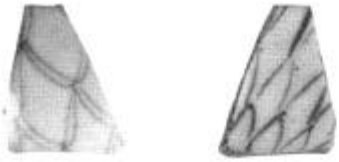
32



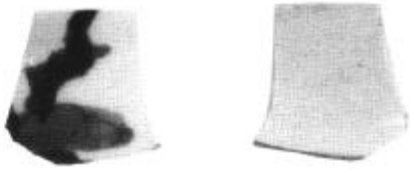
33

34

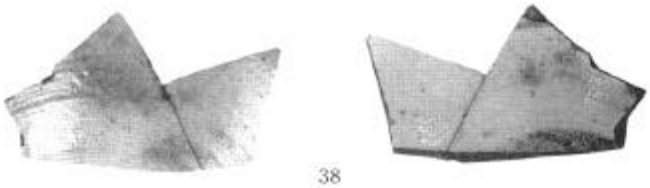
35



36



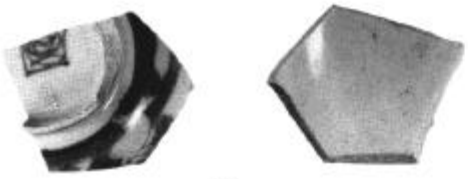
37



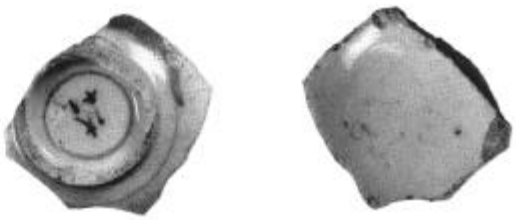
38

39

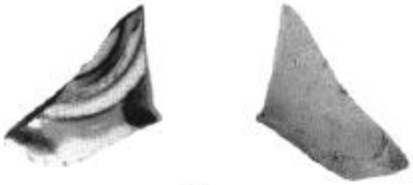
陶磁器（5）



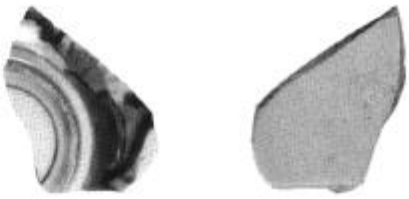
40



41

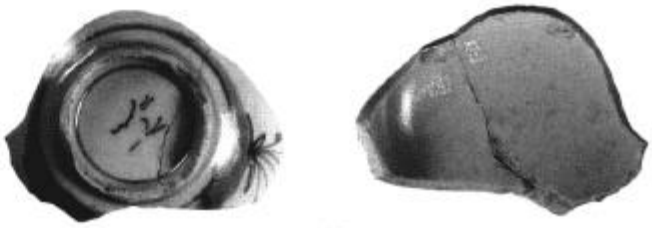


42



43

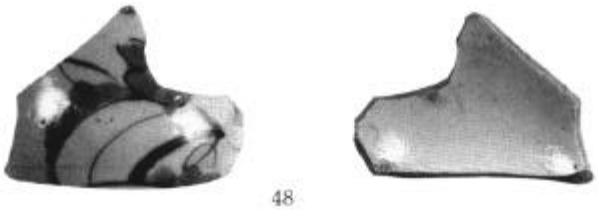
44



45

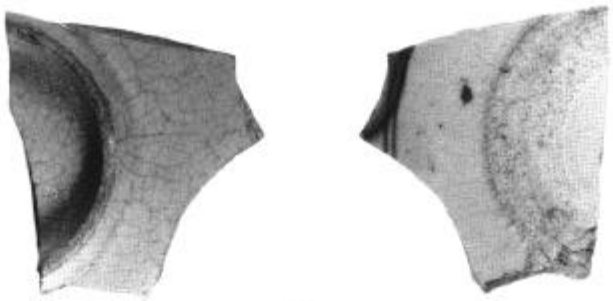
46

47

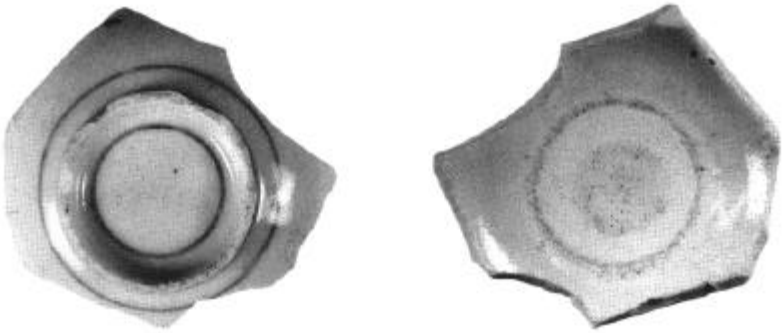


48

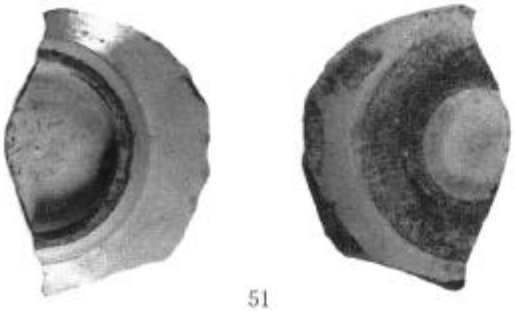
陶磁器（6）



49



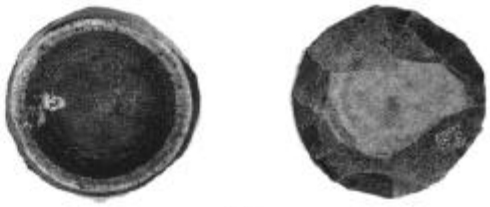
50



51

52

53



54

55

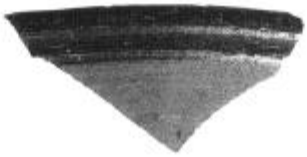
56

陶磁器（7）

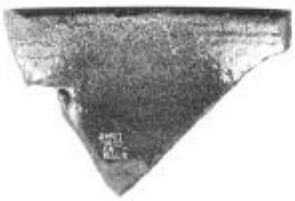
57

58

59



60



61

62

63

64

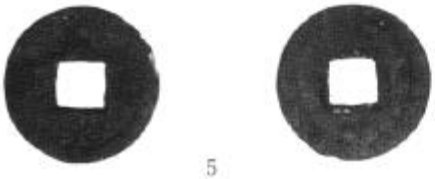
陶磁器（8）

1

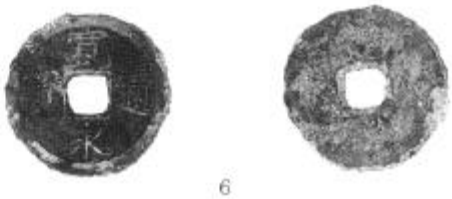
2

3

4



5



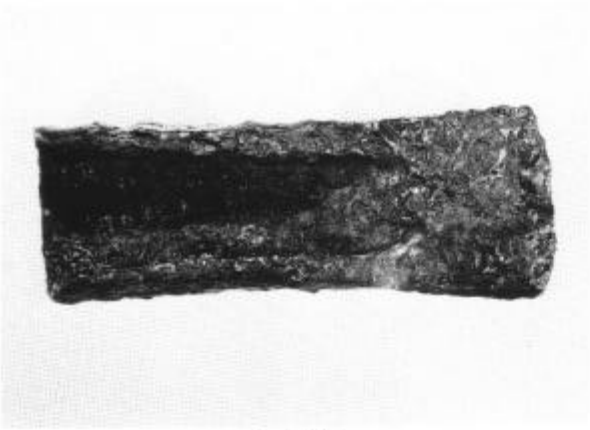
6

7

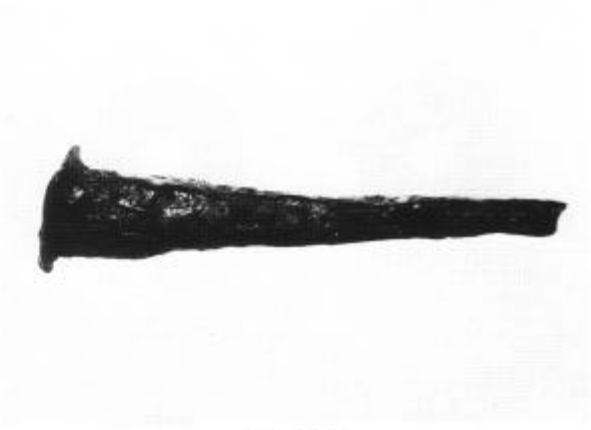
8

9

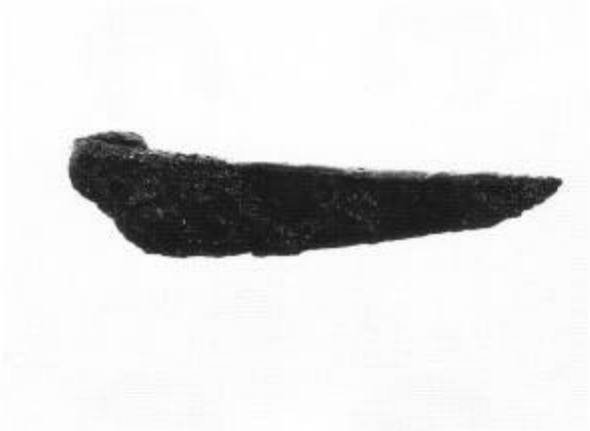
銭貨



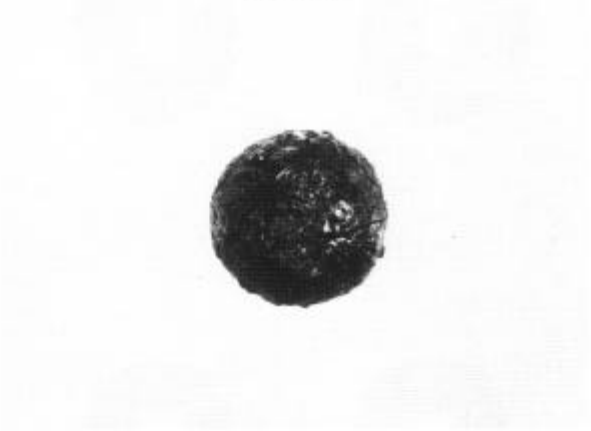
1．鉄斧



2．槍先

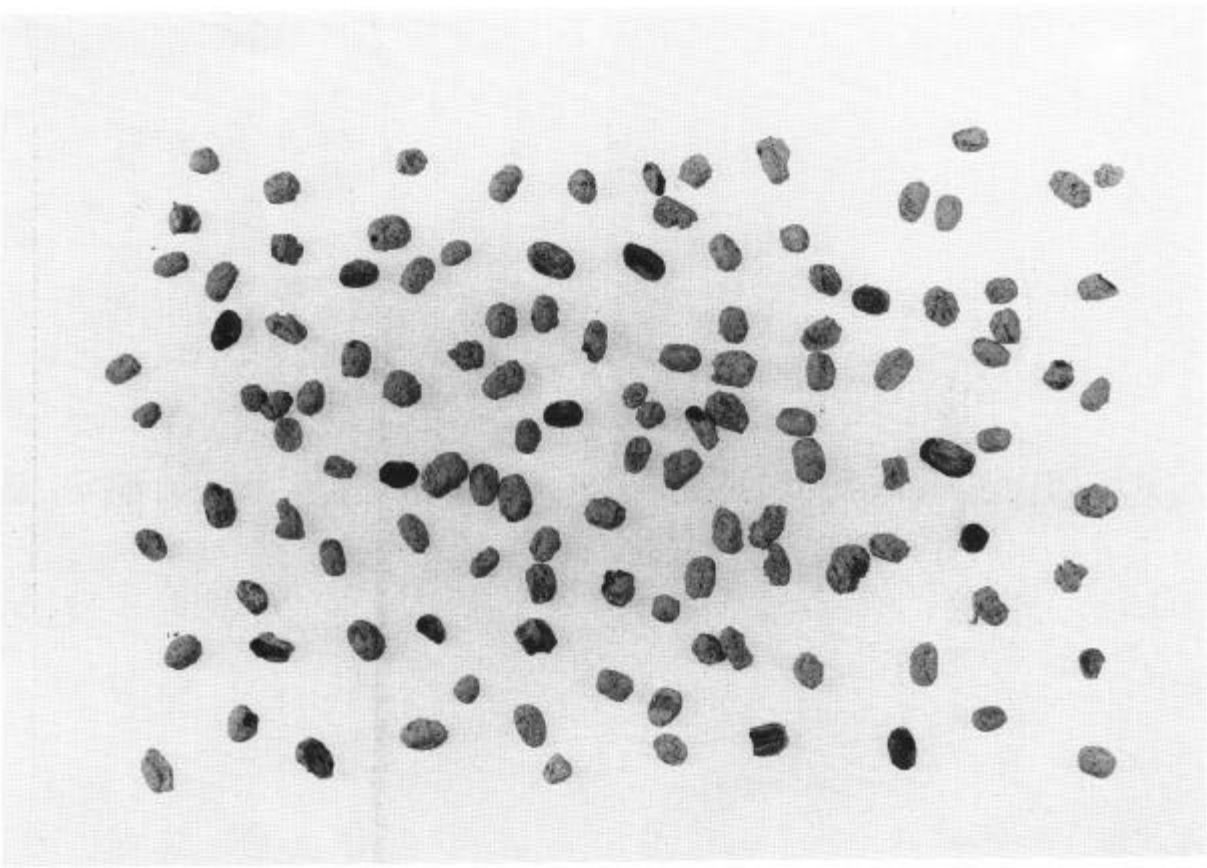


3．刀子

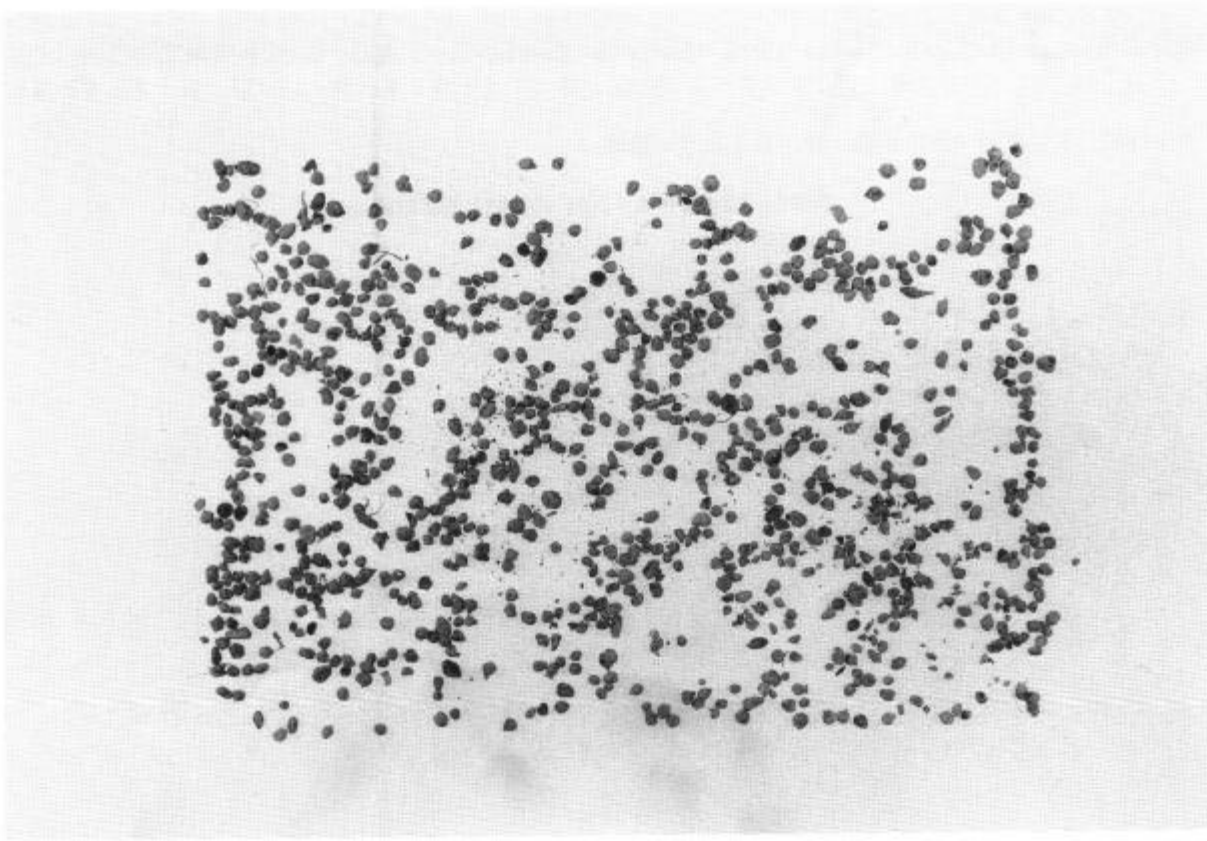


4．金属玉

5．鉄滓

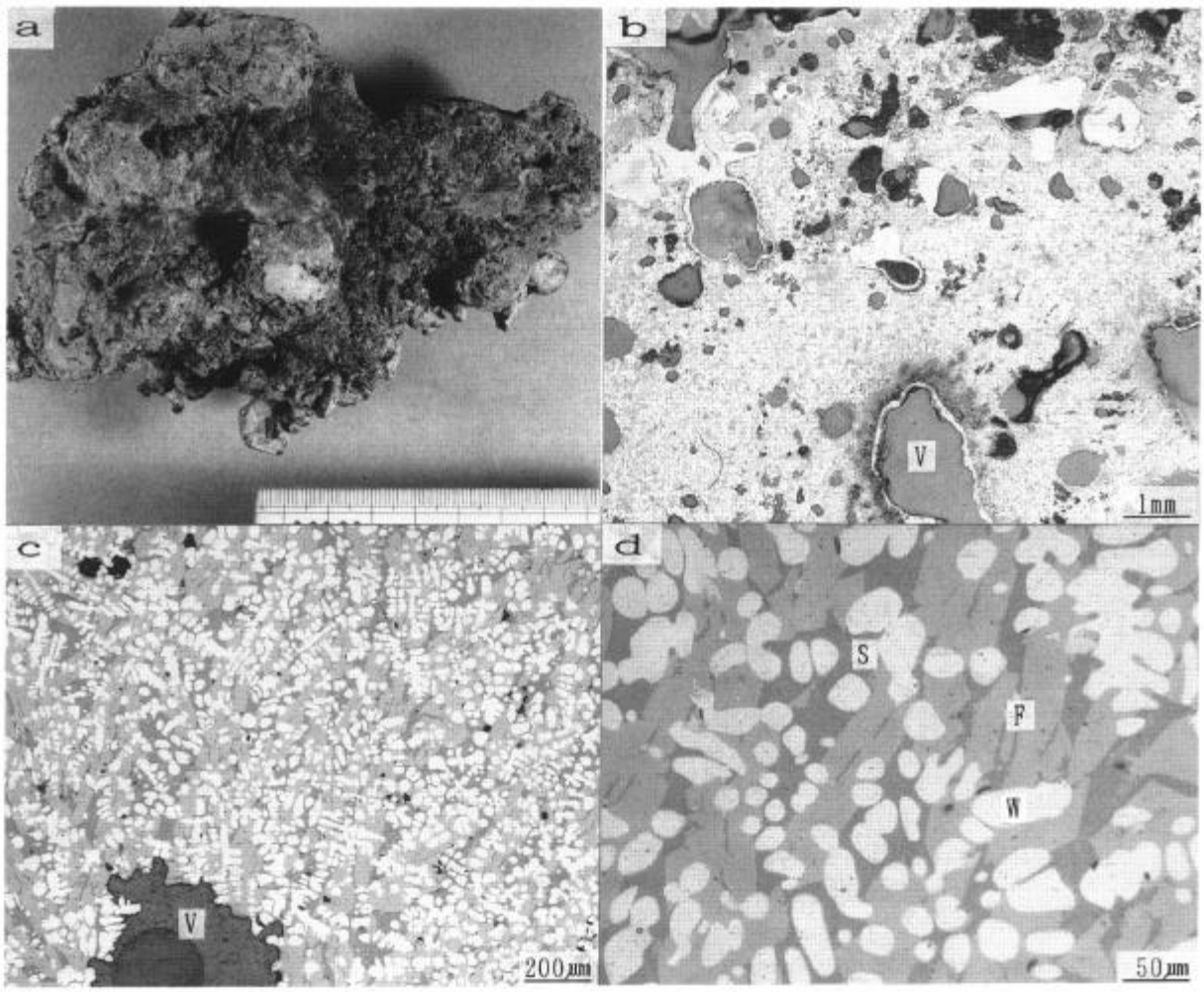


1．雑穀（豆類）



2．雑穀（ヒエ類）

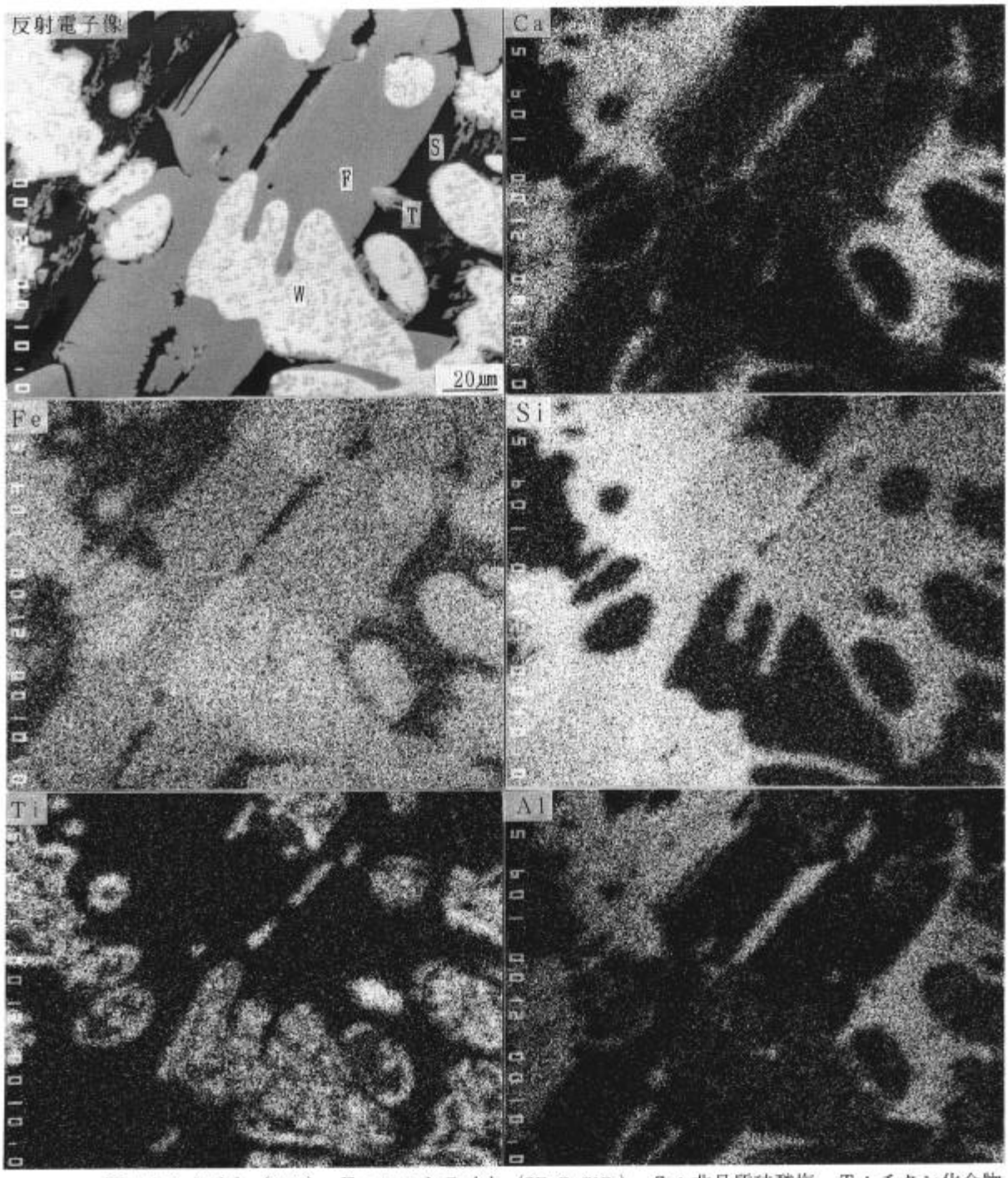
図版50



V；空孔、W；ウスタイト（FeO）、F；ファヤライト（$2FeO\ SiO_2$）、S；非晶質珪酸塩

a；外観、b；断面マクロ組織、c，d；ミクロ組織

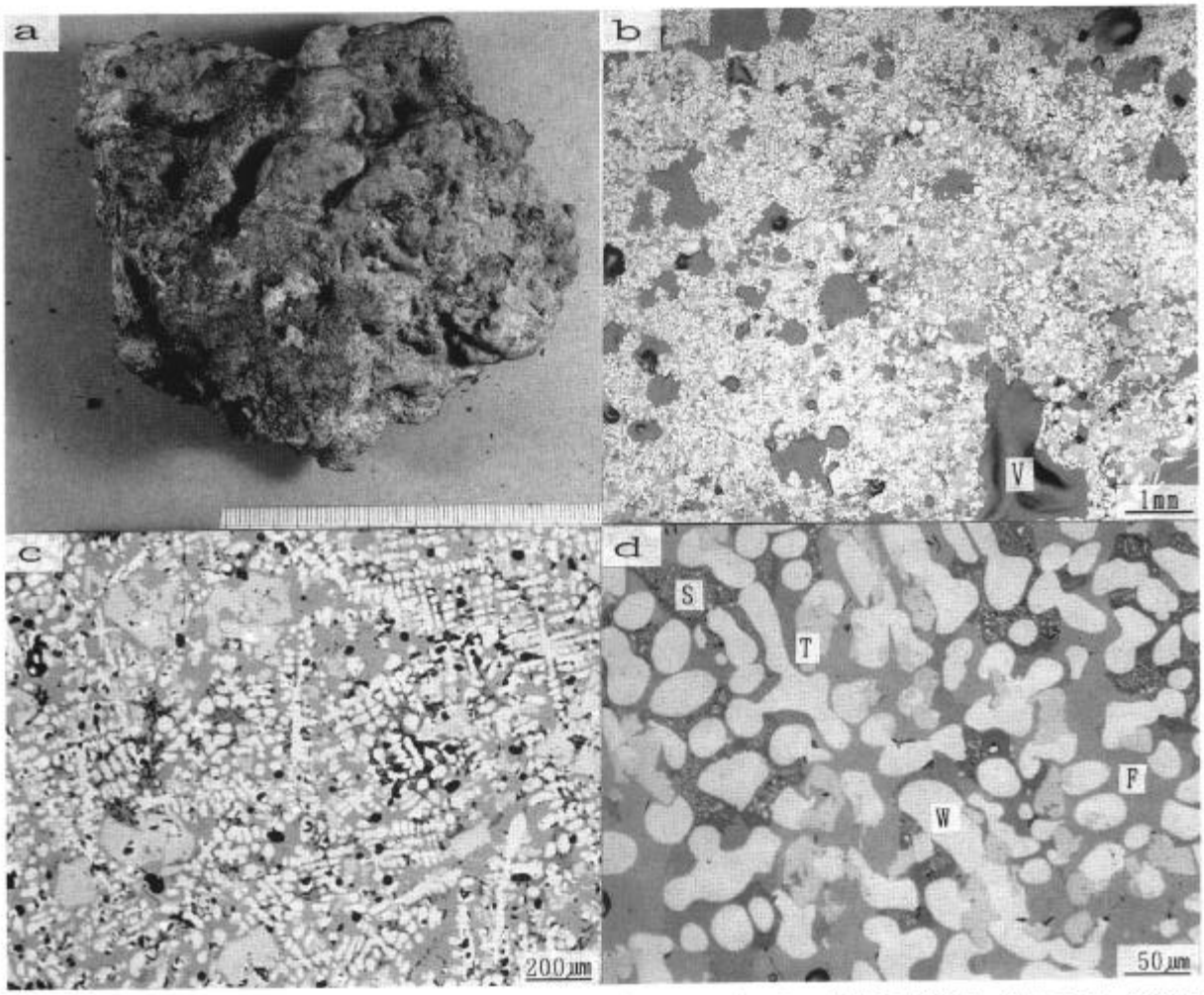
鉄滓①（遺物番号S－107）の外観と断面組織



W；ウスタイト（FeO）、F；ファヤライト（$2FeO\ SiO_2$）、S；非晶質珪酸塩、T；チタン化合物

鉄滓①（遺物番号ＳＩ107）の元素分布

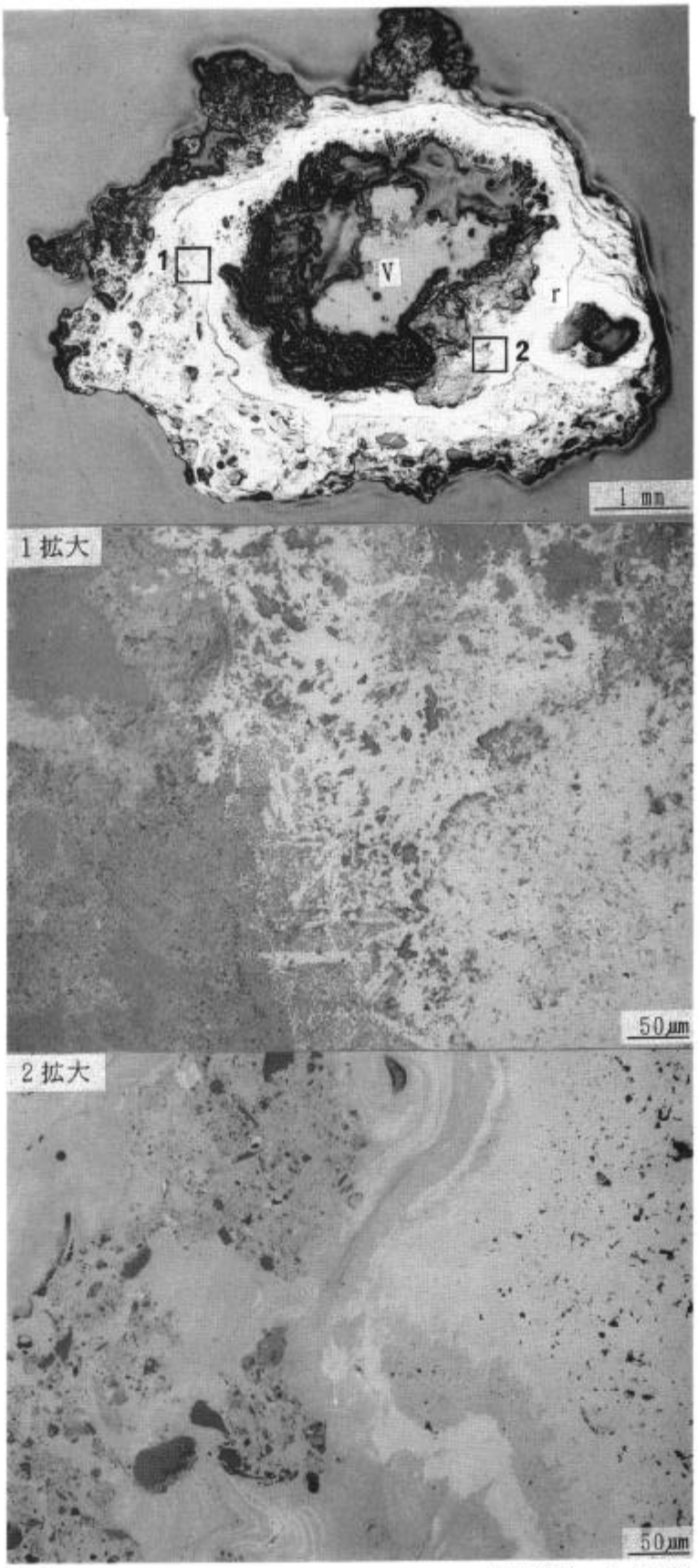
図版52



V；空孔、W；ウスタイト(FeO)、F；ファヤライト(2FeO SiO_2)、S；非晶質珪酸塩、T；チタン化合物

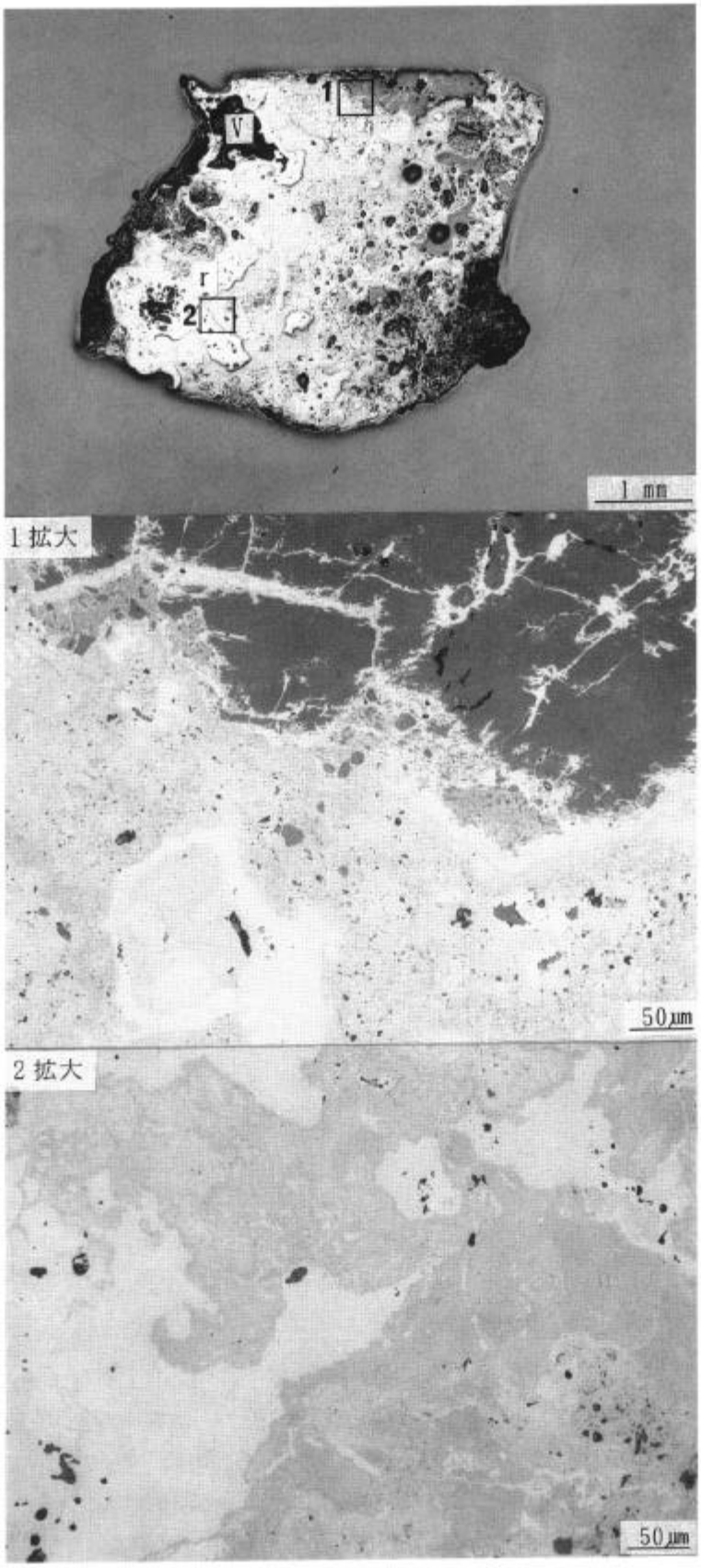
a；外観、b；断面マクロ組織、c，d；ミクロ組織

鉄滓②（遺物番号ＳＩ215）の外観と断面組織



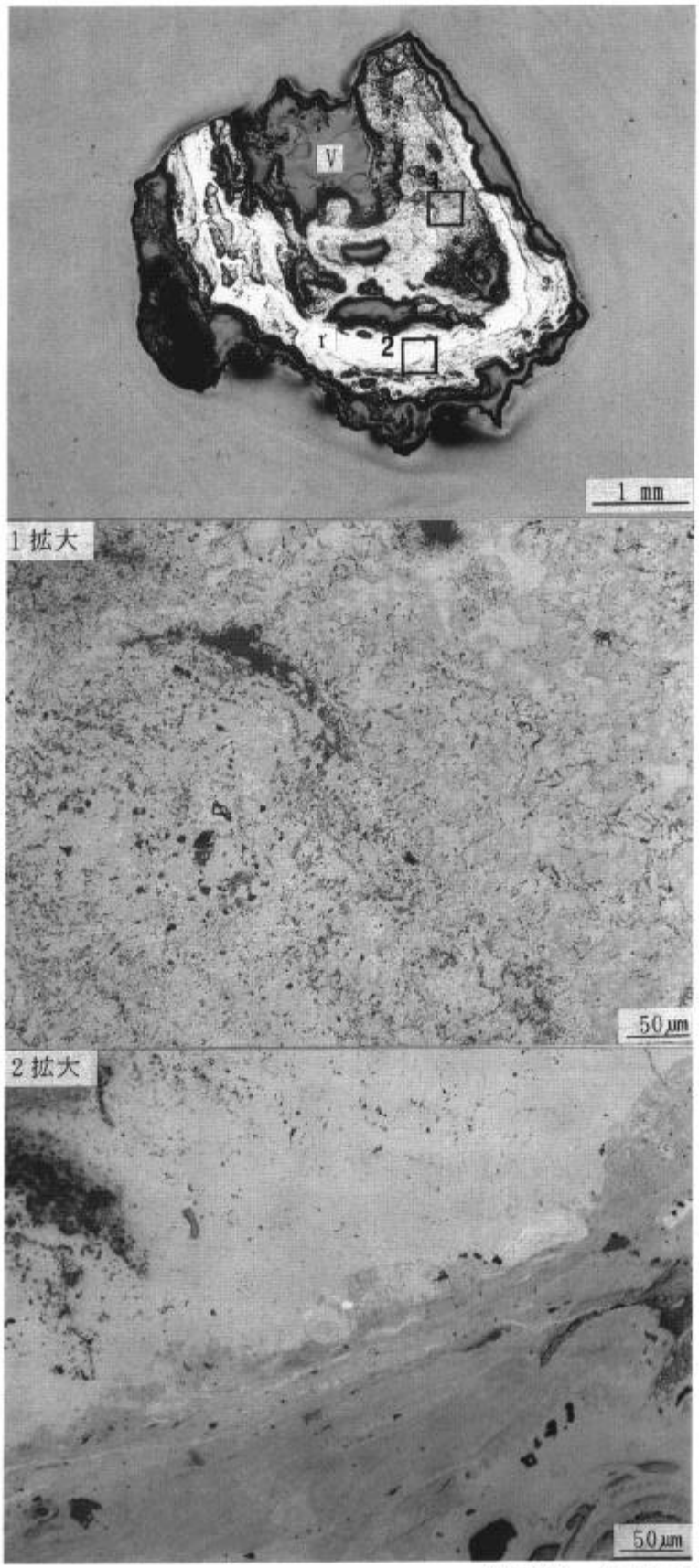
V；空孔、r；黒錆

鉄斧（遺物番号ＳＩ373）の断面マクロ・ミクロ組織



V；空孔、r；黒錆

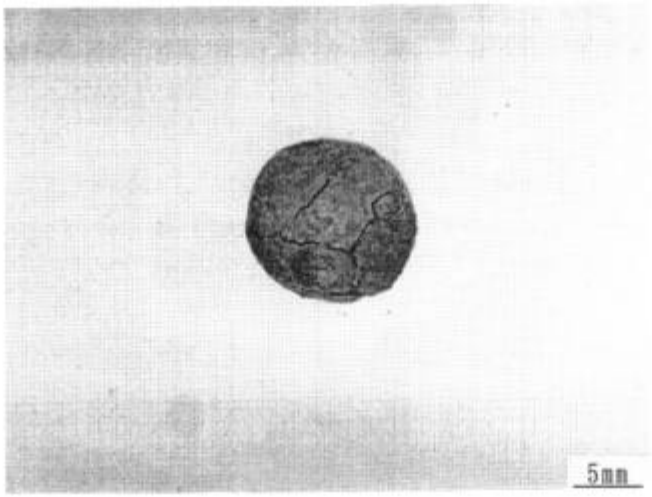
槍先（遺物番号ＳＩ267）の断面マクロ・ミクロ組織



V；空孔、r；黒錆

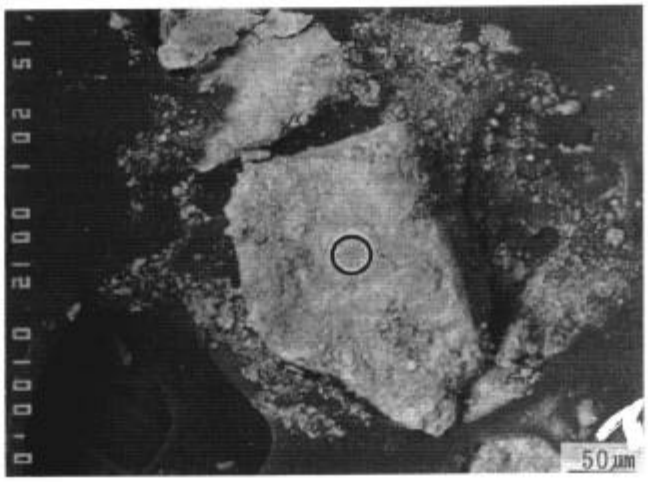
刀子（遺物番号ＳＩ428）の断面マクロ・ミクロ組織

金属玉の外観（脇神館跡出土）



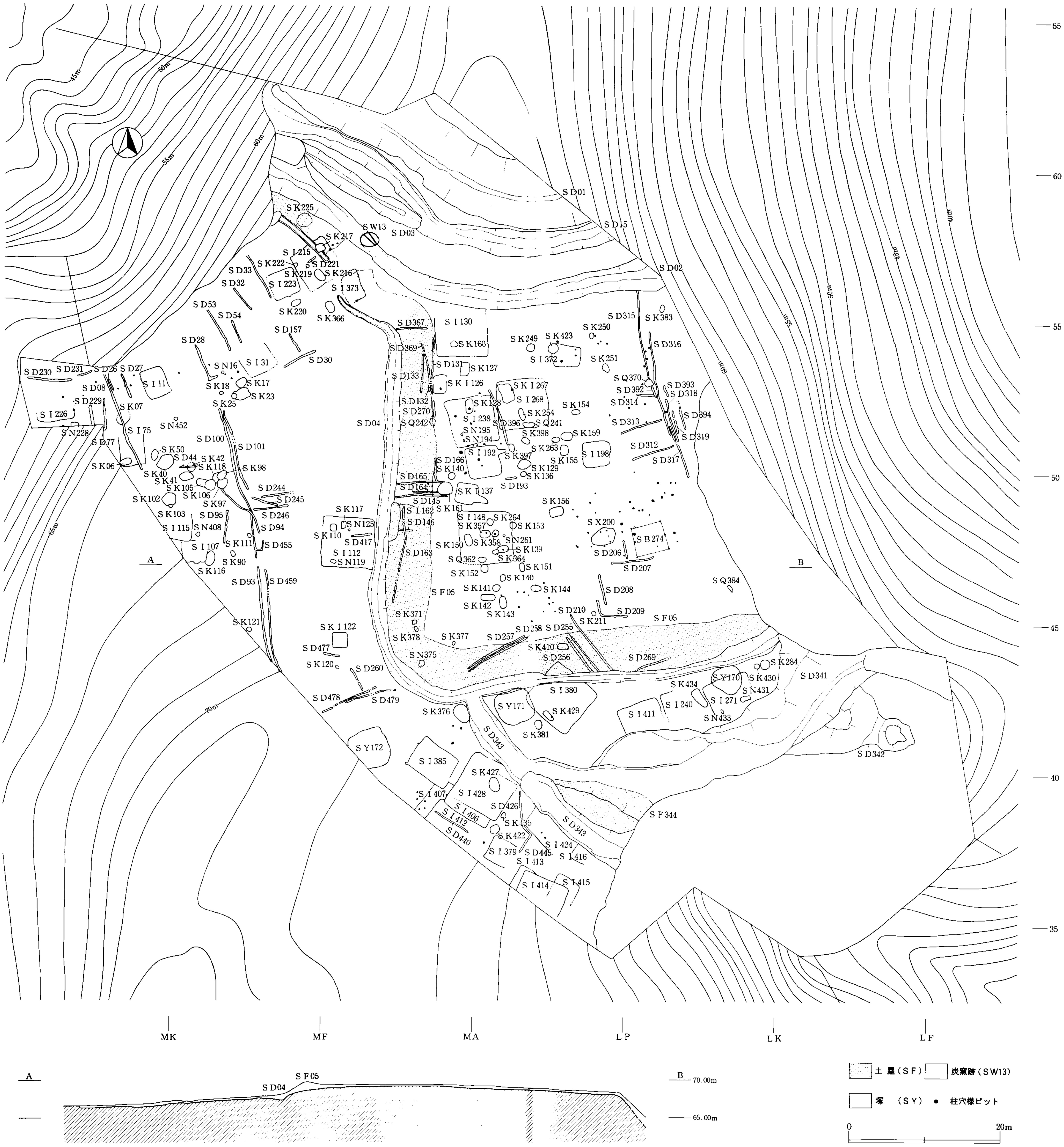
金属玉の表面（脇神館跡出土）

金属玉破片の電子像



丸印：分析箇所

金属玉の外観と電子像



付図　脇神館跡遺構配置図